

常磐自動車道遺跡調査報告33

上本町 G 遺跡

上本町 F 遺跡

日南郷 遺跡

2002年

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
日本道路公団

常磐自動車道遺跡調査報告33

かみもとまち いせき
上本町 G 遺跡

かみもとまち いせき
上本町 F 遺跡

ひ な ごう いせき
日南郷 遺跡

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間
が、平成11年にはいわき中央～いわき四倉間が開通し、現在は富岡までの区間で工事が
進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、
周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、
我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財
の保護・保存について開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地
の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から現
状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきま
した。

本報告書は、平成12年度に行った富岡町に所在する上本町G遺跡、上本町F遺跡なら
びに日南郷遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様の文化財に対するご理解と、文化財保護活動の普及や
地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活
用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり御協力いただいた日本道路公団、財団法人
福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表
するものであります。

平成14年1月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査については、平成6年度から平成8年度までに、いわき中央からいわき四倉間のうち、いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに、平成9年度からはいわき四倉から富岡間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており、平成12年度までにいわき市四倉町・広野町・楡葉町・富岡町の30遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成12年度に実施した発掘調査のうち、富岡町に所在する上本町G遺跡・上本町F遺跡・日南郷遺跡の3遺跡の発掘調査成果を収録したものです。

上本町G遺跡は、海岸線が広く見渡せる丘陵の頂部にあり、縄文時代前期のまとまった集落跡が検出されました。さらに上本町F遺跡からは、縄文時代の土坑群や深い空堀跡のほか、中世土器がまとまって出土した土坑など、貴重な資料が調査されました。日南郷遺跡からは縄文時代の落とし穴が検出されています。

今後、この報告書を、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にご協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所、福島県担当部局、富岡町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年1月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 佐藤 栄佐久

緒 言

1. 本書は、平成12年度に実施した常磐自動車道（いわき市四倉～富岡町）遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本書には福島県双葉郡富岡町に所在する3遺跡の調査成果を収録した。
 - (1) 上本町G遺跡（遺跡番号：54300056） 双葉郡富岡町本岡字上本町
 - (2) 上本町F遺跡（遺跡番号：54300065） 双葉郡富岡町本岡字上本町
 - (3) 日南郷遺跡（遺跡番号：54300054） 双葉郡富岡町上手岡字日南郷・後田
3. 本発掘調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は日本道路公団が負担した。
4. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託して実施した。
5. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の次の職員を配置して調査にあたった。

文化財主査	山内 幹夫	文化財主査	富田 修
文化財主査	宮田 安志	文化財主査	細山 郁夫
文化財主査	高橋 幸司	文化財副主査	鈴木 広子
文化財副主査	井 憲治	文化財副主査	関 博人
文化財副主査	国井 秀紀	文化財主事	丹治 篤嘉
文化財主事	門脇 秀典	囑 託	新海 和広
6. 本書の執筆は担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1、2.5万分の1地形図を複製したものである（承認番号）「平13東複第369号」。
8. 本書掲載の分析・考察・空中写真などは、次の諸氏・諸機関に委託・協力いただいた。（順不同・敬称略）
航 空 写 真 日本特殊撮影株式会社

石 質 鑑 定 真鍋健一（福島大学教育学部）
自然科学分析 古環境研究所

9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の諸機関からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）
石岡市教育委員会
財団法人 茨城県教育財団
財団法人 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

11. 本文中の敬称は省略させていただいた。

用 例

1. 本書における遺構実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 方 位 遺構図・地形図の方位は真北をさす。方位記号の表記がないものは、すべて図の真上を真北とする。遺構平面図は、原則として座標軸経線の北を上にして割り付けた。

(2) ケ バ 原則として遺構内の傾斜面は π で表現したが、相対的に緩斜面の部分は π で表している。また、後世の削平や人為的な削土部分は π の記号で表記した。なお、風倒木痕やその他の攪乱による範囲には、「攪乱」などの語句で表記した。

(3) 土 層 遺構外の自然堆積土・基本土層はアルファベット大文字のLとローマ数字を組み合わせ、遺構内堆積土は小文字の ℓ と算用数字を組み合わせて表記した。

(例) 基本土層—L I・II…， 遺構内堆積土— ℓ 1・2…

なお、土色の注記は「新版標準土色帖」を使用し、本文中の記号は本書に基づく。

(4) 標 高 東京湾からの海拔標高を示す。また、断面図では水準（基準）線脇に数値で示した。

(5) 縮 尺 原則として、竪穴住居跡1/40・1/60，掘立柱建物跡1/40，土坑1/40とし、その他は遺構の大きさに則して縮小した。縮尺率はスケールの右脇に表示した。

(6) ピットの深さ 平面図のピット番号下に（ ）記号で括り数値を表示した。単位cm。

(7) 網 点 遺構図で頻繁に使用した網点の具体的な用例を下図に示した。下図に示さない網点についてはそのつど図中に示した。



焼 土

(8) 破 線 等 平面図では、実線で上端・下端・調査区境，短い破線「----」で推定線・挟り込み線，長い破線「—」で掘形，一点鎖線「—」で貼床範囲，二点鎖線「—」で踏み締まり範囲を表している。

2. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮 尺 率 挿図のスケール右脇に示したが、原則として土器・土製品は1/4・1/3・2/5，石器・石製品は1/3・1/2・3/4で採録した。

(2) 土器断面 縄文土器・土師器・陶器は断面を白ヌキで、須恵器の断面は隙間なく黒く表示した。粘土紐の積み上げ痕跡は器面では実線で、断面では一点鎖線で表記した。縄文土器は、胎土中に植物繊維を混和するものについては、断面に▲を表

示した。

(3) 拓 本 表裏面の拓本を掲載した場合は、左側を表とし、断面を挟んで右側を裏面とした。

(4) 遺物番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。遺物番号の次の()内は遺物の出土位置・層位を示した。遺構図中の土器番号は遺物図中の土器番号と一致する。文中では下記のように省略している。また、遺物写真図版中の番号は、挿図番号と枝番号の組み合わせで示した。

〔例〕 図20の15番の土器 文中 … 図20-15
遺物写真 … 20-15

(5) 遺物表記 「第1編 上本町G遺跡」 遺物の出土位置の下に土器の計測値を口径・底径・器高または現存高の順にcmで示した。()内の数値は推定値を示す。石器・金属器については、長さ・幅・厚さ・重さの順でcmとgで図中に示した。石器については石質も示した。

「第2編 上本町F遺跡」 土器の計測値は表1にまとめた。()内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。石器・金属器については、長さ・幅・厚さ・重さの順でcmとgで図中に示した。石器の石質については本文中に記した。

「第3編 日南郷遺跡」 遺物番号の右脇に遺物の出土位置・層位を示した。

(6) 土器の色調 前記の土層断面の色調判定で使用した土色帖で判定した。土師器の黒色処理は実測図に網点で表示した。

3. 本書で使用した略号は、次のとおりである。

富岡町……………TO	上本町G…KMM・G	上本町F…KMM・F
日南郷……………HNG	グリッド……………G	トレンチ……………T
遺構外堆積土……………L	遺構内堆積土……………ℓ	竪穴住居跡……………SI
掘立柱建物跡……………SB	土坑……………SK	焼土遺構……………SG
溝跡……………SD	性格不明遺構……………SX	ピット……………P

4. 文章中の土器の点数などは、すべて破片点数である。

5. 引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し、巻末に収めた。

目 次

序 章

第1節 調査にいたる経過	1
第2節 遺跡の位置と周辺環境	3
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	3

第1編 上本町G遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過	9		
第1節 位置と地形	9		
第2節 調査経過	9		
第3節 調査の方法	10		
第2章 遺構と遺物	13		
第1節 遺跡の概要と基本土層	13		
第2節 竪穴住居跡	17		
1号住居跡 (18)	2号住居跡 (20)	3号住居跡 (22)	4号住居跡 (29)
5号住居跡 (31)	6 a号住居跡 (33)	6 b号住居跡 (37)	7号住居跡 (41)
8号住居跡 (43)	9号住居跡 (45)	10号住居跡 (48)	
第3節 土 坑	50		
1号土坑 (50)	2号土坑 (50)	3号土坑 (50)	4号土坑 (51)
5号土坑 (51)	6号土坑 (53)	7号土坑 (53)	8号土坑 (53)
9号土坑 (54)	10号土坑 (55)	11号土坑 (55)	12号土坑 (57)
13号土坑 (57)	14号土坑 (58)	15号土坑 (58)	16号土坑 (59)
17号土坑 (59)	18号土坑 (61)	19号土坑 (61)	20号土坑 (62)
21号土坑 (64)	22号土坑 (64)	23号土坑 (65)	24号土坑 (65)
25号土坑 (65)	26号土坑 (67)	27号土坑 (67)	28号土坑 (68)
29号土坑 (68)	30号土坑 (68)	31号土坑 (72)	32号土坑 (72)
33号土坑 (78)			

第4節	焼土遺構	79
	1号焼土遺構 (79) 2号焼土遺構 (80) 3号焼土遺構 (81) 4号焼土遺構 (81)	
第5節	その他の遺構	81
	1号竪穴遺構 (81) 1号ピット (82)	
第6節	遺構外出土遺物	85
第7節	試掘調査出土遺物	119
第3章	考 察	123
第1節	遺構について	123
	竪穴住居跡 (123) 土坑 (128)	
第2節	遺物について	132
	縄文土器 (132)	
第3節	ま と め	135

第2編 上本町F遺跡

第1章	遺跡の環境と調査経過	139
第1節	位置と地形	139
第2節	調査経過	139
第3節	調査の方法	142
第2章	遺構と遺物	146
第1節	基本土層	146
第2節	竪穴住居跡	149
	1号住居跡 (149)	
第3節	柱 列 跡	152
	1号柱列跡 (152)	
第4節	土 坑	153
	1号土坑 (153) 2号土坑 (154) 3号土坑 (154) 4号土坑 (154)	
	5号土坑 (156) 6号土坑 (156) 7号土坑 (156) 8号土坑 (157)	
	9号土坑 (157) 10号土坑 (157) 11号土坑 (159) 12号土坑 (159)	
	13号土坑 (161) 14号土坑 (161) 15号土坑 (162) 16号土坑 (162)	
	17号土坑 (164) 18号土坑 (164) 19号土坑 (164) 20号土坑 (166)	
	21号土坑 (166) 22号土坑 (167) 23号土坑 (167) 24号土坑 (167)	

	25号土坑 (169)	26号土坑 (169)	27号土坑 (169)	28号土坑 (170)
	29号土坑 (170)	30号土坑 (172)	31号土坑 (172)	32号土坑 (178)
	33号土坑 (179)			
第5節	焼土遺構……………179			
	1号焼土遺構 (179)	2号焼土遺構 (179)		
第6節	溝跡……………180			
	1号溝跡 (180)			
第7節	性格不明遺構……………184			
	1号性格不明遺構 (184)	2号性格不明遺構 (184)	3号性格不明遺構 (184)	
	4号性格不明遺構 (186)	5号性格不明遺構 (186)	6号性格不明遺構 (186)	
	7号性格不明遺構 (188)	8号性格不明遺構 (188)	9号性格不明遺構 (189)	
第8節	その他の遺構……………189			
	ピット (189)	畝状遺構 (191)		
第9節	遺構外出土遺物……………194			
第3章	考 察……………207			
	1	円形を呈する土坑について……………		
	2	1号溝跡について……………		
	3	31号土坑出土遺物について……………		

第3編 日南郷遺跡

第1章	位置と地形……………217			
	第1節	遺跡の位置と周辺環境……………217		
	第2節	調査経過……………220		
	第3節	調査方法……………222		
	第4節	基本土層……………222		
第2章	遺構と遺物……………224			
	第1節	土 坑……………224		
		1号土坑 (224)	2号土坑 (225)	3号土坑 (225)
	第2節	水路跡……………226		
		1号水路跡 (226)	2号水路跡 (232)	3号水路跡 (233)

第3節	溝跡	233
	1号溝跡 (233)	
	2号溝跡 (233)	
	3号溝跡 (234)	

第3章	まとめ	235
-----	-----	-----

付編 自然科学的分析

付編1	福島県富岡町上本町G遺跡における放射性炭素年代測定	239
-----	---------------------------	-----

付編2	福島県富岡町上本町G遺跡から出土した炭化材の樹種	240
-----	--------------------------	-----

付編3	福島県富岡町上本町F遺跡の火山灰分析	244
-----	--------------------	-----

挿図・表目次

序 章

〔挿 図〕

図 1	常磐自動車道位置図	1
図 2	遺跡所在図	4

〔表〕

表 1	平成12年度調査遺跡一覧	2
表 2	上本町 G・F、日南郷遺跡周辺の遺跡一覧	5

第1編 上本町 G 遺跡

〔挿 図〕

図 1	調査区とグリッド配置図	11
図 2	遺構配置図	14
図 3	土層観察地点と基本土層	15
図 4	1号住居跡	18
図 5	1号住居跡および出土遺物	19
図 6	2号住居跡	21
図 7	2号住居跡出土遺物	22
図 8	3号住居跡 (1)	23
図 9	3号住居跡 (2)	24
図10	3号住居跡出土遺物 (1)	25
図11	3号住居跡出土遺物 (2)	27
図12	3号住居跡出土遺物 (3)	28
図13	4号住居跡	30
図14	4号住居跡および出土遺物	31
図15	5号住居跡 (1)	32
図16	5号住居跡 (2)	33
図17	6 a・6 b号住居跡	34
図18	6 a号住居跡	35
図19	6 b号住居跡	38
図20	6 a号住居跡出土遺物	39
図21	6 a・6 b号住居跡出土遺物	40
図22	7号住居跡および出土遺物	42
図23	8号住居跡	44
図24	9号住居跡	46
図25	9号住居跡出土遺物	47
図26	10号住居跡および出土遺物	49
図27	1～6号土坑	52
図28	7～12号土坑	56
図29	13～17号土坑	60
図30	18～21号土坑	63
図31	22～26号土坑	66
図32	27～30号土坑	69
図33	31～33号土坑	70
図34	土坑出土遺物 (1)	71
図35	土坑出土遺物 (2)	72
図36	土坑出土遺物 (3)	73

図37	土坑出土遺物 (4)	74
図38	土坑出土遺物 (5)	75
図39	土坑出土遺物 (6)	76
図40	土坑出土遺物 (7)	77
図41	土坑出土遺物 (8)	78
図42	1～4号焼土遺構	80
図43	1号竪穴遺構	82
図44	1号ピットおよび出土遺物	83
図45	1号ピット出土遺物	84
図46	グリッド別土器出土点数	86
図47	遺構外土器出土状況	87
図48	遺構外出土遺物 (1)	88
図49	遺構外出土遺物 (2)	90
図50	遺構外出土遺物 (3)	91
図51	遺構外出土遺物 (4)	92
図52	遺構外出土遺物 (5)	93
図53	遺構外出土遺物 (6)	96
図54	遺構外出土遺物 (7)	97
図55	遺構外出土遺物 (8)	99
図56	遺構外出土遺物 (9)	100
図57	遺構外出土遺物 (10)	101
図58	遺構外出土遺物 (11)	103
図59	遺構外出土遺物 (12)	105
図60	遺構外出土遺物 (13)	106
図61	遺構外出土遺物 (14)	107
図62	遺構外出土遺物 (15)	109
図63	遺構外出土遺物 (16)	110
図64	遺構外出土遺物 (17)	112
図65	遺構外出土遺物 (18)	113
図66	遺構外出土遺物 (19)	114
図67	遺構外出土遺物 (20)	115
図68	遺構外出土遺物 (21)	116
図69	遺構外出土遺物 (22)	117
図70	遺構外出土遺物 (23)	119
図71	試掘トレンチ配置図および出土遺物	120
図72	試掘出土遺物	121

第2編 上本町F遺跡

〔挿 図〕

図1	遺跡周辺地形図	140	図23	1号溝跡	181
図2	調査区グリッド配置図	143	図24	1号溝跡断面	182
図3	I区遺構配置図	144	図25	1～3号性格不明遺構・出土遺物	185
図4	II区遺構配置図	145	図26	4～7号性格不明遺構	187
図5	基本土層柱状図	147	図27	8・9号性格不明遺構	188
図6	基本土層	148	図28	ピット群	190
図7	1号住居跡	150	図29	畝状遺構位置図	191
図8	1号住居跡出土遺物	151	図30	畝状遺構	192
図9	1号柱列跡	153	図31	畝状遺構土層断面図・出土遺物	193
図10	1～5号土坑	155	図32	グリッド別遺物出土状況	194
図11	6～9号土坑	158	図33	遺構外出土遺物(1)	196
図12	10～12・15号土坑	160	図34	遺構外出土遺物(2)	197
図13	13・14・16号土坑	163	図35	遺構外出土遺物(3)	198
図14	17～19号土坑	165	図36	遺構外出土遺物(4)	199
図15	20～24号土坑	168	図37	遺構外出土遺物(5)	200
図16	25号土坑・出土遺物, 26～28号土坑	171	図38	遺構外出土遺物(6)	201
図17	29・30号土坑・出土土器	173	図39	遺構外出土遺物(7)	203
図18	31号土坑・出土遺物(1)	175	図40	遺構外出土遺物(8)	204
図19	31号土坑出土遺物(2)	176	図41	1号溝跡と周辺の地形	208
図20	31号土坑出土遺物(3)	177	図42	31号土坑出土遺物法量グラフ	210
図21	32・33号土坑	178	図43	灯明皿2枚重ね使用状況想定復元図	211
図22	1・2号焼土遺構	180			

〔表〕

表1	上本町F遺跡出土土器一覧	205
----	--------------	-----

第3編 日南郷遺跡

〔挿 図〕

図1	遺跡の位置と周辺地形	217	図6	1・2号水路跡及び遺構外出土遺物	229
図2	遺構配置図	218	図7	1号水路跡及び遺構外出土遺物	230
図3	基本層位柱状図	223	図8	2・3号水路跡及び2号水路東側堰跡詳細	232
図4	1・2・3号土坑	225	図9	1・2・3号溝跡	234
図5	1号水路跡	227			

写真目次

第1編 上本町G遺跡

1	上本町G遺跡全景（東から）	251	35	24～26号土坑	268
2	上本町G遺跡全景（北西から）	252	36	27・28号土坑	269
3	上本町G遺跡全景（真上から）	252	37	29・30号土坑	269
4	調査区中央部全景（真上から）	253	38	31・32号土坑	270
5	調査区中央部全景（東から）	253	39	33号土坑	270
6	基本土層A-A'（東から）	254	40	1・2号焼土遺構	271
7	基本土層（東から）	254	41	3・4号焼土遺構	271
8	1号住居跡全景（北から）	255	42	1号竪穴遺構, 1号ピット(1)	272
9	2号住居跡全景（北から）	255	43	1号ピット(2), 遺構外遺物出土状況	272
10	3号住居跡全景（北から）	256	44	1号住居跡出土遺物	273
11	3号住居跡細部	256	45	2号住居跡出土遺物	273
12	4号住居跡全景（東から）	257	46	3号住居跡出土遺物(1)	273
13	4号住居跡細部	257	47	3号住居跡出土遺物(2)	274
14	5号住居跡全景（南から）	258	48	4号住居跡出土遺物	274
15	6a・6b号住居跡全景（真上から）	258	49	6a号住居跡出土遺物	275
16	6a号住居跡全景（南から）	259	50	6a・6b号住居跡出土遺物	275
17	6b号住居跡全景（北から）	259	51	9号住居跡出土遺物	276
18	6a・6b号住居跡細部(1)	260	52	土坑出土遺物(1)	276
19	6a・6b号住居跡細部(2)	260	53	土坑出土遺物(2)	277
20	7号住居跡全景（南東から）	261	54	土坑出土遺物(3)	278
21	8号住居跡全景（南西から）	261	55	土坑出土遺物(4)	279
22	9号住居跡全景（東から）	262	56	土坑出土遺物(5)	280
23	10号住居跡全景（南西から）	262	57	土坑出土遺物(6)	281
24	1～4号土坑	263	58	1号ピット出土遺物	282
25	5・6号土坑	263	59	遺構外出土遺物(1)	282
26	7・8号土坑	264	60	遺構外出土遺物(2)	283
27	9号土坑	264	61	遺構外出土遺物(3)	284
28	10～12号土坑	265	62	遺構外出土遺物(4)	285
29	13・14号土坑	265	63	遺構外出土遺物(5)	286
30	15・16号土坑	266	64	遺構外出土遺物(6)	287
31	17・18号土坑	266	65	遺構外出土遺物(7)	288
32	19号土坑	267	66	遺構外出土遺物(8)	289
33	20・21号土坑	267	67	遺構外出土遺物(9)	290
34	22・23号土坑	268	68	遺構外出土遺物(10)	291

69	遺構外出土遺物 (11)	292	75	遺構外出土遺物 (17)	296
70	遺構外出土遺物 (12)	293	76	遺構外出土遺物 (18)	297
71	遺構外出土遺物 (13)	294	77	遺構外出土遺物 (19)	297
72	遺構外出土遺物 (14)	295	78	縄文土器細部	298
73	遺構外出土遺物 (15)	295			
74	遺構外出土遺物 (16)	296			

第2編 上本町F遺跡

1	I区全景 (南東から)	301	17	基本土層	312
2	I区土坑群全景 (南から)	301	18	1号住居跡出土遺物	313
3	1号住居跡全景 (南から)	302	19	29・30号土坑出土遺物	313
4	1号住居跡細部	302	20	31号土坑出土遺物 (1)	314
5	作業風景, 1号柱列跡, 1～4号土坑	303	21	31号土坑出土遺物 (2)	315
6	5～9号土坑	304	22	31号土坑出土遺物 (3)	316
7	10～14号土坑	305	23	31号土坑出土遺物 (4)	317
8	15～19・21号土坑	306	24	31号土坑出土遺物 (5)	318
9	20・22～25号土坑	307	25	遺構外出土遺物 (1)	319
10	26～30号土坑	308	26	遺構外出土遺物 (2)	319
11	31～33号土坑, 1号焼土遺構	309	27	遺構外出土遺物 (3)	320
12	1号溝跡全景 (南から)	310	28	遺構外出土遺物 (4)	321
13	1号溝跡断面 (南から)	310	29	遺構外出土遺物 (5)	321
14	I区畝状遺構全景 (南西から)	311	30	遺構外出土遺物 (6)	322
15	I区畝状遺構断面	311	31	遺構外出土遺物 (7)	322
16	1・3・4号性格不明遺構	312			

第3編 日南郷遺跡

1	日南郷遺跡遠景 (南西から)	325	8	3号土坑全景 (東から)	328
2	日南郷遺跡近景 (北から)	325	9	1号水路全景 (東から)	329
3	基本土層① (南から)	326	10	1号水路しがらみ (南から)	329
4	基本土層② (南から)	326	11	2号水路全景 (南東から)	330
5	1号土坑全景 (東から)	327	12	2号水路しがらみ・堰	330
6	1号土坑土層 (北東から)	327	13	出土遺物	331
7	2号土坑全景 (南東から)	328			

序 章

第1節 調査に至る経過

平成12年度常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は、34名の体制で開始した。調査対象地は、第12次区間の双葉郡広野町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち、4月上旬から富岡町内で新たに発掘調査が予定されている遺跡の条件整備状況の確認を行うとともに、連絡所・駐車場等用地借り上げ、連絡所設置などの準備作業を進めた。また、現町道下を対象とする上田郷Ⅵ遺跡では、町道の迂回工事が行われた。

調査は、4月17日から広野町上田郷Ⅵ遺跡、楢葉町馬場前遺跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町本町西A遺跡・上本町F遺跡、1日遅れて4月18日に楢葉町小埜城跡の6遺跡の発掘調査を開始した。このうち上田郷Ⅵ遺跡・小埜城跡は3次調査、馬場前・大谷上ノ原各遺跡はそれぞれ2次調査でと、継続調査が多いこともあり、順調に展開した。5月19日には狭長な上田郷Ⅵ遺跡の調査を終了した。

5月に入り、新たに楢葉町小山B遺跡と富岡町上本町G遺跡の発掘調査を開始した。小山B遺跡は水田に挟まれた場所にあり、水路に留意しながらの調査となった。また上本町G遺跡では一般道路から入り込んだ不便な場所にあるため、調査に先行し、路線内に作業員通勤用通路を確保ののち、連絡所設置・駐車場造成などの準備作業を行った。また同遺跡は、深い沢に挟まれており、沢に泥水が流れないようにする沈砂・土留め処置にも留意した。小山B遺跡からは木戸川自然堤防上に立地する平安時代の集落跡、上本町G遺跡からは縄文時代前期の集落跡が検出された。

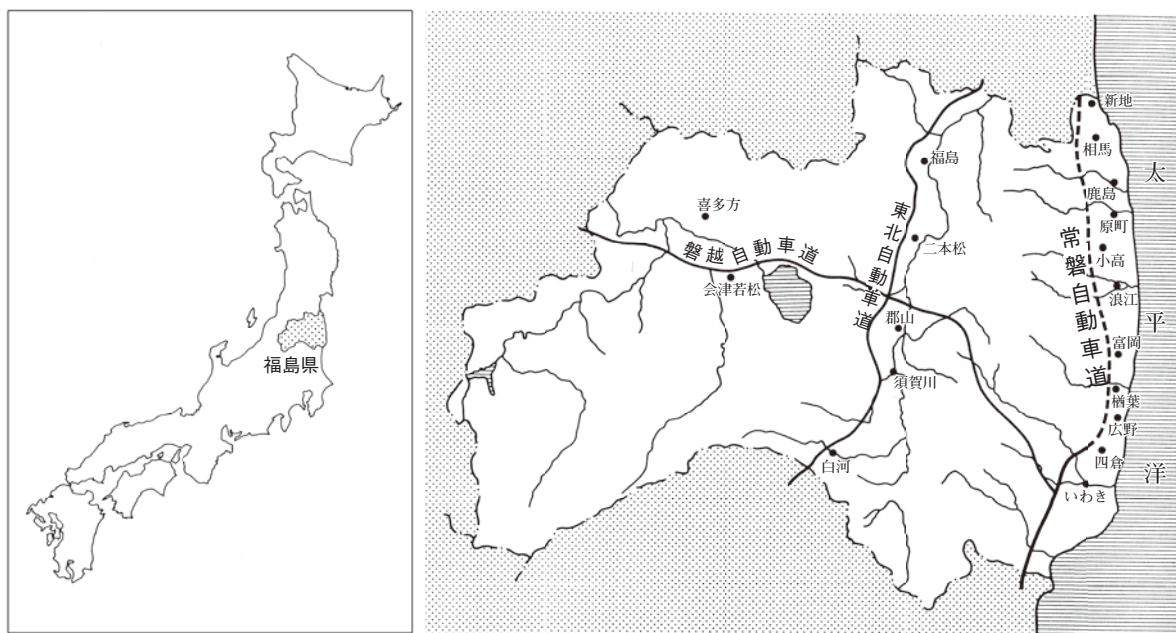


図1 常磐自動車道位置図

6月からは、榑葉町鍛冶屋遺跡3次と、富岡町上郡B遺跡の発掘調査を開始した。上郡B遺跡は遺跡内に比高差の大きな段丘崖を挟んで発掘調査区が二分されるため、当初上位面の発掘調査を先行させた。上郡B遺跡上位面からは古墳時代前期の住居跡が検出された。また、4月に調査を開始した榑葉町大谷上ノ原遺跡について、6月14日に、発掘調査の終了した北側部分を引き渡すとともに、新たに工区変更に伴う、南東側1,600mの追加発掘調査を行うこととなった。大谷上ノ原遺跡は、1次発掘調査に引き続き、旧石器時代の石器群が検出された。

7月には、榑葉町鍛冶屋遺跡と小山B遺跡の部分的な拡張範囲について、関係機関協議の結果、追加発掘調査を実施することとなった。鍛冶屋遺跡からは、平安時代・中世の集落跡に加えて、南斜面から縄文時代後期の集落跡が検出された。

8月11日には富岡町本町西A遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。本町西A遺跡からは縄文時代前期の集落跡の他、中世の建物跡も検出された。また、富岡町上郡B遺跡は段丘崖より下位面の発掘調査に入った。

9月には、榑葉町小塙城跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町上郡B遺跡・上本町G遺跡・上本町F遺跡の発掘調査が相次いで終了し、現地引き渡しを行った。引き続き、榑葉町二枚橋遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査を開始した。この頃になると、榑葉町馬場前遺跡では、大規模な縄文時代集落跡は知られるところであったが、その上面に平安時代集落跡、さらにその上面に中世村落の遺構がおびただしく検出された。この調査を進めるため総力を挙げて対応した。その結果、町道中島一高田線の南側と、北側の中世村落跡については、調査を終了することができた。

10月には榑葉町鍛冶屋遺跡・小山B遺跡・二枚橋遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行っ

表1 平成12年度調査遺跡一覧 (面積総計 93,840㎡)

番号	遺跡名	所在地	発掘調査面積 (㎡)	時代	発掘調査期間
①	上田郷Ⅵ遺跡	広野町上北迫字上田郷	700	縄文	4/17～5/19
②	小塙城跡	榑葉町上小塙字正明寺他	5,500	縄文・平安・室町 戦国・江戸	4/18～9/29
③	鍛冶屋遺跡	榑葉町上小塙字根子原他	6,200	縄文・平安・中世	6/15～10/31
④	馬場前遺跡	榑葉町上小塙字馬場前他	18,740	縄文・奈良・平安 鎌倉・室町	4/17～12/20
⑤	小山B遺跡	榑葉町上小塙字小山	4,560	平安・中世	5/29～10/13
⑥	大谷山根遺跡	榑葉町大谷字山根	600	奈良・平安	10/4～11/21
⑦	大谷上ノ原遺跡	榑葉町大谷字上ノ原	10,600	旧石器・縄文・平安	4/17～9/14
⑧	二枚橋遺跡	榑葉町上繁岡字二枚橋	3,200	縄文・平安	9/14～10/13
⑨	上繁岡山根遺跡	榑葉町上繁岡字山根	5,100	縄文・平安・中世・近世	9/19～11/14
⑩	上郡B遺跡	富岡町上郡山字上郡	3,140	古墳・平安	6/13～9/20
⑪	本町西A遺跡	富岡町本岡字本町西	6,800	旧石器・縄文・中世	4/17～8/11
⑫	上本町G遺跡	富岡町本岡字上本町	14,100	縄文・平安	5/26～9/26
⑬	上本町F遺跡	富岡町本岡字上本町	7,000	縄文・平安・中世	4/17～9/14
⑭	日南郷遺跡 (確認調査)	富岡町上手岡字日南郷他	7,600 (※2,840含)	縄文	10/3～12/8 11/29～12/9

た。

二枚橋遺跡は戦後の農地構造改善事業により大きく削平を受けて、遺構の遺存状態が良くなかったため、発掘調査が予定より早く進行した。また同月初旬に榑葉町大谷山根遺跡と富岡町日南郷遺跡の発掘調査を開始した。

11月には榑葉町大谷山根遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。また、富岡町日南郷遺跡は、次年度に予定されていた発掘調査範囲について確認調査を実施した。

12月の初旬には富岡町日南郷遺跡の発掘調査・範囲確認調査が終了、12月20日には榑葉町馬場前遺跡の発掘調査も終了した。馬場前遺跡は、町道中島一高田線より北側4,500文化層2枚分（平安と縄文の文化層）が次年度調査となったため、シートによる養生を行った。

調査員は当初34名体制をとったが、1名欠員となったため最終的には33名の体制となった。

第2節 遺跡の位置と周辺環境

富岡町は浜通地方の南部に位置し、北は大熊町、南は榑葉町、西は川内村に接し、東は太平洋に面している。双葉郡の中核地域に位置づけられ、町の中央部を富岡川が、南側には紅葉川がそれぞれ東流し、太平洋へ注ぐ。町域の約40%は阿武隈高地から延びる舌状の丘陵によって占められ、現在町の中心部は標高10～70mの地帯に展開している。西方には標高約500mを測る阿武隈高地が連なり、そこから東へ向かっておよそ4段の平坦な段丘を経て、太平洋に臨む。最高峰は大倉山(593.1m)で、町域の南西にあり、榑葉町との境をなしている。

気候は、初夏の頃は「やませ」といわれる海からの冷たい東風による冷涼な日が続く、その後は太平洋上をわたる小笠原高気圧の南風を受けて比較的涼しく、冬は北西からの季節風が脊梁山脈である阿武隈高地を越える間に乾燥した風となり、強く吹き下ろしてくる。

富岡町の地形は、阿武隈高地の東縁を南北に走る双葉断層から太平洋沿岸にかけて緩やかに傾斜する丘陵地と沖積平野からなり、富岡川やその支流の遅沢川、紅葉川、またこれらの支流の小河川に開析された谷状の地形が、複雑に入り組んでいる。

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

富岡町内の遺跡の分布状況を概観すると、縄文時代～古代の遺跡が富岡川に沿った大字上手岡・小浜と、紅葉川に沿う上郡山・下郡山に多く発見され、中世以降の遺跡は後述のように主要な道路沿いに分布すると考えられる。

旧石器時代の遺跡は榑葉町の大谷上ノ原遺跡や、広野町の東下遺跡などが発見されているが、富岡町では今のところ未発見である。縄文時代の遺跡は、早～前期の遺跡として大菅地区の蛇谷須遺跡や本岡地区の本町西A・C・D遺跡、上本町G遺跡などがあげられる。これらは町の中心部から

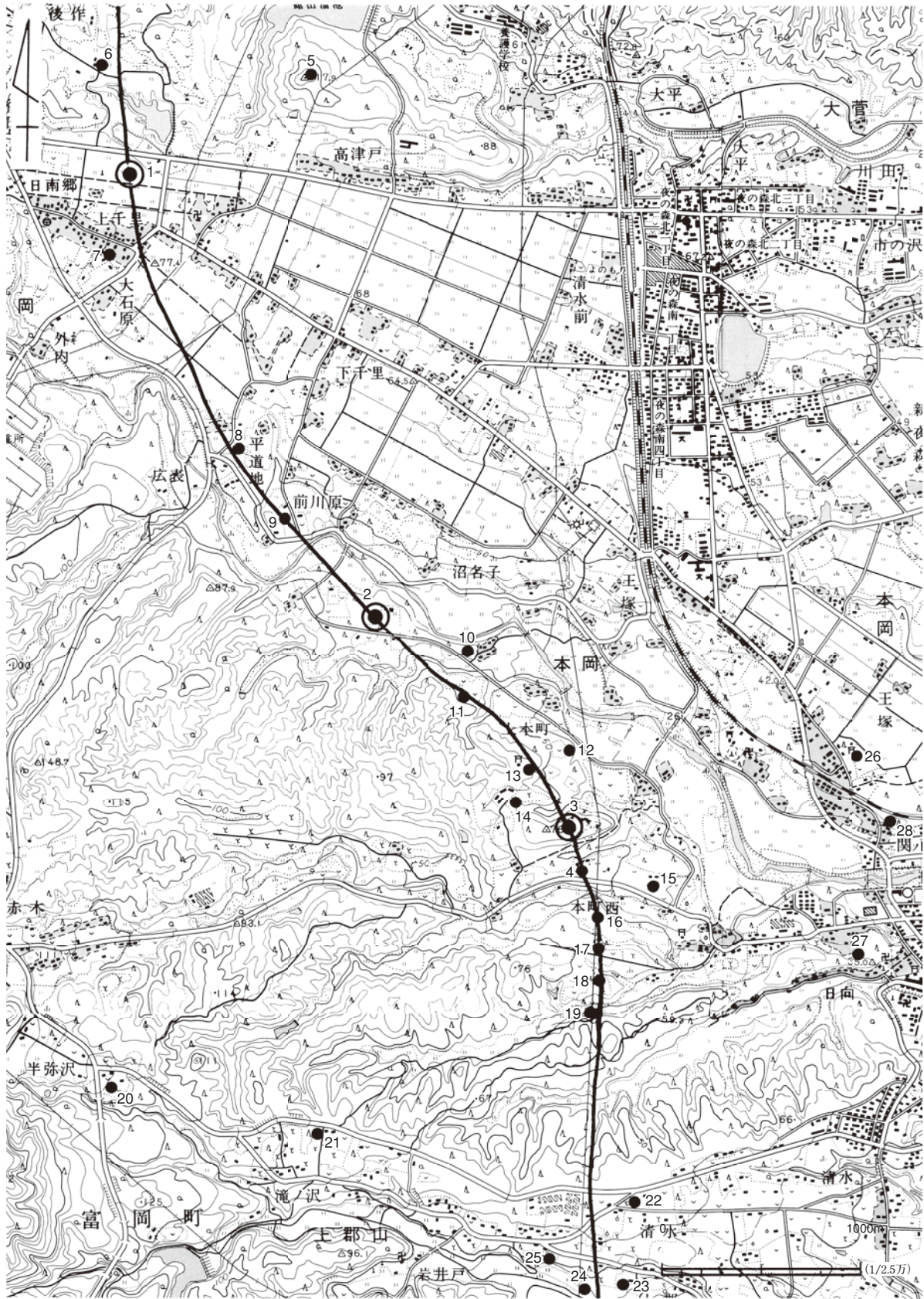


図2 遺跡所在図 (遺跡所在地の遺跡番号は、表2 周辺遺跡一覧の番号と符合する) 国土地理院「平13東複第369号」

表2 発掘調査遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	日南郷遺跡	54300054	富岡町上手岡字日南郷・後田	縄文時代・近世の散布地
2	上本町F遺跡	54300056	富岡町本岡字上本町	奈良～平安時代の散布地
3	上本町G遺跡	54300065	富岡町本岡字上本町	縄文時代の集落跡
4	本町西A遺跡	54300009	富岡町本岡字本町西	縄文時代の集落跡
5	高津戸館跡	54300003	富岡町上手岡字高津戸	中世の城館跡
6	後作A遺跡	54300055	富岡町上手岡字後作	縄文時代の散布地
7	大石原遺跡	54300053	富岡町上手岡字大石原	縄文時代の散布地
8	平道地遺跡	54300008	富岡町上手岡字平道地	縄文・平安時代の散布地
9	前川原遺跡	54300052	富岡町上手岡字前川原	近世の散布地
10	上本町E遺跡	54300062	富岡町本岡字上本町	縄文時代の散布地
11	上本町D遺跡	54300051	富岡町本岡字上本町	縄文・奈良・平安時代の散布地
12	上本町A遺跡	54300049	富岡町本岡字上本町	奈良～平安時代の散布地
13	上本町C遺跡	54300013	富岡町本岡字上本町	社寺跡
14	上本町B遺跡	54300061	富岡町本岡字上本町	奈良・平安時代の散布地
15	本町西F遺跡	54300048	富岡町本岡字本町西	縄文時代の散布地
16	本町西B遺跡	54300045	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地
17	本町西C遺跡	54300046	富岡町本岡字本町西	縄文・平安時代の散布地
18	本町西D遺跡	54300047	富岡町本岡字本町西	奈良・平安時代の散布地
19	本町西E遺跡	54300044	富岡町本岡字本町西	縄文時代の散布地
20	半弥沢遺跡	54300020	富岡町上郡山字半弥沢	縄文時代の散布地
21	滝の沢遺跡	54300021	富岡町上郡山字滝の沢	縄文時代の散布地
22	清水遺跡	54300057	富岡町上郡山字清水	奈良・平安時代の散布地
23	上郡A遺跡	54300058	富岡町上郡山字上郡・清水	縄文・奈良・平安時代の散布地
24	上郡B遺跡	54300060	富岡町上郡山字上郡	古墳時代の散布地
25	岩井戸東遺跡	54300059	富岡町上郡山字岩井戸	奈良・平安時代の散布地
26	王塚古墳	54300012	富岡町本岡字王塚	古墳
27	日向館跡	54300016	富岡町本岡字本町	中世の城館
28	関根遺跡	54300013	富岡町本岡字関ノ前	縄文時代の散布地

若干西へ入った、標高45～76mを測る比較的標高の高い丘陵上にある。縄文時代中期から後・晩期の遺跡としては、多数の土器片や石器が出土した上手岡地区の片倉遺跡がある。また上郡山の一本松遺跡では土偶が出土した。早～前期の遺跡は阿武隈高地よりの、あるいはそこから東へ延びる丘陵状に存在する。また、それ以降の遺跡は、富岡川沿いの平坦な沖積平野に分布する。

弥生時代になると中期の遺跡が若干見られる程度である。毛萱遺跡で中期前葉頃の土器や土偶が出土している。真壁地区の下郡山A・B・C遺跡で、わずかに天神原式土器や中期後葉頃の土器片が確認された程度である。

次に古墳時代になると、富岡川沿いの本岡地区や河口部、紅葉川水系の上郡山地区などに古墳がみられる。本岡地区の王塚古墳からは直刀が出土している。下郡山地区では下郡山古墳が、小浜地区では小浜古墳群がある。これらはいずれも円墳である。また小浜地区には小浜横穴群、清水尻古墳群などがある。古墳時代の遺跡は海岸近くの丘陵部と台地上に集中しており、この時代の開発が

海岸付近の河口部などの支谷を中心に行ったことがわかる。

奈良～平安時代の代表的な遺跡としては、小浜代遺跡があげられよう。この遺跡は富岡川の河口部北岸の段丘上にあり、奈良三彩片や、六葉重弁蓮華文軒丸瓦、開元通宝などが出土した。遺跡周辺では同時代の集落跡が確認されたとされる。10世紀初頭の承平年間成立の『倭名類聚鈔』に見える古代の磐城郡榎葉郷は、この地域に相当するといわれるが、10世紀後半頃に榎葉郷と白田郷が磐城郡から分置されて榎葉郡となり、そして郡衙は現在の双葉町郡山に置かれたと考えられている。本町西B遺跡では、奈良～平安時代の土師器が出土している。

中世の富岡町は、岩城氏と相馬氏の勢力の境界に位置したため、しばしば争いの舞台となった。この時代の代表的な遺跡は、城館跡であろう。まず、日南郷遺跡の北東には、高津戸館跡がある。南北朝期の築城と伝え、建武4(1337)年に北朝方に攻略され、以降岩城氏の最前線となったとされ、現在でも土塁や井戸跡が遺存している。次に上本町G遺跡の東側で発見された諸沢館跡がある。これは『福島県の中世城館跡』(1988)には記載がないが、西から東へ延びる丘陵を南北に分断するかのよう、堀切で区画している。内陸部を走る現在の県道35号線と、富岡の中心街を結ぶ赤木街道の東側の要衝ではあるまいか。その他、福島第2原発用地内の毛萱館跡、上郡山にある上郡山館跡、小浜の小浜館跡など、いずれもかつての陸前浜街道や県道小野富岡線など主要な道に沿うか、あるいは近接した場所に存在する。

富岡町の近世は、天正18年のいわゆる奥州仕置きにより、岩城氏領となることから始まる。慶長7(1602)年岩城平藩領となる。その後元和8(1622)年からは富岡組の村々として支配を受けるが、平藩支配下では騒動や一揆が多発し、延享4(1747)年以降は幕府天領となって小浜代官の支配下に入った。その後は、陸前浜街道沿いの宿駅としての性格を強くもち、にぎわいを見せながら幕末に至る。このころの遺構としては、新夜ノ森の新田町一里塚や上郡山の清水一里塚が残されている。また、近世には、阿武隈高地の東山麓一帯で製鉄操業がさかんに展開される。本県唯一の洋式技術が確認されている上手岡鉄山高炉跡や、同じく滝川製鉄遺跡などがある。

戊辰戦争以降、近現代の富岡町はやや複雑な経過をたどり、明治9年に福島県に合併されて現在に至っている。明治22(1889)年の市制町村制施行により、榎葉郡富岡村と上岡村が成立。同33年町制が施行されて現在の富岡町の基礎となる。昭和30(1955)年双葉町と富岡町が合併して、現在の富岡町となる。近代初頭の主な産業は農業であるが、明治30年頃から農家の副業としての養蚕が始まり、大正末頃には町の主要産業にまで発展する。また、町の特産品としてハウストマト栽培、双葉牛に代表される酪農もさかんであるが、昭和48(1973)年、毛萱地区に東京電力福島第2原子力発電所が設けられ、産業構造も大きく変化しつつある。

第1編 ^{かみ} ^{もと} ^{まち} 上本町 G 遺跡

遺跡記号 TO-KMM・G

所在地 双葉郡富岡町本岡字上本町

時代・種類 縄文時代 集落跡

調査期間 平成12年5月26日～9月26日

調査面積 14,100㎡

調査員 宮田安志・細山郁夫・関 博人
国井秀紀・新海和広

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

上本町G遺跡は、双葉郡富岡町大字本岡字上本町地内に所在し、阿武隈高地から東に延びる丘陵の頂部平坦面とその南北両側の傾斜面に立地している。遺跡は富岡川から南へ約0.5km、JR常磐線の夜ノ森駅から南へ約2kmのところであり、福島第2原子力発電所のある太平洋の海岸線から、約4km西にある。

本遺跡のある富岡川下流域の地形を外観すると、北岸と南岸で景観が異なる。すなわち、北岸では中位Ⅱ段丘面に相当する平坦な段丘が東に向かって標高を減じながら続き、これに対し南岸は双葉富岡層を基盤とする丘陵地である。この丘陵地は小河川によって樹枝状に開析された複雑な地形的景観を呈している。

上本町G遺跡はこのような富岡川の南岸にあって、大年寺層を基盤としたローム層丘陵の上部に立地し、北側と南側をそれぞれ東流する沢に挟まれて、東西に細長く延びる標高約75mを測る長い丘陵とその南北両面の斜面部からなっている。この丘陵上からは、東は富岡の市街地や太平洋を、また、南は楢葉、北は大熊・双葉方面の眺望がきく。

本遺跡の丘陵の東端部には、諸沢館跡とよばれる城館がある。調査区の東境に沿って丘陵を南北に横断するように堀切が認められる。また、南の沢を隔てた台地上には、本町西A遺跡があり、一方北側約1.2kmには上本町F遺跡が存在する。 (細山)

第2節 調査経過

上本町G遺跡は、平成8年度に福島県教育委員会が(財)福島県文化センターに委託して実施した常磐自動車道いわき市四倉～富岡町間の表面調査で発見され、遺跡の可能性が高い場所(T-B12)として登録された。その後、日本道路公団より予定工区が提示され、平成9～11年度に試掘調査が行われ、縄文時代早期頃の土器が出土し、斜面上位の平坦面に縄文時代前期の集落の存在が推定されたため、上本町G遺跡と命名した。これらの成果を受けて要保存範囲とされた14,100㎡に関して、平成12年度に発掘調査を実施する運びとなった。

以下に日誌概要を記す。

4月下旬 調査区内のセンター杭や伐採木の残置状況、北側沢の進入路用地などの下見を行う。

5月中～下旬 進入路の整備、プレハブ設置用地などの選定を行う。

6月上旬～中旬 調査区の範囲確認、縄張りを行う。プレハブ用地などの整備。北側から進入路を開削していったが、これについては試掘結果に基づいて、遺構や遺物が確認されない所を縫うよ

うに設定していった。完成と同時に、調査区の丘陵頂部から表土剥ぎを開始。同15日から作業員を導入。調査員5名、作業員約60名の体制で調査に当たることとした。

試掘調査の結果を踏まえ、調査区中央部の丘陵頂部平坦面西側から遺構検出を開始する。同時に休憩所や仮設トイレなども設営。

6月下旬 北側斜面の表土剥ぎに着手。安全対策のため北側進入路に階段・手摺を付ける。重機による表土剥ぎをほぼ終了し、遺構検出作業本格化。この間、基本土層の確認などを行う。

7月上旬 ベンチ・マークの移動、基準杭の打設を行う。検出作業ほぼ終了し、これにより遺構が頂部平坦面中央から西側に偏在し、東側は少ない傾向を把握した。遺構の掘り込みを開始する。

7月中旬～8月上旬。平坦部西側から中央部にかけて、竪穴住居跡や土坑が多く検出された。これにより、調査区内での遺構の分布状況などがはっきりしてきた。北側斜面の調査開始。トレンチ調査により基本土層を確認。縄文土器片が少量ではあるが出土した。この頃から晴天続きとなり、以降水不足に悩まされることとなる。

8月下旬～9月中旬。南側斜面の上位から遺構検出作業を開始。斜面下位では倒木や雑草の除去を行う。この南側斜面は、試掘調査でも遺構・遺物が稀薄で、また、全面の表土を除去した場合調査区外の林道や沢部への土砂流出による被害も懸念されたため、トレンチ掘削で対応し、表土除去は最小限にとどめた。

9月下旬 地形測量を開始。南側斜面ではトレンチを設定し、確認調査を行う。また、航空写真を撮影。同時に撤収にむけて器材の片付けや清掃などを実施。プレハブ・仮設トイレその他器材などを返却し、26日上本町G遺跡の発掘調査を終了した。

本遺跡の調査は地形が急斜面であり、開始以前から条件面の整備に問題が多く、進入路の取り付けや排土処理、南北両斜面からの土砂流出時の対処など、課題を抱えながらの調査であった。

(宮 田)

第3節 調査の方法

調査区内のグリッド設定に関しては、日本道路公団で設定した道路工事施工範囲内の中心杭2本(256+0.000, 256+20.000)を基にして行った。上記の2本の中心杭の座標をもとに、三角関数等で求められた真北ラインを設定し、そのライン上の区切りの良い地点N390, E890を規準にし、10m四方のグリッド網を調査区内全体に設定した。グリッドに沿って10mごとに西から東にA・B・C～Q, 北から南に1・2・3～16, これらの組み合わせにより各グリッドを表示することとした。さらに、より詳細な遺物の出土位置確認ができるように、グリッド内を5m四方に4分割し、時計回りで、北東側からa・b・c・dとした。なお、測量基準杭の設置にあたってはトータルステーションを使用した。地点の表記は、グリッド基軸線を国土座標に則って設定しているため、国土座標の下3桁を利用して示すこととした。図中でN378・E696と表記されている地点は、国土座標IX

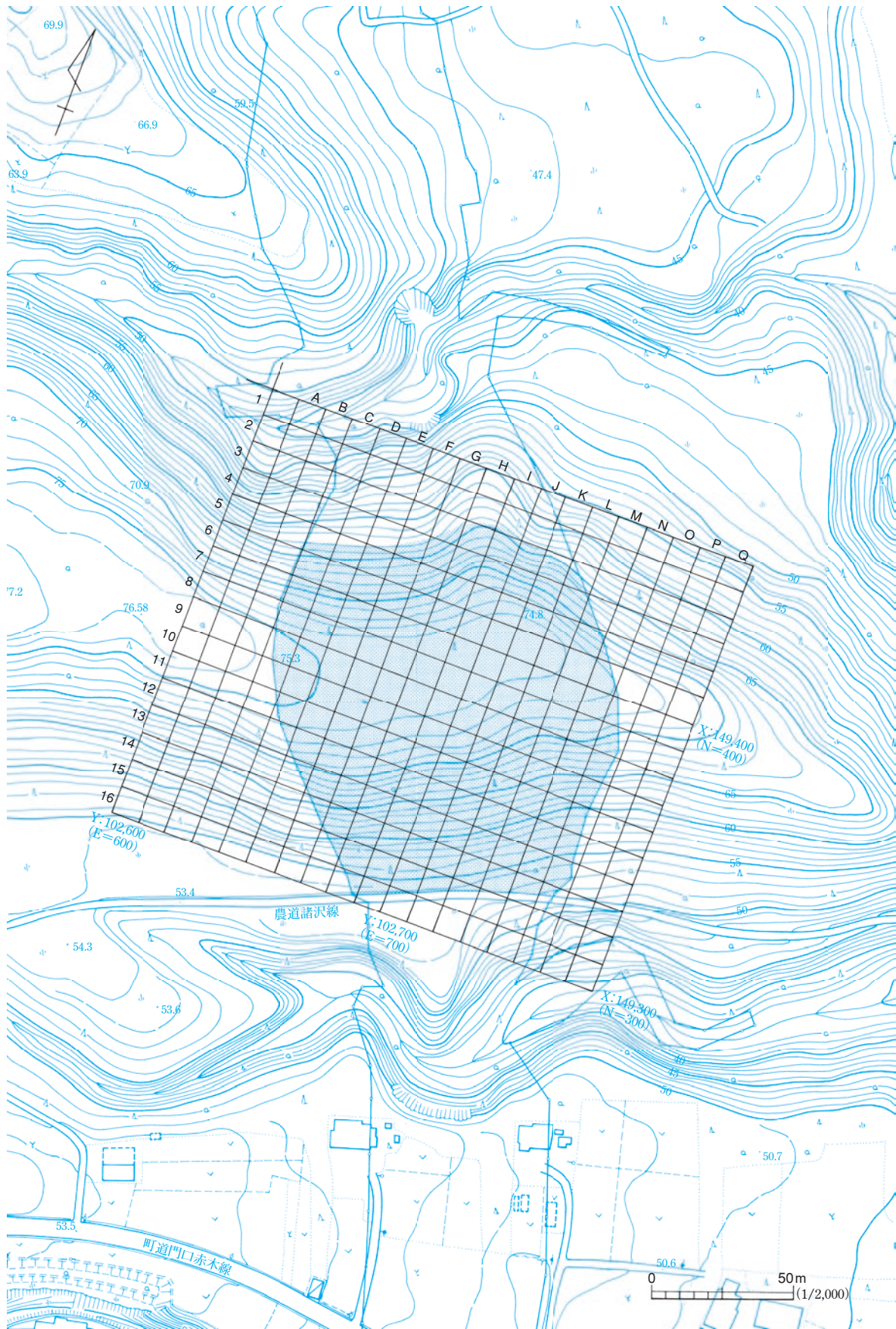


図1 調査区とグリッド配置図

系のX=149,378, Y=102,696に相当する。

ベンチ・マークは、本遺跡の南側に位置する本町西A遺跡内に設置したものを尾根部まで移動し、標高75.00mとして随時使用した。

基本土層については、頂部平坦面では、調査区西端に設定した土層観察用のトレンチの断面を基に、表土から地山までのL IからL VIまでを確認した。また、北斜面と南斜面については、尾根部から裾部まで通したトレンチにより土層を観察した。遺構内の土層は、土坑や柱穴は半截し、竪穴住居跡では、4分割して土層を観察した。焼土遺構は範囲図作成後、断ち割りを行い、その厚さを記録した。

遺物取り上げの出土層位については、遺構外ではL, 遺構内ではℓで表示した。

遺構の記録は、1/20縮尺を基本とし、焼土遺構等の小型の遺構については1/10縮尺で平面図及び断面図を作成した。写真は調査段階に応じて35mm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムで随時撮影し、竪穴住居跡等については、6×4.5判のモノクローム・カラーリバーサルの撮影も併せて行った。調査後の全景や遺構集中部については、ラジコンヘリコプターで上空からも写真撮影している。地形測量は、1/200縮尺で作成した。

発掘調査で得られた記録・遺物資料は、(財)福島県文化センターで整理を行い、本報告書作成終了後は、資料台帳を作成して、福島県文化財センター白河館に保管する予定となっている。(関)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺構の分布状況

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑33基、屋外焼土遺構4基、竪穴遺構1基、グリッドピット1基である。出土遺物は、遺構内・外から総数10,428点が出土しており、その内訳は、縄文土器片7,900点、弥生土器片が確認可能なもので1点、土師器片5点、陶器類2点、石器類647点、炭化物417点、焼成粘土塊1,453点、銭貨3点である。土器片は出土総数の99%を縄文土器が占め、石器類・炭化物・焼成粘土塊の大多数もこの時期に属すると考えられる。

遺構配置図は図2・3に示してある。これで遺構の分布を概観すると、調査区内の頂上平坦面では概ね全面的に遺構が分布している状況がみとれる。

縄文時代の遺構は、住居跡が頂部の平坦面北西部以外は等間隔に散在しており、土坑はほぼ調査区全体に散在するが、住居跡も土坑もG8・H8グリッドでは密集する様相を示す。

時期別に見ると、縄文時代前期前葉に所属する住居跡が調査区中央より東側、前期後葉に所属する住居跡が調査区中央より西側に多く分布しており、これは、図46の遺構外出土遺物の分布状況とも符合する傾向である。現況でのG8・H8グリッドの遺構密集状態は、前期後葉の住居跡と前期前葉の土坑が重複しているため、異時期の遺構の接点であることによる。

前期前葉の住居跡は、2号住居跡は確実であるが、その他に5・10号住居跡は、その可能性がある。これらの配置は調査区中央より東側に集中している。土坑の場合、住居の配置よりは西側に分布している。

調査区西側の前期後葉に属する遺構群は、住居跡と土坑が比較的セットになり分布する状況を示すが、土坑の分布は調査区西端部まで見られるため、前期後葉の集落がより西側に伸びるものと考えられる。住居跡の分布で顕著な例は、南側斜面沿いには西から1・4・9号住居跡が長軸を東西方向にもって並ぶが、北側斜面沿いには3号住居跡しか存在しないことである。3・6a号住居跡は炉列が南北に伸びていることから、住居の軸方向が南北になるものだと考えられ、これより東側では前期前葉の遺構が分布するようになるので、前期後葉の住居跡は3・6a号住居跡のラインで、西側から伸びる住居列が閉塞すると考えられる。

縄文時代前期以外の縄文時代に属する遺構は、D10グリッドに位置する6号土坑が後期前葉に属するが、これ以外には確認されなかった。

縄文時代以外と考えられる遺構には、平安時代に属する可能性のある1号竪穴遺構がある。この遺構は、平坦面中央でも南側斜面際に立地している。斜面際になると、斜面への崩落が多くなるた

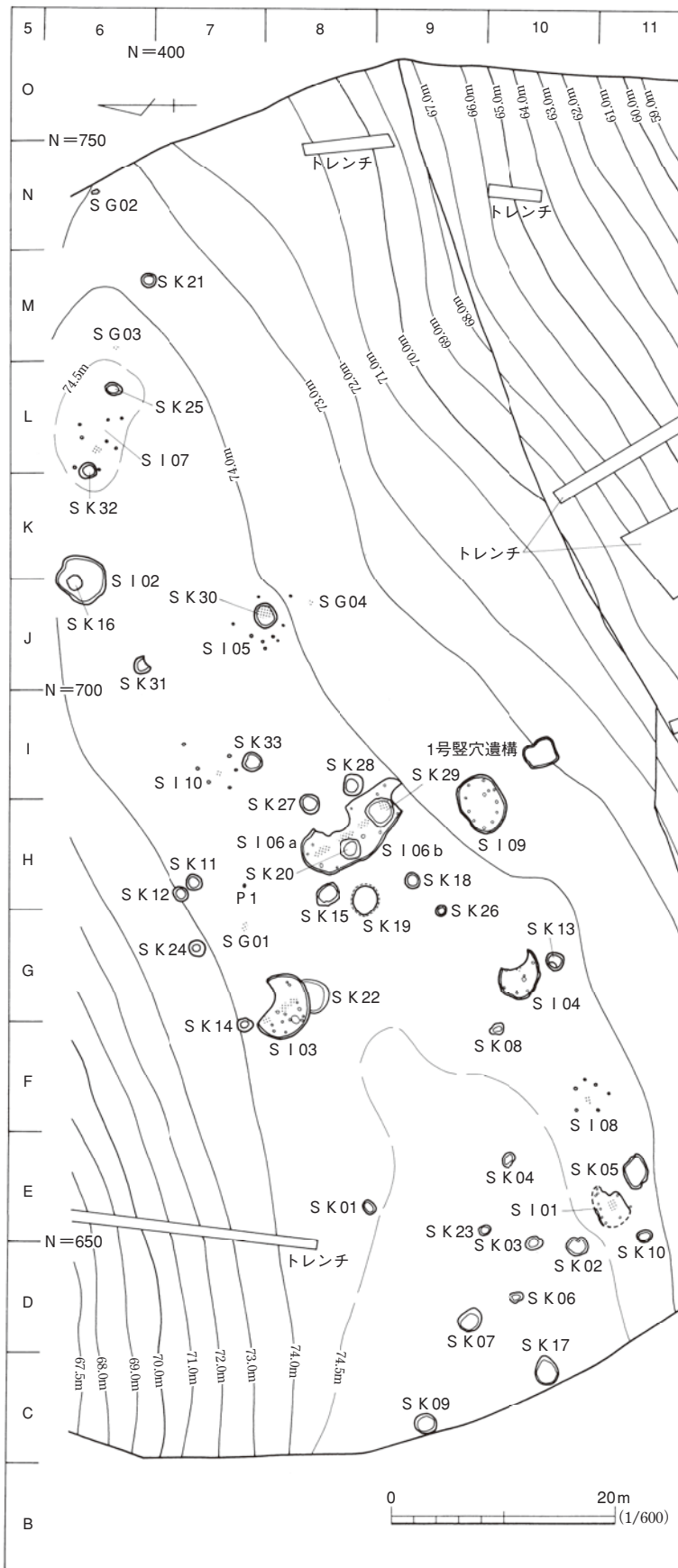


図2 遺構配置図

めローム層の層厚が薄く、段丘礫層がほぼむき出し状態になっており、遺構構築には不向きな場所と考えられるが、わざわざこういった場所に構築する点は、遺構の性格や特殊性に結び付くものとも考えられる。

調査区内の頂部平坦面北側と南側には急傾斜の斜面がある。ここでは、調査対象外になる近代以降の炭窯3基が確認されたが、その他遺構は確認されなかった。また斜面には、段丘面である頂部平坦面から、崖錐性の礫が多量に崩落堆積している状況で、良好な包含層は確認されなかった。そのため斜面出土の遺物も、北側斜面では散発的に得られたが、南側斜面では10点前後の出土量でとどまった。

以上のように、本遺跡の場合、ほぼ遺構も遺物も縄文時代のものが大勢を占め、遺構の分布でも縄文時代の遺構が重要性を帯びていると言える。縄文時代のなかでも主体になるのは前期前葉の時期と前期後葉の時期で、いずれも生活跡が構築されている。(新海)

2. 基本層序

調査区は、本遺跡が東西方向に伸びる丘陵に位置することから、丘陵上の平坦面とその南側

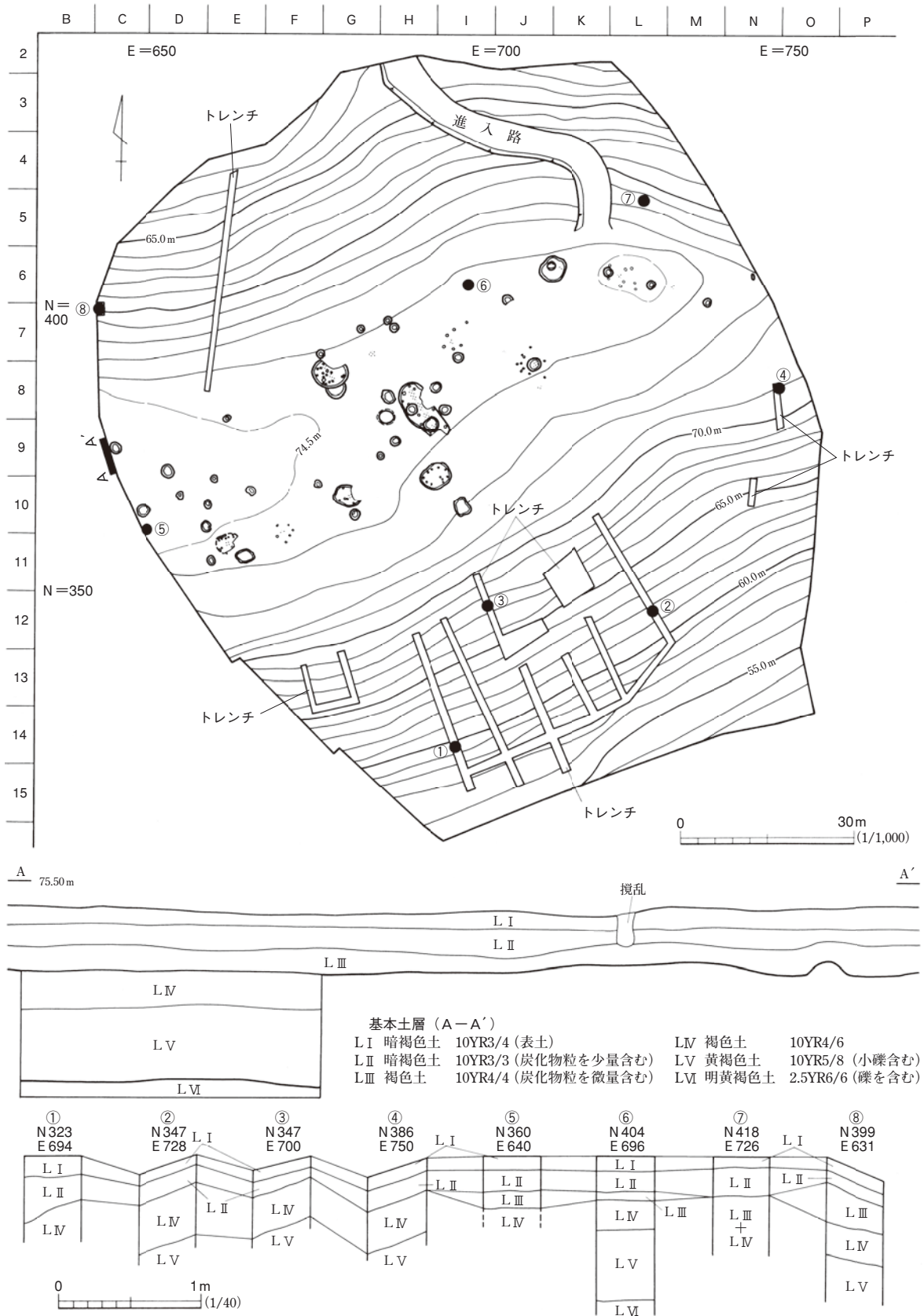


図3 土層観察地点と基本土層

北側の両傾斜面に形成されている。現況は山林である。土層の観察は、土層図と土層注記を記した平坦部のA-A'、柱状図で示した平坦部と斜面部にかけての①～⑧について行った(図3、写真6・7)。また、柱状図上には、その位置を記した。調査区内の基本層序は、土層の特徴と遺構・遺物の関係から6つに大別され、上層からそれぞれにLⅠ～LⅦという土層番号を付した。

LⅠは腐葉土化した暗褐色土の表土である。調査区内において平均に認められる。締まりがなく、木根が多く認められる。

LⅡは暗褐色土である。土色はLⅠに比べ、本層の方がやや暗い。締まりがある。本層はLⅠと同様に調査区内において平均に認められる。縄文時代前期の土器を中心に、縄文時代早期～平安時代までの遺物が含まれている。このため、本層は、調査区内における遺物包含層である。本層より2号焼土遺構が検出されているため、この遺構は他の遺構よりも新しい可能性が高い。

LⅢは粘性のある褐色土である。平坦面での本層の色調は、東側に向かって赤味が強くなる。LⅡよりも締まりがある。縄文時代早期～晩期の遺物が含まれている。平坦部から北側傾斜面部にかけて認められるものの、南側傾斜面部では確認されなかった。層厚は、平坦部で全体的に薄く、北側傾斜面では厚い。本層はLⅡと同様に遺物包含層であるが、その出土位置は本層の上部である。遺物は縄文時代のものに限定される。

LⅣは褐色土で、LⅢとLⅤの間に認められる漸移層である。LⅢに比べて黄色味が強く、締まりもある。上面は今回の調査での遺構検出面となる。本層以下の層は、無遺物層である。したがって、本調査区における遺跡基底面はLⅣ上面となる。

LⅤは粘性のある黄褐色土で、いわゆるローム質の土質となっている。かなり締まりがある。南側と北側の斜面では小礫が含まれている。

LⅥは明黄褐色土である。平坦面の一部で本層上面付近を確認しただけであるが、締まりがあり、礫を含む。

LⅦは礫層である。平坦面南側縁辺部の標高72.0～73.0m付近では、本層に相当する礫層(段丘礫層)が確認されている。このようなことから、礫層によるこの範囲については、遺構を構築することが困難であるために遺構が存在していないものと考えられる。(国 井)

3. 遺跡の年代と土器分類

出土土器は、器形及び文様の特徴から便宜的に下記のような時期分類を行った。

I 群土器 縄文時代早期中・後葉の土器群である。

1 類 沈線文系土器。

2 類 条痕文系土器。

II 群土器 縄文時代前期前葉の土器群である。

1 類 縄圧痕文と竹管凸面を使った沈線文を施し、胴部に非結束羽状縄文を施すもの(花積下層式併行期の土器)。

- 2類 刺突文による列を施すもの（宮田Ⅲ群土器系の土器）。
- 3類 平行沈線間に短沈線が施されるものや瘤状の貼付文が施されるもの（関山式系の土器）。
- 4類 Ⅱ群土器に該当するものと思われる破片・胴部資料。
- 5類 Ⅱ群土器に該当するものと思われる底部資料を一括した。

Ⅲ群土器 縄文時代前期後葉の土器群である。

- 1類 地文に沈線文・波状貝殻圧痕文等が加飾するもの（浮島式系の土器）。
- 2類 縄文地文上に浮線文が施されるもの（諸磯式系の土器）。
- 3類 大木系の土器。
- 4類 Ⅲ群土器に該当するものと思われる破片・胴部資料。
- 5類 Ⅲ群土器に該当するものと思われる底部資料を一括した。

Ⅳ群土器 縄文時代中期から晩期の土器群である。

- 1類 中期末から後期初頭の土器。
- 2類 後期前葉の綱取Ⅱ式期の土器。
- 3類 後期中葉の加曾利B式期の土器。
- 4類 後期後葉の新地式期の土器。
- 5類 晩期前葉の大洞B式期の土器。
- 6類 Ⅴ群土器に該当するものと思われる破片・胴部の粗製土器。
- 7類 Ⅴ群土器に該当するものと思われる底部資料を一括した。

Ⅴ群土器 弥生時代中期の土器群である。出土量が少ないため細分していない。

Ⅵ群土器 平安時代の土器を一括した。

以上の土器分類から今回調査した範囲内の遺跡の年代間を設定した。特に、主体となる縄文時代前期のⅡ・Ⅲ群土器について分類した各群・各類の詳しい説明は、本章第6節を参照いただきたい。

(国 井)

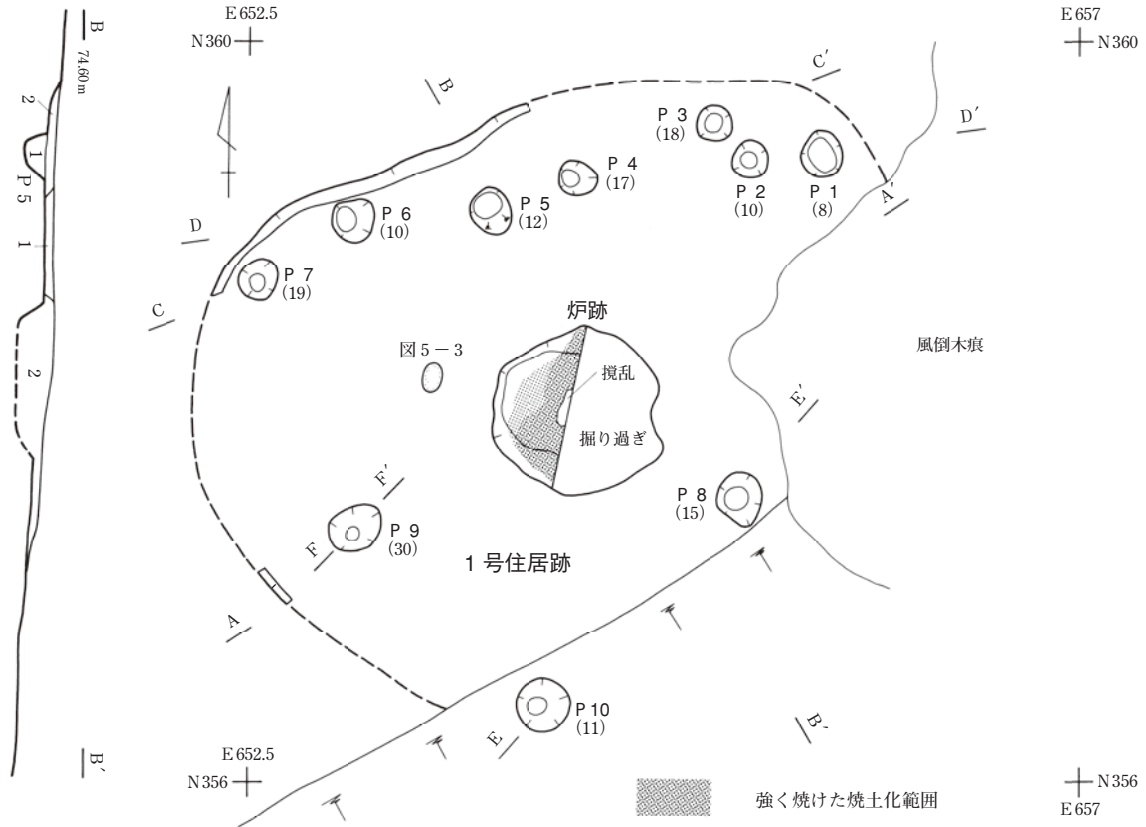
第2節 竪穴住居跡

今回の調査では、竪穴住居跡を11軒検出している。いずれも、調査区中央の丘陵頂部平坦部で確認され、その全域に分布している。遺存状態は悪いものが多く、特に、5・7・8・10号住居跡は焼土遺構の周りにピットが巡るように検出されたことから住居跡と判断したものである。また、6号住居跡は2時期と考えられることから6 aと6 bの2つに分けた。住居跡の平面形は、いずれも楕円形を呈し、住居跡の内部には炉跡が認められる。時期は、縄文時代前期のものが大半と考えられる。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図4・5, 写真8)

本住居跡はE11グリッドのLⅣ上面で検出した。住居跡の東側は2割程が風倒木痕によって破壊されており、南側では傾斜により東壁・南壁を失っている。また、当初確認していた範囲よりも小



- 1号住居跡内堆積土
- 1 暗褐色土 7.5YR3/4 (炭化物粒・焼土粒を含む)
 - 2 褐色土 7.5YR4/6 (炭化物粒を含む)

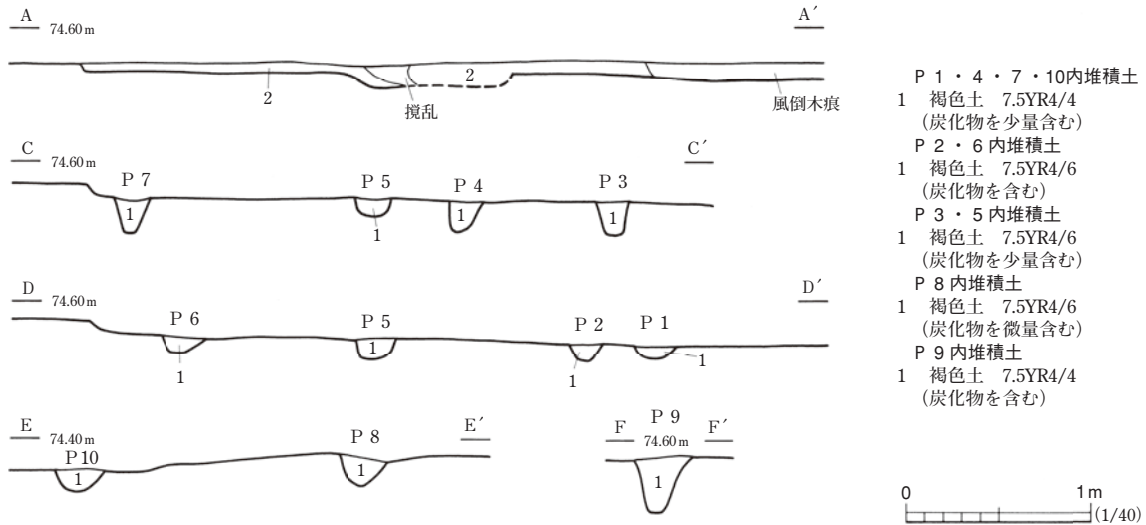


図4 1号住居跡

さかったため一部掘りすぎている。重複する遺構はない。周辺には、南東1 mに5号土坑、南西1 mに10号土坑、北西1.5 mに2号土坑が位置する。

堆積土は2層に分層されたが、ほとんどは2の褐色土のみである。土塊を含まないことから自然堆積で埋没したと考えられる。

平面形は、遺存状態から東西主軸の楕円形と推定され、規模は推定で長径4.0 m、短径3.0 mと考えられる。床は南斜面に向かって緩やかに傾斜している。周壁は、壁高が北壁と西壁で検出面から約5 cmを測り、外傾して立ち上がる。

炉跡は、床面中央部に位置し掘り窪みを伴う。炉跡の平面形は円形状を呈し、規模は径90 cmを測る。焼土の厚さは最大8 cmで、周辺部より中央部が強く焼けている。

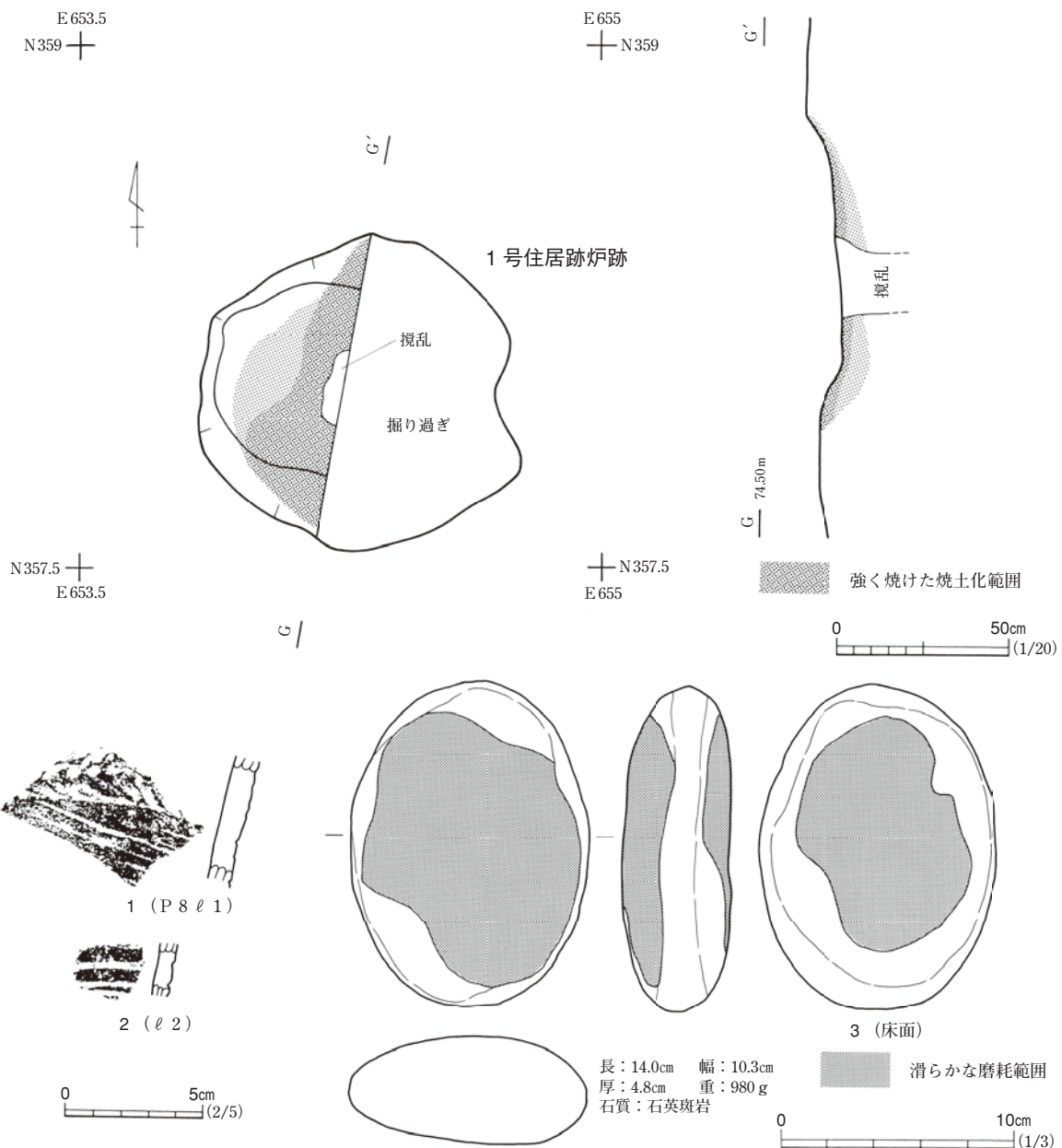


図5 1号住居跡および出土遺物

ピットは、床面から10基検出された。ピットの径は上端幅20～28cmで、床面あるいは検出面からの深さは7～30cmの範囲である。床面からの深さで分けると、P 3・4・7・9は深くなるが、P 10は床面以下の検出であり、その分の比高を考慮すると深い部類に含まれる。それ以外は比較的浅いピットであることから、おそらくこれら深いものが柱穴として考えられる。P 3・4・7・9・10の配列によれば、柱構造は壁際に比較的偏在するものと考えられる。

遺物 (図5, 写真44)

出土遺物は、床面やピット内から土器片5点と磨石1点である。土器は多くが小片のため、図示したのは2点である。図5-1は横走する変形爪形文の下に斜行する平行沈線が施文され、2は平行沈線のみが施される。いずれもⅢ群土器と考えられる。3は炉の脇から出土した磨石で、ほぼ全面に摩耗痕が観察される。

まとめ

1号住居跡は平面形が楕円形を呈し、中央に炉を持ち、柱穴の配列から壁柱のみで上屋を支える構造の住居だったと考えられる。住居機能時期は、判断材料となる土器が少ないが、おそらく縄文時代前期後葉のⅢ群土器の時期と考えられる。 (新海)

2号住居跡 S I 02

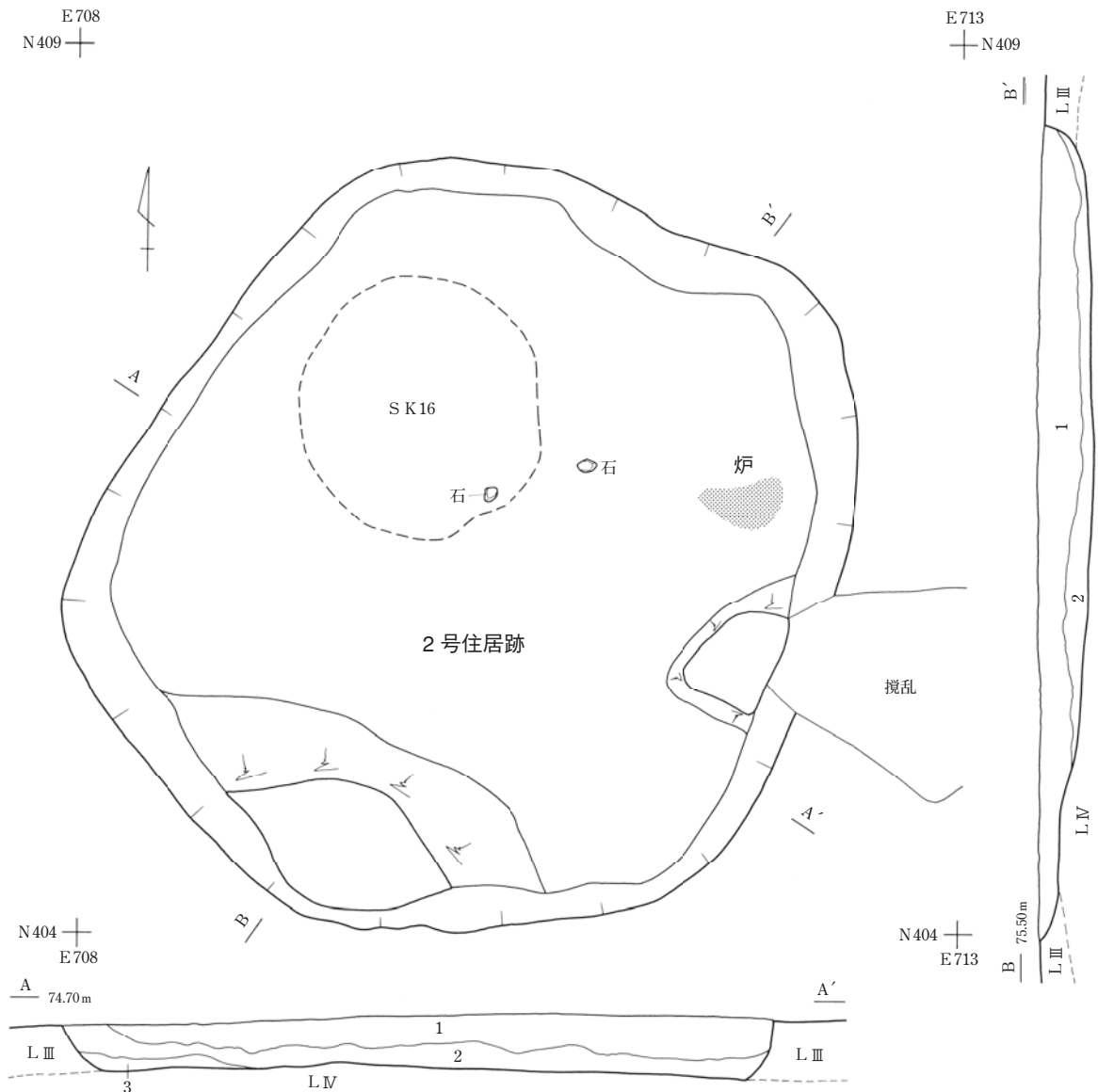
遺構 (図6, 写真9)

本住居跡は調査区の中央からやや東寄りのJ6, K6グリッドにまたがって位置する。地形的には丘陵頂部平坦面の肩の部分にあり、北斜面との境に存在している。遺構検出面はLⅢ上面で、鈍い赤褐色土の広がりとして検出された。床面を精査中に16号土坑が検出されたが、本住居跡の方が新しいと判断した。遺存状態は比較的良好である。

平面形はややゆがんだ五角形を呈し、主軸を北東方向にとる。大きさは上端で長径約4.40m、短径約4.00mを測る。検出面からの深さは10～25cmを測る。床面の形もややゆがんだ隅丸の五角形で、大きさは長径約4.00m、短径約3.60mを計測する。遺構内の堆積土は3層に分けられた。ℓ1は少量の焼土・炭化物粒を含み、ℓ2は少量の炭化物粒を含む褐色土で、縄文土器片が数点出土した。ℓ3はLⅢを基質とする堆積土で、壁際で三角堆積を示し、次第に水平に堆積する様相を呈しており、本住居跡は自然に埋没したと考えられる。遺物はすべてこのℓ2から出土した。付属施設としては、南東側に床面を僅かに高く掘り残した部分があり、堅く踏みしまっていることからここを出入り口と推定している。また、床面東壁際に長さ50cm、幅25cmほどの不定形の広がりを持つ焼土範囲が検出され、ここが炉跡と考えられる。その他、貼床や柱穴などは確認されなかった。

遺物 (図7, 写真45)

本住居跡では、ℓ2から9点の縄文土器片が出土した。すべて胎土中に植物繊維を混和する資料である。1は外面に半截竹管状工具により、右上から2本同時の刺突が行われる。内面は条痕が施される。2は内外面ともに条痕文が観察される。3・4・6・8はいずれも羽状縄文を有する資料で、



- 2号住居跡堆積土
- 1 にぶい赤褐色土 10YR4/6 (やや粘性あり, 少量の焼土粒・炭化物粒を含む)
 - 2 褐色土 10YR4/4 (やや粘性あり, 縄文土器片出土, 少量の炭化物粒を含む)
 - 3 明褐色土 7.5YR5/8

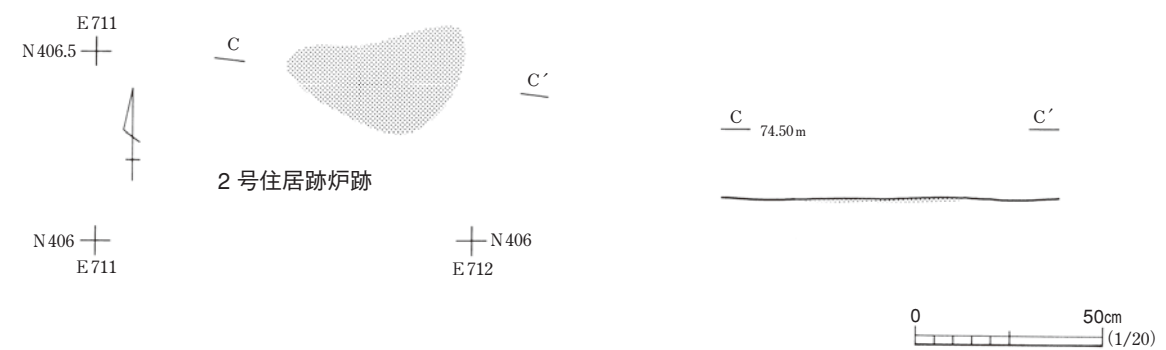
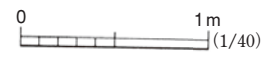


図6 2号住居跡

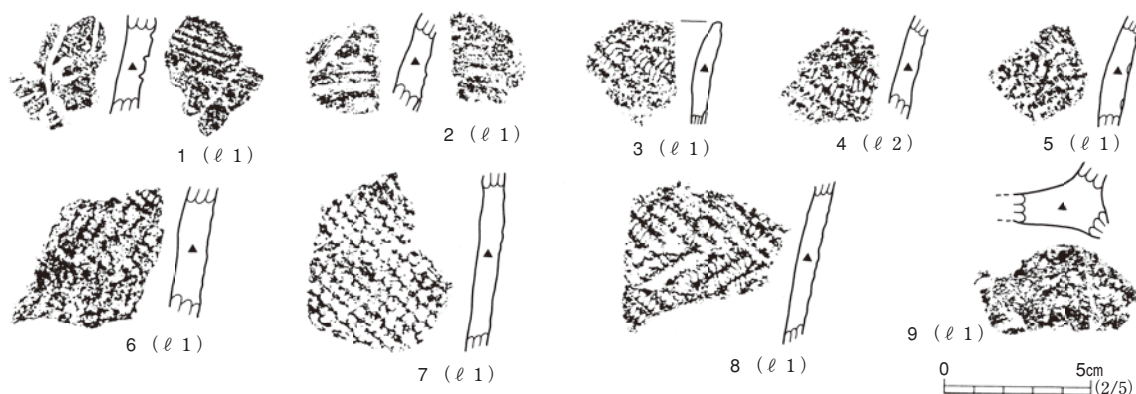


図7 2号住居跡出土遺物

8は非結束の羽状縄文である。5・7は斜縄文が施される。9は底部資料で、上げ底気味の底面に縄文が観察される。

まとめ

本住居跡は、丘陵頂部平坦面でも北側斜面との際付近に位置している。他の住居跡が調査区中央部に集中するのに対し、単独で存在する特徴がある。炉跡は床面中央でなく、東側に偏在している。出土土器は、縄文時代早期末葉と前期初頭から前葉に属するが、自然堆積と考えられる $l 1 \cdot l 2$ から出土した小片で、本住居跡が機能した時期は若干さかのぼる可能性もある。しかし、床面から検出された16号土坑がその出土土器から縄文時代前期前葉と判断されるので、本住居跡の所属時期は縄文時代前期前葉頃と考えて大過ないであろう。 (宮田)

3号住居跡 S I 03

遺構 (図8・9, 写真10, 11)

調査区中央F・G 8グリッドのL IV上面で検出した。住居跡の範囲は、土器が多く出土したため、この周辺の検出を行ったところ、炭化物粒を含む褐色土範囲を確認した。本遺構の北側は、風倒木痕により壊されている。また、南側では22号土坑と重複し、その関係については、堆積土や南東側の炉跡から本遺構の方が新しいと判断した。

遺構内堆積土は4層に細分され、 $l 2$ 以外は炭化物粒や焼土粒等を均一に含み、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。 $l 2$ は、堆積状況や人頭大の礫や黄褐色土塊や焼成粘土塊が含まれることから、住居廃絶後に投棄されたものと考えている。

平面形は、楕円形を呈するものと推定され、長軸方向は真北から西に 72° 傾いている。規模は、長径6.05m、残存する短径4.45mを測る。周壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は最大30cmである。床面はやや軟質で、小さな凹凸が認められるものの概ね平坦である。また、南東側では本遺構が22号土坑の底面を床面としているため、最大10cmの段差が認められる。ピットは17個検出された。大きさは、径が16~42cm、深さが11~29cmで大型のものと小型のものがあり、深さは25cm前後のものが多い。また、P 17は検出面が炉跡として使用されているため、この炉跡より古い。ピットの配列

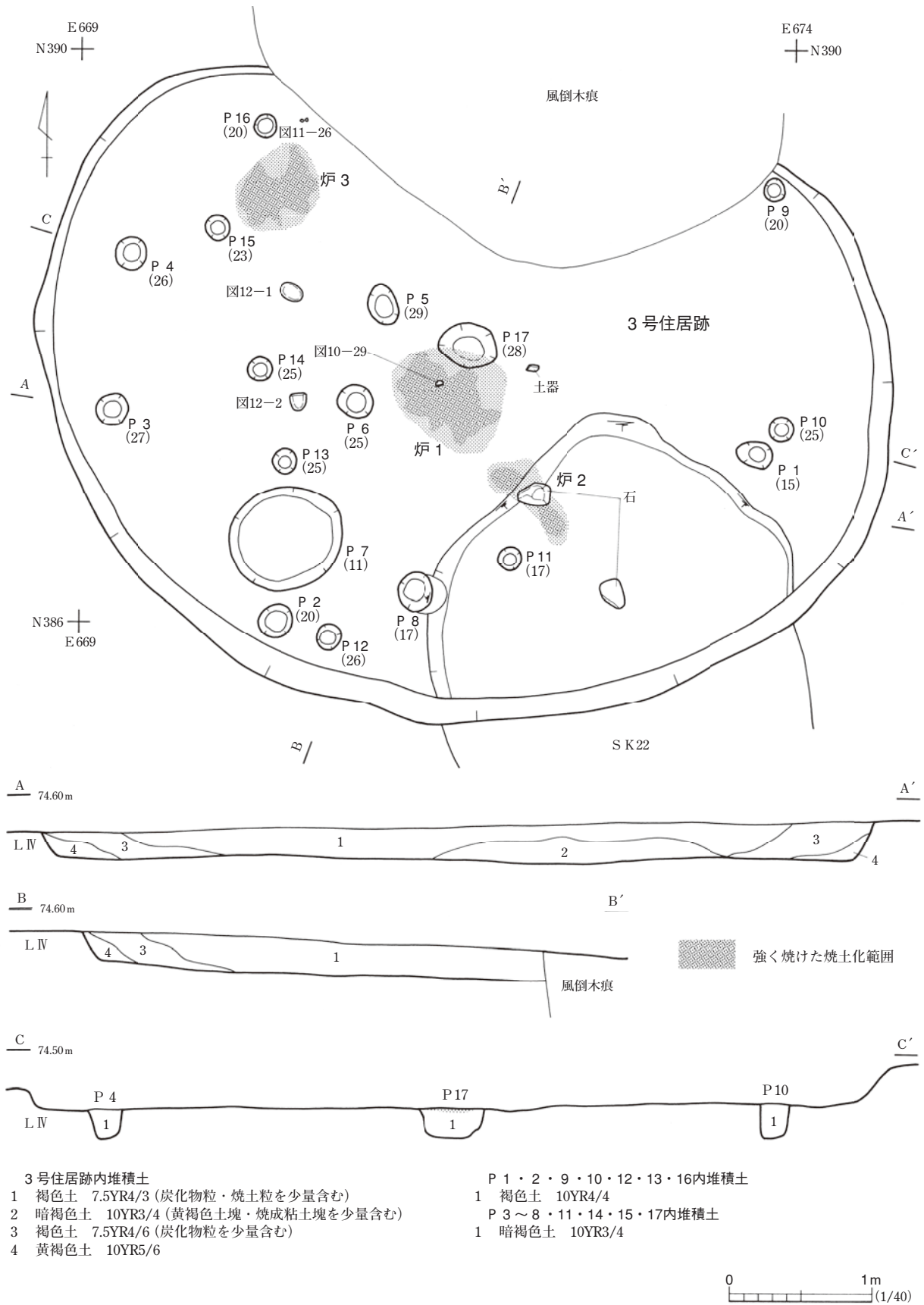


図8 3号住居跡(1)

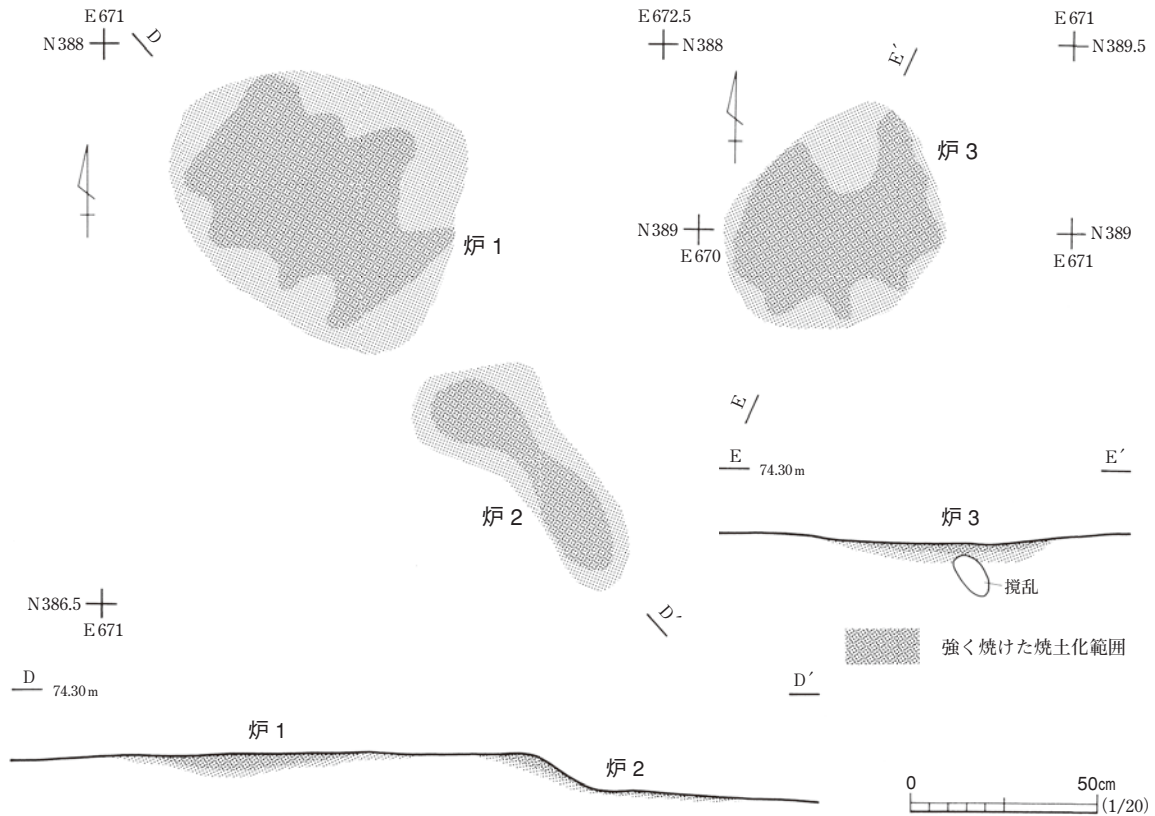


図9 3号住居跡(2)

から、周壁付近と中央の炉跡を巡るものが認められ、これらは柱穴と思われる。炉跡は床面中央部と北西部と南東部の3か所に認められ、いずれも掘り込みを持たないもので、これらの炉跡は一直線上に並ぶ。炉跡の平面形は南東部のものが不整形で、それ以外は楕円形を呈する。いずれも炉跡の中央付近が強く焼けているが、特に中央部の炉跡には、焼き締まりが認められる。これら炉跡の厚さは4～6 cmまで及ぶ。遺物は遺構内堆積土から多量に出土している。

遺物 (図10～12, 写真46・47)

本遺構からは、縄文土器641点、石器66点が出土している。縄文土器の多くは、住居跡南側のℓ1から出土している。石器は剥片が多く、石質の主体は流紋岩である。このうち、図示した遺物は縄文土器60点、石器9点である。図示したⅡ群土器の胎土には植物繊維が含まれている。

図10-1・2はⅠ群土器である。1はⅠ群1類土器で、爪形状の刺突文の下に斜め方向の単沈線が施されている。2は4類土器で、地文に条痕文が施される。

図10-3～26はⅡ群土器である。3・4・6はⅡ群1類に比定される土器で、文様帯を区画する幅の狭い刺突列が施されている。3・4には蕨手状の縄圧痕が施され、6には刺突列の下に幅の狭い非結束の羽状縄文が施されている。5・7・8はⅡ群2類に比定される土器である。5は口縁部に山形の突起を持つ資料で、C字状を呈する刺突列の間に無文部を形成し、コンパス文が施され、胴部にはループ文が施されている。また、突起の下には、刺突列と同一工具による山形文と下向きの弧文が描かれている。7は横方向と山形状の平行沈線が描かれ、沈線上には細かい刺突が縦方向に施さ

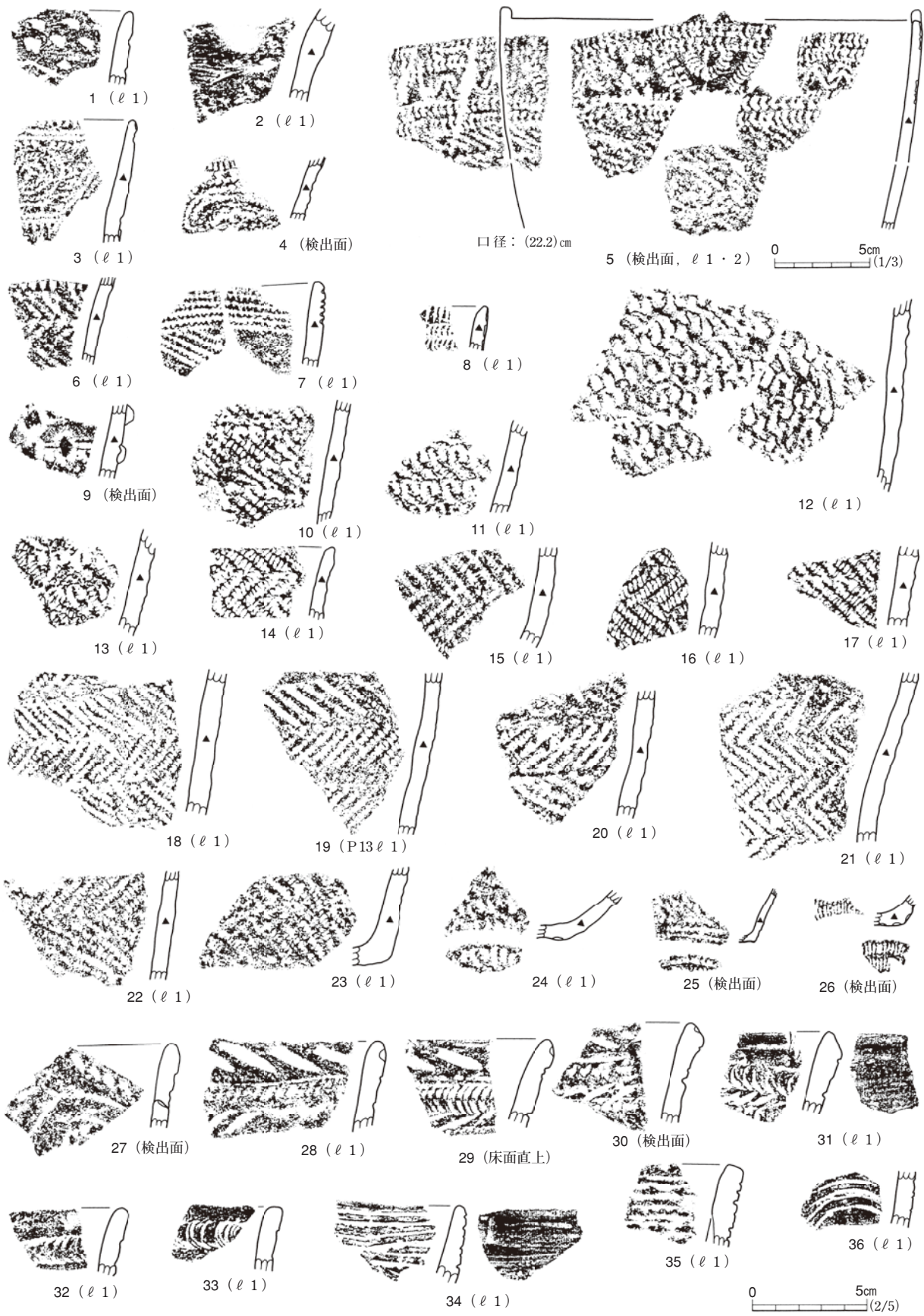


図10 3号住居跡出土遺物(1)

れている。8は口唇部下に縦方向の刺突と、その下にC字状の刺突列が施されている。9はⅡ群3類に比定される土器で、平行沈線と縄文が施され、これらの施文後には瘤状の粘土が貼り付けられている。図10-10~22、図11-11・22はⅡ群4類に比定される土器である。図10-10~13にはループ文、図10-14~22には非結束の羽状縄文、図11-11・22には斜行縄文が施されている。図10-14の羽状縄文は、同図6と同様に幅の狭いものである。図10-23~26はⅡ群5類に比定される土器である。23は底部が無文となり、胴部下端まで斜行縄文が施されているが、24~26は底部から底部下端にかけて、同一工具による刺突文が施されている。

図10-27~図11-9はⅢ群1類土器である。図10-27~35は口縁部資料であり、27が波状口縁で、それ以外は平縁である。図10-27~30は肥厚した口端に斜めの刺突を施し、その下には変形爪形文の施文後に斜めの刺突を施している。図10-31~33は、変形爪形文が施されている。また、31の内面にはナデによる調整痕が明瞭に観察される。図10-34~図11-5は平行沈線文を施すもので、図10-36・図11-1では沈線を弧状に描き、図10-35では平行沈線文の溝底に刺突が施される。また、図11-3には変形爪形文、図11-4には斜めの刺突文が、平行沈線文とともに認められる。図11-5は、幅の異なる工具により平行沈線文が格子目状に施されている。図11-6~9は貝殻文を地文とする土器で、6~8は放射肋を持たない貝殻を立てた状態で使用し、ロッキング手法により波状貝殻文を施している。9は放射肋を持つ貝殻の外面を傾けた状態で施文したものである。

図11-10、12~18はⅢ群3類土器である。10、12~14は口縁部資料で、14の口唇部には山形の突起が取り付けられ、13の口唇部には刻み状の刺突が施されている。10・12には波状の単沈線、14には結節回転文が施されている。15は無文部と縄文の境に単沈線が施され、無文地には波状沈線が施されている。16には縦方向の単沈線とコンパス文、17には沈線文と刺突文、18には縄文上に貼り付け文が施されている。図11-19~21はⅢ群4類土器である。19・20は斜行縄文が施されている。21は数段の結節回転文を施文したもので、それと同時に結節回転文との間に軸となる縄文が施されている。図11-23・24はⅢ群5類土器である。23の底面には網代痕が認められ、24はやや上げ底となる底部である。

Ⅲ群土器の中で、図11-15・16・19・20の胎土には植物繊維が含まれている。

図11-25は抉りの浅い凹基無茎石鏃、26は平基無茎石鏃である。25・26とも二等辺三角形を呈し、断面形は凸レンズ状を呈する。特に、25は器面調整を丁寧に行い、両面から側縁部に細かい剥離を連続的に加えて器体を整えている。26は床面直上から出土している。同図27・28は石錐で、27が小型、28が大型のものである。基部にはわずかな調整が行われ、錐部は両面から剥離を連続的に加えて作り出している。図11-29は石核で、自然礫を打割して打面調整を行わずに剥片を取ったものと思われる。

図12-1~4は磨石・凹石で、そのうち1・2は床面直上から出土している。1・2・4は両面に磨面が認められ、1・2では側面に磨面、1の両面には磨面の一部を敲打した痕跡が認められる。3はそのほとんどが欠損しているため、残存部の片面にのみ磨面が認められる。

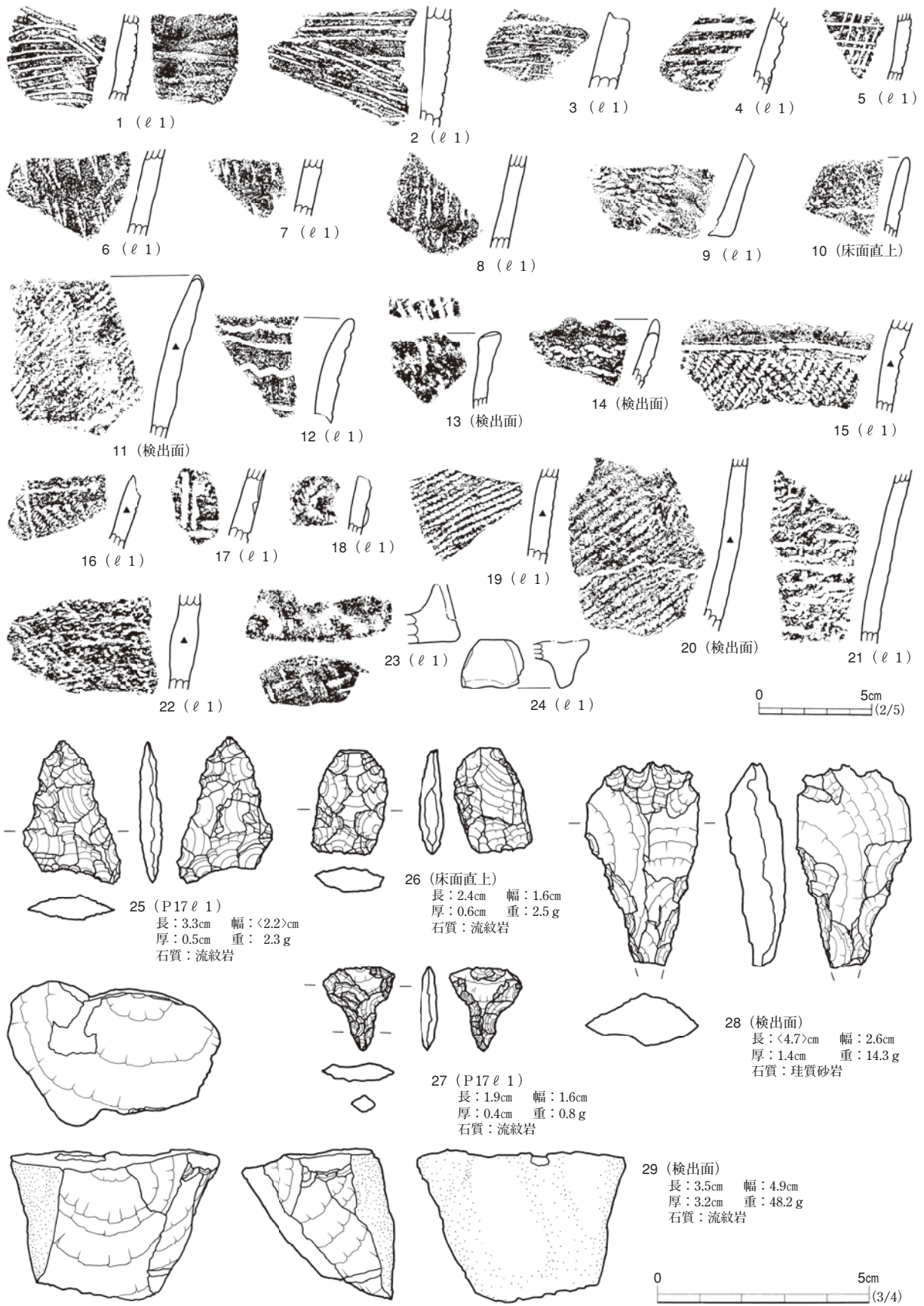


図11 3号住居跡出土遺物(2)

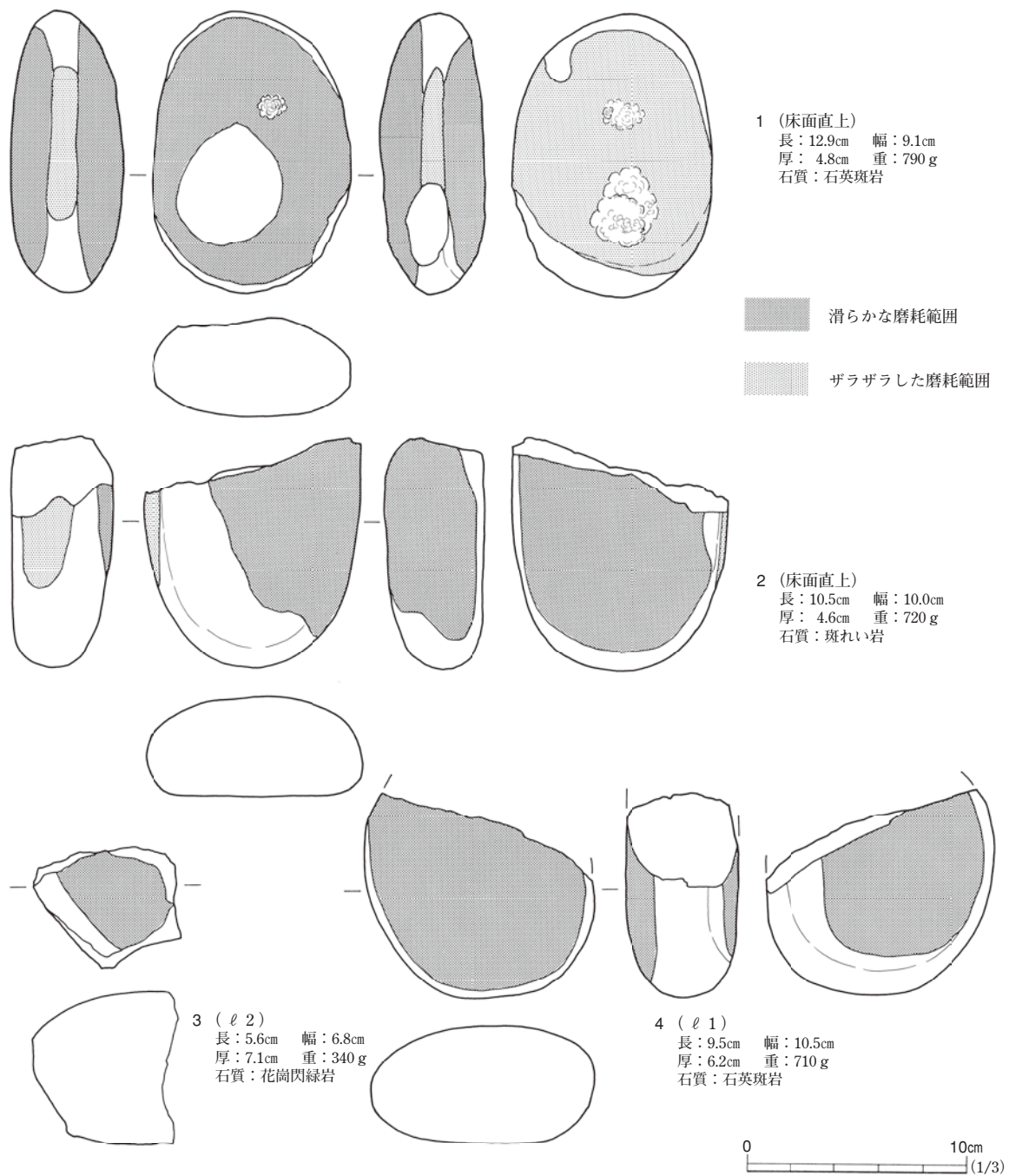


図12 3号住居跡出土遺物(3)

まとめ

本遺構は、今回調査した中で大型の住居跡である。特徴として、床面には3か所の炉跡が一直線上に並んで検出されている。柱穴には、炉跡より古いものがあり、住居の建て替えを行った可能性が高い。遺物の時期は縄文早期後半から前期後半であるが、床面から出土した土器や炉跡の特徴から、本遺構の所属時期は縄文時代前期後半と考えられる。(国井)

4号住居跡 S I 04

遺 構 (図13・14, 写真12・13)

本住居跡はG10グリッドのLⅣ上面で検出した。住居北東部側では約3割が風倒木痕により消滅している。南側1mの位置には13号土坑が隣接する。

住居跡内堆積土は2層に分層した。ℓ1・ℓ2いずれもLⅢに由来する褐色土で、ℓ2は小礫を含む点特徴的である。土質・堆積状態から自然堆積による埋没と考えられる。

平面形は、東西主軸の楕円形で、規模は長径4.62m、短径3.57mを測る。床は、西壁際に低い段差が認められる以外は、全体的に南側斜面に向かって緩やかに傾斜している。壁高は東壁20cm、北壁22cm、西壁12cm、南壁14cmである。壁の立ち上がりは、北壁・南壁ではほぼ直立に立ち上がるが、西壁と東壁の残存部では若干緩やかに立ち上がる。

炉跡は、床面中央部と西側で2基検出されている。中央の炉跡は、掘り窪みを伴う形態で、一部風倒木痕により破壊されているが、焼土面の範囲から燃烧面の大部分は残存していると考えられる。西側の炉跡は、床面を使用面としており、中央の炉跡に比べると規模は小さい。規模は中央の炉跡が、南北方向で58cm、残存幅47cmで、西側の炉跡が長軸39cm、最大幅19cmである。焼土の厚さは、中央の炉跡の最も厚い部分で5cm、西側の炉跡の最も厚い部分で4cmである。

ピットは全部で6基検出されたが、うち柱穴として考えられるものはP1～5で、規模はピット上端幅で26～14cm、床面からの深さは14～21cmの範囲で、P4以外はほぼ壁際に位置している。柱構造は、柱穴の配置からP1とP4を結ぶラインを中心にし、住居四隅を壁柱がまわる可能性が高いと考えられる。P6の用途については不明である。

遺 物 (図14, 写真48)

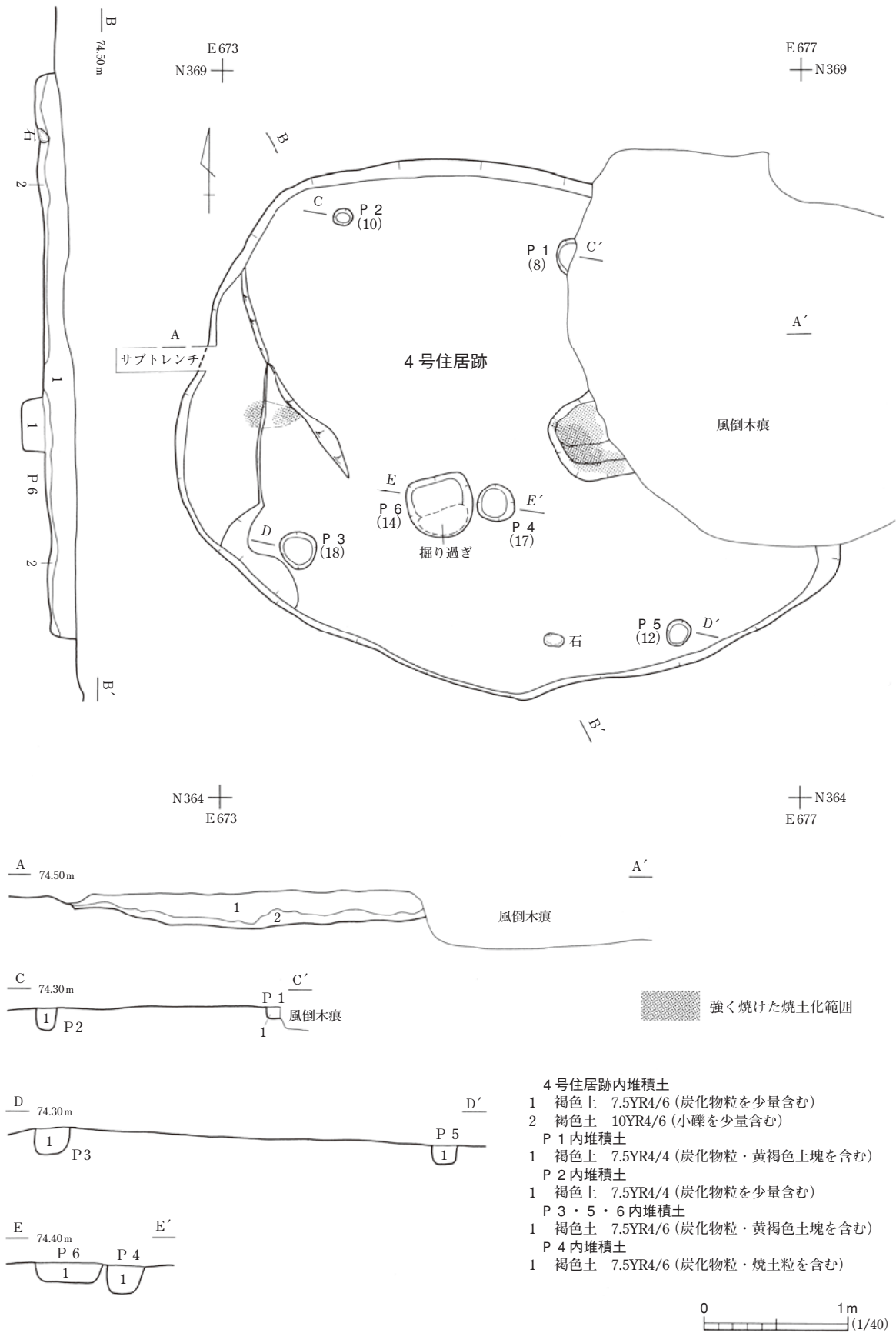
出土遺物は縄文土器片6点と磨石1点のみである。このうち土器片4点と石器1点を図示した。

土器はいずれもℓ1から出土している。図14-1・2は非結束羽状縄文を施す土器で、口唇部には同じ原体による圧痕が見られる。3はループ文を多段に施す土器で、2種類の原体を用いて羽状の文様効果を出している。またループ文を多段に施す際に、原体末端の環を残す程度に重ねて施したものであると思われる。以上はⅡ群土器である。4は地文のみの体部破片であるが、胎土がⅢ群の土器に近似することから、この時期に所属するものと考えられる。

5はℓ2から出土した磨石で、表裏面と側面の一部を使用している。

ま と め

本住居跡は、壁柱以外に主柱を有する可能性がある住居である。本住居跡の機能時期は、床面出土遺物がないことから決定し難いが、ℓ1中に同じ条件でⅡ群土器とⅢ群土器が含まれることから、縄文時代前期後葉に属する可能性が指摘されよう。(新 海)



4号住居跡内堆積土

- 1 褐色土 7.5YR4/6 (炭化物粒を少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/6 (小礫を少量含む)
- P 1 内堆積土
 - 1 褐色土 7.5YR4/4 (炭化物粒・黄褐色土塊を含む)
- P 2 内堆積土
 - 1 褐色土 7.5YR4/4 (炭化物粒を少量含む)
- P 3・5・6 内堆積土
 - 1 褐色土 7.5YR4/6 (炭化物粒・黄褐色土塊を含む)
- P 4 内堆積土
 - 1 褐色土 7.5YR4/6 (炭化物粒・焼土粒を含む)

図13 4号住居跡

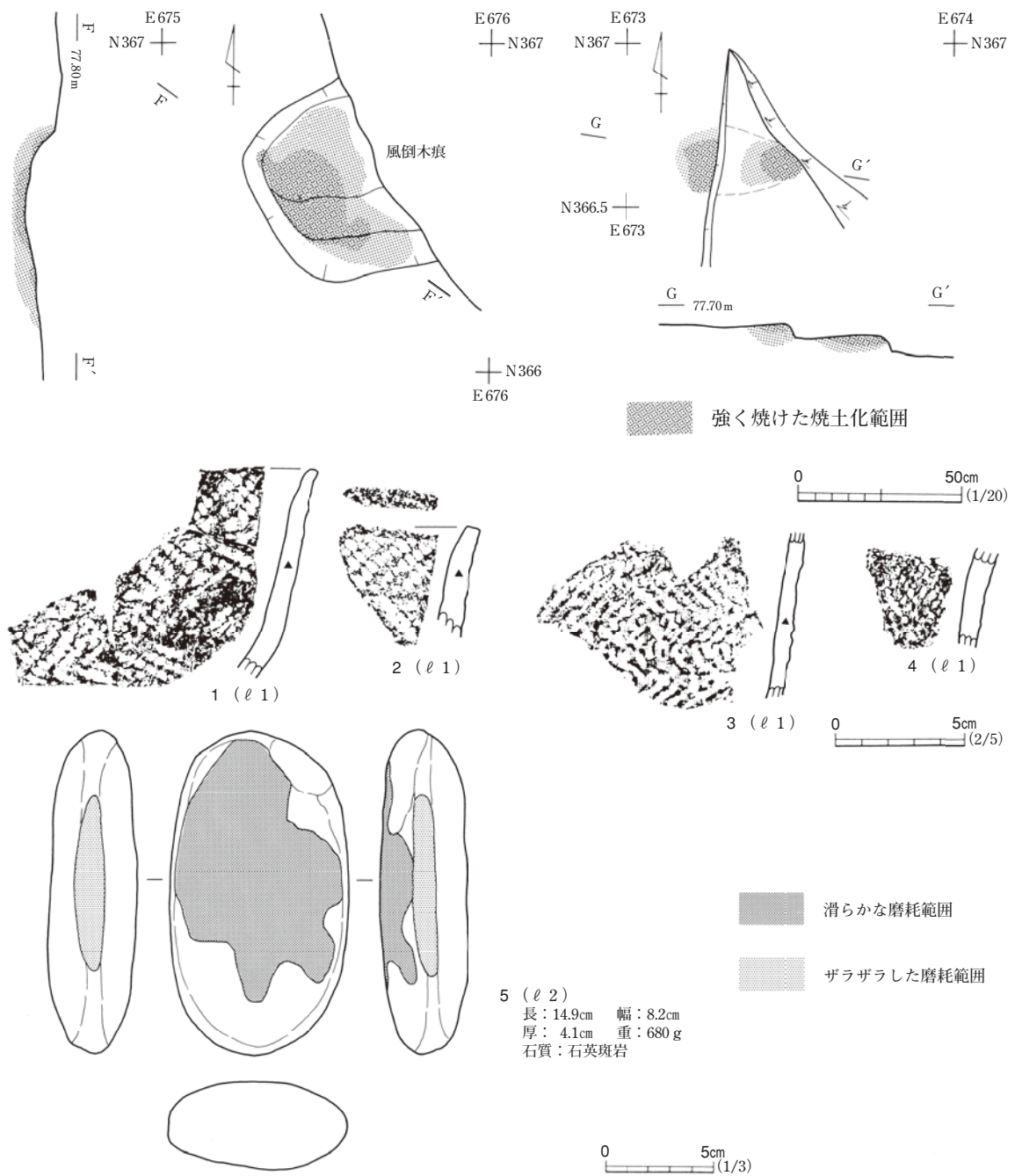


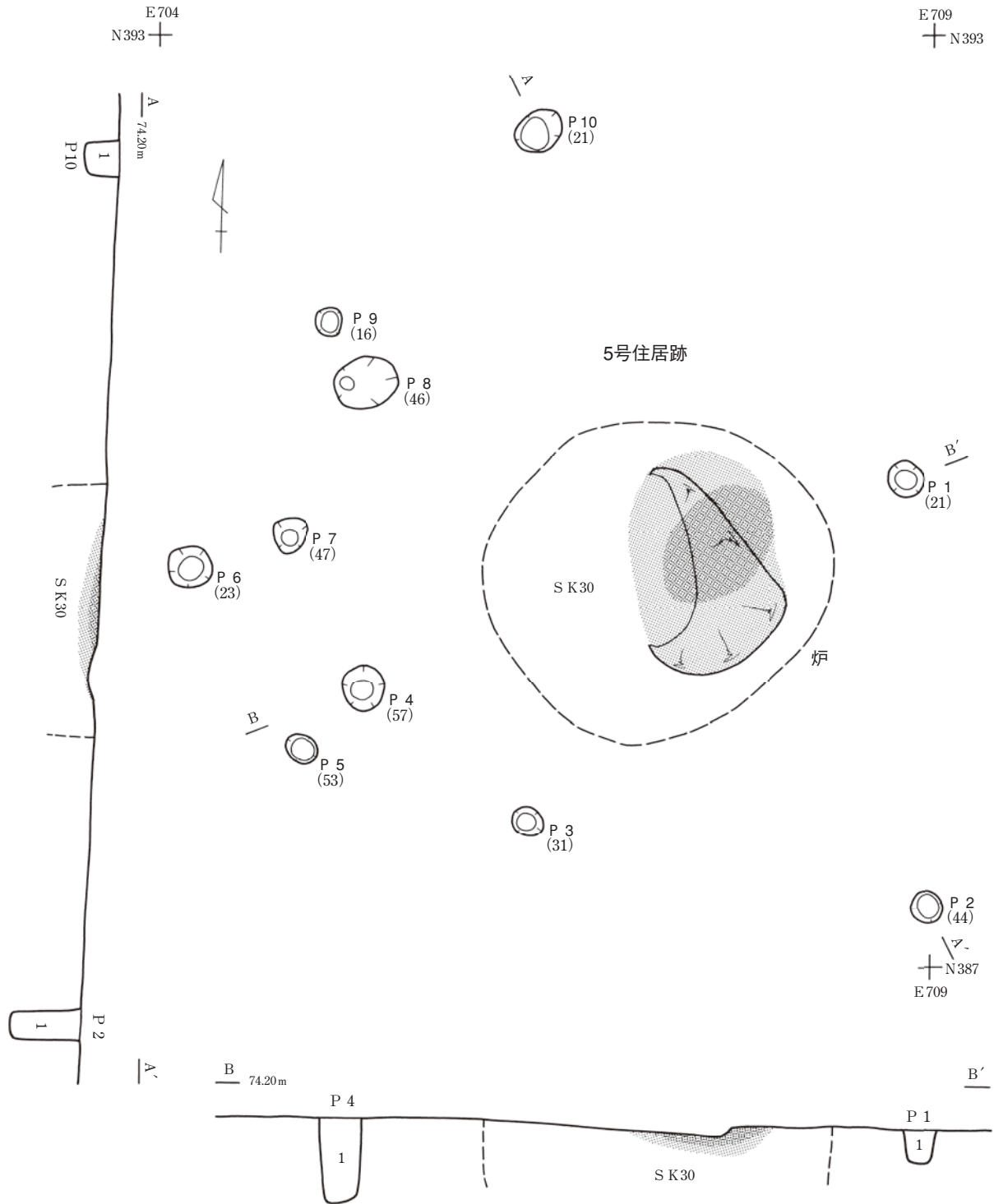
図14 4号住居跡および出土遺物

5号住居跡 S I 05


遺 構 (図15・16, 写真14)

調査区平坦部中央J7・8グリッドのLIV上面で検出した。大きめの焼土化範囲を検出し、その周囲から柱穴と考えられる小穴が確認されたことから住居跡と判断した。本遺構の中央で炉跡と30号土坑と重複するが、本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は柱穴のみで確認されている。

平面形は不明であるが、検出した小穴の配列からは楕円形と推定される。同様に小穴の配列から



- 5号住居跡 P 1 ~ 3・6・7・9内堆積土
- 1 褐色土 7.5YR4/6 (黄褐色土塊を含む)
- 5号住居跡 P 4 ~ 5・8・10内堆積土
- 1 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物粒を少量含む)

 強く焼けた焼土化範囲

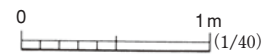


図15 5号住居跡 (1)

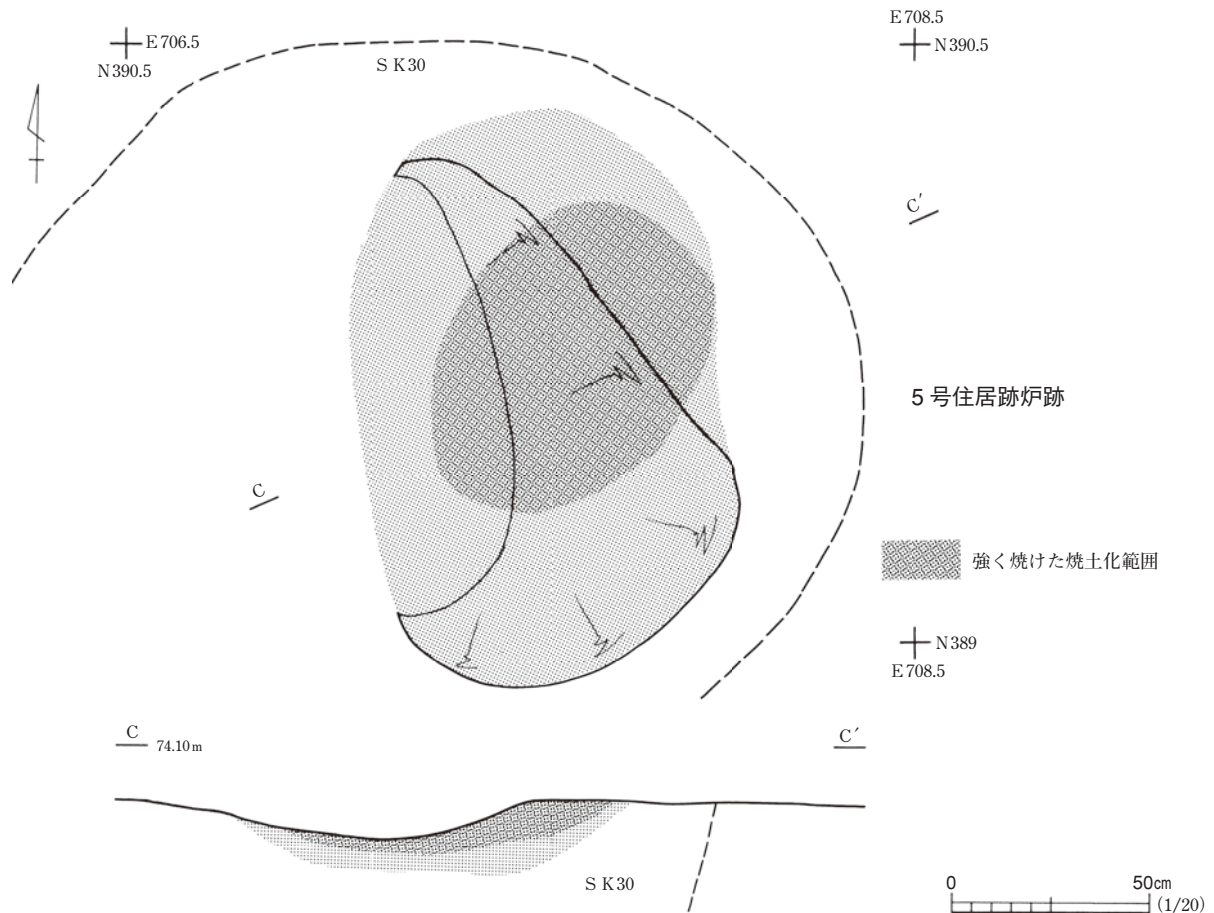


図16 5号住居跡（2）

推定される規模は、長径5.84m、短径4.47mを測る。床面は、炉跡検出時から柱穴確認のため何度か削っているために失われたものと考えられる。柱穴は10基検出された。柱穴の大きさは、径が18～43cm、深さが16～57cmで大型のものと小型のものがあるが、深さは一定していない。また、柱穴内堆積土はLⅡ・Ⅲに相当する土が堆積している。炉跡は、掘り込みを持つもので住居中央に認められる。その平面形は楕円形を呈し、規模は長径144cm、短径93cmを測る。炉跡は中央付近が赤褐色で強く焼けているのに対し、その周辺は赤味が弱い。この範囲内での焼き締めは認められなかった。炉跡の焼土化範囲の厚さは4～6cmまで及ぶ。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、7・8・10号住居跡と同様、炉跡と柱穴のみが確認された住居跡である。遺構に伴う遺物が出土していないため、正確な時期は不明であるが、柱穴内堆積土や炉跡の特徴から縄文時代前期後葉以降と考えている。 (国 井)

6 a 号住居跡 S I 06 a

遺 構 (図17・18, 写真15・16・18・19)

本住居跡はH 8 グリッドのLⅣ上面で検出した。当初は、6 b 号住居跡と重複していることに気

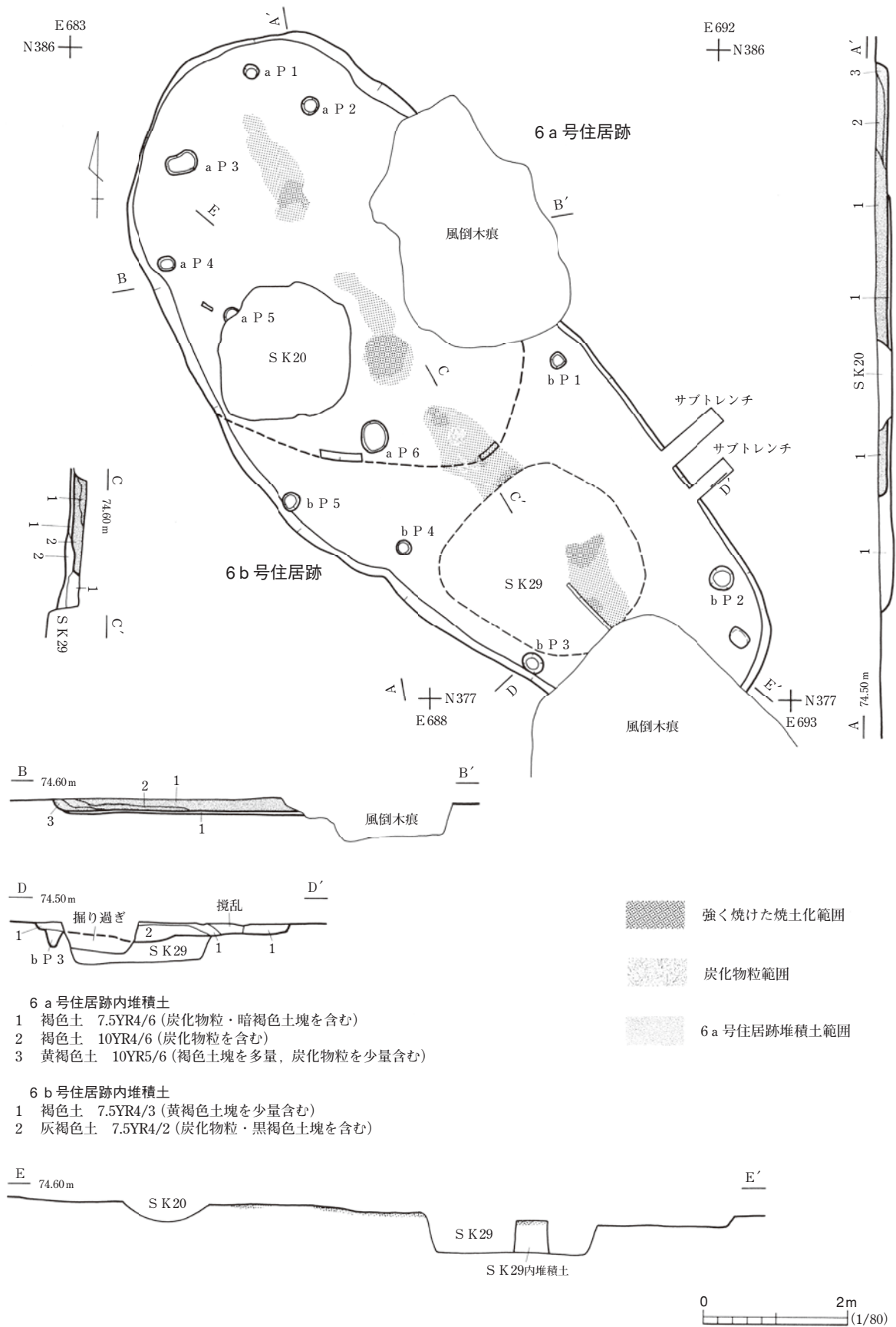


図17 6 a・6 b号住居跡

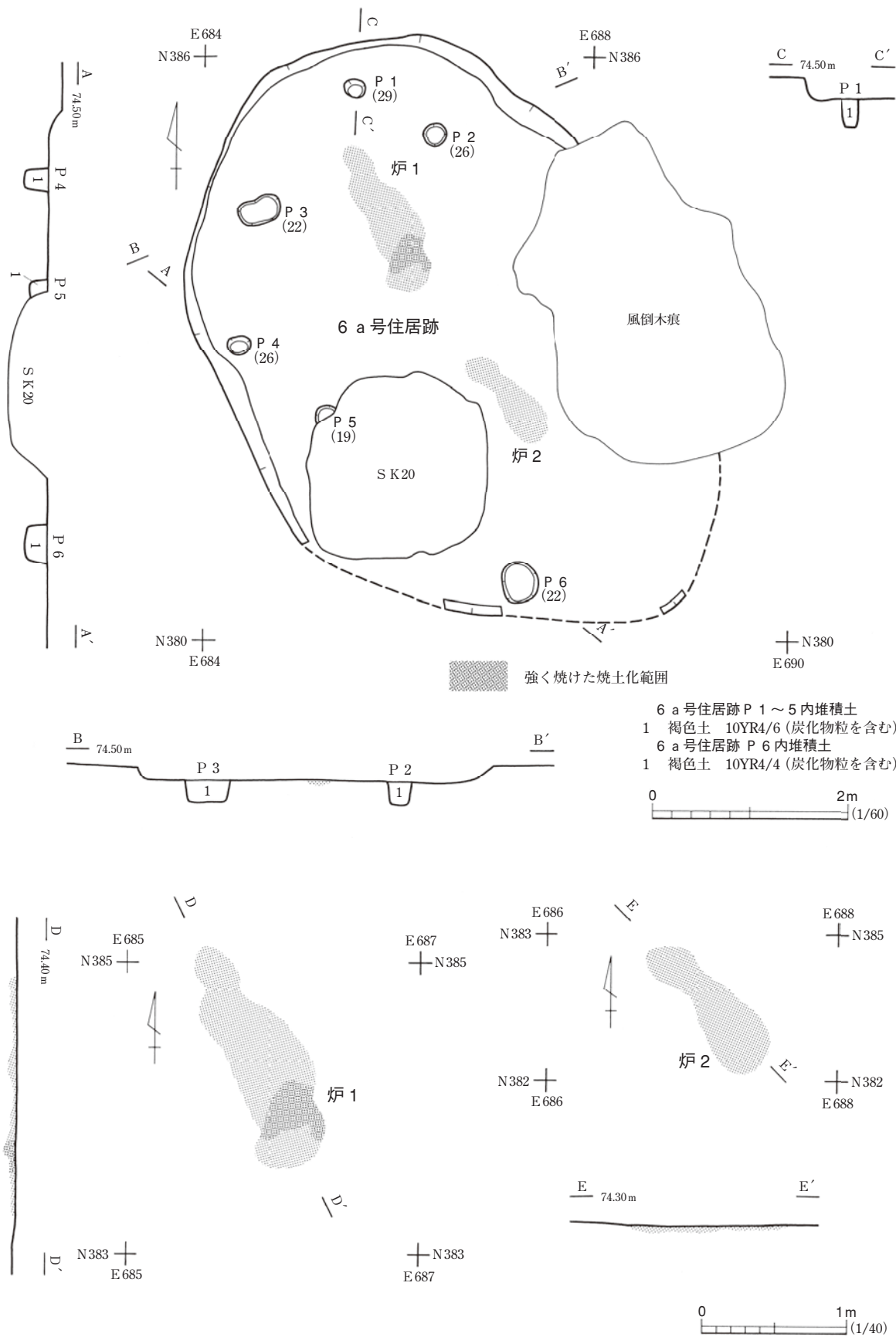


図18 6 a号住居跡

付かずに、一軒の住居跡として調査したため、南壁・南半部の床面は掘りすぎてしまった。東側半分ほどが風倒木痕で破壊されている。重複する遺構は、本住居跡より古い遺構が6b号住居跡、新しい遺構が20号土坑である。また、周辺には15・18・19・27・28号土坑が分布し、いずれかの土坑は、本住居跡と同時期に機能していた可能性が高いと考えられる。

堆積土は3層に区分された。ℓ1・ℓ2ともに褐色土で、ℓ3は黄褐色土であるが褐色土との混合土である。ℓ3の黄褐色土は全体的にブロック状を呈しているが、壁際のみに見られる点を考慮すると、壁崩落土と考えられる。

遺構の平面形は、上述したように掘りすぎているため、南側1/4程に推定線を用いることになった。平面形は北西から南東にかけて主軸となる不整楕円形が推定される。規模は長径6.90m、短径推定4.60mである。周壁は、東壁の大部分が風倒木痕に破壊されているが、それ以外の遺存部での状況は、北西壁で直角に立ち上がる以外は緩やかに立ち上がっている。検出面からの壁高は、東壁で16cm、北壁15cm、西壁15cm、南壁で12cm程である。床面はほぼ水平に構築されている。

炉跡は2基検出され、北西側を1号炉跡、南東側を2号炉跡とした。いずれも床面を掘り窪めておらず、酸化の程度も1号炉跡の一部を除いては比較的弱い。規模は1号炉跡が長軸160cm、最大幅50cmで、2号炉跡が長軸110cm、最大幅40cmである。焼土の厚さは1号炉跡の最も厚い部分で9cm、2号炉跡の最も厚い部分で4cmである。

ピットは床面から6基検出された。P1が若干深い程度で、ほぼ床面からの深さは同程度の20cm強である。ピット上端幅は15～30cmである。壁際に集中する傾向からこれらはいずれも柱穴であったと考えられる。20号土坑や風倒木痕が重複しているため柱配置の全体像は不明であるが、検出したものより多くの柱が存在したものと考えられる。

2号炉跡上部からP6上部のℓ1下部より人頭大の礫がまとまって出土した。うち加工が加えられているものについては図示した。

遺物 (図20・21, 写真49・50)

出土遺物は縄文土器片125点、石器類17点、加工痕のある石1点である。そのうち図示したのは縄文土器片15点と石器1点と加工痕のある石1点である。

図20-1は19号土坑や遺構外出土土器とも接合したもので、Ⅲ群1類に属する。器形は、口縁が外反し、口唇部が外削ぎ状の形態を有する。口唇直下には2段の変形爪形文列を、その下には平行沈線による菱形モチーフが横位に連結する。さらに、その下段には変形爪形文列が並ぶようである。同図5・7・8は繊維を多量に含む土器である。5は口縁部資料で、結束をもつ斜行縄文が口端沿いから施されている。8は斜行縄文が施され、7は非結束の羽状縄文が施される。以上はⅡ群土器である。同図2・3・4・6・9はいずれも胎土に少量の繊維を含む土器である。2・4は口縁部資料で、いずれも口端から単節斜縄文を施す。2は9と同一個体と考えられる。3・6は体部破片で、いずれも体部上部に結節回転文が施される。同図13は変形爪形文、同図10・11は平行沈線が施され、10は口縁部資料で波状を呈するようである。同図12・14・15はおそらく同一個体と考えられ

る。三角文状の刺突のみが施される体部破片資料である。以上はⅢ群土器である。

図20-16は粘板岩に似た頁岩製の刀状石製品で片側の側縁に明瞭に調整が施されており、実用品の可能性も考えられるが、用途は不明である。図21-1は、P6上部ℓ1からまとまって出土した礫の一つで、長さ24cm程の楕円形を呈し、一側面が平坦に加工されている。形状からして人為的に持ち込まれたのは确实だが、何の目的があって持ち込まれたかは不明である。

ま と め

本住居跡は地床炉を2つ持つ住居で、柱は壁柱のみで構成され则认为られる。所属時期は床面出土遺物がないことから確定的ではないものの、出土遺物の主体が縄文時代前期後葉の時期であることから、機能時期もそれと大差ないと判断している。 (新海)

6 b号住居跡 S I 06 b

遺 構 (図17・19, 写真15・17~19)

本住居跡はH8・9, I8・9グリッドのLⅣおよび、6a号住居跡下部で検出した。当初、6a号住居跡の一部として調査したことや、29号土坑近辺で南接する風倒木痕の続きとして調査したため、図のような変則的なベルト配置になった。また、6a号住居跡と併せて1軒と判断して土層を解釈したため、堆積土の検討が十分でなかったが、炉跡主軸方向や床面の僅かなレベル差などから2軒に分離するのが妥当と判断したことにより、図17のようなセクション図にまとまった。東側一部と南側は風倒木痕により破壊されている。重複する遺構は、本住居跡より古いものが29号土坑、新しいものが20号土坑である。近接する遺構は、6a号住居跡同様に15・18・19・27・28号土坑であり、中には同時期に機能していた土坑があったとされる。

堆積土は2層に区分された。大部分を6a号住居跡に壊されているため残存土は少ないが、ℓ1は褐色土で、色調での地山との区別は困難を極めた。ℓ2は灰褐色土としたが、ℓ1の土に比べると特に黒く見える土である。炉跡上部で層厚が増すことや、炭化物が多量に混入する点は局地的要素であり、この点を重視し堆積土の差というよりは堆積後の土質の変化として考えている。堆積状態はℓ2を上述したように解釈すれば、堆積作用は1回ととらえられ、また黄褐色土粒が含まれることから、人為堆積の可能性も考えられるが断定はできない。

住居跡平面形は、北西から南東にかけて主軸となる楕円形で西壁北西部付近がやや外側に膨らむ形態を呈する。規模は、長径10.0m, 短径4.55mである。周壁は、西壁は6a号住居跡・風倒木痕に切られて残りが悪いが、北壁・南壁は緩やかに立ち上がり、東壁のみが直立気味に立ち上がる。検出面からの深さは、東壁で11cm, 北壁は6a号住居跡による破壊のため2~3cm, 西壁10cm, 南壁12cmである。床面は、凹凸はないものの全体的に南側に傾斜している。

炉跡は3基検出され、北西側から1号・2号・3号炉跡とした。2号炉跡・3号炉跡は掘り窪みをもち、1号炉跡は掘り窪みをもたない。規模は、1号炉跡が長軸80cm, 最大幅70cm, 2号炉跡が長軸150cm以上, 最大幅77cm, 3号炉跡が長軸125cm以上, 最大幅75cm以上である。焼土の厚さは、1

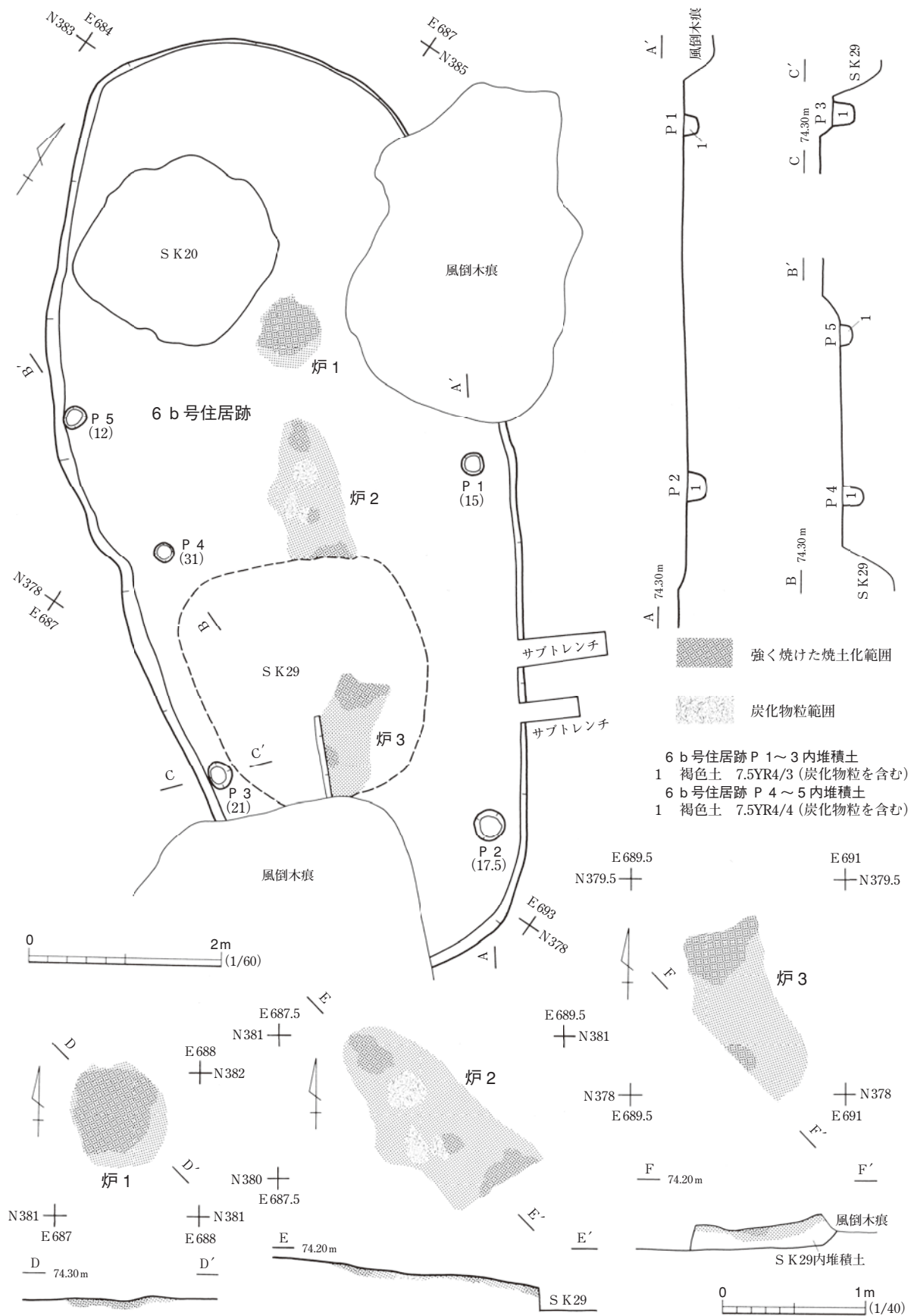


図19 6 b号住居跡

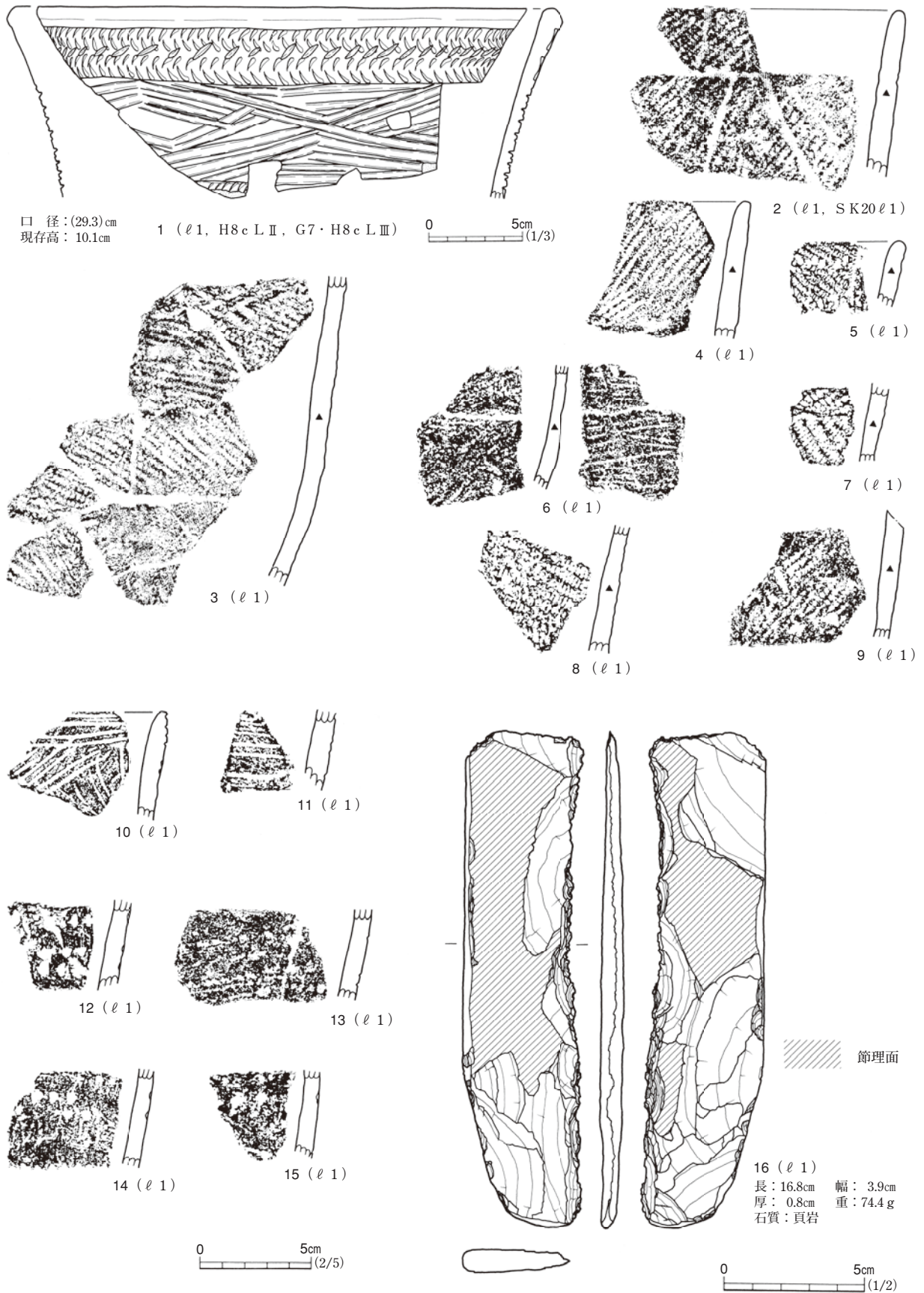


図20 6 a号住居跡出土遺物

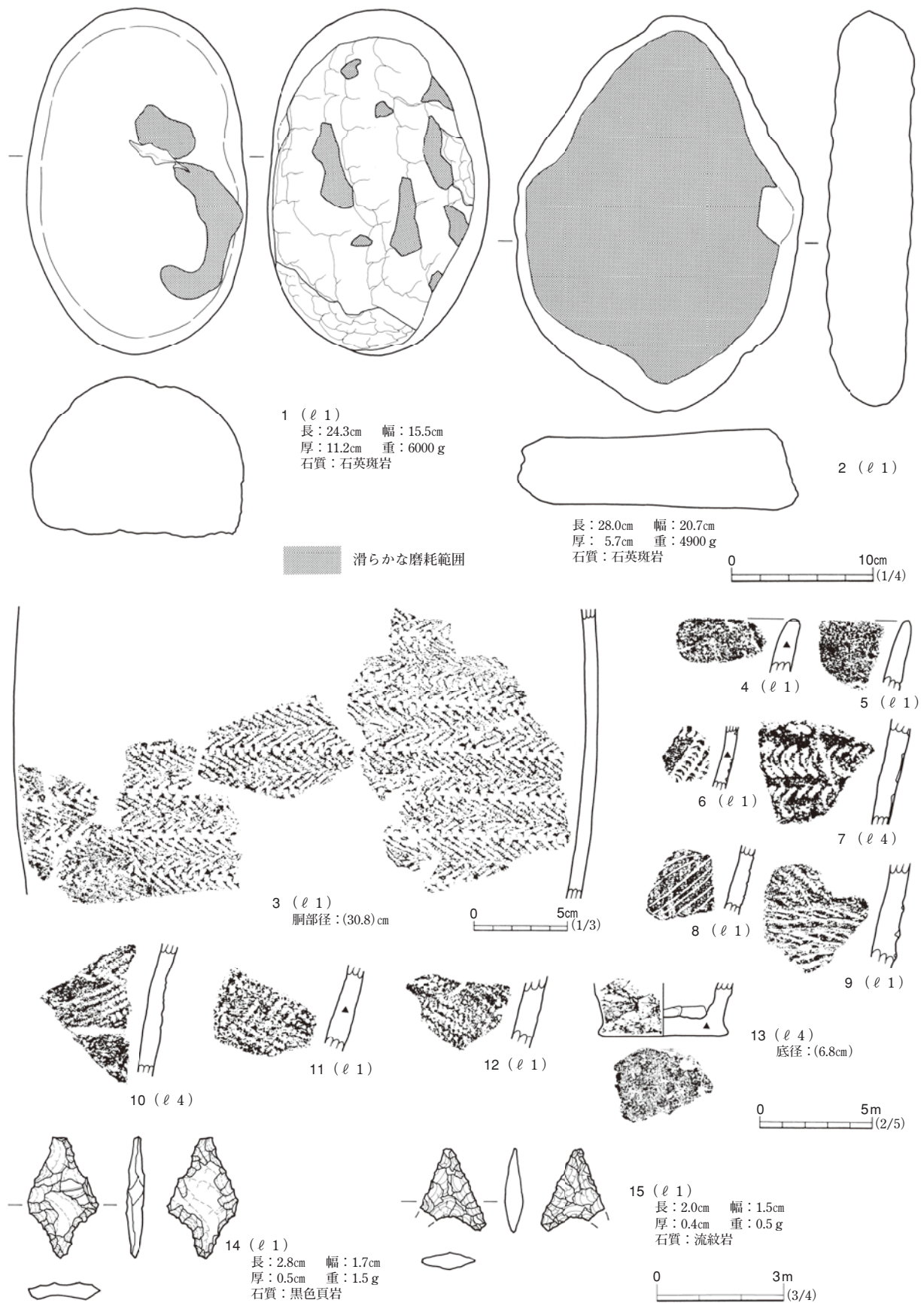


図21 6 a・6 b号住居跡出土遺物

号炉跡・2号炉跡が最も厚い部分で6cm, 3号炉跡の最も厚い部分で8cmである。3基とも共通するのは、酸化程度が強く部分的にレンガ状に硬化している点で、これは明らかに6a号住居跡の炉跡とは異質な部分である。2号炉跡は部分的に炭化物の密集部があり、その範囲は図示した通りである。また、先述したように29号土坑部分を掘り過ぎているため、3号炉跡は西側1/3程と北側1/4程を破壊しているため、実際にはより大きかったものと考えられる。また、3号炉跡掘り窪み部分から図21-3の土器がまとまって出土した。

ピットは5基検出された。P1・5が浅くて12~14cm, P2・3・4が19~22cmである。いずれも壁際に位置している。ピットの上端幅は14~23cmである。規模の面からみて全て柱穴と考えている。全体的にピットの数が少ないのは、住居中央部に炉跡が複数直列していることと、風倒木痕や土坑に破壊されている部分があるため、柱穴配置の規則性は不明である。

遺物 (図21, 写真50)

出土遺物は縄文土器片77点と石器3点である。そのうち縄文土器11点と石器3点を図示した。

図21-3は、遺存部においては全面に結束羽状縄文が施される大型破片である。6は竹管文による刺突状押引文が施される。以上はⅡ群土器である。以下はⅢ群土器で、同図4・5・10・11・12は大木式系の土器である。4は口唇部に刻み状の刺突が施される口縁部資料である。5も口縁部資料で摩滅がひどく判然としないが、結節回転文もしくは波状沈線が施されている。10は結節回転文が施される体部破片である。11・12は地文のみが施される体部破片である。7・8は浮島式系の土器で、7は変形爪形文が、8は平行沈線が施されている。9は諸磯式系の土器で、下半に浮線文が3段、上半に地文の斜縄文が見られる。13は底部資料で底面が張り出す形状を有する。

14・15は石鏃で、14は有茎、15は凹基の欠損品である。2は石皿で片面の全面を使用している。

まとめ

本住居跡は6a号住居跡に一部破壊されているが、炉を3個直列配置する大形の住居跡である。柱配置は、住居中央部は炉が占めているため壁際に限られるようだが、風倒木痕を考慮すれば、検出数以上の個数が存在していたものと考えられる。

所属時期は、出土土器全体像や炉跡の特徴から考えると縄文時代前期の時期と考えられる。6a号住居跡より古く、3号炉跡上面より図21の3がまとまって出土していることから、縄文時代前期前葉の可能性も考えられるが、不明な点が多い。(新海)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図22, 写真20)

本住居跡は調査区のやや北東寄り、L6グリッドに位置する。頂部平坦面の北側斜面付近に存在する。検出面はLⅣ上面で、楕円形の酸化面の広がり、その周辺に小穴が検出されたことから、これを炉跡と柱穴群と考え、竪穴住居跡の存在を想定した。酸化面から西へ約1mのところ、ちょうどP6とP7の間にSK32が存在するが、新旧関係は不明である。

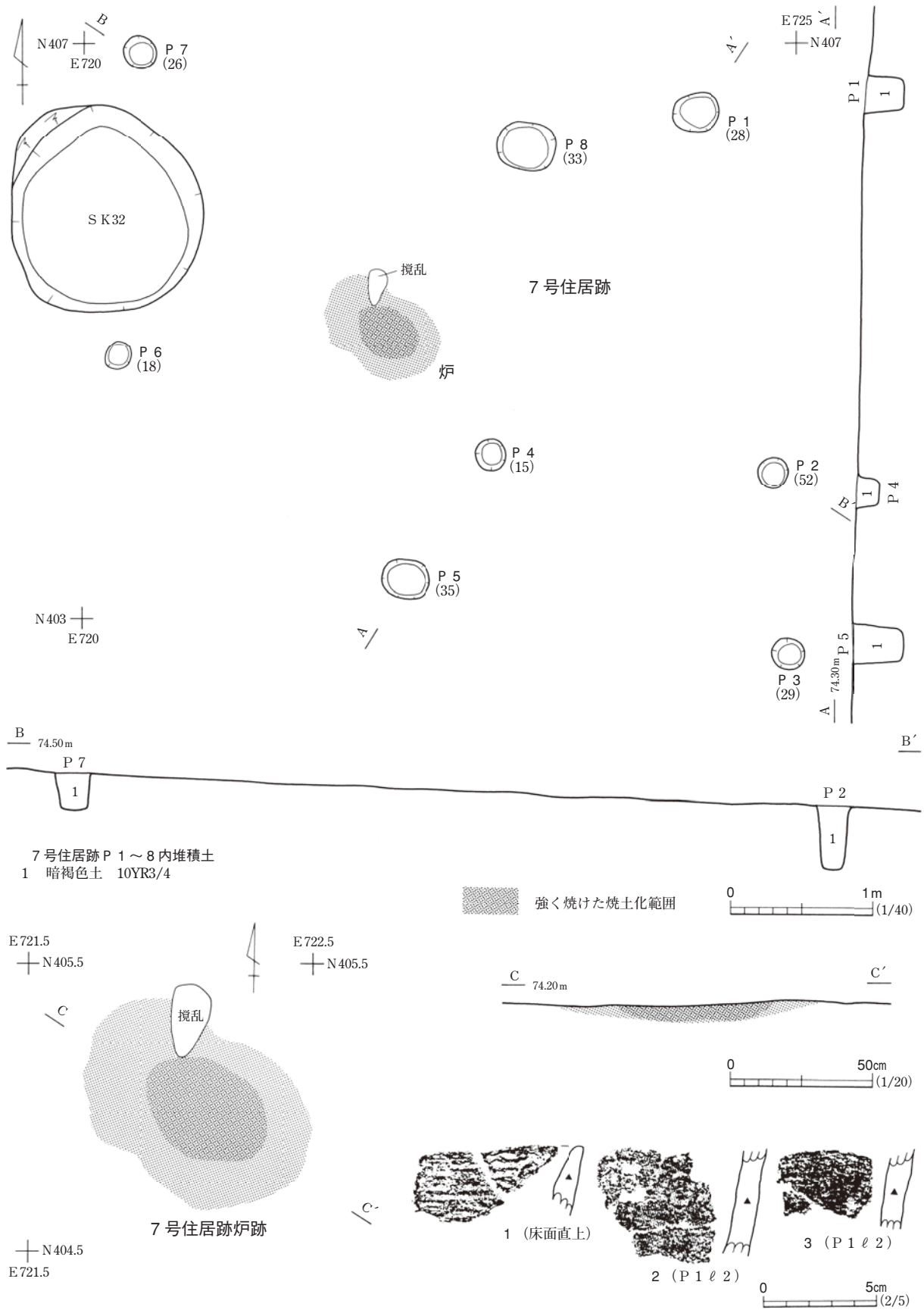


図22 7号住居跡および出土遺物

埋没状況や規模、平面形などは、削平によって壁が遺存しておらず、まったく不明である。

炉跡は楕円形を呈し、長径約90cm、短径約55cmを測る。断ち割ったところ、焼土は検出面から約5cmの厚さまで達していた。

柱穴と考えられるものは8基検出された。配置はP1～P5・P8は炉の東側に、P6・P7の2基は炉跡を挟んで西側に検出された。さらに炉の南東寄りにP2・P3が位置する。このうちP1～P3の3基は、炉跡から2.5～3.5mの間隔でやや直線的に配列するのに対し、P4・P5・P8の3基は1～1.5mを測り、炉跡の外側にやや弧を描くように並ぶ。一方、炉を中心としてP6は西へ約2m、P7は北西へ2.5mを測る。

遺物 (図22)

本住居跡からは縄文土器片が3点出土し、すべて図示した。いずれも胎土中に植物繊維を混和するものである。図22-1は床面直上から出土した口縁部破片資料である。外面に横位の撚糸文が施される。2・3はともにP1の2から出土した胴部破片資料で、ともに内外面とも文様は不明瞭であるが、1と同じく撚糸文とみられる。

まとめ

本住居跡は、炉跡と柱穴のみが確認された。規模・平面形とも不明である。遺物は堆積土内から縄文早期に属する土器片が出土したが、明確に本遺構に伴うといえるものではなく、本住居跡の所属時期を決定するものではない。したがって、所属時期は不明とせざるを得ない。(宮田)

8号住居跡 S I 08

遺構 (図23, 写真21)

本住居跡はF10～F11グリッドのLⅣ中部で検出した。重複状況は住居跡西側に風倒木痕があり、これが住居西側部分を破壊している。最も近接して存在する遺構は2.5m離れた場所に位置する5号土坑で、それより若干離れて1号住居跡、4号土坑が存在する。

住居の構造は、床面で検出したため周壁が残存しておらず、推定として考える部分が多い。そのため平面形は不明であり、規模はピットの配置を援用すると、東西推定3.50m以上、南北推定3.10m以上と考えられる。

炉跡は、おそらく住居中央部と考えられる場所に1基ある。この炉跡は掘り窪みをもたないタイプで焼け方も弱い。床面が本住居跡検出面となったことから、焼土上部を若干削っているため、遺存状態は悪い。規模は、長軸53cm、最大幅33cmを測る。焼土は最も厚い部分で5cmである。

ピットは6基検出され、床面からの深さが18～24cmの間で、ピット上端幅26～36cmの範囲で、いずれも柱穴になるものと考えられる。周壁が残っていないため確定的ではないが、配置から見て壁際によった場所に位置していた可能性が高い。

炉跡から80cmほど東に、30cm程の石があるが、これは地山に突き刺さっており、明確な掘形も確認されなかったことから、人為的に設置されたものではない。だが住居機能時には当然存在してい

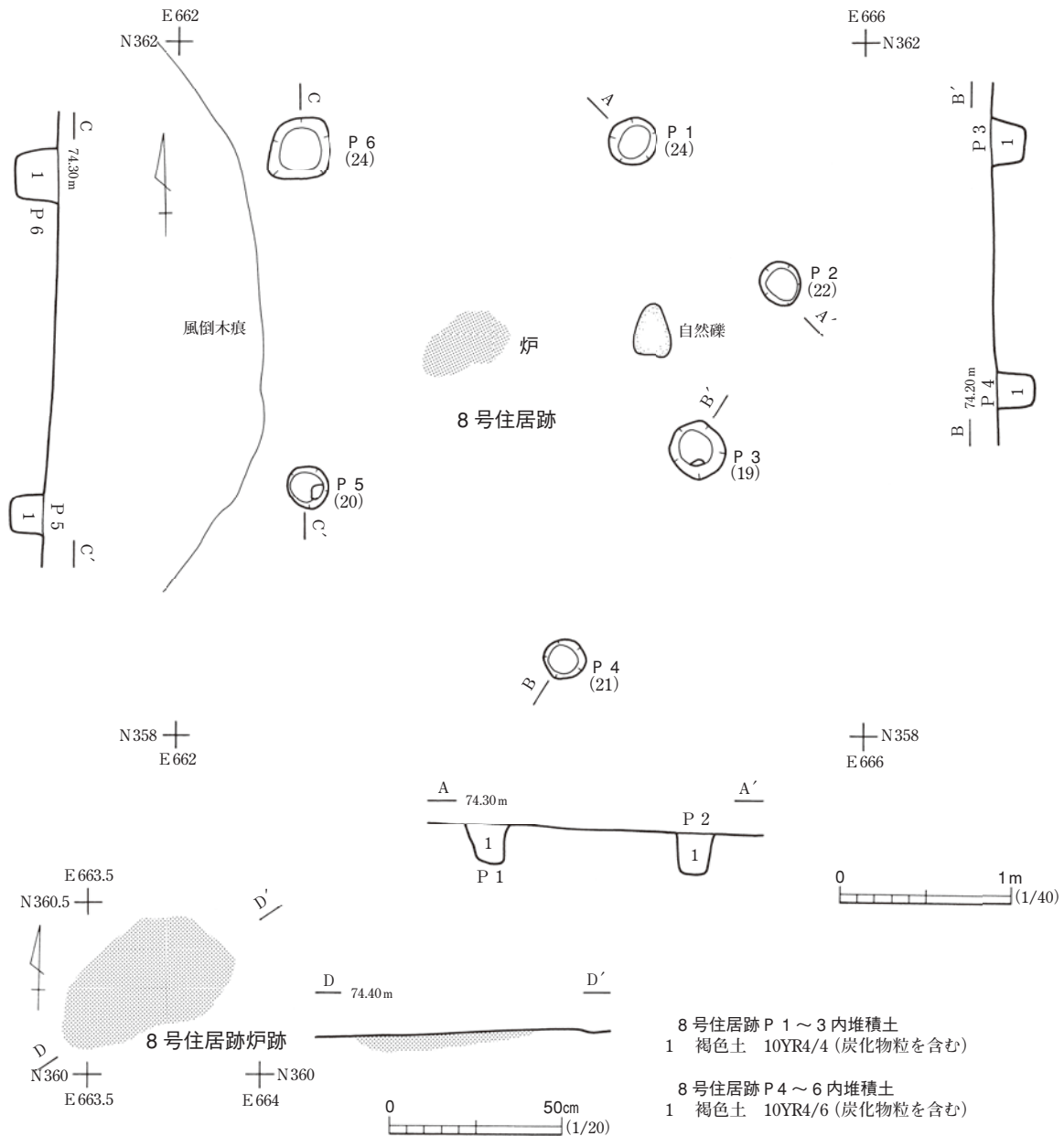


図23 8号住居跡

たことから、何らかの用途があったことは完全には否定できない。

遺物

本住居跡の出土遺物は、検出段階で床面レベルに達していたため全くない。ただ参考として、F 10・F 11グリッドLⅢや、隣の風倒木痕からの出土土器の傾向を述べておくと、遺構外出土土器の図61-26は胎土に少量の繊維を含み、結節回転文と斜縄文が施される土器の体部でⅢ群土器と考えられる。その他図示できなかった土器小片も、量的に多いのはこの類の土器で、胎土に繊維を多量に含む縄文時代前期前葉と考えられる土器片は少量である。

まとめ

本住居跡は、周壁がなく構造上不明な点が多いが、掘り窪みをもたない炉があり、おそらく柱配

置は壁柱構造を呈すると考えられる。所属時期は、調査段階で遺構に伴う遺物が採取されていないので断言はできないが、周囲の遺構の所属時期や、周辺グリッド出土土器の傾向から考えると、縄文時代前期後葉段階に機能していた可能性が高い。(新海)

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図24, 写真22)

本住居跡はH 9・10, I 9・10グリッドのL IV中部で検出した。重複状況は北側に隣接して風倒木痕があるのみである。その他1号竪穴遺構と29号土坑が、比較的近くから検出された。

住居内堆積土は、 $\ell 1 \sim \ell 3$ までの3層に分層されたが、 $\ell 1 \cdot \ell 2$ が褐色土の堆積土で、レンズ状に堆積しているので自然堆積と考えられる。それに対して、 $\ell 3$ は赤褐色の焼土で、図の通り北壁際に集中して分布する。また、ベルトにはかからなかったため断面図には掲載できなかったが、焼土の分布と符合するように炭化物が見られる。このことから、本住居跡は焼失家屋の可能性も考えられる。

住居跡平面形は、北東から南西にかけて主軸となる楕円形で、規模は長径5.45m, 短径4.13m以上である。床は、全体的にほぼ水平に構築されている。周壁は、検出面がL IV中部であるため、本来の壁高より低くなっているが、東壁で14cm, 北壁で27cm, 西壁で22cm, 南壁で4cmとなり、立ち上がりは東西南北いずれも緩やかである。

炉跡は、本住居跡では検出されなかった。精査段階では住居中央部に認められた窪みが炉跡と考えていたが、焼土は確認されなかった。ただ、若干西よりの部分にある石が、床面中央の窪みに隣接してその接する部分が加熱を受けている。この石は、三角錐状の石を頂点から半割しており、割った部分を床に向けて置かれている。わずかに床面から浮いているものの、安定した状態であるので、意図的に構築材として設置された可能性が考えられることと、床面中央の窪みと共に考慮すると、この近辺を何らかの燃焼作業で利用した可能性は高い。

ピットは床面から12基検出された。P 5・6が深く23・28cmで、P 11が最も浅く6cmとなる。その他はおおよそ10~19cmの間で収まる。柱の配置を考えると、北壁・南壁沿いに3基ずつ、東壁・西壁沿いに2基ずつの配置になり、対面のピットと相関関係があると考えられることから、P 3・4を除くピットで、壁柱構造をとるものと考えられる。P 4については、P 5の代わりに柱穴として用いた可能性が考えられる。P 3については、主柱もしくは建て替えの可能性もあるが、それでも柱配置のうえで不適合と判断して柱穴としては扱わなかった。

遺 物 (図25, 写真51)

本住居跡から出土した遺物は縄文土器片98点、石器碎片3点である。そのうち縄文土器片24点を図示した。図25-1は胎土に繊維を含み、内面に貝殻条痕が施される土器である。2は口端部に縦位のスリットを、以下にLとRの原体圧痕を横位に2段、さらに、下に原体圧痕によるモチーフをもつ土器である。3は胎土に繊維を含み、連続刺突により施文を行う土器で円形竹管文を伴う。4・

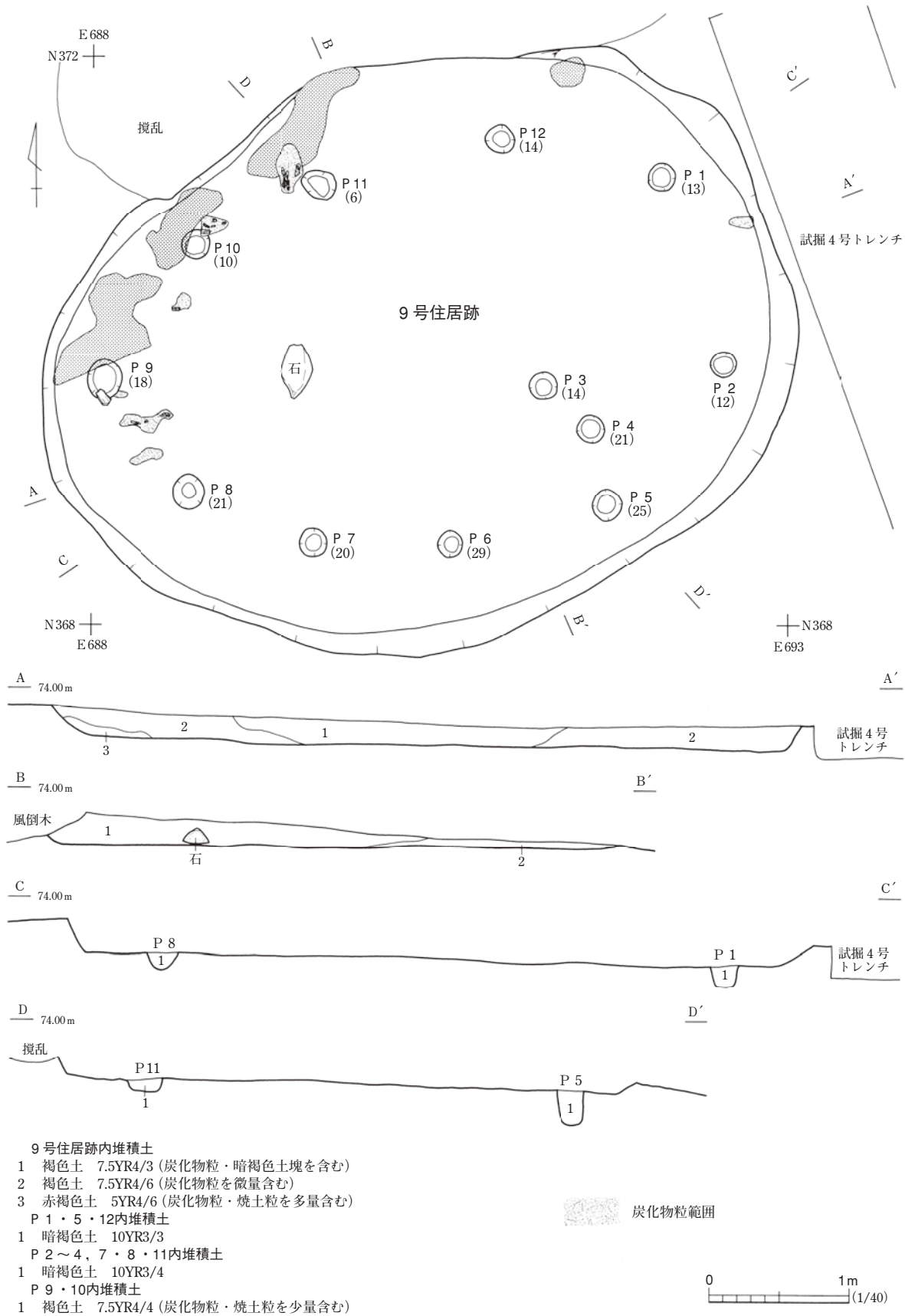


図24 9号住居跡

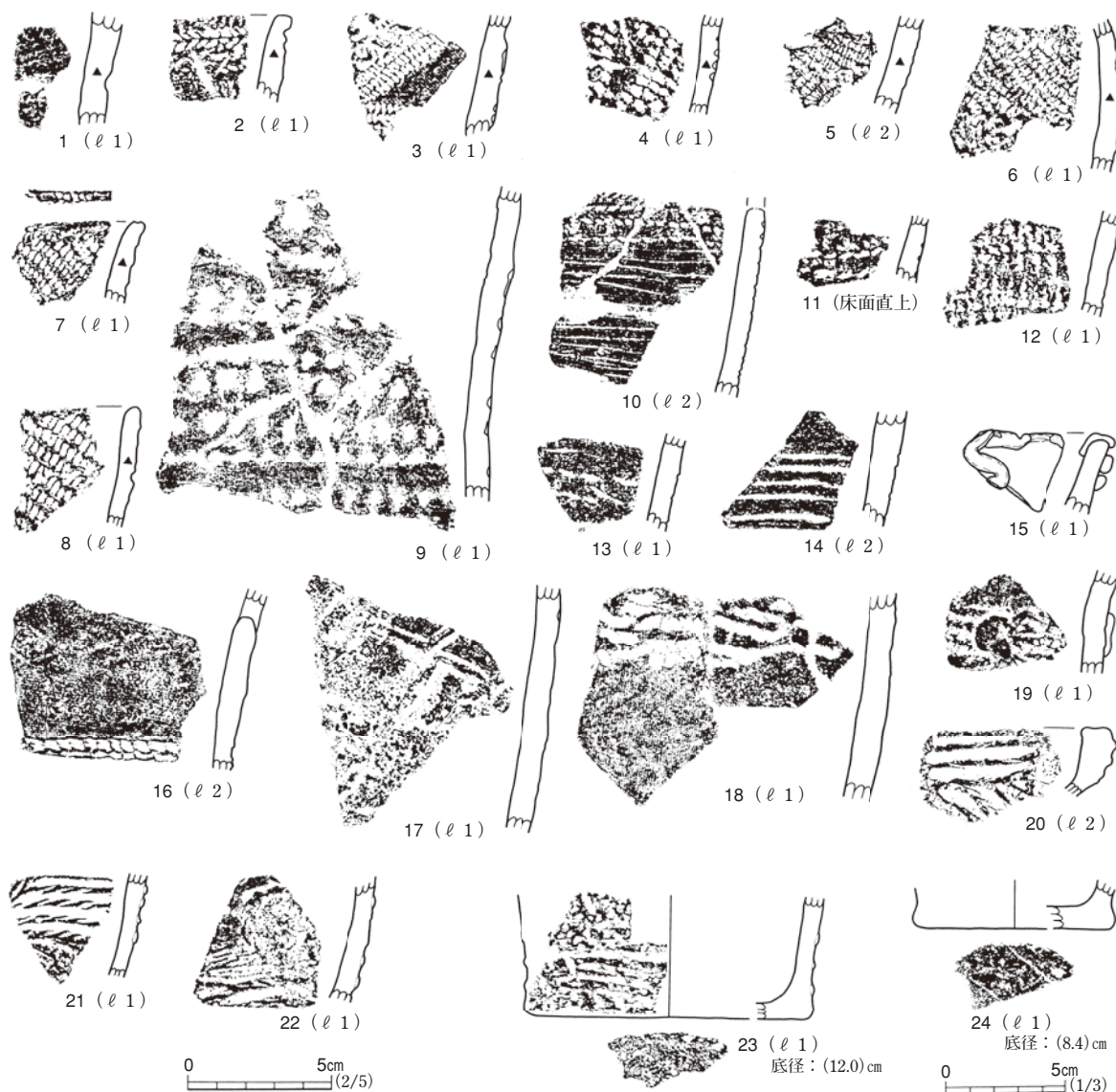


図25 9号住居跡出土遺物

5・6・7は胎土に繊維を含み、羽状縄文・斜縄文を施す土器である。7は口唇部に原体圧痕を施しており、6は結束の羽状縄文である。以上の土器はⅠ群Ⅱ類・Ⅱ群土器で、5がℓ2出土である以外は、すべてℓ1出土である。

以下は全てⅢ群土器である。15・16・18・19は大木式系の土器で、15・16が口縁部資料である。15は口唇部にも貼付文が施される。19は、体部に瘤状の貼り付けを持つ。18は結節回転文が3段施されるが、上部が欠損しているのも、より多段に施されていた可能性もある。16は口縁部資料で波状口縁を呈する。口端下を無文とし、遺存部で確認される限り2段の押引文が施される。9～14は浮島式系の土器である。10・11・13は変形爪形文を施すもので、いずれも三角文に近い施文になっている。10は同じ工具によると考えられる平行沈線が変形爪形文以下に、多段に施される。12は、縦位の貝殻腹縁連続刺突が多段に施される体部資料、9は三角文が多段に施される体部資料である。17・20・21・22・23は諸磯式系の土器である。17は平行沈線により菱形のモチーフを描くもの

で、比較的古い要素を持つと考えられる。20は口縁部、21・22は口縁部近くの資料であり、器面の剥落が著しいが、いずれも浮線文による渦巻き状のモチーフが施される。23は底部資料で、底部付近まで浮線文が施されるが、浮線文上まで縄文が施されている。24も底部資料で、底面に木葉文と思われる線が見られるものの、資料自体が部分的であるので判然としない。また、決め手になる文様もないので、正確な時期は分からないが、胎土から判断して諸磯式期と考えられる。

ま と め

本住居跡は明確に地床炉を検出できなかったが、被熱を受けた石などの間接資料から、おそらく住居中央部に何らかの燃焼部を持っていたものと考えられる。また柱は北壁・南壁各3本ずつ、東壁・西壁各2本ずつの計10本で構成される壁柱構造と考えられる。

所属時期は、床面直上から出土した土器や比較的大形の破片に占める割合などから、縄文時代前期後葉の時期と考えている。 (新 海)

10号住居跡 S I 10

遺 構 (図26, 写真23)

調査区平坦部中央 I 7 グリッドの L IV 上面で検出した。当初、焼土化範囲を検出し、その周囲から柱穴と考えられる小穴が確認されたことから住居跡と判断した。他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は柱穴内のみで確認されている。

平面形は不明であるが、検出した小穴の配列からは長楕円形と推定される。同様に小穴の配列から推定される規模は、長径6.00m、短径3.35mを測る。床面は、炉跡検出時から柱穴確認のため何度か削ったために失われたものと考えられる。柱穴は6基検出され、炉跡の周辺を巡るように配列されている。柱穴の大きさは、径25~40cm、深さ30~41cmで、全体的に一定している。また、柱穴内堆積土はL II・IIIに相当する土が堆積している。

炉跡は赤褐色を呈し、掘り込みを持たないもので住居中央に認められる。その平面形は楕円形を呈し、規模は長径27cm、短径17cmを測る。炉跡の焼土化範囲の厚さは2cmまで及ぶが、焼き締まりは認められなかった。

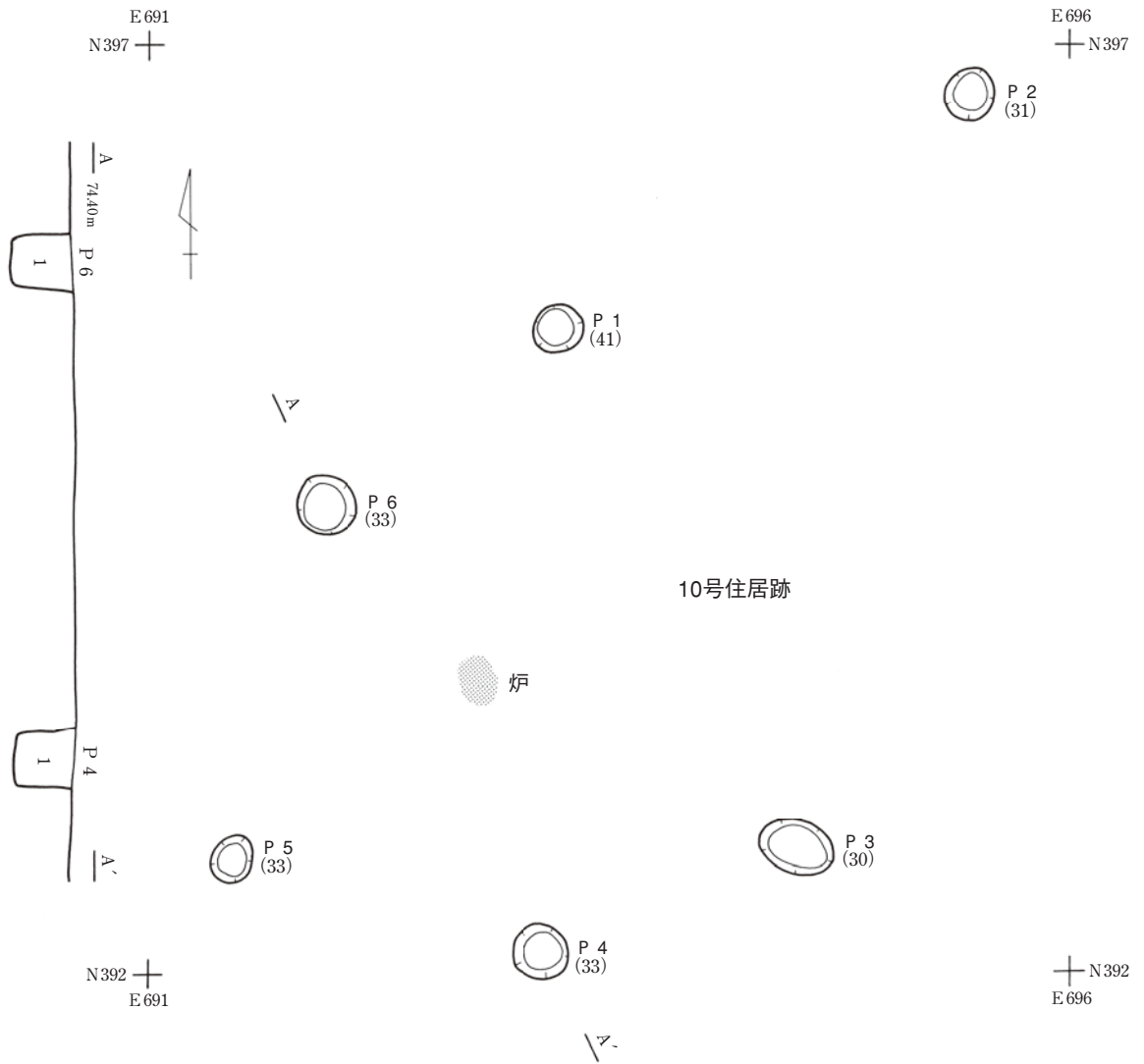
遺 物 (図26)

本遺構からは、縄文土器片1点がP 5 ㊦ 1から出土した。土器は小破片であるが図示した。

図26-1はⅢ群1類に相当し、刺突文を施す土器である。胎土には植物繊維が混和されていないが、白色針状物質がわずかに観察される。

ま と め

本遺構は、炉跡と柱穴のみが確認された住居跡である。このような住居跡は、5・7・8号住居跡と同様である。出土遺物が少ないため正確な時期は不明であるが、柱穴内堆積土や出土した遺物から縄文時代前期後葉と考えられる。 (国 井)



- 10号住居跡 P 1 ~ 5 内堆積土
 1 褐色土 10YR4/6 (炭化物粒を少量含む)
 10号住居跡 P 6 内堆積土
 1 暗褐色土 10YR3/4 (暗褐色土塊・炭化物粒を少量含む)

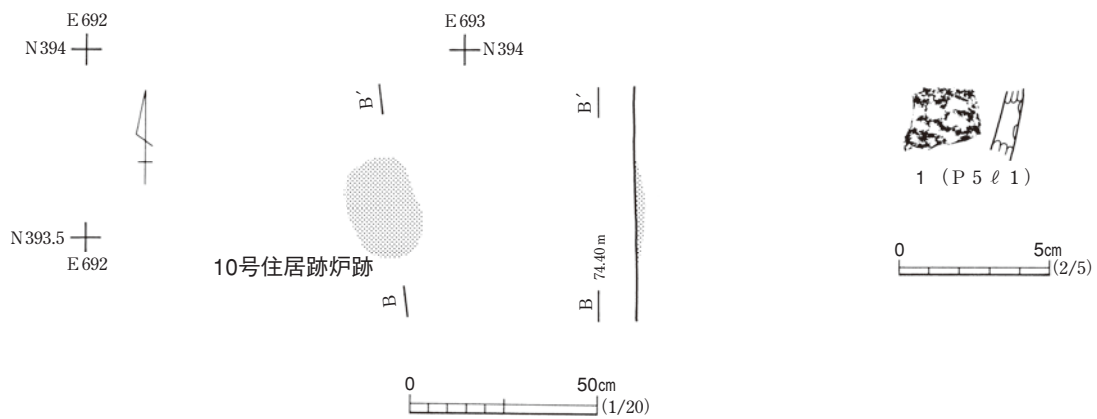


図26 10号住居跡および出土遺物

第3節 土 坑

今回の調査では土坑が33基検出された。土坑は平坦部全体に散在し、中央部と西側にまとまりがあるものの東側では希薄となる。平面形は円形と楕円形が多く、大きさでは、大型・中型・小型に分けられる。時期は、出土遺物や堆積土状況などから縄文時代と考えられる。

1号土坑 SK01 (図27, 写真24)

本土坑はE9グリッドにおいてLⅣ上面で検出した。重複する遺構はなく、周辺の遺構からは孤立した位置にある。

堆積土は3層に分層された。ℓ1～ℓ3までの堆積状態がレンズ状であることから、自然堆積による埋没と考えられる。ℓ3は黄褐色土粒を含むため、壁の崩落土と考えられる。

平面形は北東-南西主軸の楕円形で、規模は長径140cm、短径で90cmを測る。検出面からの深さは20cmである。周壁は北東壁が垂直に立ち上がる以外は緩やかに立ち上がる。底面は水平に構築されている。

遺物は、ℓ2から縄文土器片が1点出土しているが、小片で器面が摩滅しているため時期は不明である。

本土坑は、判断材料が少なく時期・性格ともに不明である。 (新 海)

2号土坑 SK02 (図27・34, 写真24・54)

本土坑は調査区頂部の平坦面西寄り、D10・11、E10・11グリッドに位置する。丘陵頂部平坦面の南西寄り、南側斜面に近い。他遺構との重複はないが周辺には5m程度の距離をおいて、南東に1号住居跡、北に3号土坑などが分布する。検出面はLⅢ上面で、褐色土の広がりとして検出した。

平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、長軸を北東にとり、規模は長径1.8m、短径1.5m、検出面からの深さは約25cmを測る。底面は壁際でやや凹凸があるがほぼ平坦で、長径1.4m、短径1.2mを測り、やや歪な楕円形を呈する。遺構内堆積土は、微量の炭化物粒を含んだ褐色土の単一層であり、自然堆積と判断される。

遺物はℓ1上部から土器片1点が出土したのみである。器表面に弧状の沈線を施している。遺物からは、詳細な時期や性格を判断することはできない。堆積土が、周辺にある縄文時代前期の土器を出土した土坑に近似することから、縄文時代前期頃に属すると思われる。 (宮 田)

3号土坑 SK03 (図27, 写真24)

本土坑は調査区西側E10グリッドのLⅣ上面で検出された。他の遺構との重複はない。堆積土は2層に分けられ、ℓ1は締まりが良く均質な土であり、ℓ2は壁際の一部に堆積していることか

ら、自然に堆積したものと考えられる。平面形は南側の一部を掘り過ぎているが、楕円形と推測される。規模は長径1.35m、短径1.2m、検出面からの深さは最大30cmを測る。周壁は外傾気味に立ち上がる。底面はLⅣに達し、平面形は長径1.06m、短径は78cmの不整楕円形であり、概ね平坦である。遺物は出土していない。

本土坑の性格は、不明である。時期は、LⅢを基質とした土が堆積していることから縄文時代に属する可能性が高い。(関)

4号土坑 SK04 (図27・34・41, 写真24・54・57)

調査区平坦部西側E10グリッドのLⅢ上面で検出した。本遺構は風倒木痕上に構築されるため、風倒木痕より新しい。また、西側は木の根による攪乱により壊されている。遺構内堆積土は2層に分けられ、堆積土内に異なる土の塊が多く含まれることから人為堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は遺存する長径1.44m、短径1.03mを測り、検出面からの深さは最大40cmである。周壁は直立気味に立ち上がる。底面は外側が低く、内側がやや高くなる。

遺物は縄文土器片8点、石器3点が出土している。このうち縄文土器と石器を1点ずつ図示した。図34-2はLR縄文のみのもので、胎土には多量の砂粒と植物繊維が混和されている。図41-2は石鏃の未製品である。本資料は両面から側縁部に剥離を加えた簡単な作りであることから、未製品と判断した。

本遺構は小型の浅い土坑である。出土遺物は、縄文時代前期前半の土器片と石器が少量出土したのみである。堆積土がLⅢに相当することから、所属時期は縄文時代前期前半と推定される。性格は不明である。(国井)

5号土坑 SK05 (図27・34, 写真25・52・54)

本土坑はE11グリッドにおいてLⅣ上面で検出した。重複する遺構はない。北西1mほどの所に1号住居跡があり、比較的近い場所に8号住居跡・10号土坑がある。堆積土は2層に分層された。ℓ1・ℓ2とも含有物の少ないレンズ状堆積を示すことから、自然堆積による埋没と考える。

平面形は東西方向主軸の不整な楕円形で、規模は長径3.0m、短径2.0mを測る。検出面からの深さは、最深部で14cmである。周壁は、全体的に緩やかに立ち上がる。底面は、西側部分で凹凸が見られるが、その他は水平に構築されている。

遺物は、縄文土器片が28点、石器碎片が5点出土しており、そのうち縄文土器4点を図示した。いずれもⅡ群土器で、胎土に繊維を含んでいる。図34-6は、検出面において同一個体の破片が石を伴い破碎した状態で出土したものである。器形は底部が欠損するが、胴部下半から外傾気味に立ち上がり、口縁が大きく外反する。器面には単節斜縄文のみが施文されている。3はⅡ群2類土器で、原体末端まで転がす非結束羽状縄文を施している。4・5は斜縄文を施す土器で、5は胴部下端から底面に縄文が施されている。

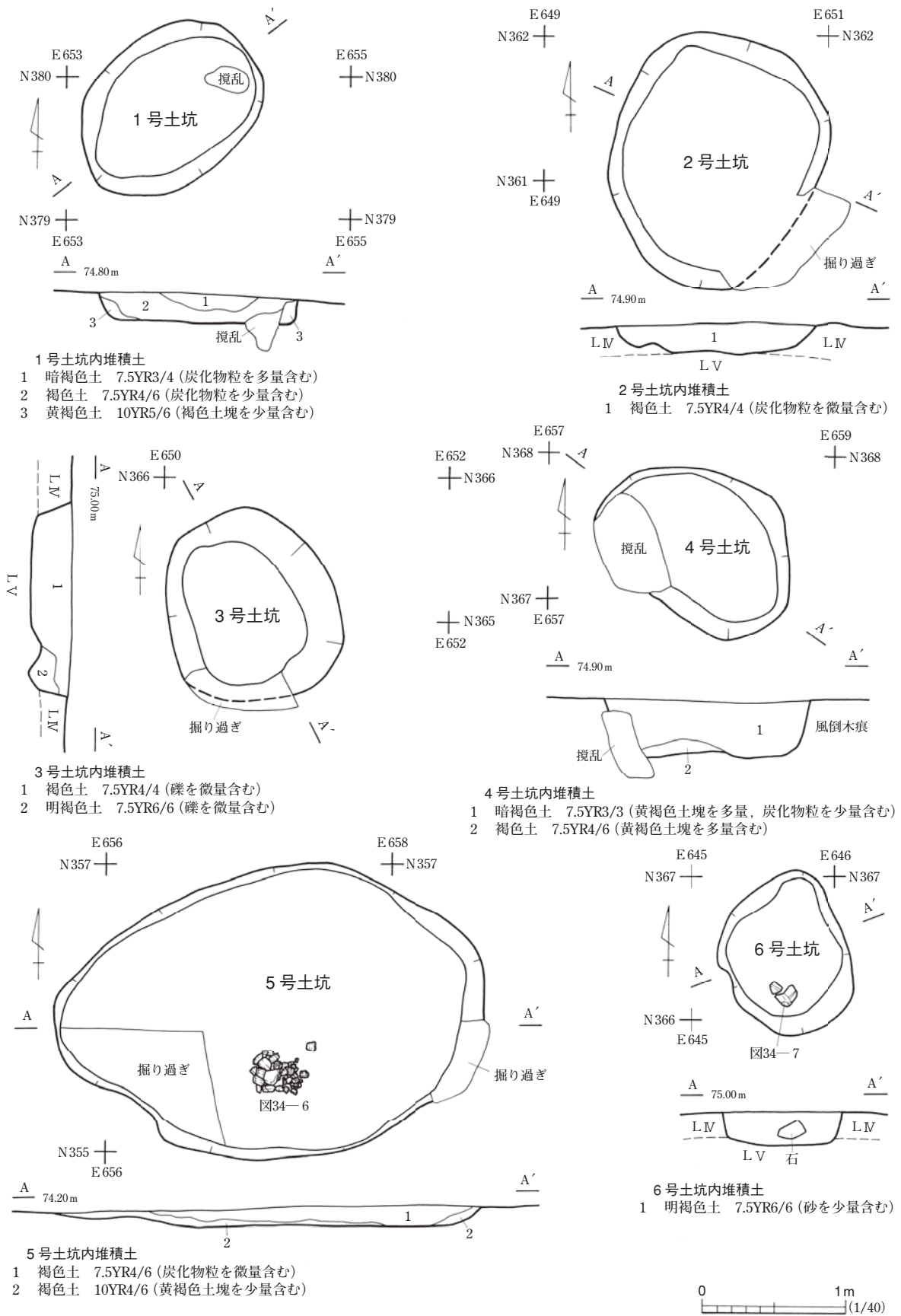


図27 1～6号土坑

本土坑の所属時期は、検出面に大型破片が遺棄されていることや、出土土器がほとんど繊維を含むことから、縄文時代前期前葉以前の所産と考えている。性格については不明である。（新 海）

6号土坑 SK06 (図27・34, 写真25・52)

調査区西側D10グリッドのLⅣ上面で検出された。他の遺構との重複はない。堆積土は砂を少量含んだ明褐色土の単層であり、LVを基質とする塊が不均質に含まれていることから人為堆積と考える。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は、長径107cm、短径88cm、検出面からの深さは最大24cmを測る。周壁は直立気味に立ち上がる。底面はLⅥ上面に達し、大きさは長径100cm、短径80cmを測る不整な方形を呈し、やや凹凸があるものの概ね平坦である。

遺物は、図34-7が底面直上から出土した。図34-7は、口縁部から胴部下半までであり、全体の約1/4が遺存する深鉢形土器である。器面は摩滅が著しいが、地文にはLR縄文が施されている。口縁部は4単位の波状口縁を呈している。口縁部と胴部は断面が三角形の隆線により区画され、その隆線の上下には半截竹管凹面による沈線が施される。口縁部は無文で、波頂部下には2本の隆線が垂下し、隆線の上端と下端には盲孔が施されている。また、胴部は盲孔の下部から垂下する2本の沈線によって胴部地文を区分している。

本遺構の性格は不明である。遺物が人為堆積と考えられる層から出土していることから、縄文時代後期前葉頃に属すると考えられる。（関）

7号土坑 SK07 (図28・34, 写真26・54)

本土坑は調査区西寄りの、丘陵頂部平坦面のD9・10グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面で西側が攪乱され、遺存状態は悪い。

平面形は卵形を呈し、長径2.1m、短径1.8m、検出面からの深さは65cmを測る。堆積土は5層で、北東壁側から流入し次第に水平に堆積するため、自然堆積と判断される。周壁はLⅢで、底面はLⅣ上面に達する。北・東側壁がやや緩やかに、南・西壁は急角度で立ち上がる。底面はやや歪んだ卵形を呈し、概ね平坦である。大きさは長径1.7m、短径1.4mを測る。

遺物は、 $\ell 1$ と $\ell 3$ から縄文土器片44点、石器16点が出土し、うち縄文土器片11点を図示した。図34-8は無文の体部片で、9・10・13・15・16は縄文を地文とする深鉢片である。9と15には沈線が見られる。これらには胎土中に植物繊維が混和される。14・17・18は外面に横走する多条沈線が施される。12は口縁部に3段の粘土紐を貼付し、口唇部は刻み目を有する。図34-11は底部付近の破片で横位に貝殻腹縁文が押し引かれている。

本土坑は出土遺物から、縄文時代前期後半の所産と推定される。性格は不明である。（宮 田）

8号土坑 SK08 (図28・35・41, 写真26・52・54・57)

本土坑はF10・G10グリッドのLⅣ上面で検出した。重複する遺構はない。東に2.5mの位置に4

号住居跡がある。

堆積土は4層に分層された。堆積土は不均一に焼土粒や黄褐色土塊・褐色土塊を含むことから、人為的に埋められたと考えられる。

平面形は南北主軸の楕円形で、規模は長径約1.26m、短径約1.1mを測る。検出面からの深さは50cmで、周壁は北壁・南壁では急角度で立ち上がり、東壁・西壁では比較的緩やかに立ち上がる。底面はほぼ水平に構築されている。

遺物は縄文土器片6点、石器類2点が出土した。このうち縄文土器片3点と石器1点を図示したが、図示しなかった土器も含めて、いずれも胎土に多量の繊維を含む土器がないことからⅢ群に属する。図35-1は1類土器で、外反する口縁を有し、口縁部下に2段平行沈線が横走して、その下に「く」の字状に平行沈線が2段施される。下端部は横走する沈線により区画したものと考えられる。

同図2・3は4類土器である。2は口縁部資料で、口縁部直下から縄文を転がしている。3は体部資料で、斜縄文が施されている。

図41-5は砥石で片面に数条の研磨痕が見られる。裏面には敲打痕が認められるので、敲打石の転用と考えられる。

本土坑の所属時期は、堆積土が人為堆積と考えられることや、出土土器の所属時期からも、縄文時代前期後葉の時期と考えている。性格については不明である。 (新海)

9号土坑 SK09 (図28・35・36, 写真27・52~54・57)

調査区平坦部西端C9グリッドのLⅣ上面で検出した。重複する遺構はない。遺構内堆積土は4層に細分される。ℓ4には多量の焼土や炭化物粒と多量の土器が含まれ、そのような状況からℓ4は人為堆積と考えられる。ℓ1~3はレンズ状の堆積から自然堆積と考えられるが、ℓ2から多量の土器が出土していることから、ℓ2の堆積段階に土器等の投棄が行なわれた可能性が高い。図28の平面図には、ℓ4出土土器と焼土範囲を示した。

平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.97m、短径1.7mを測り、検出面からの深さは最大54cmである。周壁は全体的に整うように掘り込まれ、壁の立ち上がりは東壁がやや緩やかである以外は直立気味である。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器片308点、石器16点が出土している。縄文土器はℓ2とℓ4から多く出土している。ℓ4出土の土器は主に底面付近から出土し、ℓ2出土土器に比べ土器片が大きい。石器は流紋岩の小剥片が多い。このうち、縄文土器片11点と石器1点を図示した。

図35-4、図36-3・4はⅢ群1類の土器である。図35-4は、平行沈線文主体に変形爪形文が施されている。図36-3・4は胴部下半に波状の貝殻腹縁文が施されている。3は底面付近でつぶれた状態で出土し、内面底部付近には炭化物が巡るようにつ着している。

図35-5~7、図36-1・2はⅢ群3類の土器である。図35-5は口縁に無文部を持ち、無文部には2本の異なる工具により波状単沈線が施されている。また、口縁部下のRL縄文地文上には半截

竹管凹面により弧状の平行沈線が施されている。図35-6・7, 図36-2はいずれも同一個体である。図36-2は底部を欠き約5割が遺存する。この土器は主に底面中央付近の ϕ 4から破片が散乱した状態で出土したため、焼土や炭化物粒と一緒に投棄されたものと考えている。器形は底部から胴部にかけてやや胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁部でわずかに外反する。文様はLR縄文地文上に、横位の結節回転文を口唇部下に施し、また、2本の結節回転文が縦位に施されている。図36-1は底部を欠いているが約6割遺存する。本遺構内の北側部分と南側部分で確認され、南側では主に ϕ 2からまとまった状態で出土し、北側では大型の土器片が口縁部下向きの状態で底面直上から出土した。器形は底部から胴部にかけて胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁部で強く外反する。口縁部は無文となり、文様はRL縄文地文上に、異なる棒状工具を使い分けて弧状の単沈線を施し、その下には垂下する波状の沈線が施されている。

図35-8・9はⅢ群4類の土器である。8はLRの原体を横と斜め回転により、縦方向の羽状縄文を施している。9はLRの原体を縦回転により斜行縄文を施している。

図36-5は底部資料のⅢ群5類に相当する土器である。器面がかなり剥落しているが、僅かに縄文の痕跡が認められ、内面には炭化物の付着が認められる。

図35-5~9, 図36-2の胎土には植物繊維が混和されている。また、図35-6・7・9, 図36-2の胎土には白色針状物質が認められる。

図41-4は磨製石斧の欠損品である。やや軟質な石材を使用しているが、器面に調整痕は確認できなかった。

本遺構は、大型の土坑である。底面付近から多くの土器が投棄された状態で出土しているため、これらの土器は共伴資料と判断している。所属時期は、底面付近から出土した土器から縄文時代前期後半と考えられる。性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴と考えている。(国井)

10号土坑 SK10 (図28, 写真28)

本土坑はE11グリッドにおいてLIV上面で検出した。重複遺構はなく、1.5m北東に1号住居跡がある。

堆積土は2層に分層され、レンズ状堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は南北主軸の楕円形で、長径1.38m, 短径1.11mを測る。検出面からの深さは、最深部で14cm, 周壁は全体的に急角度に立ち上がる。底面は北から南に向かって、10cmほど下っている。

遺構内から遺物の出土がなかったため本土坑の時期は決定できないが、周囲の遺構との関連を考えれば、縄文時代に機能していたと考えるのが妥当である。(新海)

11号土坑 SK11 (図28・37, 写真28・54)

調査区平坦部中央H7グリッドのLIV上面で検出した。重複する遺構はないが、北西側には12号土坑が隣接する。遺構内堆積土は2層に細分される。 ϕ 2は異なる土の塊が含まれることから、人

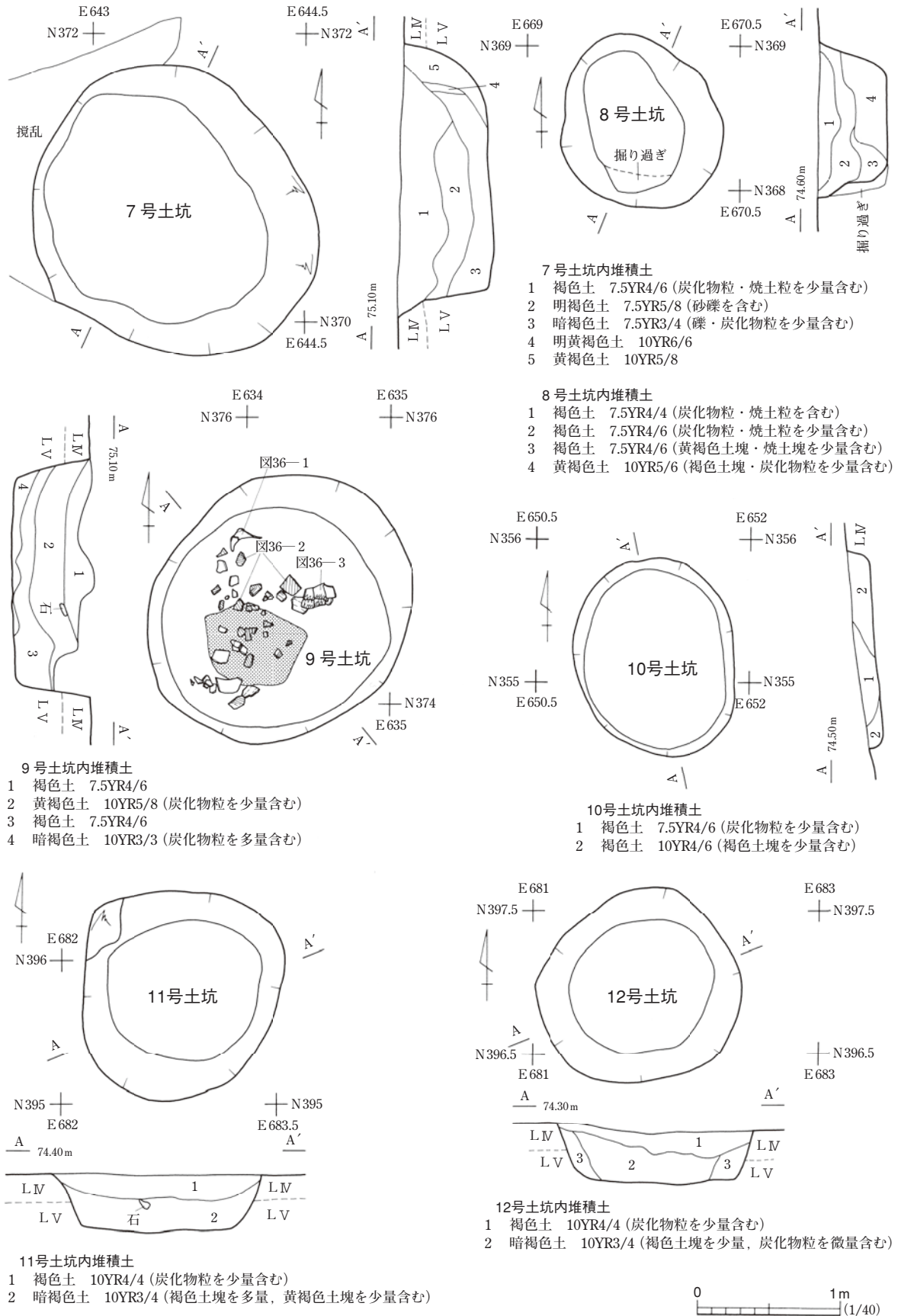


図28 7～12号土坑

為堆積の可能性が高く、 $\ell 1$ は炭化物粒を均一に含むことから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し、規模は長径1.52m、短径1.23mを測る。検出面からの深さは40cmである。周壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器片4点、石器2点が出土している。縄文土器はいずれもⅡ群4類の土器で、石器は流紋岩の小剥片である。このうち、縄文土器2点を図示した。図37-1・2は非結束羽状縄文を施し、胎土には植物繊維が混和されている。

本遺構は中型の土坑である。規模や形状が同様な12号土坑が隣接している。正確な所属時期は不明であるが、出土土器や図46グリッド出土縄文土器点数の状況から縄文時代前期前葉と考えている。なお、性格は不明である。 (国 井)

12号土坑 SK12 (図28・37, 写真28・54)

調査区平坦部中央H7グリッドのLⅣ上面で検出した。重複する遺構はないが、南東側には11号土坑が隣接する。遺構内堆積土は3層に細分され、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。 $\ell 3$ はLⅣに相当することから壁の崩落土と考えている。平面形は円形を呈し、規模は長径1.4m、短径1.34mを測る。検出面からの深さは最大44cmである。周壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器片10点、石器2点が出土している。縄文土器はⅡ群1・4類の土器で、石器は流紋岩と頁岩の小剥片である。このうち、縄文土器1点を図示した。図37-3は非結束の羽状縄文下に刺突列が認められる。胎土には植物繊維が混和されている。

本遺構は小型の土坑である。規模や形状が同様な11号土坑が隣接している。正確な所属時期は不明であるが、出土土器や図46グリッド出土縄文土器点数の状況から縄文時代前期前葉と考えている。なお、性格は不明である。 (国 井)

13号土坑 SK13 (図29・37・41, 写真29・54・55・57)

本土坑はG10グリッドのLⅣ上面で検出した。重複遺構はなく、1m北に4号住居跡がある。

堆積土は3層に分層された。 $\ell 1$ は焼土を多量に含み、全体的に赤褐色を帯びる土で、 $\ell 2 \cdot \ell 3$ も褐色・黄褐色土主体に暗褐色土が少量混じる土質であることから、堆積土は全体的に人為的埋没によると考えられる。平面形は西側が若干崩れる隅丸方形で、南北1.62m、東西1.6mを測り、わずかに南北に長い。検出面からの深さは、最も深いところで42cm、周壁は全体的に緩やかに立ち上がる。底面は基本的に水平に作られるが、北西部に落ち込みが見られる。

遺物は縄文土器片48点、石器8点が出土している。そのうち縄文土器片8点と石器1点を図示した。図示したのは全てⅢ群土器である。4・5・6・7は大木式系の土器で、4は口縁部が外反する口縁部資料で、口縁部直下から不整な波状沈線が2段～3段施される。6は体部破片で結節回転文が施される。5・7は体部の地文のみの資料である。8・9・10は浮島式系の土器で、8・10は変形爪形

文が施される。9は口縁部資料で意匠化した輪積痕上にスリットを入れた文様帯の下に、平行沈線が施される。11は諸磯式系の土器で、浮線文が施されるが表面の剥落がひどく詳細は不明である。

図41-3は石錐の完形品である。つまみ部には調整は加えられず、錐部にのみ丁寧な調整を行っている。錘部の断面形は菱形状を呈する。

本土坑は、人為的に埋められたと考えられる土坑で、近接する4号住居跡との関連性も考えられる。所属時期は、出土土器の大部分が縄文時代前期後葉のものであることから、この時期と考えている。(新 海)

14号土坑 SK14 (図29・37, 写真29・55)

調査区平坦部西端G・F7グリッドのLⅣ上面で検出した。3号住居跡の北西側に隣接し、重複する遺構はないが、東側では風倒木痕により一部壊されている。遺構内堆積土は6層に細分され、いずれにも均一に炭化物粒が含まれおり、自然堆積の可能性が高い。ℓ6についてはLⅣに相当することから壁の崩落土と考えている。平面形は円形と推定され、現存する規模は長径1.38m、短径1.18mを測る。検出面からの深さは最大60cmである。周壁は北壁から西壁の上半にかけては緩やかであり、それ以外では直立気味に立ち上がる。底面は小凹凸が認められるものの概ね平坦である。

遺物は縄文土器片20点、石器2点が出土している。縄文土器は、その多くがℓ1から出土し、Ⅱ群4類とⅢ群1・3・4類の土器である。石器は流紋岩と頁岩の小剥片である。このうち、縄文土器1点を図示した。図37-12は口縁部が無文となり、この無文部に2段の波状沈線が施されている。

本遺構は小型の土坑で、堆積土内には炭化物粒が多く含まれている。正確な所属時期は不明であるが、出土土器から縄文時代前期と考えている。なお、性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴の可能性が高い。(国 井)

15号土坑 SK15 (図29, 写真30)

本土坑はH8グリッドにおいてLⅣ上面で検出した。重複する遺構はない。東へ1mに6a号住居跡、20号土坑があり、南へ1.5mに19号土坑がある。

堆積土は5層に分層された。ℓ2～ℓ5までの土には、黄褐色土・明褐色土の塊が含まれ、特にℓ4は黄褐色土塊のみで構成される土質であり、またℓ2には焼土も含まれることから、埋没過程に人為的要素が含まれると考える。ただしℓ1については、若干の窪みに自然堆積でたまった土の可能性もある。

平面形は南北主軸の不整な楕円形で、規模は長径2.27m、短径1.74mを測る。検出面からの深さは最も深いところで70cm、周壁は北壁が垂直気味に立ち上がる以外は、一部段を伴いながら斜面状を呈する。底面も東から西に向かって24cm程下り、不整な様相を示す。本土坑は形態的に崩れていることや堆積土の状態から考えて、障害となる風倒木痕を人為的に埋没させた穴とも考えられる。

本土坑からは、土器の出土はなく、石器碎片が31点出土しているものの小片のみであるため図示しなかった。そのため時期決定の材料はまったくない。ただ近接する6 a号住居跡との関連性を考える事は可能である。 (新 海)

16号土坑 SK16 (図29・37, 写真30・55)

本土坑は調査区の東寄り、J 6・K 6グリッドにまたがって位置し、遺跡のある丘陵頂部平坦面の北側にあつて、北側斜面との境に立地する。2号住居跡の床面から炭化物粒や白色砂粒を多く含んだ褐色土の広がりとして検出した。

遺構の平面形はほぼ円形を呈し、規模は径約1.5m、底面までの深さは約0.7mを測る。遺構内堆積土は6層からなり、全体に締まりが弱く、炭化物粒や焼土粒を含む。ℓ 6はほとんど焼土からなり、若干の明黄褐色土を含んでいる。ℓ 1～ℓ 5は堆積の状況からみて人為的に短時間で埋められたものと推定される。ℓ 6は、大量の焼土が中央部をやや高めに、ほぼ水平に堆積しており層厚20～40cmを測る。明褐色土が混入していることから、ここで火を使用したのではなく、焼土のみを意識的に敷いた可能性がある。底面の規模は長径1.1m、短径1.0mを測る卵形を呈し、凹凸がある。周壁はLⅢを掘り抜き、底面はLⅣに達し、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面・壁面ともに焼けた痕跡はなく、底面と周壁の境には幅15～20cm、深さ10cm程度の周溝が掘られており、壁溝をもつような様相である。また底面中央部分に径約30cm、深さ12cmほどの円形の小穴が掘り込まれていて、この小穴にはℓ 6が流入している。またこの小穴に切られるように、さらに1基検出されている。

遺物はℓ 6から縄文土器片21点が出土し、そのうち3点を図示した。いずれも胎土中に植物繊維が混入する資料である。図37-13は外面の文様は不明であるが、内面にわずかに条痕文が観察される。14は外面に斜行縄文が施される。15は底部片資料で、底面と胴部下位に縄文が施されている。

本土坑は、2号住居跡の下から検出された。よって時期はそれ以前に位置付けることが可能であろう。遺構の性格としては、本来は貯蔵穴であったと考えられるが、堆積土は人為的に埋められたと考えられ、2号住居跡とさほどの時間差はないと考えられる。 (宮 田)

17号土坑 SK17 (図29, 写真31)

本土坑は、D10グリッドのLⅣ上面で検出した。重複する遺構はない。北へ2mの位置に4号土坑があり、また5～10mの範囲内に土坑が4基所在する。

堆積土は1層のみで、暗褐色土を含む褐色土である。これだけでは埋没過程を明らかにすることはできない。

平面形は東西主軸の楕円形で、長径2.5m・短径2.11mを測る。検出面からの深さは25cmで、周壁は、北壁が若干緩やかに立ち上がる以外は急に立ち上がる。底面は、西から東に向けて8cm下る。

本土坑からは、遺物が全く出土していないため所属時期・性格は不明である。 (新 海)

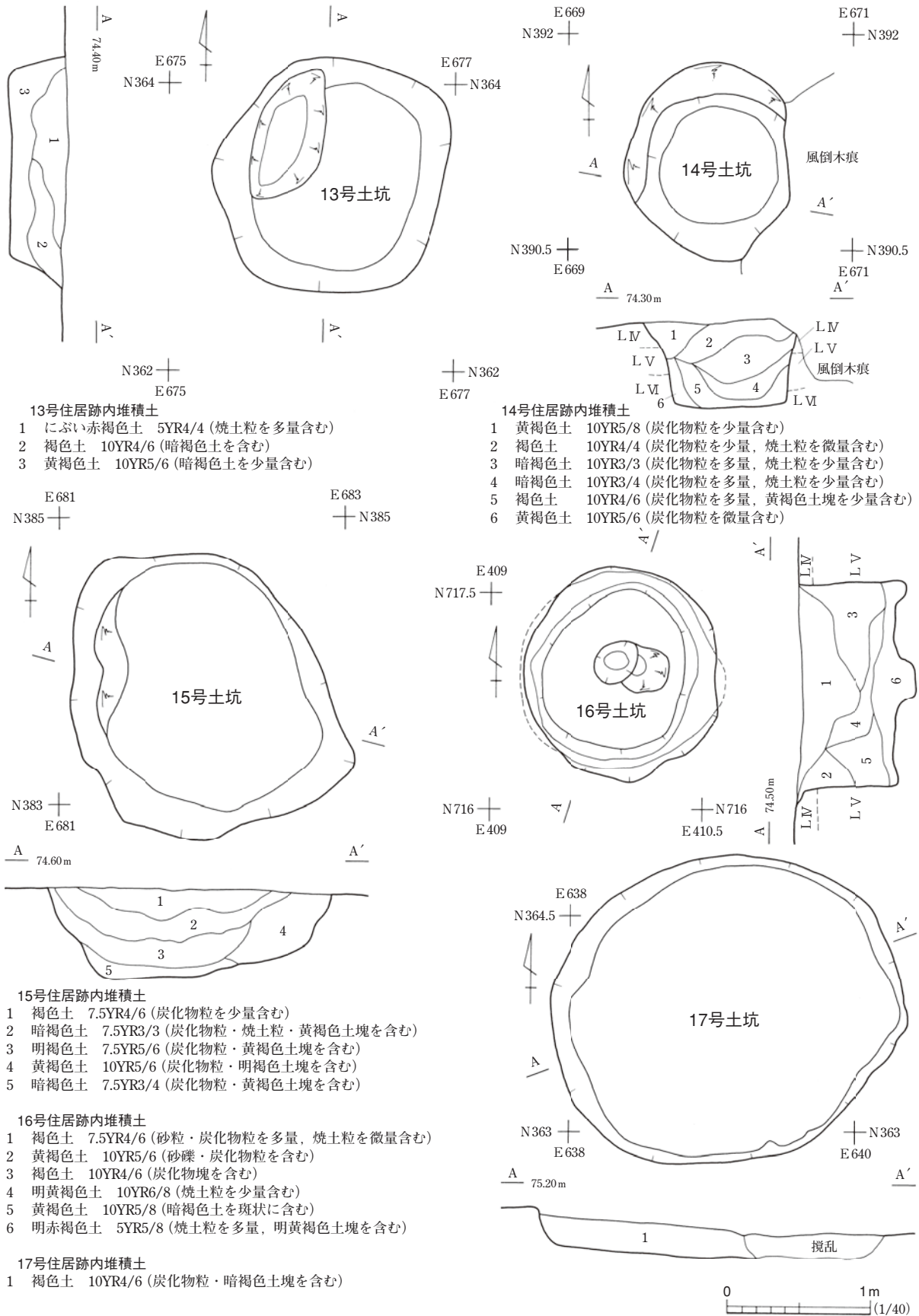


図29 13~17号土坑

18号土坑 S I 18 (図30・37, 写真31, 55)

本土坑はH 9グリッドのL IV上面で検出した。重複する遺構はないが、北東へ3 mに6 b号住居跡・29号土坑、北へ3 mに19号土坑、南西へ2.5 mに26号土坑が所在する。

堆積土は3層に分層された。ℓ 1には焼土が含まれるため人為的要素と考えられるが、ℓ 2・ℓ 3は黄褐色土を少量含むが主体は褐色土で、堆積状態からも自然堆積と考えて良いと思われる。

平面形は円形で、規模は南北・東西ともに1 mを測る。検出面からの深さは55 cmで、周壁は垂直気味に立ち上がる。底面は、ほぼ水平に構築されている。

本土坑からは縄文土器片が19点出土したが、ほとんどℓ 1の出土でいずれも胎土に繊維を含み非結束の羽状縄文を施すⅡ群土器である。図37-17・18・19が同一個体で、16は別個体である。

本土坑は、ℓ 2・ℓ 3の自然堆積土が流入した後、ℓ 1の土が投げ捨てられ、土坑が埋没したと考えられる。所属時期は、出土土器がℓ 1からまとまって出土した非結束の羽状縄文のみであることから、縄文時代前期前葉以前であると考えられる。埋没途中に廃棄が行われたが、本来の性格については不明である。

(新 海)

19号土坑 S I 19 (図30・37・38・41, 写真32・53・55・57)

本土坑はH 8・H 9グリッドのL IV上面で検出した。重複する遺構はない。東へ2 mに6 a号住居跡・20号土坑、北へ1.5 mに15号土坑、南へ3 mに26号土坑がそれぞれ所在する。堆積土は6層に分層された。ℓ 1・ℓ 2は褐色土で、ℓ 2は焼土を含むものの下部に部分的に固まる状態であることから、この2層は自然堆積と考えられる。ℓ 3～ℓ 6までは黄褐色土とにぶい黄褐色土との互層で、明らかに人為堆積と考えられる。また、ℓ 6は炭化物・焼土を多量に含み、底面付近になると図30に示したように、環状に焼土が分布する。さらに焼土を取り除くと完全に底面となり、炭化物が出土する。この炭化物は、確実に底面に密着している。底面そのものには焼けた形跡はない。また、ℓ 6の土はより多くの細分も可能であったが、堆積レベルと内容物の特殊性から一括で扱った。そのためセクション図に焼土や炭化物の集中範囲を図示しなかった。

平面形は円形で、上端部は南北2.32 m、東西2.63 m、底面は南北2.6 m、東西2.73 mを測る。検出面からの深さは93 cmで、周壁はいずれの壁もオーバーハングして、フラスコ状の断面形を呈する。底面は、ほぼ水平に構築されるが、底面中央には底面からの深さ26 cmのピットが存在する。ピット内から検出された礫は壁面に突き出た地山の礫である。

遺物は縄文土器片137点、石器類5点が出土している。そのうち縄文土器片22点と石器1点を図示した。出土量が多いのはℓ 1・ℓ 2で、ℓ 4・ℓ 5・ℓ 6からも少量出土している。図37-20はℓ 4出土で、胎土に繊維を含み、内面に薄く条痕が認められる早期末の土器である。図38-10もℓ 4出土で、口縁部直下から複節斜縄文を施している。これはⅡ群土器である。

以下は全てⅢ群土器である。図38-9はℓ 5の出土だが、それ以外は全てℓ 1・ℓ 2出土である。

図38-1・3・5は同一個体、4は口縁部に結節回転文を数段施す土器で、3・5は口唇部に刻み目が入る。図37-23、図38-7・9は、口縁部下に2～数段平行沈線により波状文が施される土器である。9のように波状文間を利用し、そこにさらに大きく蛇行する平行沈線が施されるものもある。図38-6・8は、口縁部下に1・2段1本引きの沈線による波状文が施される土器である。6には補修孔が開けられている。図37-24、図38-11は地文のみの体部破片である。以上は大木式系の土器である。図37-21・22は浮島式で、22は体部破片で平行沈線が施されている。21は、口唇部直下に変形爪形文帯を2段並べ、その下に平行沈線で菱形と三角形のモチーフを横位に展開させる文様帯を持ち、さらにその下に変形爪形文帯が施される土器である。この土器は、6 a 号住居跡出土の土器と接合はしないものの、同一個体と考えられる。図37-25～30は浮線文を施す諸磯b式の土器で、25～29は同一個体であると考えられる。図38-2は不明な点が多いが、胎土から前期に含まれるものと考えている。

図41-7は、台石と考えられる。偏平な礫を用いており両面に敲打痕が認められる。欠損しているため全体像は不明である。

本土坑は床面中央にピットを有する点、床面直上に焼土が多量に廃棄されている点、底面に炭化物(炭化材?)が多い点など、比較的特徴的な所見の多い土坑である。ピットは形態上の要素であり、土坑使用時に関連する存在であるのに対し、多量の焼土・炭化物は土坑廃絶時に関わる要素であると考えられる。使用時の特異性が、廃絶時の特異性と関連する可能性が高いのではないかと考える。

所属時期は、*l* 6から前期前葉の土器が出土しているが、同じ*l* 6出土で小片のため図示できなかった土器の中に前期後葉の土器が含まれていることから、縄文時代前期後葉の段階で廃絶したと考えられる。

(新海)

20号土坑 S K 20 (図30・38・41, 写真33・55～57)

本土坑はH 8グリッドの6号住居跡の床面で検出した。検出は床面だが6号住居跡のベルトで確認したところ、本土坑のほうが6 a・6 b号住居跡よりも新しいことが判明した。西へ2.5mに15・19号土坑が、東へ4 mに28号土坑が、南東へ2 mに29号土坑が所在する。

堆積土は3層に分層された。*l* 3には黄褐色土塊が多量に含まれるものの、*l* 1・*l* 2には確認されず、堆積状態もレンズ状であることから自然堆積による埋没と考えられる。

平面形は不整形円で、南北・東西ともに1 mを測る。本来の検出面からの深さは約60cmで、周壁はいずれの方向でも段々になり、斜めに立ち上がる。底面は、最も深いところでは水平になるが西側・南側では、10cmほど高くなって緩やかに傾斜する。

本土坑からは縄文土器片が72点、石器類が3点出土した。そのうち縄文土器片10点と石器1点を図示した。図38-19は土坑以外にH 8グリッド出土の土器と接合したもので、小形の土器である。器外面は縦方向のナデ調整で整形され、口縁部の一カ所に半截竹管によると思われるスリットが加

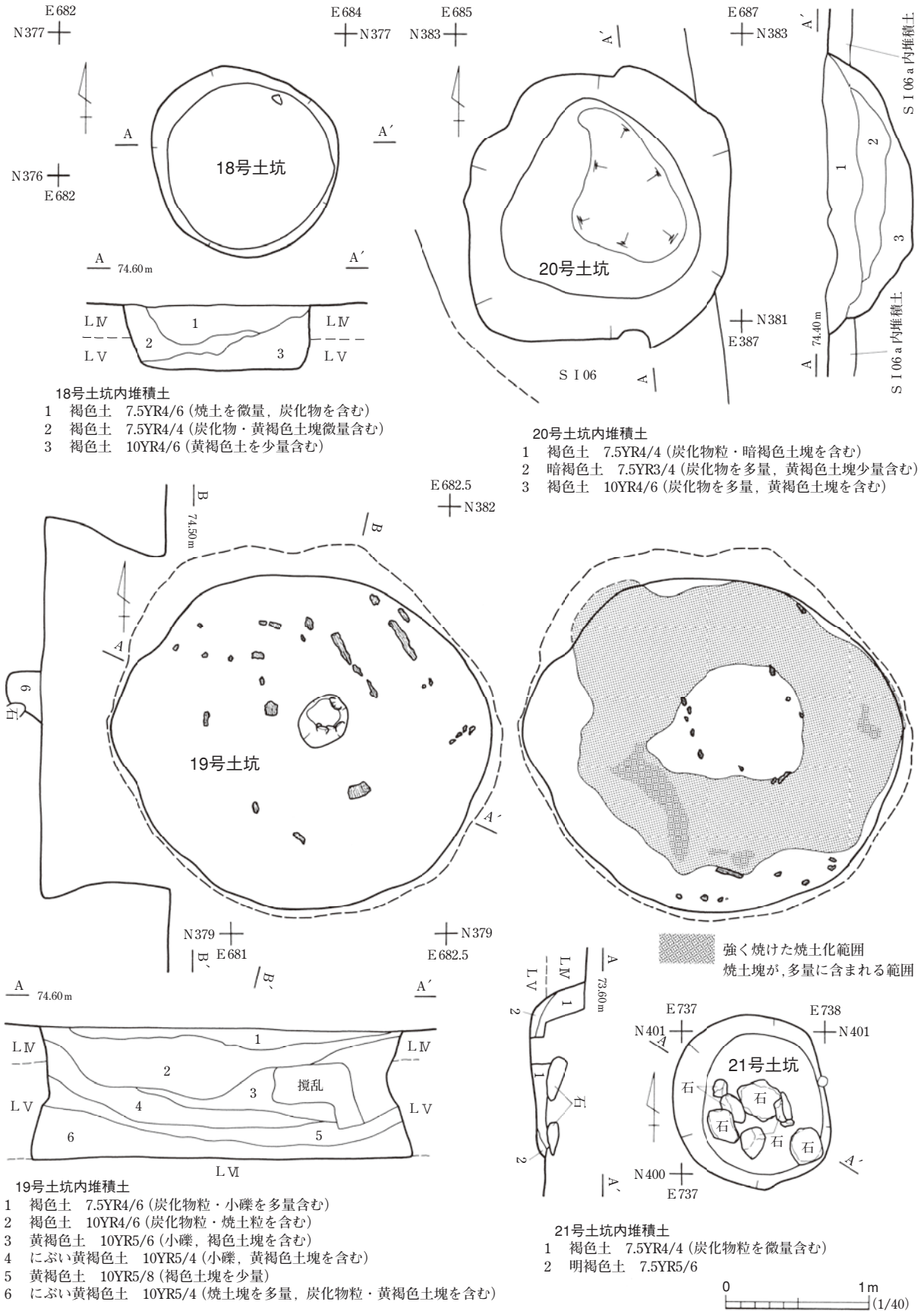


図30 18~21号土坑

えられる。特殊な土器のため時期比定は難しいが、胎土から考えるとⅡ群以外の土器と考えている。同図12・13はⅡ群土器で、12は竹管の押引状の連続刺突によるモチーフを持つ文様帯の下にループ文が施される。13は体部破片でループ文が施される。以後に示す土器は全てⅢ群土器である。

図38-14・17は、口縁部直下から1本引きの沈線によって横位に波状文が施される土器で、14は波状文間に直線の沈線を挟んでいる。15・18は体部破片で、斜縄文が施される。これらの土器は大木式系の土器である。16は口縁部直下に平行沈線、その下に変形爪形文帯2段が、さらに下に斜行する平行沈線が施文されている。20は波状口縁の波頂部で、口唇部には列点が施され、口縁部直下からは変形爪形文が口縁沿いに施文される。21は平行沈線が施される体部資料である。以上は浮島式の土器である。

図41-6は磨石で、両面を使用している。

本土坑は、6a・6b号住居跡より新しい不整形な土坑である。所属時期は、出土土器の多くが縄文時代前期後葉の土器であることから、この時期とそれほど離れた時期ではないと考える。(新 海)

21号土坑 SK21 (図30, 写真33)

調査区平坦部東側M6・7グリッドのLⅣ上面で検出した。本遺構は当初、攪乱と判断して調査を行ったため、堆積土の大半と東壁を掘り過ぎている。遺構が希薄な地区に構築され、他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は2層で、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

ℓ1下面には掌大から人頭大の礫が認められる。平面形は円形と推定され、現存する規模は長径123cm、短径110cmを測る。検出面からの深さは最大38cmである。周壁は直立気味に立ち上がり、底面は北西側に向かってわずかに低くなっている。

遺物は縄文土器片1点が出土しているが、摩滅が著しいため図示していない。胎土には植物繊維が多く含まれることから、土器の時期は縄文時代早期後葉から前期前葉と考えている。

本遺構は小型の土坑で、堆積土内には礫が多く含まれている。正確な所属時期は不明であるが、堆積土がLⅢに相当し、締まりがあることから縄文時代と考えている。なお、性格は不明である。

(国 井)

22号土坑 SK22 (図31・39・41, 写真34・56・57)

本土坑は調査区中央のG8グリッドで検出された。3号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。検出面はLⅣ上面で、明褐色土の範囲として確認した。平面形は楕円形を呈する。規模は長径380cm、短径約320cm、検出面からの深さは最大52cmを測る。底面は長径約360cm、短径300cmを測り、楕円形を呈する。遺構南西部には直径100cm、深さ11cmの窪みが認められた。壁は外傾して立ち上がる。

遺物は、縄文土器が34点出土しているが、その多くはℓ2からの出土である。このうち図39-1~4の4点を図示した。1・2・4はⅡ群4類土器で、1には斜行縄文、2・4には羽状縄文が施されている。3はⅢ群4類土器で、原体を斜め回転施文して縦走縄文を施している。図41-1は土製品

である。表面には、細い棒状工具により、垂直あるいは斜め方向に刺突が施されている。

土製品の性格については不明である。

本遺構は大型の土坑である。堆積土の $\ell 2$ に少量の炭化物粒や土器細片が含まれていた。所属時期は、3号住居跡より古い点と出土遺物から縄文時代前期前葉～後葉と考えられる。(細山)

23号土坑 SK23 (図31・39, 写真34・53・56)

本土坑はE10グリッドのLIV上面で検出した。重複する遺構はない。南へ5mに3号土坑, 南東へ5mに6号土坑が所在する。

堆積土は2層に分層された。 $\ell 1$ は褐色土, $\ell 2$ は $\ell 1$ と土質に差はないものの多量に焼土を含む。2層に分層したのは焼土面が平らであるため、燃烧作業を行ったか、焼土を敷いたかの人為的所産である可能性が高いと考えられるからである。

平面形は不整形で、南北・東西ともに85cmである。検出面からの深さは、最も深いところで28cm、周壁は北壁の一部で緩やかになる以外は急に立ち上がる。底面は水平に構築されている。

本土坑からの出土遺物は縄文土器片7点、石器碎片1点で、うち縄文土器片2点を図示した。いずれもⅢ群土器で、図39-5は直線的に広がる器形の浅鉢で、口縁部に非対称な突起をもち波状口縁を呈する。口縁部下には2段変形爪形文が施され、その下に右上から左下に斜走する平行沈線が施される。この平行沈線は下部で一部横走する部分がある。体部下端には変形爪形文が施される。6は地文だけの体部破片である。

本土坑は、形態・規模・焼土の分布から考えると、1・4号住居跡の掘り窪みを持つ地床炉に酷似する。検出面がLIVで、柱穴が発見できなかったため、土坑として扱ったが、住居の可能性も否定できない。所属時期は図39-5が浮島Ⅱ式に比定される土器であることから、縄文時代前期後葉の時期と考えられる。(新海)

24号土坑 SK24 (図31, 写真35)

調査区平坦部中央G7グリッドのLIV上面で検出した。平坦部の北側縁辺部に構築され、重複する遺構はないが、東側には11・12号土坑が隣接する。遺構内堆積土は単層で、含有物とその状況からLⅢ主体の土で一気に埋め戻された可能性が高い。平面形は円形を呈し、規模は長径144cm、短径136cmを測る。検出面からの深さは最大29cmである。周壁は断面形が皿形を呈し、立ち上がりは緩やかである。底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。

本遺構は小型の土坑で埋め戻されたものと考えられる。正確な所属時期は不明であるが、堆積土の状況から縄文時代と考えている。なお、性格は不明である。(国井)

25号土坑 SK25 (図31, 写真35)

調査区平坦部東側L6グリッドのLIV上面で検出した。重複する遺構はないが西側に7号住居跡

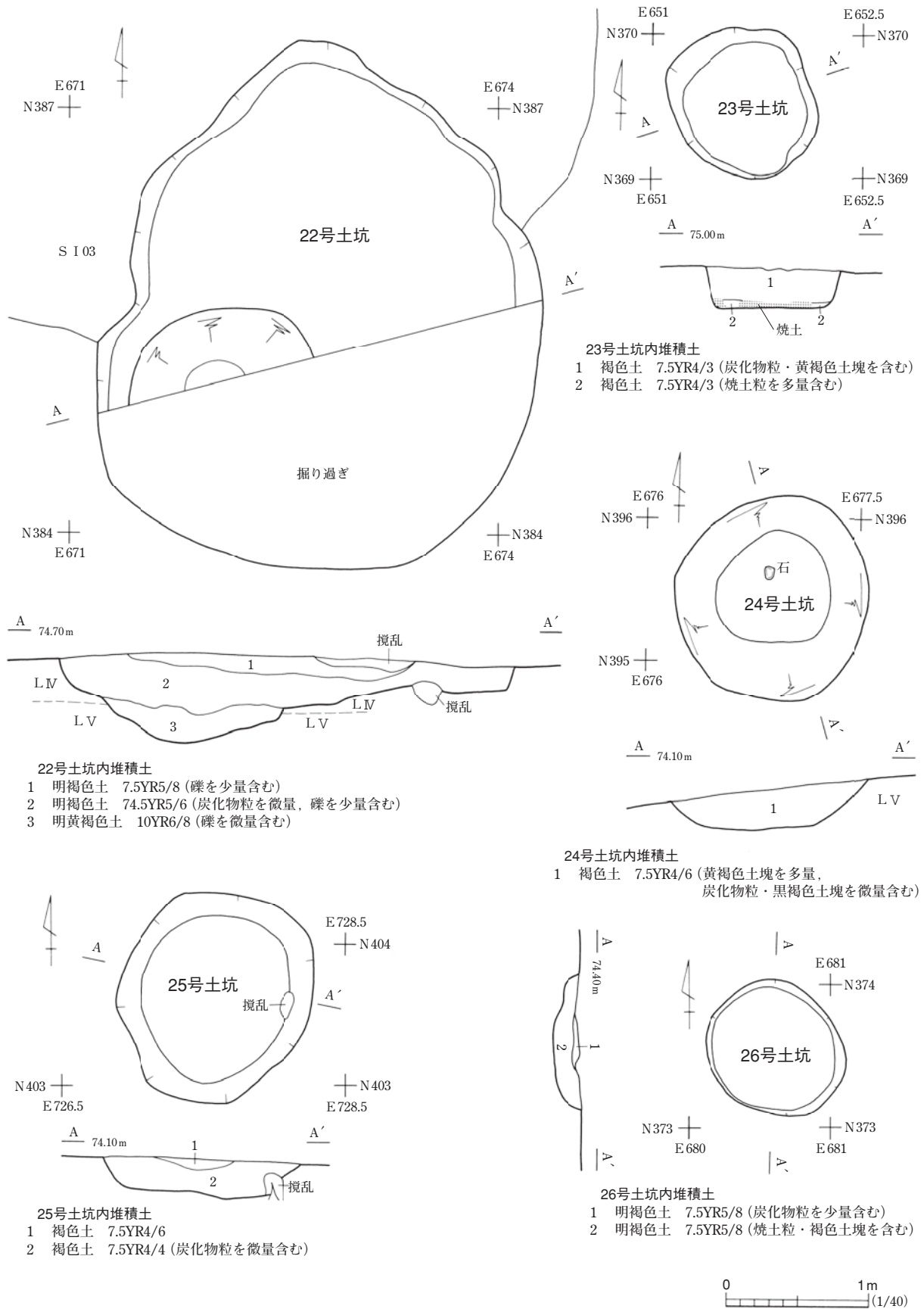


図31 22~26号土坑

が隣接する。遺構内堆積土は2層に分かれ、LⅢに相当する土がレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し、規模は長径147cm、短径136cmを測る。検出面からの深さは最大25cmである。周壁は外傾して立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。

本遺構は中型の土坑である。正確な所属時期は不明であるが、堆積土がLⅢ主体で締まりがあることから縄文時代と考えている。なお、性格は不明である。(国井)

26号土坑 SK26 (図31, 写真35)

本土坑は、調査区中央部のH9グリッドに位置する。他遺構との重複はない。検出面はLⅣ上面で明褐色土の広がりとして検出した。堆積土は2層からなり、 ℓ 1は焼土・炭化物粒をわずかに含む明褐色土、 ℓ 2はLⅣを基質とする黄褐色土で、レンズ状に堆積することから自然に埋没したと考えられる。平面形はほぼ円形を呈し、大きさは径約100cm、深さは約20cmを測る。底面は径約85cmを測る円形を呈し、ほぼ平坦である。壁、底面とも、LⅢ中に止まっている。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

本土坑からは遺物が出土していないため、所属年代を特定することができない。また、性格を推測できるような状況も確認できなかった。(細山)

27号土坑 SK27 (図32・39, 写真36・53・56)

調査区平坦部中央H・I8グリッドのLⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが、西側には6a号住居跡が隣接する。遺構内堆積土は8層に細分され、各層の堆積状況やLⅡ・Ⅴ塊と多量の炭化物粒を含むことから人為堆積の可能性が高い。平面形は円形を呈する。規模は長径184cm、短径175cmを測り、検出面からの深さは68cmである。周壁は全体的に整うように掘り込まれ、壁の立ち上がりは直立気味である。底面は小凹凸があるものの概ね平坦である。

遺物は縄文土器片271点、石器2点が出土している。縄文土器は ℓ 8から約200点出土しているが、この土器のほとんどは、図39-10に示した1個体のものである。石器は流紋岩の剥片である。

図39-7~9, 12はⅢ群4類土器である。7~9は縄文地文のもので、7には多段の結節回転文が施されている。12は口縁部が無文となり、口唇部に連続する刺突文が施されている。同図10・11, 13~16はⅢ群1類の土器である。10は底面直上で横に倒れた状態で出土し、土器は中に土が半分程入って潰れた状態で出土した。本資料は底部を欠損し、胴部下半から口縁にかけて外傾する器形を呈する。口縁部は、3段の積み上げ痕上に指頭痕の列が認められ、胴部は無文となる。器壁は土器の大きさから見て9mm前後と比較的薄い。15・16は、10と同様な土器の口縁部資料であり、15は出土層位や土器の特徴から同一個体と考えられる。11・13は口縁部資料で、口唇部下には縦方向の刻みである条線帯と変形爪形文が施され、13には平行沈線の溝底に刺突が施されている。14は変形爪形文の上下に斜めの刺突が施され、その他に幅狭の半截竹管による平行沈線の施文時に沈線の中に刺突文が施されている。

本遺構は、中型の土坑である。底面直上からは完形に近い土器が投棄された状態で出土しているため、この土器の時期は本遺構の時期に近いものと考えている。所属時期は縄文時代前期後半と考えられる。性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴と考えたい。(国 井)

28号土坑 S K 28 (図32・39, 写真36・56)

調査区平坦部中央 I 8 グリッドの L IV 上面で検出した。重複する遺構はないが、西側には 6 b 号住居跡と 29 号土坑、北側には 27 号土坑が隣接する。遺構内堆積土は 3 層に細分され、L III に相当する土がレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長径 201cm、短径 174cm を測る。検出面からの深さは 48cm である。周壁は北壁から西壁にかけて直立気味に立ち上がるが、それ以外の立ち上がりはやや緩くなる。底面は小凹凸があるものの概ね平坦である。

遺物は縄文土器片 12 点が出土している。縄文土器はいずれも III 群土器である。このうち、土器 2 点を図示した。図 39-17 は III 群 1 類土器で、変形爪形文の施文後に斜めの平行沈線を施している。同図 18 は III 群 4 類土器で、小型土器の底部である。

本遺構は、中型の土坑である。周辺には、同規模で本遺構の時期に近いと考えられる 27 号土坑が近接している。出土遺物は少ないものの、土器がすべて III 群土器であることから、所属時期は縄文時代前期後半と考えられる。性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴と考えたい。(国 井)

29号土坑 S K 29 (図32・39, 写真37・56)

調査区平坦部中央、I・H 8・9 グリッドの 6 b 号住居跡床面で検出した。6 b 号住居跡と重複し、その関係は、本遺構の上面に 6 b 号住居跡炉跡が認められることから本遺構の方が古い。遺構内堆積土は 6 層に細分され、レンズ状の堆積から自然堆積と考えられる。L V に相当する $\ell 2 \cdot \ell 4$ は、遺構を構築する際に掘り上げられた土が本遺構内に流れ込んだ可能性が高い。平面形は楕円形を呈し、規模は長径 249cm、短径 220cm を測り、検出面からの深さは最大 46cm である。周壁は全体的に直立気味に立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、南側では一段低くなる。

遺物は縄文土器片 26 点、石器 1 点が出土している。縄文土器の多くは $\ell 1$ から出土している。出土した土器はすべて II 群 4 類土器である。このうち、縄文土器 1 点を図示した。図 32-19 は、器面に結束羽状縄文が施され、胎土には植物繊維が混和されている。

本遺構は、6 b 号住居跡より古い大型の土坑である。所属時期は出土土器から縄文時代前期前葉と考えられる。性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴と考えたい。(国 井)

30号土坑 S K 30 (図32・39, 写真37・56)

調査区平坦部中央 J 7・8 グリッドの L IV 上面で検出した。5 号住居跡と重複し、その関係は、本遺構の上面に 5 号住居跡炉跡が認められることから本遺構の方が古い。遺構内堆積土は 2 層に細

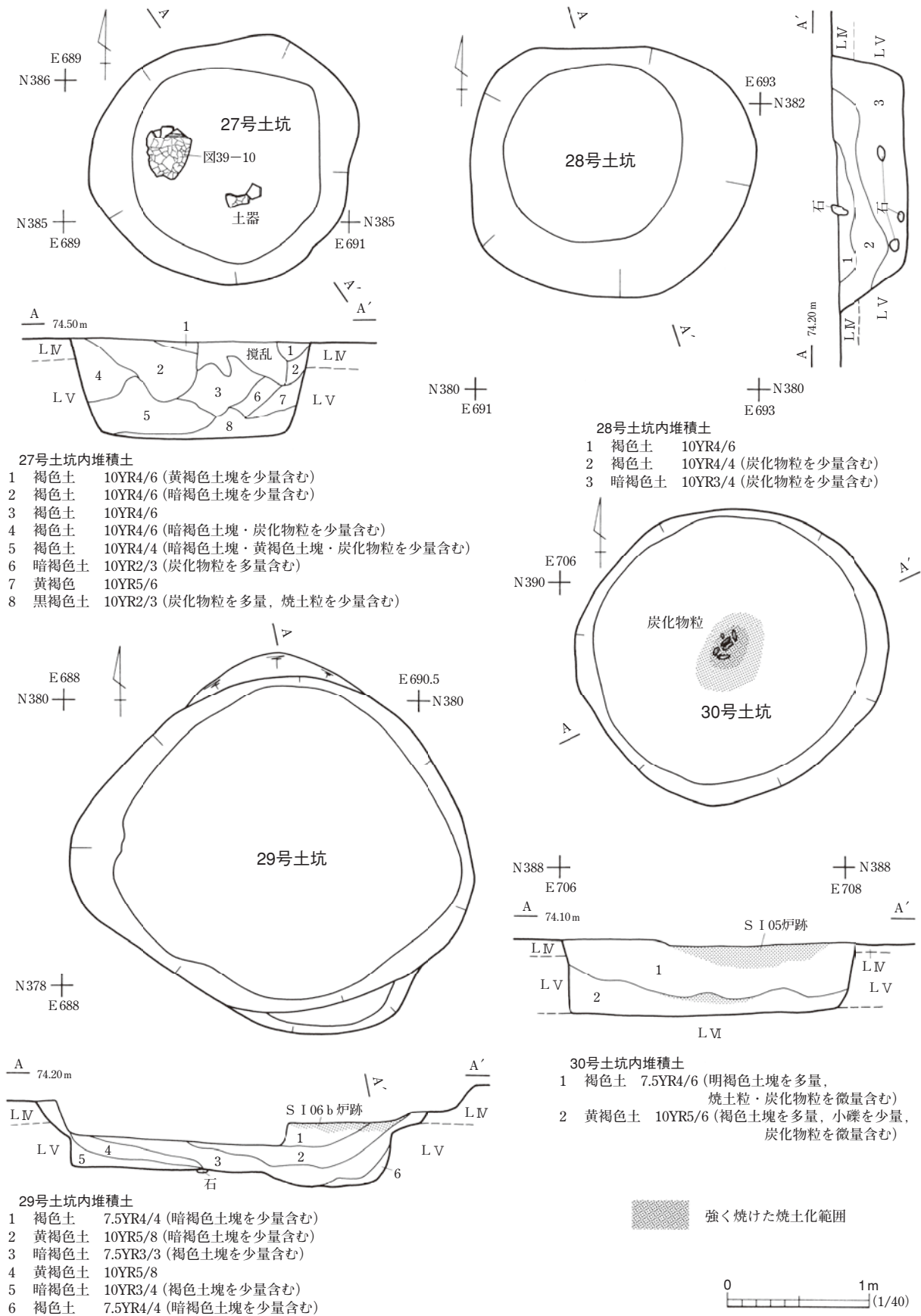


図32 27~30号土坑

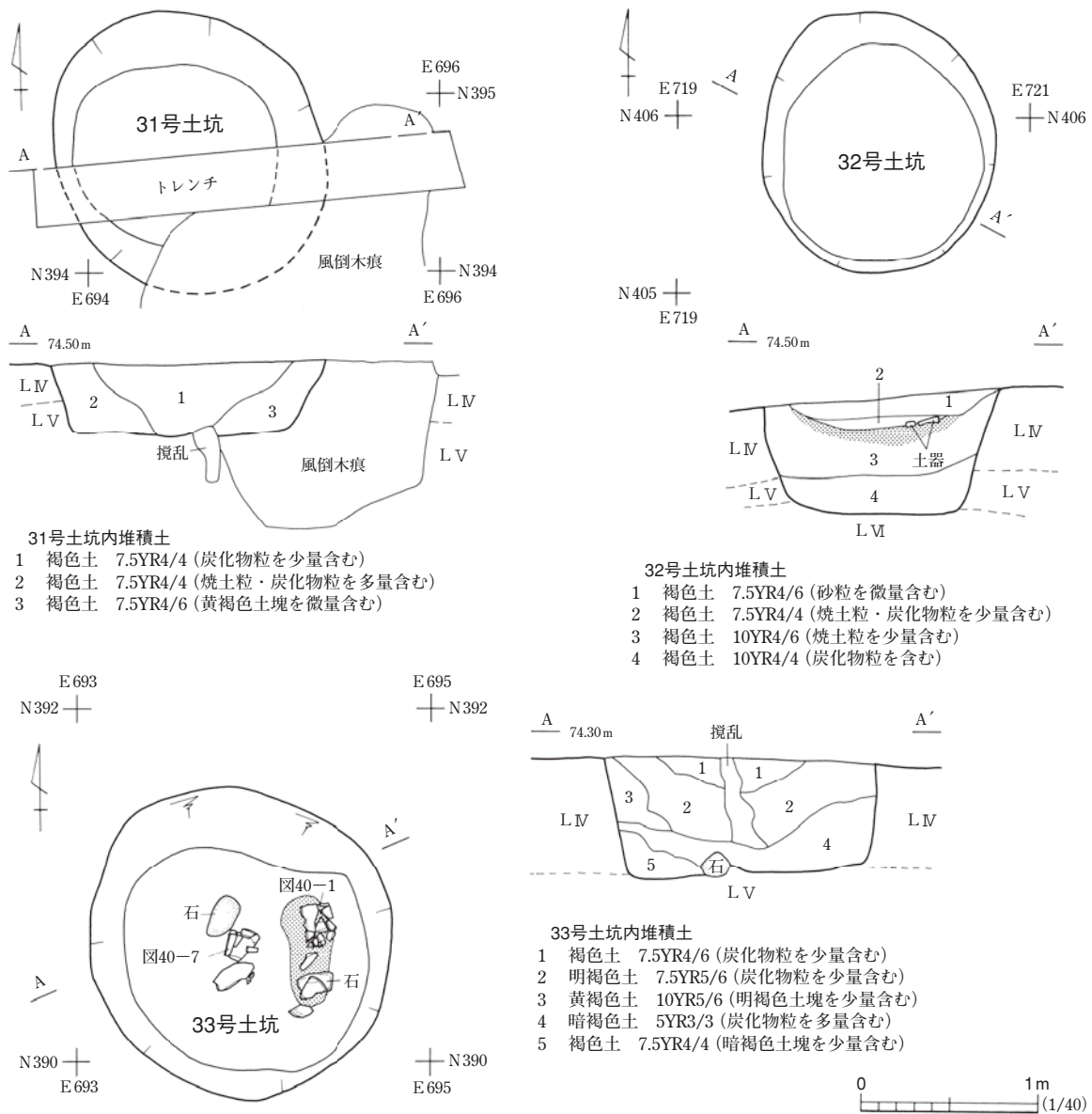


図33 31～33号土坑

分される。堆積土はレンズ状の堆積を示すが、異なる土色の土塊が不均一に多量含まれることから人為堆積と考えられる。l 2 上面では焼土化範囲が確認されているが、壁は焼けていない。焼土面の中央上には炭化物が多く認められる。焼土の厚さは最大5cmを測る。平面形は楕円形を呈し、規模は長径211cm、短径201cmを測り、検出面からの深さは最大51cmである。周壁は全体的に直立気味に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器片1点が出土している。図39-16はⅢ群3類土器で、垂下する波状沈線が施されている。

本遺構は5号住居跡より古い中型の土坑である。本遺構廃絶後、l 2 を埋め戻した後には火を使用した痕跡が認められる。正確な所属時期は不明であるが、出土土器や遺構の特徴から縄文時代前期後葉と考えられる。性格は不明であるが、その形状から貯蔵穴と考えたい。(国井)

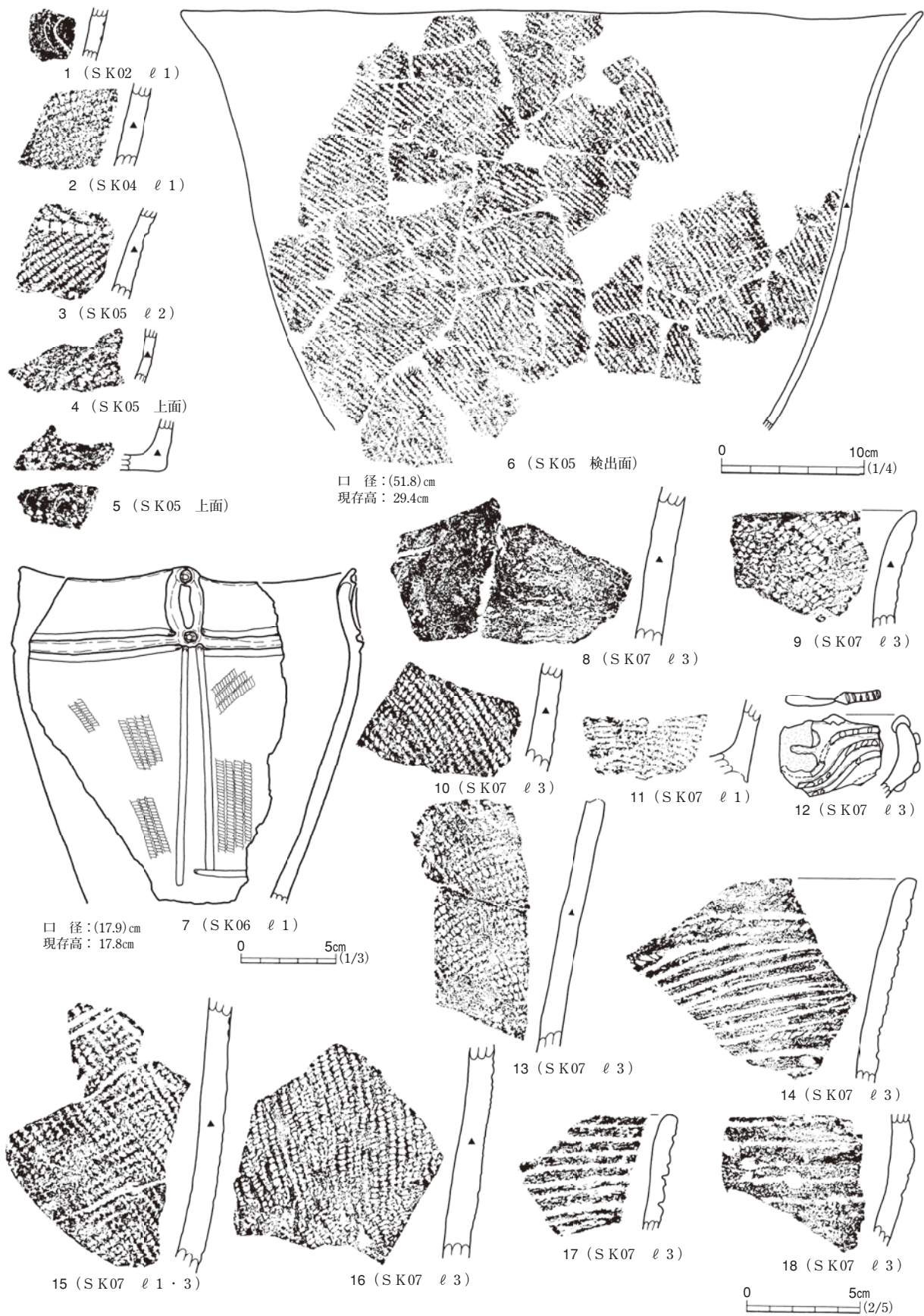


図34 土坑出土遺物 (1)

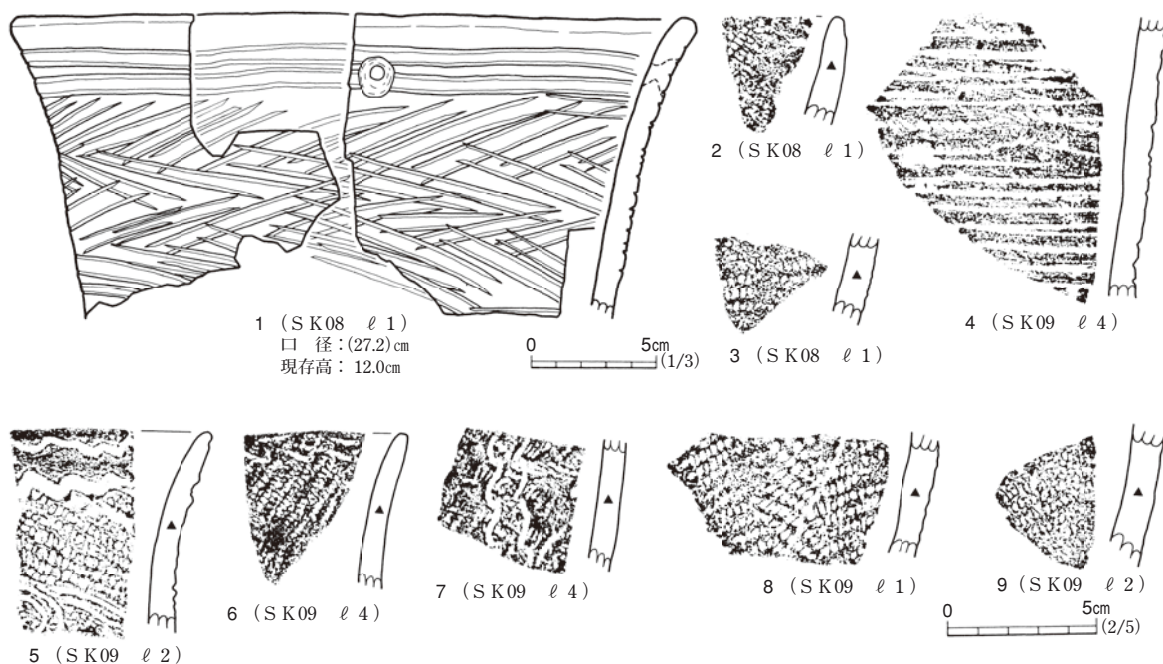


図35 土坑出土遺物（2）

31号土坑 SK31 (図33, 写真38)

調査区平坦部中央J 6グリッドのL IV上面で検出した。本遺構は南東側が風倒木痕と重複しているため、掘りすぎている。風倒木痕との重複関係は、本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形と推定され、規模は長径166cm、短径152cmを測り、検出面からの深さは最大38cmである。周壁は全体的に外傾している。底面は概ね平坦である。遺物は、焼成粘土塊が数点出土している。

本遺構は中型の土坑である。遺物がほとんど出土していないことから、正確な所属時期は不明であるが、堆積土がL III・IVに近似する土主体であり、締まりがあることから縄文時代と考えている。性格は不明である。 (国井)

32号土坑 SK32 (図33, 写真38)

本土坑は調査区北東寄りのJ 6・K 6グリッドにまたがって位置する。周辺には7号住居跡の柱穴とみられる小穴が散在し、西側に2号住居跡などが存在する。遺構検出面はL IV上面で、褐色土の広がりとして検出した。平面形は楕円形を呈し、長径300cm、短径280cm、検出面から最も深いところでは135cmを測る。遺構内堆積土は4層に分けられ、上にゆくにしながら徐々に水平に堆積する自然埋没とみられるが、l 3の表面が赤く酸化した様相を呈している。

出土土器はいずれも小片で、文様も不明であり図示できなかった。

本土坑では直接遺構に伴う遺物が出土しておらず、明確な時期も性格も判断しにくい。またl 3上面の酸化は、埋まりかけた浅い窪みの上で火を使用したためであろう。 (宮田)

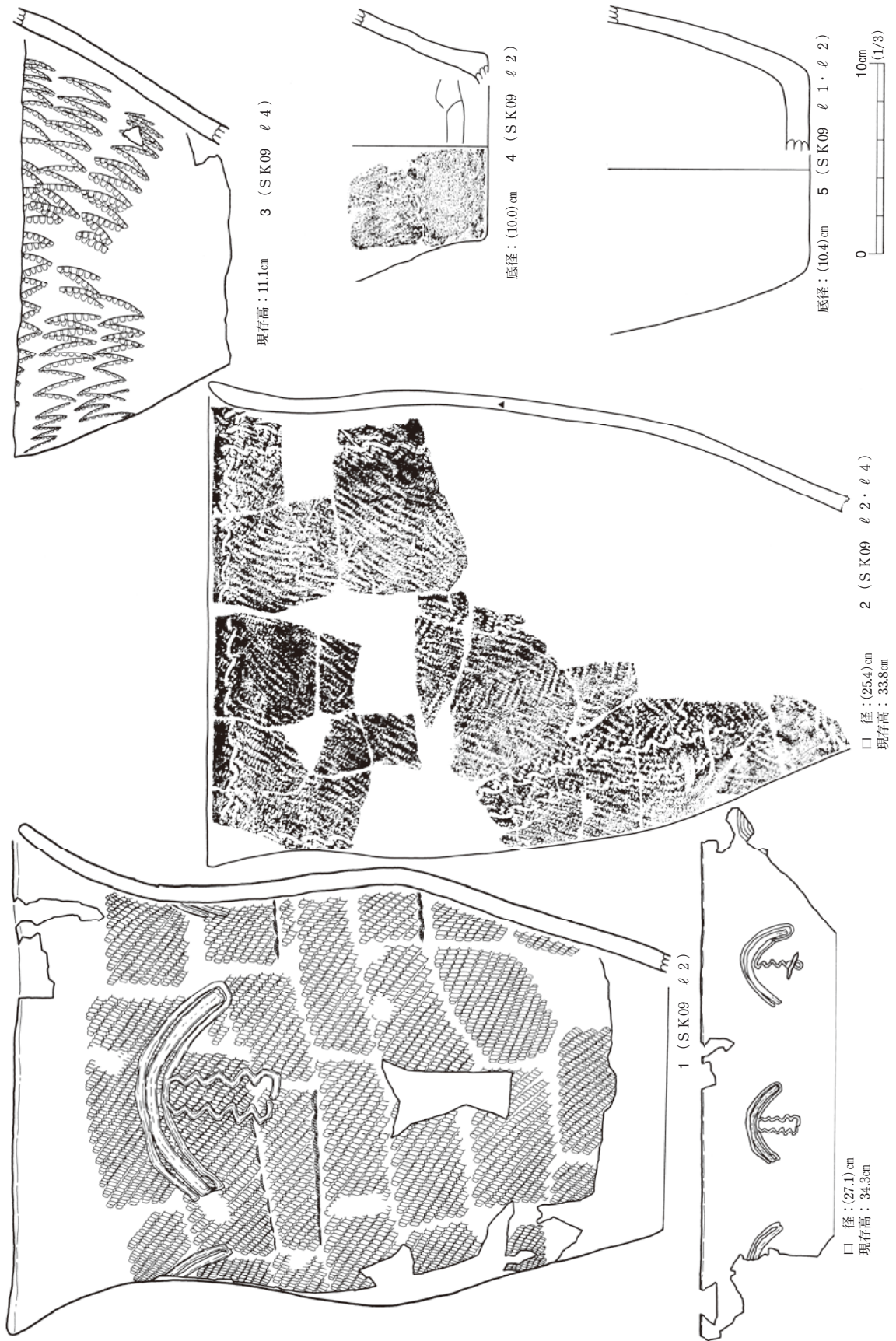


図36 土坑出土遺物 (3)



図37 土坑出土遺物 (4)

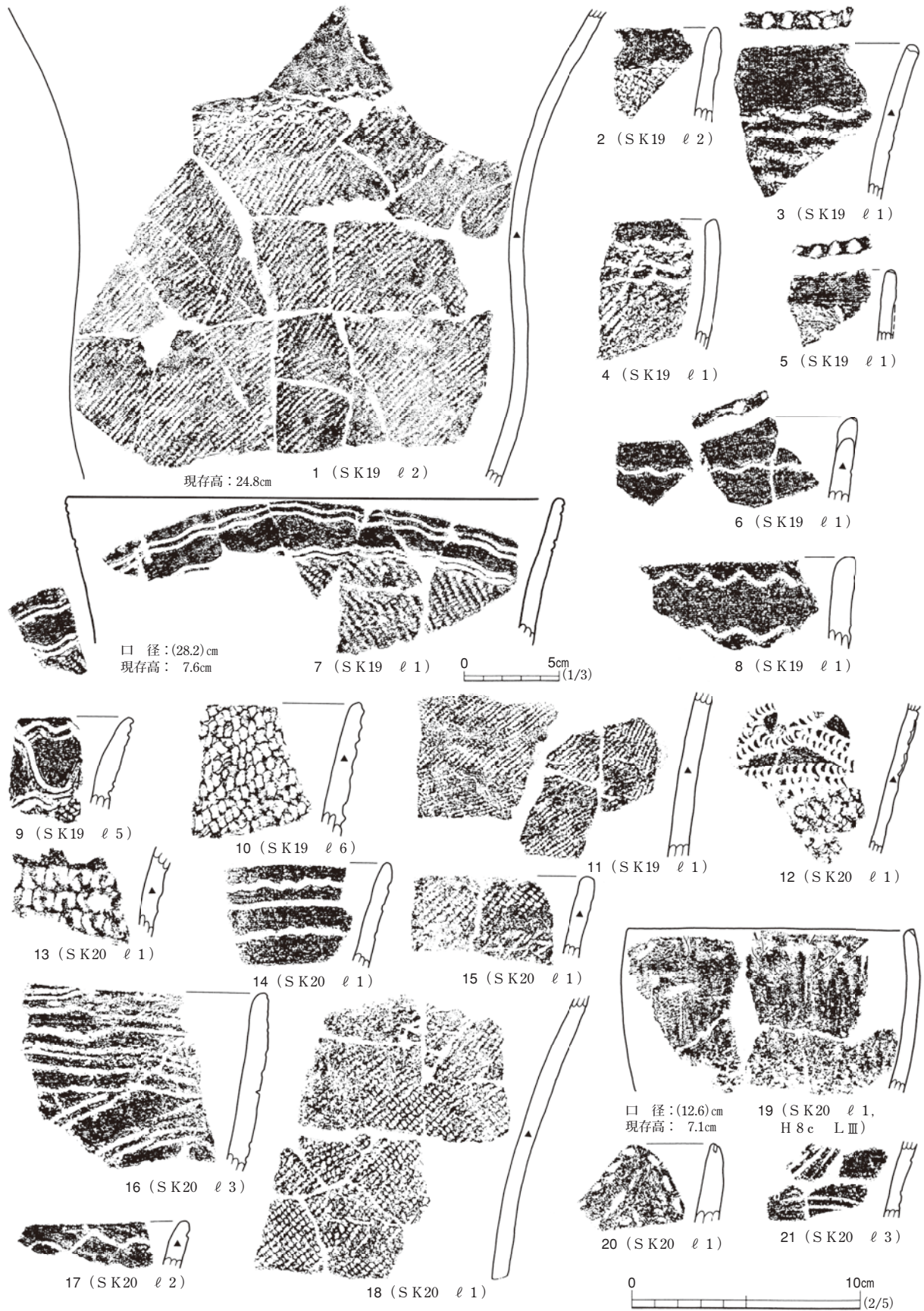


図38 土坑出土遺物 (5)

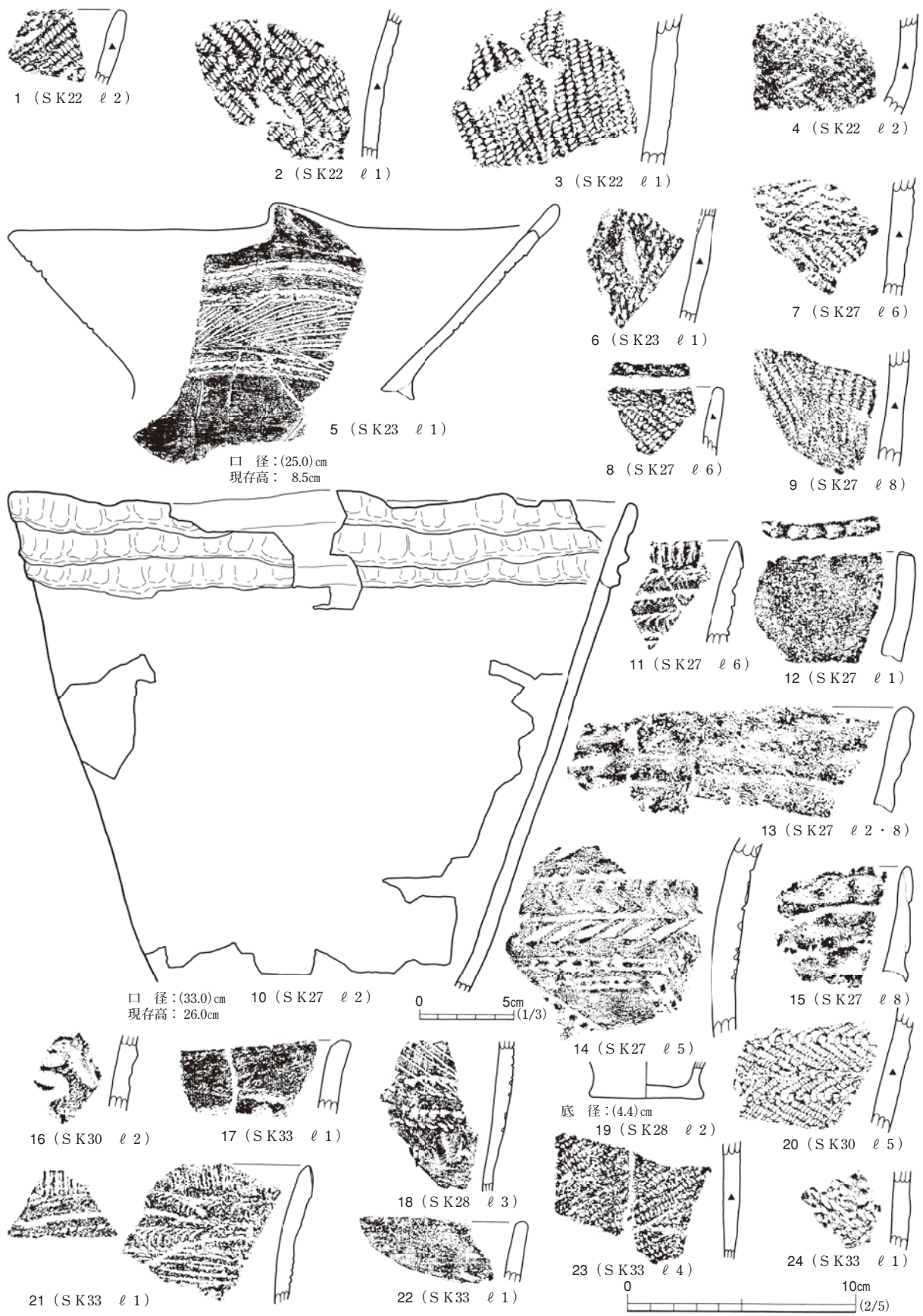


図39 土坑出土遺物 (6)

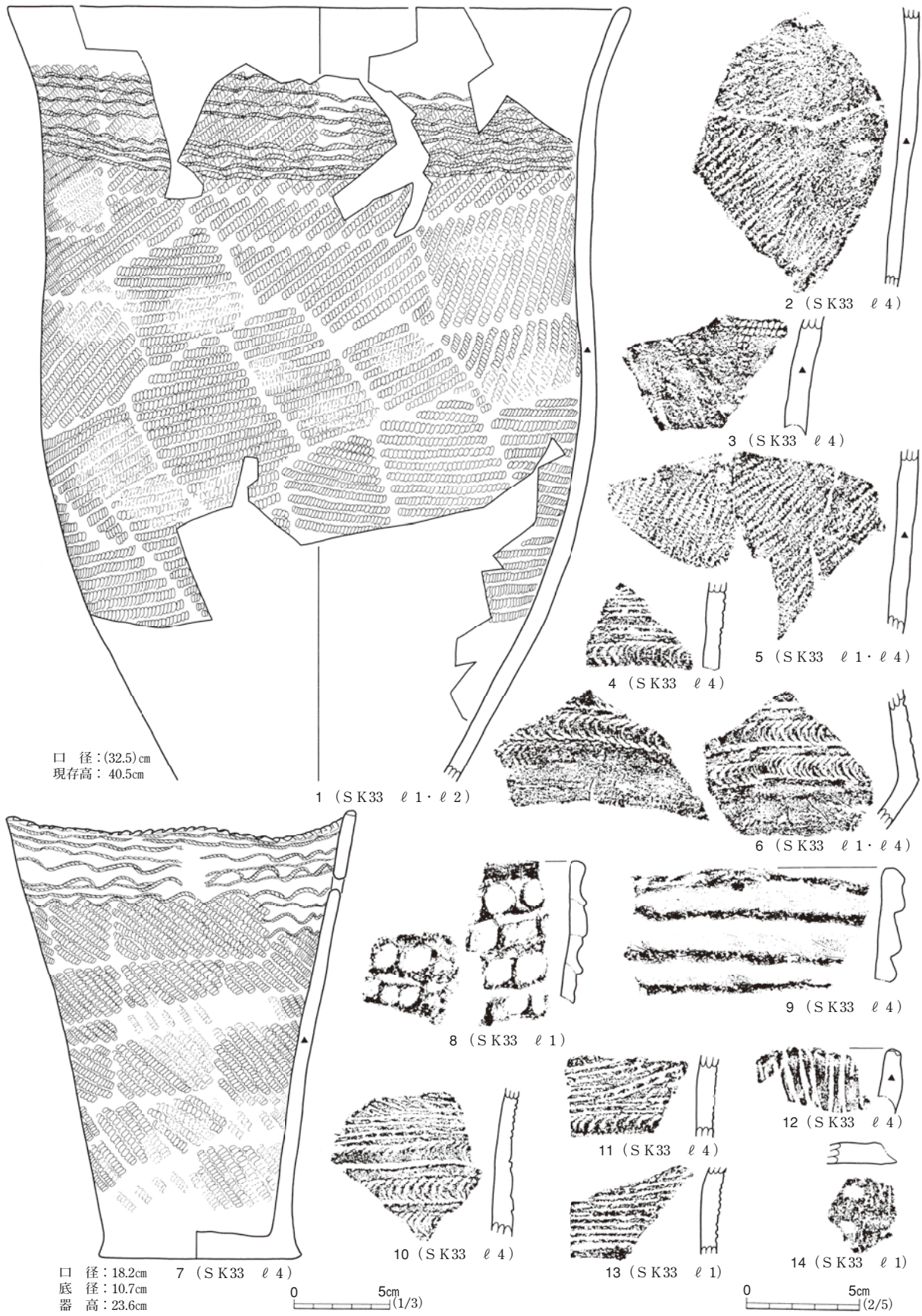


図40 土坑出土遺物 (7)

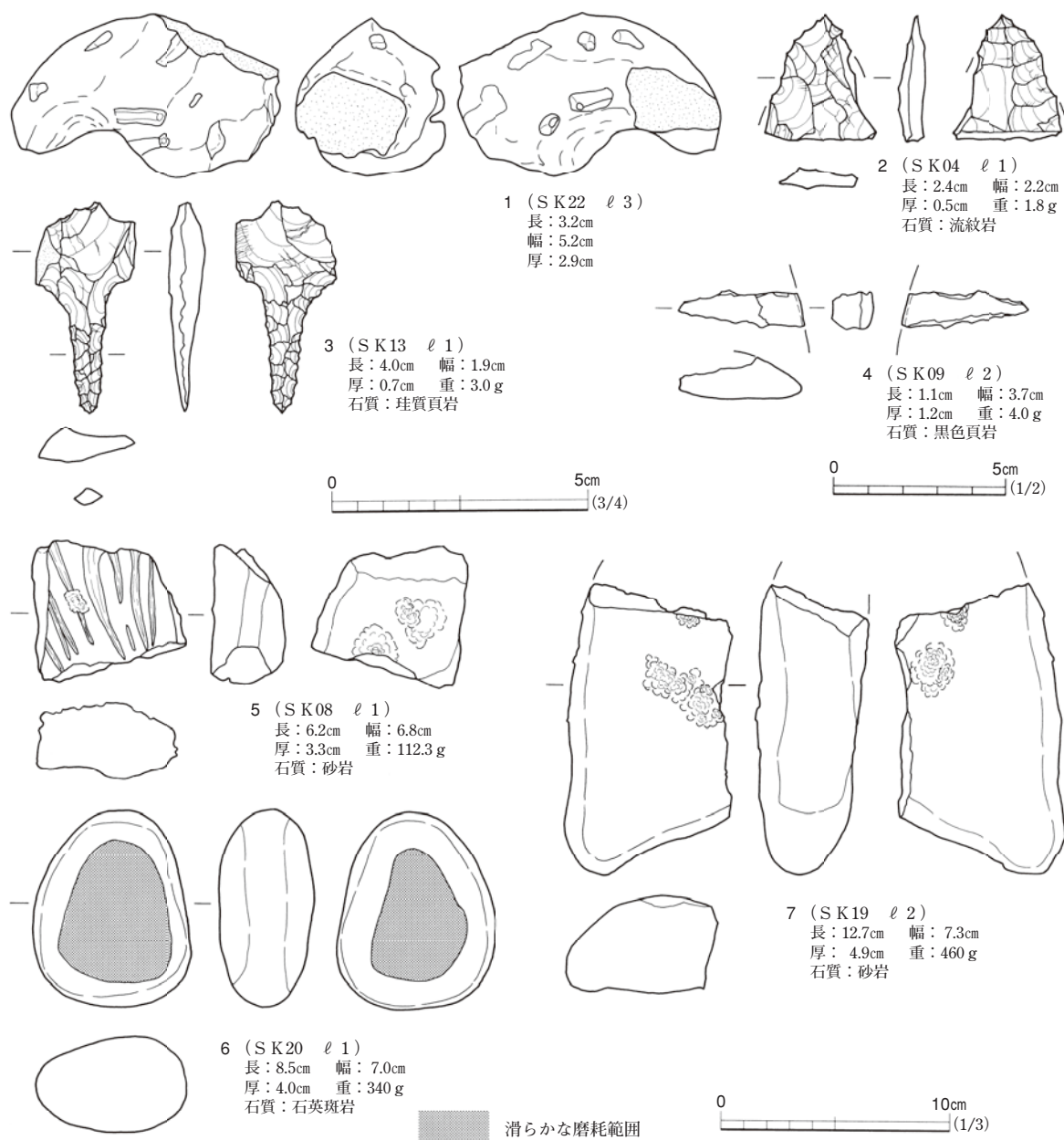


図41 土坑出土遺物 (8)

33号土坑 SK33 (図33, 写真39)

本土坑は、調査区頂部平坦面ほぼ中央のI 8グリッドに位置し、検出面はL IV上面で褐色土の広がりとして検出した。周辺には遺構が多く、27・28号土坑や10号住居跡などが西側に近接して分布する。平面形はやや不整な円形を呈し、規模は径約360cmを測る。

遺構内堆積土は5層からなるが、ℓ 5が壁際に三角堆積をなし、それより上の各層がレンズ状に重なって堆積してゆくことから、本土坑は自然に埋没したと判断される。周壁はL IVを掘り抜いて、底面はL V上面に達し、ほぼ平坦である。周壁は約80°の角度で立ち上がる。検出面からの深

さは約75cmで、底面は平坦で、長径290cm、短径230cmを測る不整形な楕円形を呈する。

遺物は縄文土器229点が出土している。そのうち20点を図示した。図39-17・22は内外面ともに無文の口縁部片で、緩やかな波状をなし、いわゆる王冠状の突起部分である。21は縦位の刻み目、横位の爪形文、沈線文を有する口縁部片である。23は細かい縄文が斜走する深鉢の胴部片である。

図40-1・3・5・7は胎土中に植物繊維を混和する土器で、1は深鉢で不定方向の縄文を地文とし、口縁部には綾絡文を施す。7はいわゆるバケツ型深鉢の完形土器である。浅い波状口縁の口唇部には刻み目が施され、口縁部直下には、径約8mmの補修孔と考えられる孔が両側から2か所うがたれている。地文は左上から右下へ斜走する縄文であるが、口縁部には地文がなく綾絡文のみとなる。2・5は深鉢の胴部片とみられ、右上から斜めに細かい縄文が施される。4・6・10・11には、いずれも半截竹管状工具による爪形文が認められる。13では連続刺突文は見られないが、10・11と同様に多条の沈線を施す。8は凹凸文土器で、指頭状の押捺をもつ。9も凹凸文を有する資料であるが、指頭状の押捺は見られない。9は口縁部に太い沈線を巡らす破片資料で、胎土中に砂や砂礫を多く含む。12は口縁部の破片資料で、口唇部に刻み目を有し、そこから縦方向に多条の沈線を引いている。14はⅢ群5類土器である。

本遺構は調査区内のほぼ中央、遺跡のある丘陵の最上部の平坦面に位置する。周辺には竪穴住居跡や土坑が集中して存在する。遺物は大木4式土器と浮島式土器の両者が出土しており、このことから本土坑の所属時期は縄文時代前期後葉頃に位置付けられよう。遺構の性格は、形態や同時期の住居跡に近接する状況から、貯蔵穴が考えられる。(宮田)

第4節 焼土遺構

今回の調査で焼土遺構は4基検出された。これらは調査区平坦面の東側に認められ、炉跡とその周りに柱穴を確認した5・7・10号住居跡の例に近似している。2号焼土遺構以外の検出面は、縄文時代の5・7・10号住居跡炉跡の検出面と同じLⅣ上面であるが、2号焼土遺構の検出面はLⅡである。このため、2号焼土遺構は他の焼土遺構に比べて新しいものと考えられる。

1号焼土遺構 S G 01 (図42, 写真40)

調査区平坦部中央G7グリッドのLⅣ上面で検出した。本遺構の上面には、炭化物粒と焼土粒を含む暗褐色土が薄く堆積していたため、一段低い状態で存在していたことが確認されたが、その周辺から小穴は確認されていない。焼土化範囲の平面形は長楕円形で、規模は長径80cm、短径35cmを測る。焼土面の西側では、強く焼けた範囲が暗赤褐色を呈し、それ以外は暗赤褐色である。断ち割りの結果、焼土の厚さは7cmまで及ぶことが判明した。

本遺構は、焼土遺構の中で最も範囲の大きいものである。1・4号住居跡炉跡に近似するが、焼土遺構がくぼんだ状態で使用されていたかは不明である。所属時期は不明であるが、遺構検出面か

ら縄文時代と考えている。

(国 井)

2号焼土遺構 S G02 (図42, 写真40)

本遺構は調査区東端のN6グリッドのLII上面で検出された。周辺に住居跡を示すものやその他の遺構は検出されず、単独で存在する。平面の状況を確認した後に、一部トレンチを入れ、焼土面と炉壁と思われる焼成粘土塊が出土したことから鍛冶炉と推定し、周辺の土や堆積土を水洗選別したが、鉄滓や微細な鍛造剥片等は検出されず、また、焼き締めや還元焼成範囲も、周囲に付随するようなピットが検出されないことから、焼土遺構と判断した。遺存する平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径113cm、短径38cm、検出面からの深さは14cmを測る。

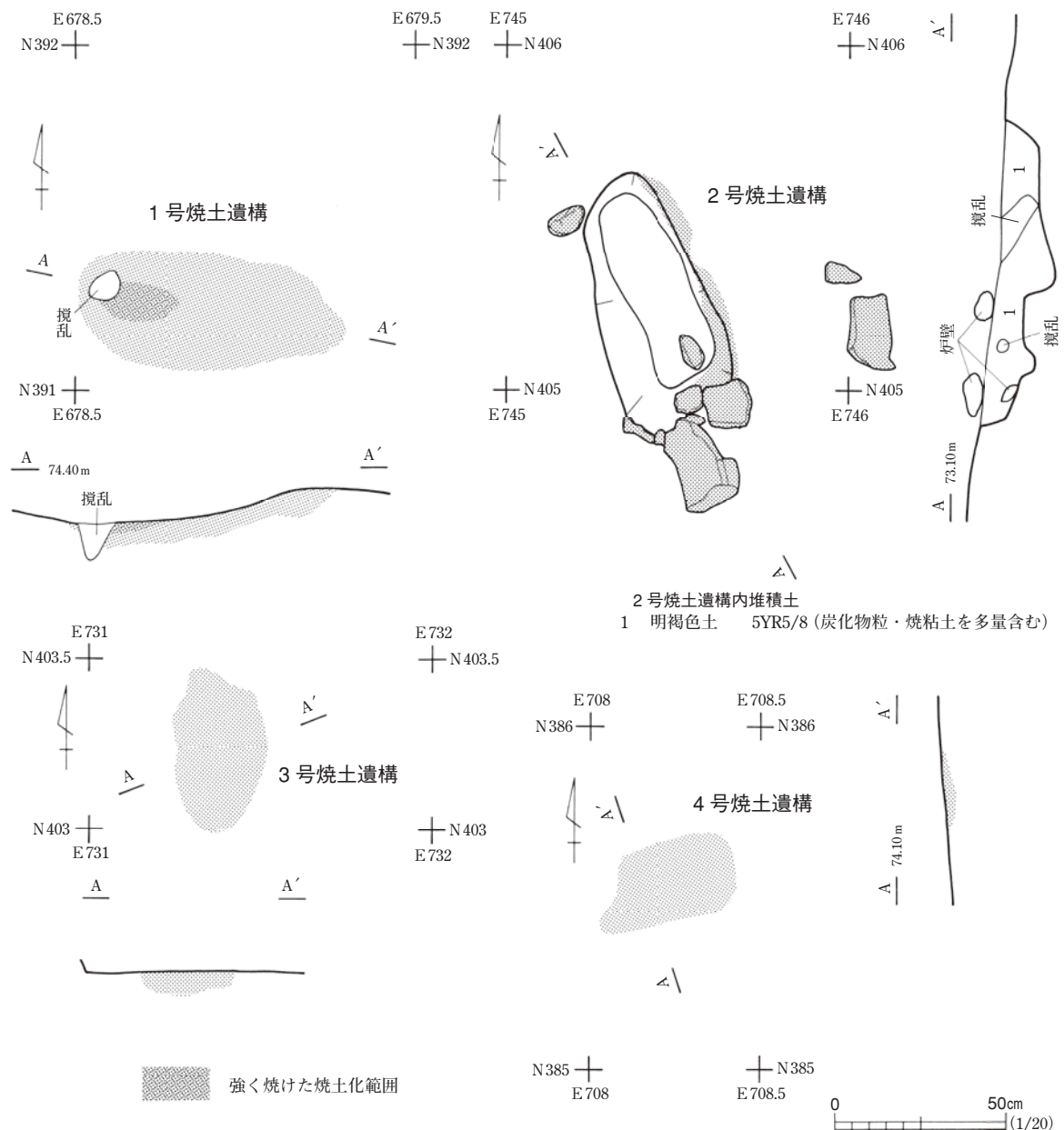


図42 1～4号焼土遺構

堆積土は単一層で、炉壁と思われる焼成粘土塊が多く出土したのみである。焼土面は赤褐色を呈し、その厚さは3cmを測る。

本遺構の東側は調査区外で、関連遺構の調査ができず、この焼土遺構の性格も時期も不明とせざるを得ない。(関)

3号焼土遺構 S G 03 (図42, 写真41)

本遺構は調査区東側M6グリッドのLIV上面で酸化面の広がりとして検出された。周辺には、遺構はなく単独で存在する。酸化面は、平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径48cm, 短径26cmを測る。酸化面は中央部分が最も強く赤色化し、外側に向かってだんだん弱くなる。また、焼土上面には、焼土塊や炭化物粒などが若干認められた。半截したところ、焼土の厚さは検出面から7cmを測る。

周辺に遺構は検出されず、この焼土遺構の性格や詳細な時期は不明である。(関)

4号焼土遺構 S G 04 (図42, 写真41)

調査区平坦部中央J8グリッドのLIV上面で検出した。本遺構は5号住居跡の南側に隣接する。焼土化範囲の平面形は不整楕円形を呈し、長径42cm, 短径25cmを測る。焼土面は、赤褐色を呈するが、外側に向かってやや薄くなる。断ち割りの結果、焼土の厚さは4cmまで及ぶ。

本遺構は、小範囲の焼土遺構である。所属時期は不明であるが、遺構検出面から縄文時代と考えている。(国 井)

第5節 その他の遺構

1号竪穴遺構 (図43, 写真42)

本遺構はI10グリッドのLIV上面で検出した。重複する遺構はない。最も近い遺構でも、9号住居跡が北西3mの場所にあるだけで、遺跡内では孤立した場所にある。

堆積土は3層に分層された。ℓ1は黒褐色土で締りが緩く、炭化物・焼土粒を含みとても見分けやすい土である。ℓ2は暗褐色土、ℓ3は褐色土で、特にℓ3は礫を多量に含む土であった。壁面の地山に比べると締り具合が緩いので堆積土と判断したが、本遺構の位置する平坦面の側縁部付近になると、ローム層の堆積も薄くなり、黄褐色の砂質土を伴う段丘礫層が表土直下に見られるようになってくるので、そのことを考慮すれば堆積土と判断するのが妥当と考えた。堆積状態はレンズ状堆積であることから、自然堆積で埋没したものと思われる。

平面形は南北長軸の長方形で、長軸280cm, 短軸240cmを測る。検出面から最も深いところで30cmを測り、周壁は、南側が緩やかに立ち上がるが、それ以外は直立気味に立ち上がる。床は南側斜面に向かって傾斜しており、北壁際から南壁際にかけて約30cm下っている。

出土遺物は全くなく直接的な時期決定はできないが、本遺構近辺からはロクロ土師器片が数点出

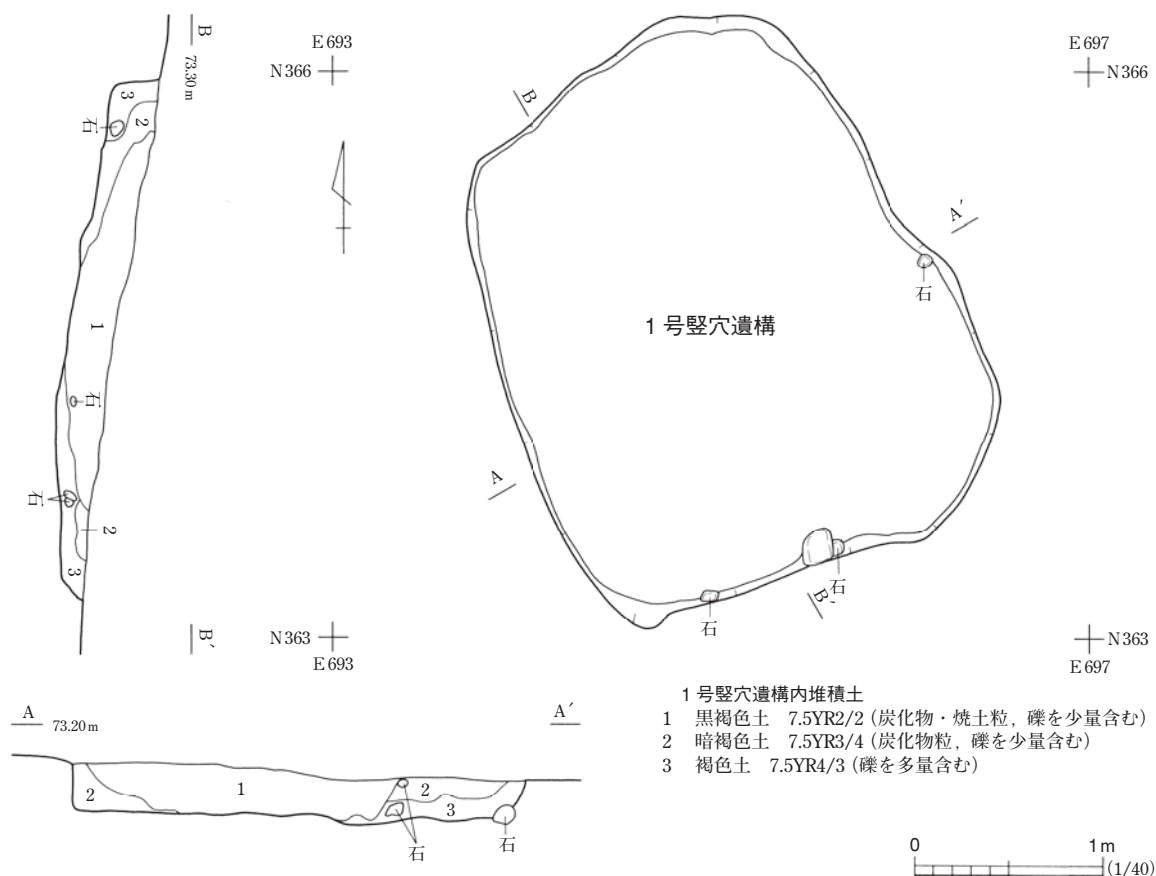


図43 1号竪穴遺構

土していることや、堆積土の内容から考えると、比較的新しい平安時代以降の所産の可能性が考えられる。

(新海)

1号ピット P1

遺構 (図44, 写真42・43)

調査区平坦部中央H7グリッドのLⅣ上面で検出した。本遺構は、検出面から石器がまとまった状態で出土したため、その周辺を確認したところピットのプランを確認した。遺構内堆積土はLⅢに相当する褐色土の単層で、堆積土が薄く、断面に石器があるために人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。平面形は楕円形を呈し、規模は長径25cm、短径19cmを測り、検出面からの深さは最大3cmである。周壁は全体的に緩やかに立ち上がり、底面は丸味をもっている。

遺物 (図44・45, 写真58)

遺物は石器8点が出土し、全て図示した。石質は珪質頁岩とチャートの2種類で、いずれも同一母岩からなるが、接合資料はなかった。石器の出土状態は図44の断面図に示した通り、No.2～4・6, 7, No.5・8がそれぞれ重なって出土し、No.2～4, 6・7は、ほぼ水平に近い状態で重なっていたことが確認された。

図44-1・6, 図45-1・2の石質は、やや赤味を帯びた乳白色を呈するチャートである。

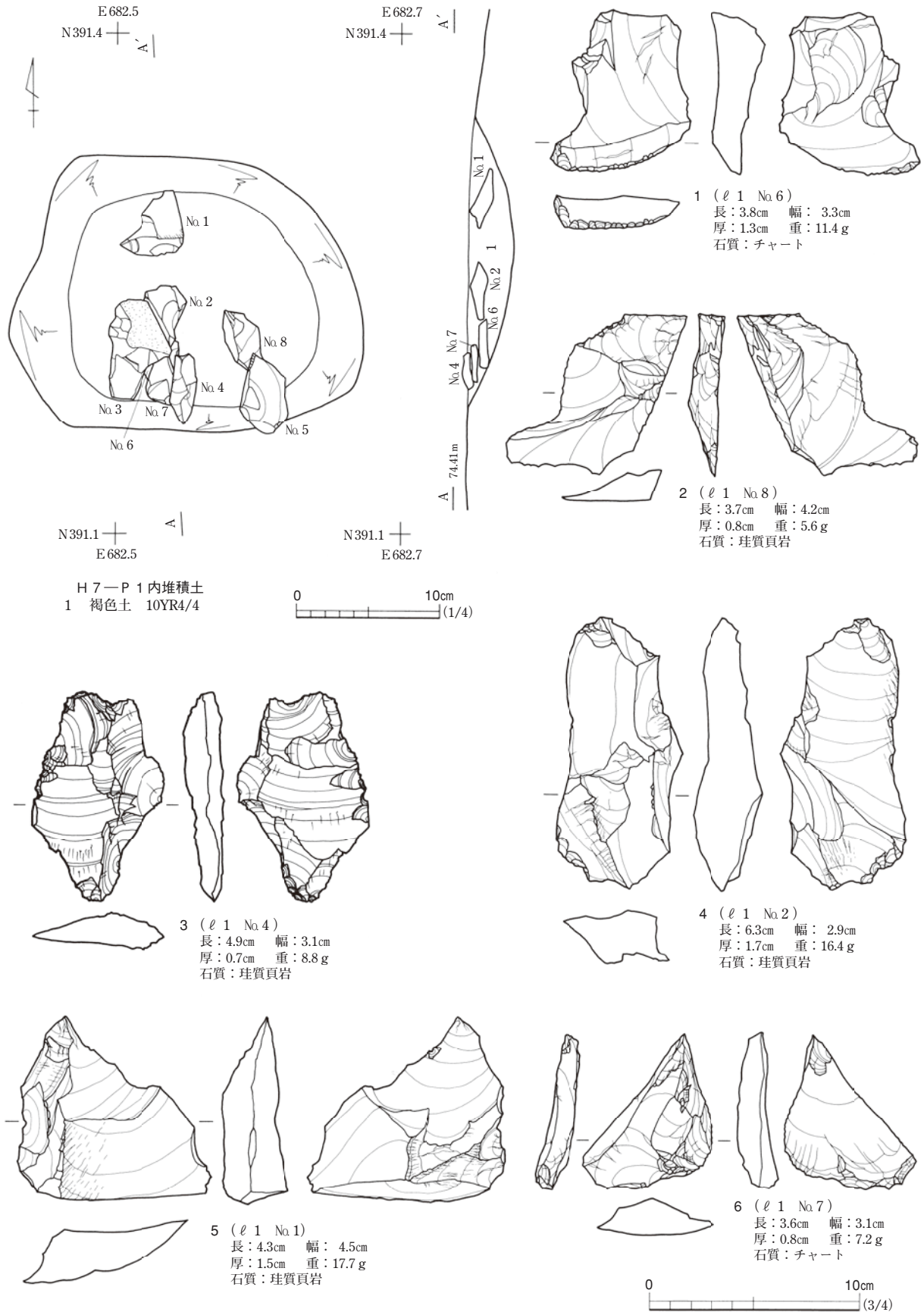


図44 1号ピットおよび出土遺物

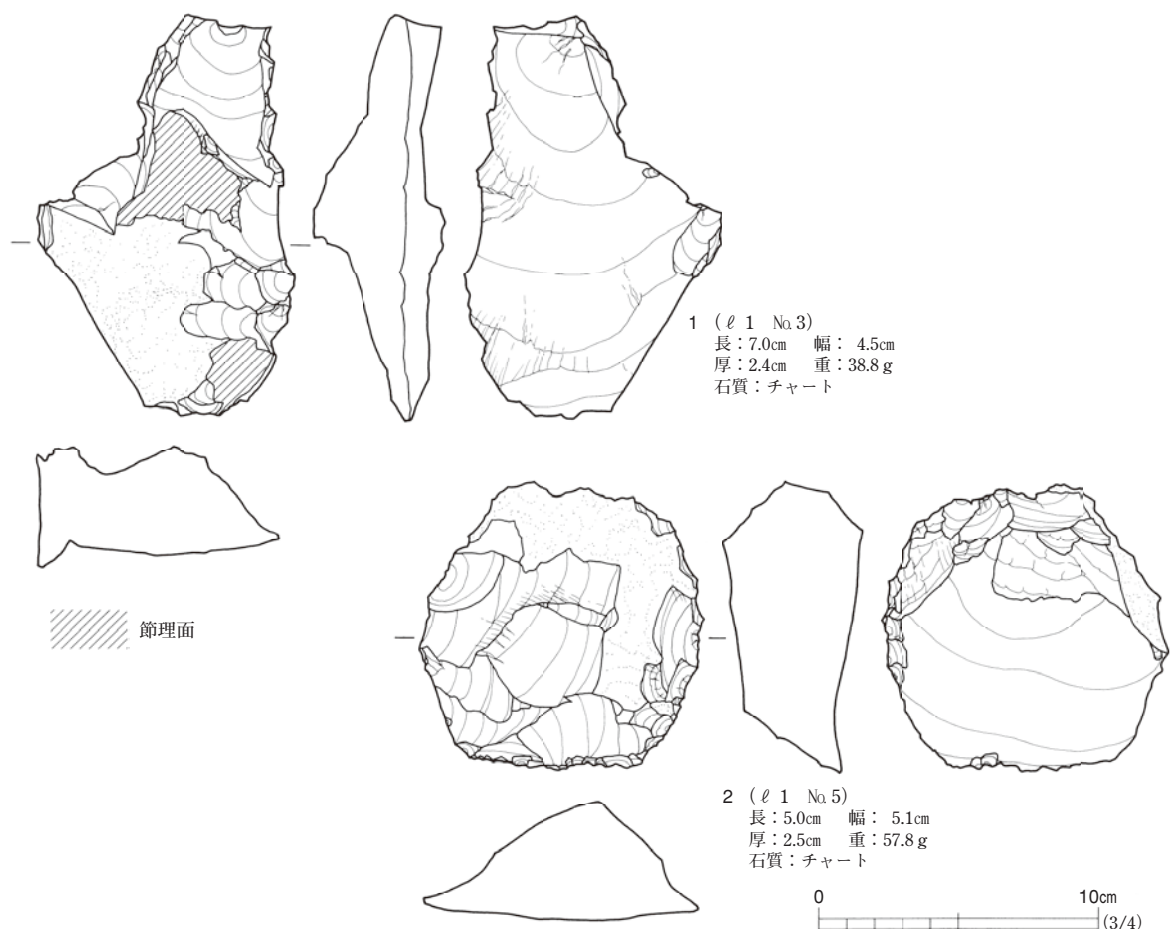


図45 1号ピット出土遺物

図44-1は削器である。表面の下方端部に細かい剥離を加え、急角度を持つ刃部を作り出している。図45-2は、円形を呈する削器の未製品と考えられる。表面には自然面が残り、両面には、器体を整形するための粗い調整剥離が認められる。

図44-6、図45-1は剥片である。図45-1は、同図2と同様に表面の一部に自然面が認められ、図44-6は裏面に打瘤が認められないことから、左側面から欠損したものと考えられる。これらの剥片にはほとんど手が加えられていない。

図44-2～5は、同一の珪質頁岩製の剥片である。2・4・5の剥片には、図44-6、図45-1と同様に、ほとんど手が加えられていない。図44-3には、両面に調整剥離がわずかに認められる。

まとめ

本遺構は、出土した石器の状態から判断して石器埋納遺構と考えられる。遺物には、簡単な加工の製品が認められるものの、そのほとんどは、未加工の剥片である。遺構検出面は、1号焼土遺構と同じであり、石器の剥離技術から遺構の時期は、縄文時代の範ちゅうで考えておきたい。(国 井)

第6節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、土器・石器・土製品・銭貨がある。以下、これらの出土遺物についてその特徴を記述していく。

本遺跡において遺構外から出土した遺物は、基本層序のLⅠ～LⅢから出土したもので、第2章第1節2で述べた通りである。中でもLⅡからの出土量が多いが、基本層序の層厚自体が30cm前後と薄いこともあり、層位的に時期差をもって出土しているわけではなく、時期別のものが混在している。また、LⅣ以下は無遺物層であるため遺物は出土していない。

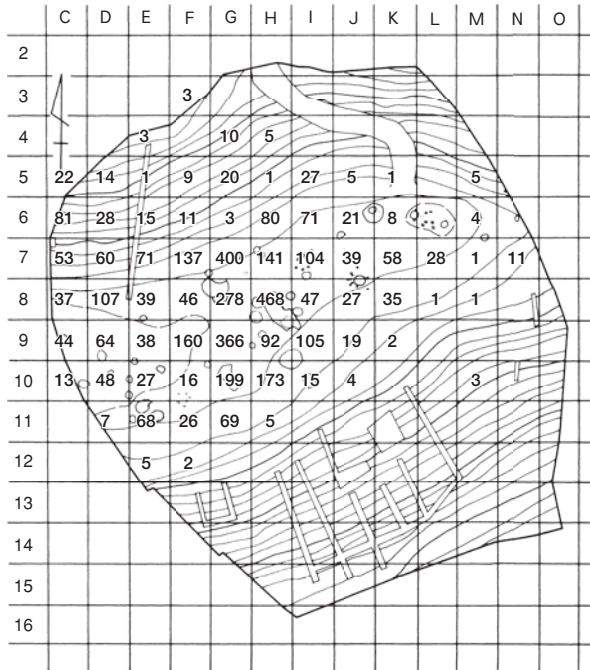
遺構外出土遺物中、土器の分布状況は総数と時期別で図46に示した。総数の上で頂上平坦面からの出土量が多いのが顕著にみとれる。また、出土傾向を図示していないが、早期の土器は遺跡全体から散発的に1・2点ずつ出土している。

時期別ごとの分布をみると、縄文時代前期前葉の土器は北側斜面と頂上平坦面との境、グリッドにするとD7・8、F7、G7、H6、I6グリッド付近で集中する傾向がみられる。頂上平坦面中央部においてはH7～K7、G8、H8、G9グリッドからの出土量が多く、4号住居跡の北側から3号住居跡を経由し7号住居跡へ至るラインに相当する。ただ、4号～3号住居跡ラインより西側の頂上平坦面や、南側斜面際になると遺物出土量は明らかに少なくなる。これに対し、縄文時代前期後葉の土器は、G7～10、H8・9グリッドの頂上平坦面中央部や、北側斜面際に集中傾向がみられる共通点はあるものの、調査区西端部に位置するC6～9グリッドや、南斜面際のE11、G11、H10グリッドからも土器が出土している。ただ、9号住居跡と10号住居跡を結ぶラインより東側になると激減する。この前期前葉と後葉の相違点を簡単にまとめると、前期前葉の出土傾向が4号～3号住居跡ラインより東側と北側斜面にあるのに対し、前期後葉の出土傾向が9号～10号住居跡ラインより西側と北側斜面・南側斜面際にあるといえる。さらに、前期前葉の土器が比較的北側斜面の斜面上部に一定量認められる状況は、斜面へ廃棄された可能性があると考えている。後・晩期の遺物はF9・G9・H8に集中する傾向がみられるが、破片で見る限りでも同一個体と考えられる資料が多い。個体数ではせいぜい数個体分の資料であると考えられ、生活跡についても、この時期に比定される遺構はないことから、後・晩期資料の分布が示すのは、ある限定された時期にこの付近に土器が廃棄されたということ以外に考えようがない。中期末～後期初頭の土器や弥生土器も出土しているが、出土量が少なく、分布傾向をつかむまでには至っていない。

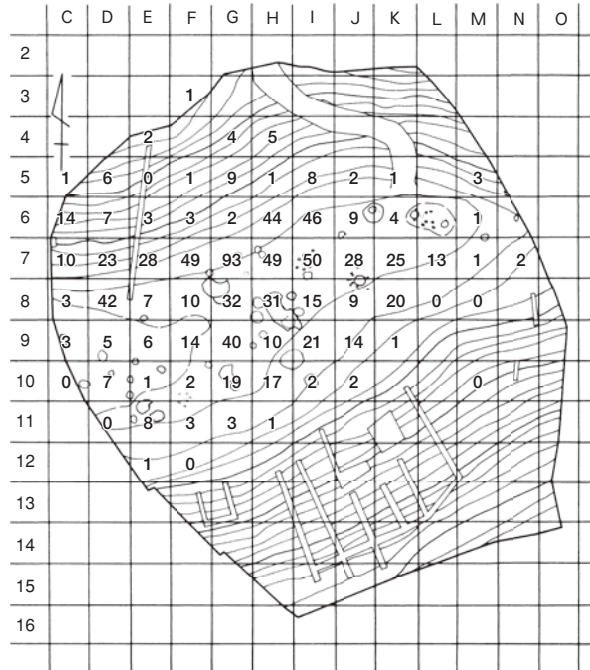
土器以外には石器・炭化物・焼成粘土塊が出土している。石器については、個別に図示・記述を行うが、炭化物は遺構で採取しているものが少ないため特別図示・記述は行わない。焼成粘土塊は不整形の粘土の塊で、指先ほどのものから拳大のものまでである。分布では、2号住居跡付近から多量に出土するという傾向はあるが、それ以外は遺跡全体から多少の差はあるもの均一に出土している。これについても個別の図示・記述は行わない。

(新 海)

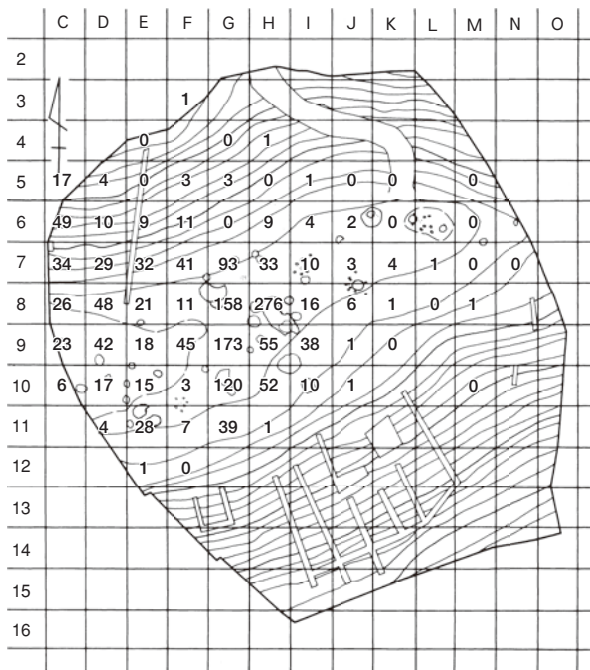
縄文土器総数



縄文時代前期前葉



縄文時代前期後葉



縄文時代後・晩期

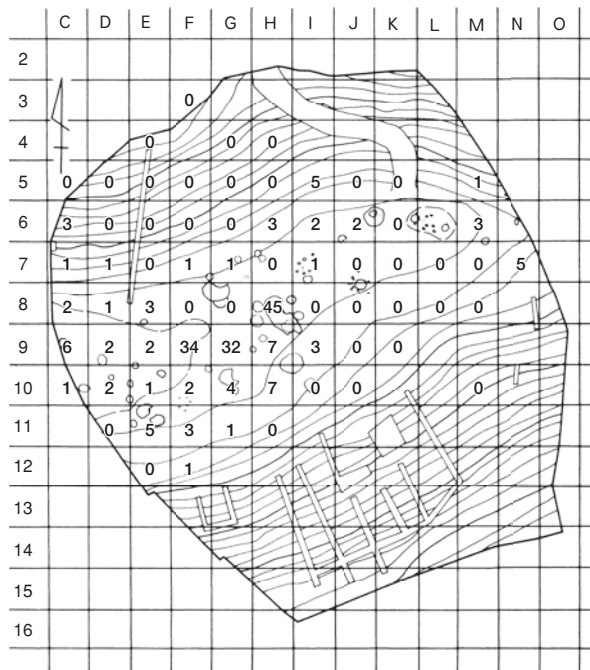


図46 グリッド別土器出土点数

土 器 (図47～図63, 写真59～73)

土器は出土遺物の主体を占め、破片数にして5,143点出土している。時期的には、縄文時代・弥生時代・平安時代の土器がみられ、特に縄文土器の割合は、土器全体の約9割を占める。その記載にあたっては、本章の冒頭に示した土器分類に従い、器形・文様等の観点から記述していく。

I 群土器 (図49, 写真60) 本群は1・2類に細分され、1類は縄文時代早期中葉、2類は縄文時代早期後葉のものと考えられる。土器の出土量はかなり少ない。

1類 (図49-1～7) 沈線文系土器を一括した。図49-1は口縁部片で、胴部には彫刻刀の丸刃で削り取られたような太い沈線が施されている。2・3は、器面に光沢がみられるほどの丁寧な調整が行われ、細い平行沈線により横位方向に施されている。これらは、器壁の厚さや胎土の状態から同一個体と考えられる。4・5は、沈線下にD字状の刺突が横位方向に2段施されている。6・7は横位・斜位方向の沈線と刻み状の刺突が施されている。

2類 (図49-8～20) 条痕文土器を一括した。本類の土器は、胎土に植物繊維が混和されている。図49-8～12は口縁部片である。このうち、8～10には縦・斜方向の沈線が施されている。特に9の沈線は細く、口唇部に施された刻み状の刺突は沈線と同一工具によるものである。また、10の口唇部も刺突が施されている。11・12は条痕地文のみが確認されたものであり、12の器壁の厚さは8mm前後で薄い。13は隆帯状の高まり上に刺突が施されている。17は13と同様に隆帯状の高まりが認められるものの、その上には刺突は認められず、先の潰れた工具により沈線が施されている。14～16, 18～20は、11・12と同様に条痕地文のみが観察されたものである。これらの中で、表裏面に条痕文が確認されたものは、8・9・11・14・18であるが、それ以外は、裏面に条痕文が観察されないものである。

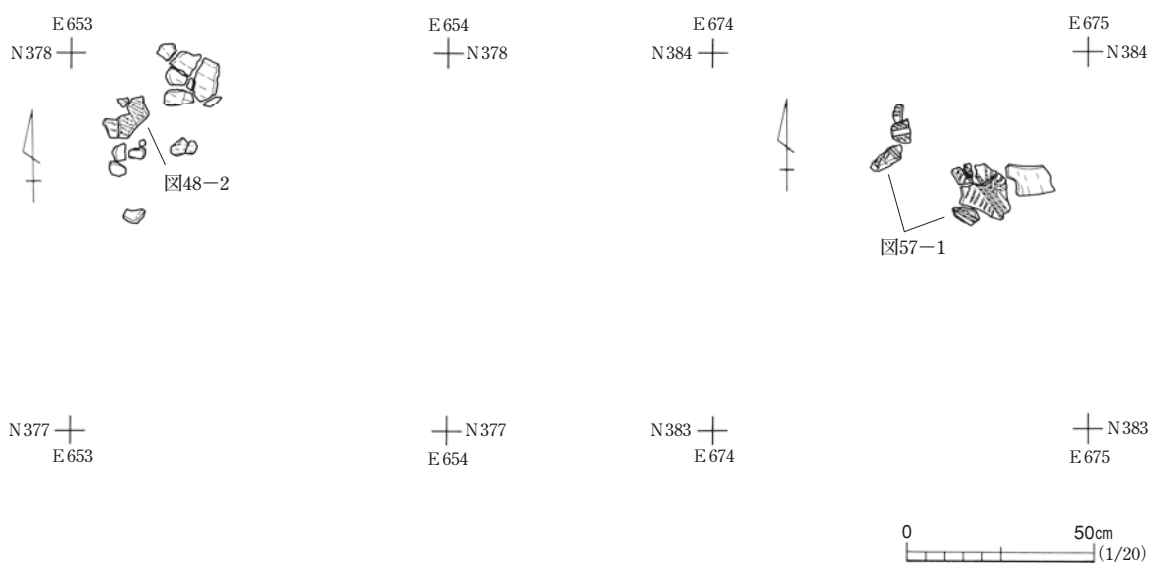


図47 遺構外土器出土状況



図48 遺構外出土遺物 (1)

Ⅱ 群土器 (図48-1・2, 図49-21~図52, 写真60~62) 本群は1~5類に細分される。1類は縄文時代前期初頭, 2・3類は縄文時代前期前葉, 4・5類は縄文時代前期初頭~前葉のものと考えられる。本類土器の胎土にはすべて植物繊維が混和されている。

1類 (図49-21~27) 1段の原体2本による縄圧痕文と竹管凸面を使った沈線文が使用され, 非結束羽状縄文が施されるものを一括した。図49-21は口縁部片であり, 口縁部の断面形は内削ぎ状を呈する。また, 非結束羽状縄文が施された後には幅広の沈線が描かれている。22~27は縄圧痕文が施されるものである。22・23は円形刺突文の周囲を縄圧痕により蕨手状に描くもので, 22には縄圧痕文の周囲に刻み状の刺突が施されている。24は縄圧痕文に沿って菱形状に刺突文が描かれ, 25・26は縄圧痕文と刻み状の刺突文と円形の連続刺突文が施されている。25・26は縄文原体と刺突文の工具が同じことから同一個体と考えられる。27は平行沈線と1段の原体を1本使用する縄圧痕文が本類の特徴と異なると思われるが, 胎土の特徴から本類に含めた。

2類 (図48-1, 図49-28~36・42) 刺突文による列を施すものである。図48-1は, 破片資料から復元した波状口縁部を呈する大型の深鉢土器である。口縁部には, 口縁に沿って刻み状の連続する刺突文の上に平行沈線を施し, 胴部には幅の狭いループ文が重層する。この波頂部下の刺突文とループ文の間には三角形の無文部が形成されている。図49-28~32は口縁部片であり, 口唇部が平や丸くなるものがある。28~31は刻み状の連続する刺突文の上に平行沈線を施すことにより, 沈線間に刺突列を施した様な効果が得られるものである。このうち, 28には, 沈線と刺突の後に円形刺突文が施され, その下には無文部が形成されている。33~36は連続する刺突文が施されている。32は刺突文により蕨手状に描かれている。35は半截竹管によりC字状の刺突文を施している。42は重層するループ文下に刻み状の刺突が施されている。

3類 (図49-37~41) 平行沈線間に短沈線が施されるものや瘤状の貼付文が施されるものを一括した。37~39は口縁部片である。38は小さな波頂部を持つ波状口縁を呈し, 口唇部には刺突文が施されている。37・39は, 平行沈線間に刻み状の刺突が施され, その上に瘤状の貼付文が施されている。これらの貼付文は, 37では平行沈線の接点に設けられているのに対し, 39では貼付文の位置が不規則である。38・40は摩滅が著しいため貼付文のみが認められる。41は無文部にコンパス文が施されているが, 本類以外にⅡ群2類の可能性もある。

4類 (図48-2, 図49-43~図52-35) Ⅱ群土器に該当すると思われる縄文地文の破片・胴部資料を一括した。図48-2は, 図47に示した状態で出土した。器体に歪みがある鉢である。器面には斜行縄文が浅く施され, 縄文の条の粒が密で細長いことから原体には0段多条が使用されたものと思われる。図49-43~図51-13は羽状縄文土器で, このうち, 非結束羽状縄文土器は図49-43~図50-25である。非結束羽状縄文土器の口縁部片は図49-43~45である。図50-1~5, 8・10には原体幅を狭く施文した非結束羽状縄文が構成されているが, それ以外は, 原体幅がやや広い非結束羽状縄文である。これらの非結束羽状縄文土器の原体には0段多条が多く使用されている。図50-12・25には0段多条とLRの原体が使用され, 異原体による羽状縄文が施されている。羽状縄文土器の

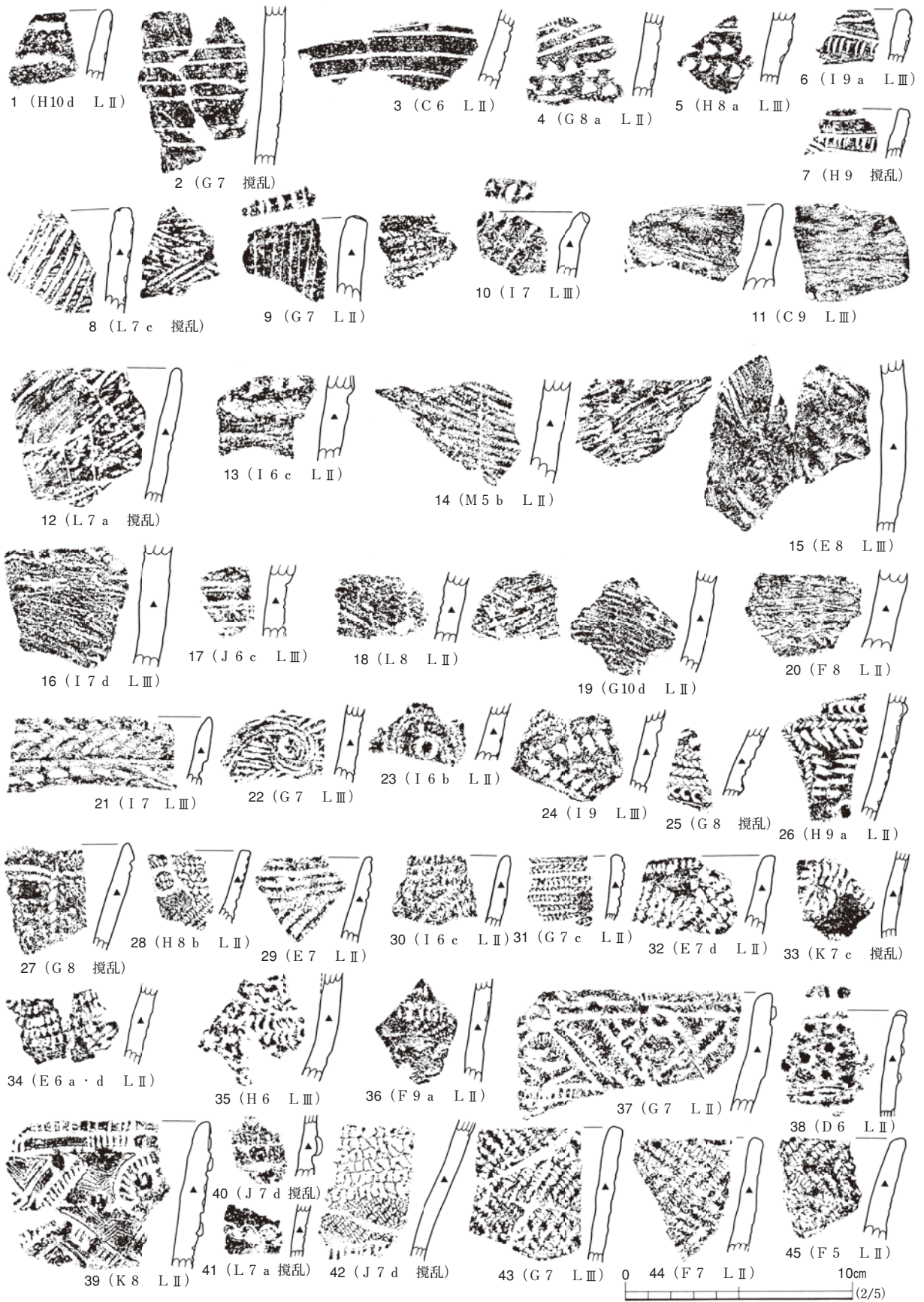


図49 遺構外出土遺物 (2)

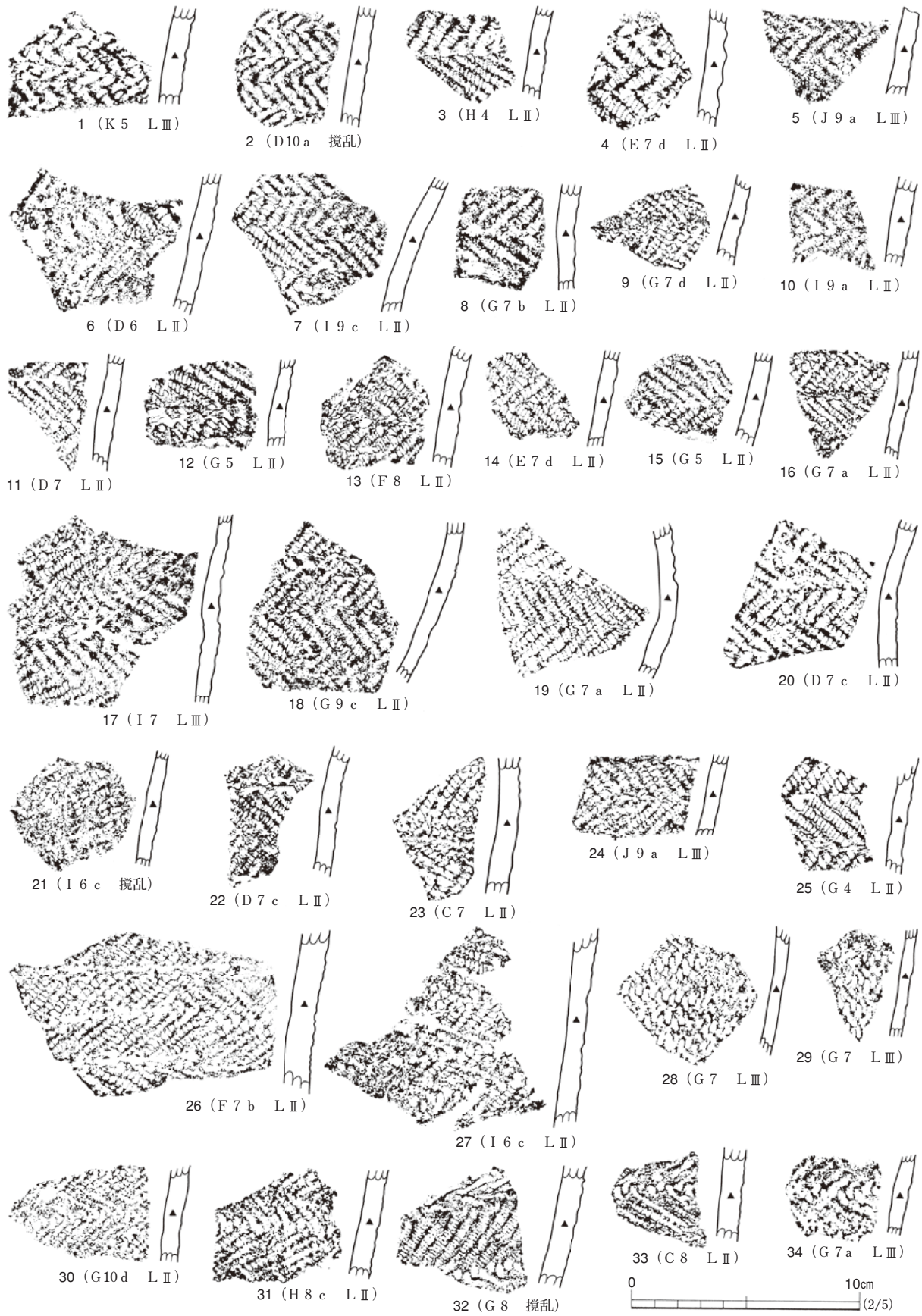


図50 遺構外出土遺物 (3)

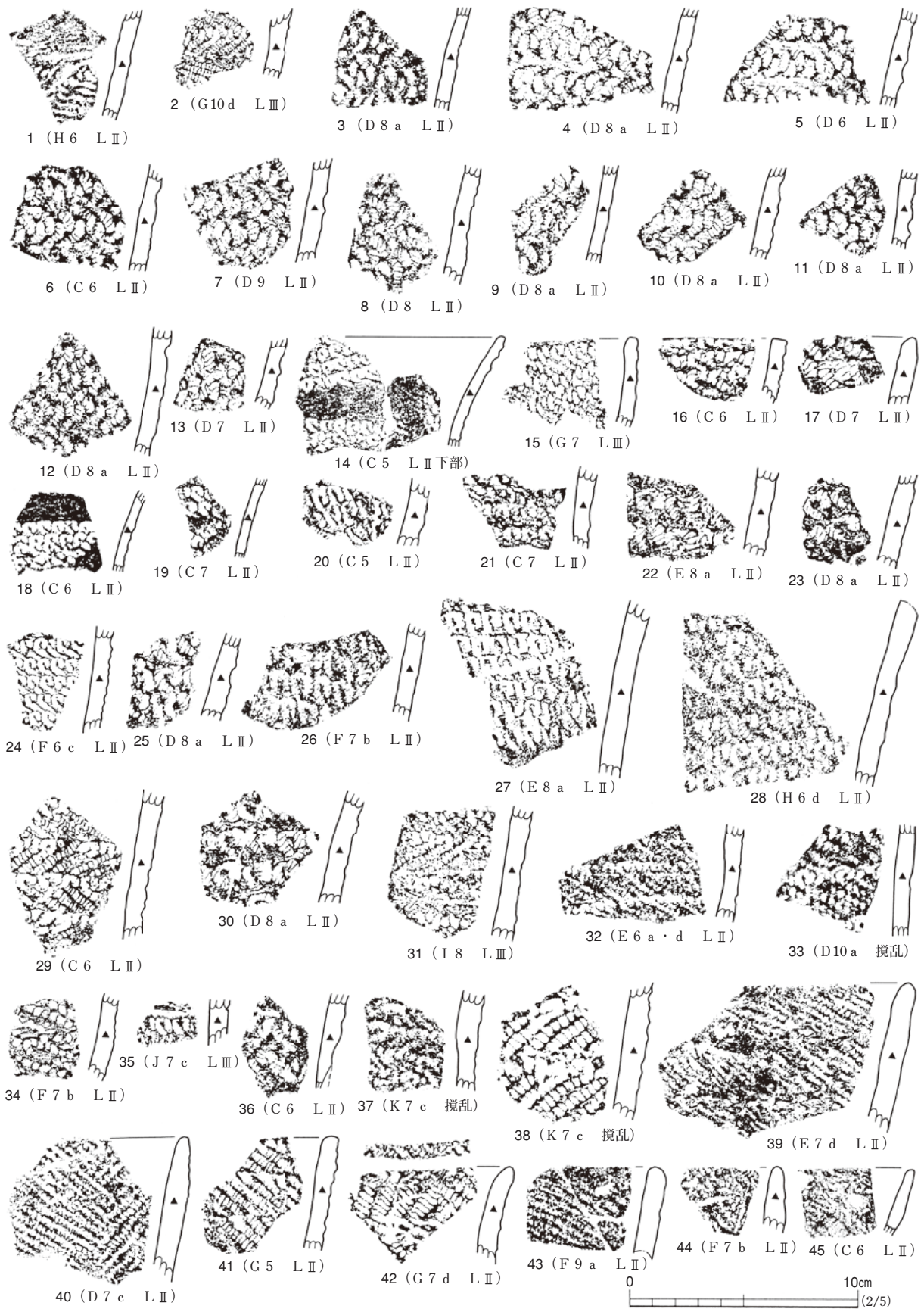


図51 遺構外出土遺物 (4)

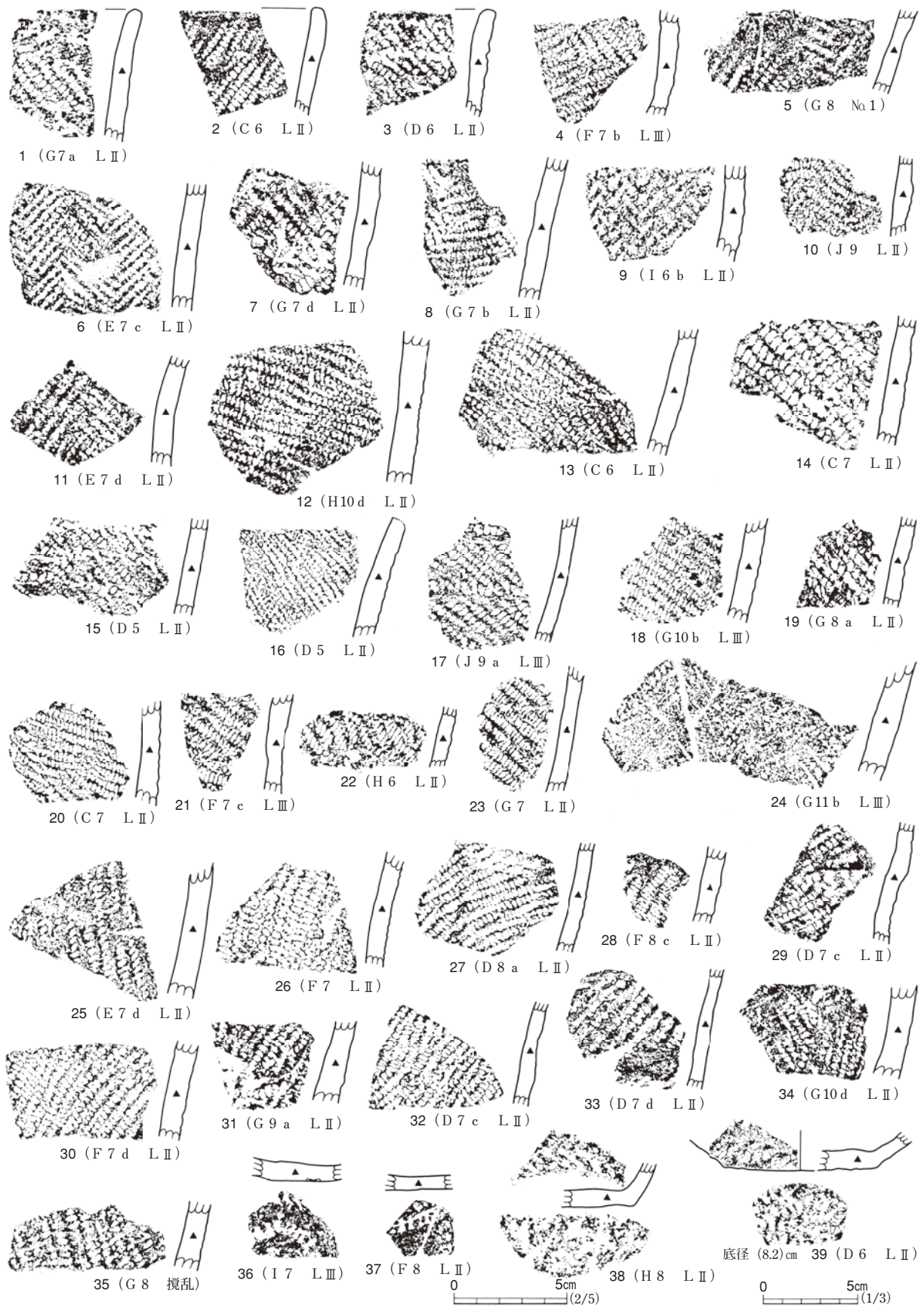


図52 遺構外出土遺物 (5)

中で結束羽状縄文となる土器は図50-26～図51-13である。図50-26は異原体を使用して菱形状を呈する羽状縄文を構成している。図50-28・29には原体の結束部分の施文が認められるものである。図51-3～13は幅の狭い羽状縄文が施され、これらの原体には、0段多条が使用されている。このような特徴から、出土位置が一致する図51-4・8～12は同一個体の可能性が高い。

図51-14～38はループ文が施された土器である。14～17は口縁部片であり、重層ループ文が施されている。このように、幅の狭い重層ループ文が施されるものは、14～28, 30, 35～37であるが、それ以外は、幅の広いループ文が施されている。その他に、14・18はループ文施文後に、磨消しによる無文部が認められる。29・31・37は異なる撚りのループ文を施文することにより、羽状縄文が構成されている。これらのループ文土器は、本群2・3類に比定されるものである。

図51-39～図52-35は単節の斜行縄文が施された土器である。これらの中には、異原体を使用して斜行縄文を羽状および菱形状に描くもの、同一原体により施文方向を変えているもの、施文方向が一定のものが認められる。口縁部片は図51-39～図52-3でであり、口唇部は図51-41, 図52-2・3が平になるが、それ以外は丸味を持つ。また、図51-42の口唇部には器面に使用された同一原体により縄文が施されている。縦方向の羽状を描くものとしては、図52-5・6・8・9であり、菱形状を描くものは、図51-42, 図52-4・7である。羽状または菱形状を描くものか判断できなかったものは、図51-40, 図52-10・11である。特に、図52-9は縄文の施文幅を短くして羽状縄文を施している。施文方向をわずかに変えているものは、図52-13・20・27・34であるが、図52-13は異原体を使用して施文されている。施文方向が一定のものは、図51-41, 43～45, 図52-1～3, 12, 14～19, 21～26, 28～33, 35である。これらの縄文を見ると、左上がりとなる単節RLは図51-41, 43～45, 図52-1・3・12, 14～19, 21・25・35, 右上がりとなる単節LRは図52-2, 22～24, 26, 28～33である。このうち、斜め方向からの施文により縄文が縦方向に近いものは、図52-25・26・35である。施文方向が一定するものの中には、施文幅を狭く施す図51-41, 図52-1～3, 17・29が認められ、特に図51-41, 図52-29は、原体を深く施文されたために縄文と縄文の単位の境に僅かの段あるいは稜が確認される。施文原体には、単節の0段多条・RL・LRが認められる。0段多条と思われるものには、図51-41・42, 図52-18, 20～23, 28などがある。

5類 (図52-36～39) II群土器に該当するものと思われる底部資料を一括した。36・37は底部片で、棒状工具により連続刺突文が弧状に施されている。38・39は胴部下端から底部にかけて遺存し、これらの器面には同一原体による羽状縄文が施されている。

III群土器 (図48-3, 図53～図62, 写真63～71) 本群は縄文時代前期後葉の土器で、1～5類に分けた。1類は浮島式系, 2類は諸磯式系, 3類は大木式系, 4・5類は1～3類に比定される土器である。なお、1類の爪形文等については、松田光太郎論文(松田1995)の表現を参考にした。

1類 (図53-1～図56-40) 地文に沈線文・変形爪形文, 貝殻文等が施されるものを一括した。本類については、文様要素の組み合わせや地文の特徴からa～d種に細分した。

a種 変形爪形文, 平行沈線文, 両者併用の土器が主体的に認められるもので、図53-1～図56

—9が該当する。図53—1～6は口縁部が山形状になる波状口縁を呈するものである。1・2の口唇部には、波頂部に3本の縦刻みと波頂部以外に斜めの刻みが入り、その下には、口縁に沿うように山形状の変形爪形文やD字状の爪形文が施されている。4は波頂部の縦刻みを除けば1と同様である。この他に、図53—3・5・6は口唇部に斜めの刻みが認められず、山形状の平行沈線が認められる。また、6については、口端付近に沈線あるいは刺突が確認できる。

図53—7～34は平縁の深鉢である。7～16は、口唇部あるいは口端に斜めの刻みが入るもので、これらの刻み目は、7～10が太い刻み、11～16は細い刻みを呈するが、11～16の刻みの間隔が狭いことから、後出的な条線帯に変化する過程のものと思われる。これらの刻み目の下には、変形爪形文、変形爪形文+平行沈線文、変形爪形文+斜めの刻みが施されている。17・18、28～34には平行沈線文が認められるが、このうち、17には平行沈線下に横位方向の刺突列が施されている。19～21には、変形爪形文下に山形状の平行沈線文が施され、20・21の変形爪形文と平行沈線文の間には斜めの刻みが入る。22・23、25・26には、口唇部の加工が見られず、変形爪形文のみ確認されるものである。24は平行沈線文と若干異なり、半截竹管の支点を交互に変えるロッキング手法による施文から有節平行線文と考えられる。27は口唇部の断面形が外削ぎ状を呈し、縦沈線の条線帯下に幅の狭い変形爪形文が施されている。

図53—35～40・45～47、図56—2は変形爪形文が確認されるもので、35・39の変形爪形文の間には斜めの刻みが施され、45には波状貝殻文が施されている。また、37には低隆起帯状の屈曲部が認められる。図53—41・42は平行沈線文上に斜めの刻みと有節平行線文が施され、いずれも、施文工具の特徴や胎土から同一個体と考えられる。図53—43、図54—11～13は変形爪形文と平行沈線文が施され、図53—44は土器の屈曲部上に平行沈線文が施されている。

図54—1・2は平行沈線文が主体に描かれるもので、1には横位・斜位の平行沈線文と有節平行線文、2には山形状の平行沈線文と斜めの刻みが施されている。3、5～8は、変形爪形文の間に斜めの刻みが施されている。4は、刻み状の刺突列の間に斜めの刻みが施され、その下には、横位の平行沈線間に菱形状の平行沈線を形成し、その中には、平行沈線と同一工具と考えられる半截竹管により刺突が施されている。9は単沈線の間半截竹管により刺突列が描かれ、その下には、変形爪形文が施されている。10・14・15は、いずれも有節平行線文が認められるもので、10の有節平行線文間には斜めの刻みが施され、14・15には有節平行線文以外に平行沈線文が施されている。

図54—16～20、図55—42は変形爪形文と平行沈線文が併用される土器である。16・17・19には凹型変形爪形文、それ以外には凸型変形爪形文が施されている。また、20以外は細い平行沈線文により矢羽根状、菱形状、山形状に描かれる。図54—21・22・27・28は変形爪形文を主体とする土器片であり、21には凹型・凸型変形爪形文がみられるが、それ以外には凸型変形爪形文が施されている。図54—23は平行沈線文を主体とする土器片であり、平行沈線上には斜めの刻みが認められる。

図54—24～26、29・30、図55—45、図56—9は有節平行線文を主体とする土器片である。図54—24～26は平行沈線文の溝底に刺突を加えた有節平行線文を斜位・縦位・横位に施し、29・30はロッ



図53 遺構外出土遺物 (6)

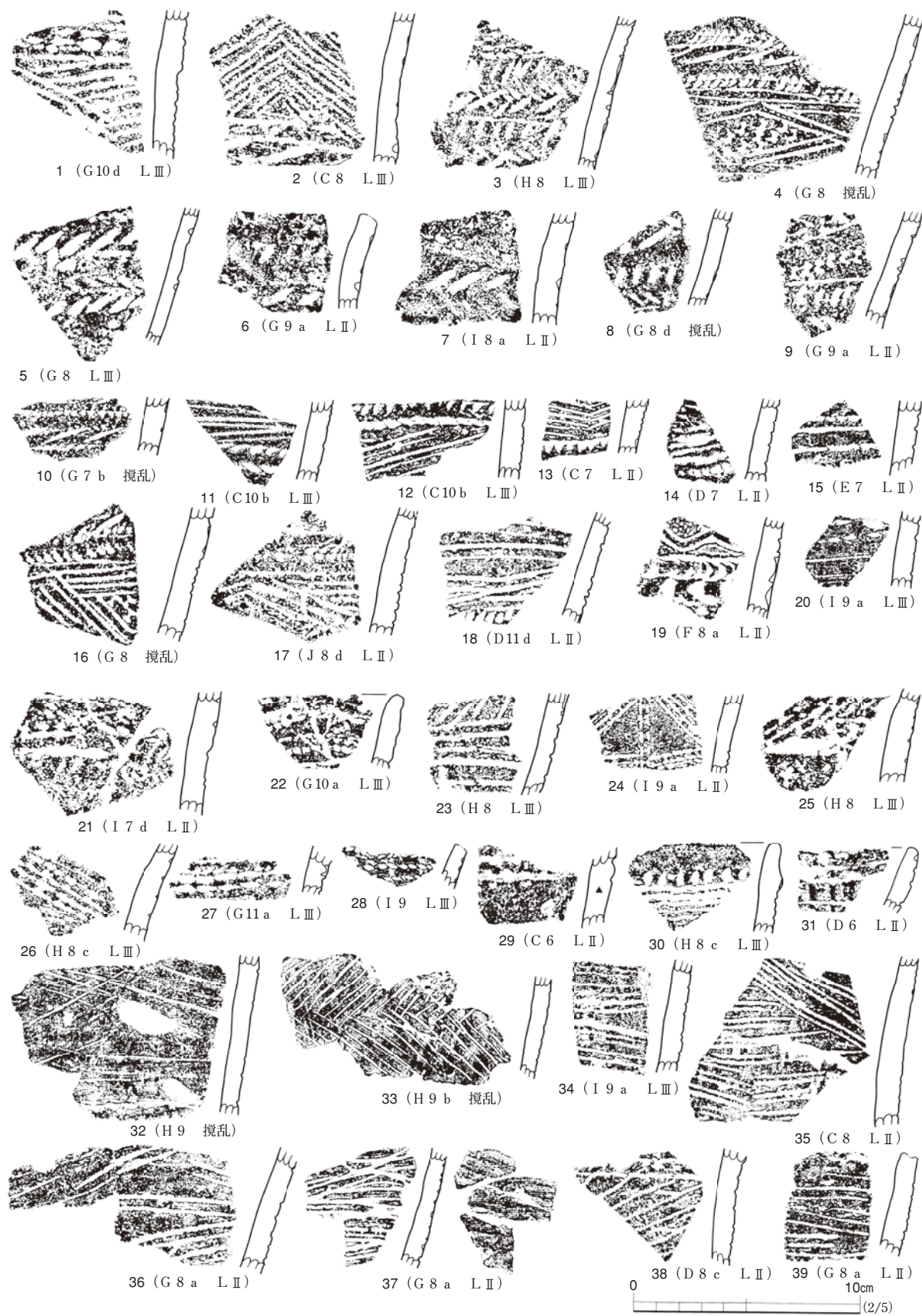


図54 遺構外出土遺物 (7)

キング手法による有節平行線文である。また、30には低隆帯が付され、その上に刺突が加えられる。

図54-31～図56-1, 3～8は平行沈線文を主体とする土器片である。これらには、横位・斜位・縦位の平行沈線文の組み合わせにより、菱形状・矢羽根状・山形状・弧状を描くもの、平行沈線文により描かれた文様が不明なものがある。平行沈線文が矢羽根状を呈するものは図54-33, 菱形状を呈するものは図55-8, 山形状を呈するものは図54-36～38, 図55-1～3, 10～14, 46, 弧状を呈するものは図55-31～34, 44である。また、横位と縦位の平行沈線文が併用されるものは図55-47, 横位と斜位が併用されるものは図54-35, 図55-6・7・16・29, 横位平行沈線文のみのは図54-34・39, 図55-4・17・19・20・28・30, 36～41, 図56-1・3～5, 7, 斜位のみのは図55-15・18・21・22, 図56-7・8である。これらの中で有節平行線文が見られるものは図54-32・38, 図55-26・30・44・48, 図56-7・9, 変形爪形文が見られるものは図55-42, 図56-3である。

b種 輪積痕が認められるもので、図48-3, 図56-10～13が相当する。いずれも器面が粗い。図48-3は、底部を欠き、胴部下半から口縁部にかけて遺存する深鉢形土器である。口縁部には4段の輪積痕上に沿って指頭痕の列が認められる凹凸文が施されている。図56-10・11は輪積痕上に凹凸文が施され、12・13は輪積痕のみが観察される。

c種 刺突文が主体に認められるもので、図56-14・16・17が相当する。14は先が角状の工具により、16・17は半截竹管により、いずれも横位の刺突文が数段施されている。

d種 地文に貝殻文が施されるものである。図56-15, 18～40が相当する。貝殻文には、腹縁に刻みのないハマグリ等や放射肋の刻みを持つアナダラ属の貝殻が使用されているものと思われる。アナダラ属の貝殻による施文については、貝殻の施文角度の違いにより文様が大きく異なる。

腹縁に刻みのない貝殻で施文したものは図56-18・20～22である。これらは、貝殻を立てた状態で使用し、ロッキング手法により波状貝殻文を施している。18は口縁部片で、突起状の高まりを持つものである。23～40は刻みを持つアナダラ属の貝殻により施文されたものである。15・23・24, 26～28, 30は貝殻の内面を器面側に向けたり、垂直に立てて施文して、波状貝殻文を描くものと思われる。25・29・31・38・40は貝殻の背を器面側に向けて施文したもので、幅広の波状貝殻文が見られる。33～37は、25・29・31・38・40よりも貝殻を傾けて施文しているため、横位に連続する刺突文あるいは有節平行線文の効果を表出している。40は底部片で、底部下端は無文部となる。32は貝殻を垂直に立てて密に施文したものである。

2類(図57) 縄文地文上に浮線文が施されるものや沈線により渦巻文を描くものを一括した。縄文地文上に浮線文が施されるものは、図57-1～24・30である。1は唯一復元した深鉢土器で、胴部下半から頸部にかけてわずかに外傾し、頸部ですぼまるものの、口縁では強く外傾する器形を呈する。文様帯を区画する浮線文が数本1組となって繰り返されているため、文様帯の下限ははっきりしない。口縁部文様帯には浮線文が渦巻を描くように施されている。2～10は口縁部片で、特に2・3・5・6は強く内湾する。2は獣顔をモチーフとした把手が取り付けくものである。3・10の口

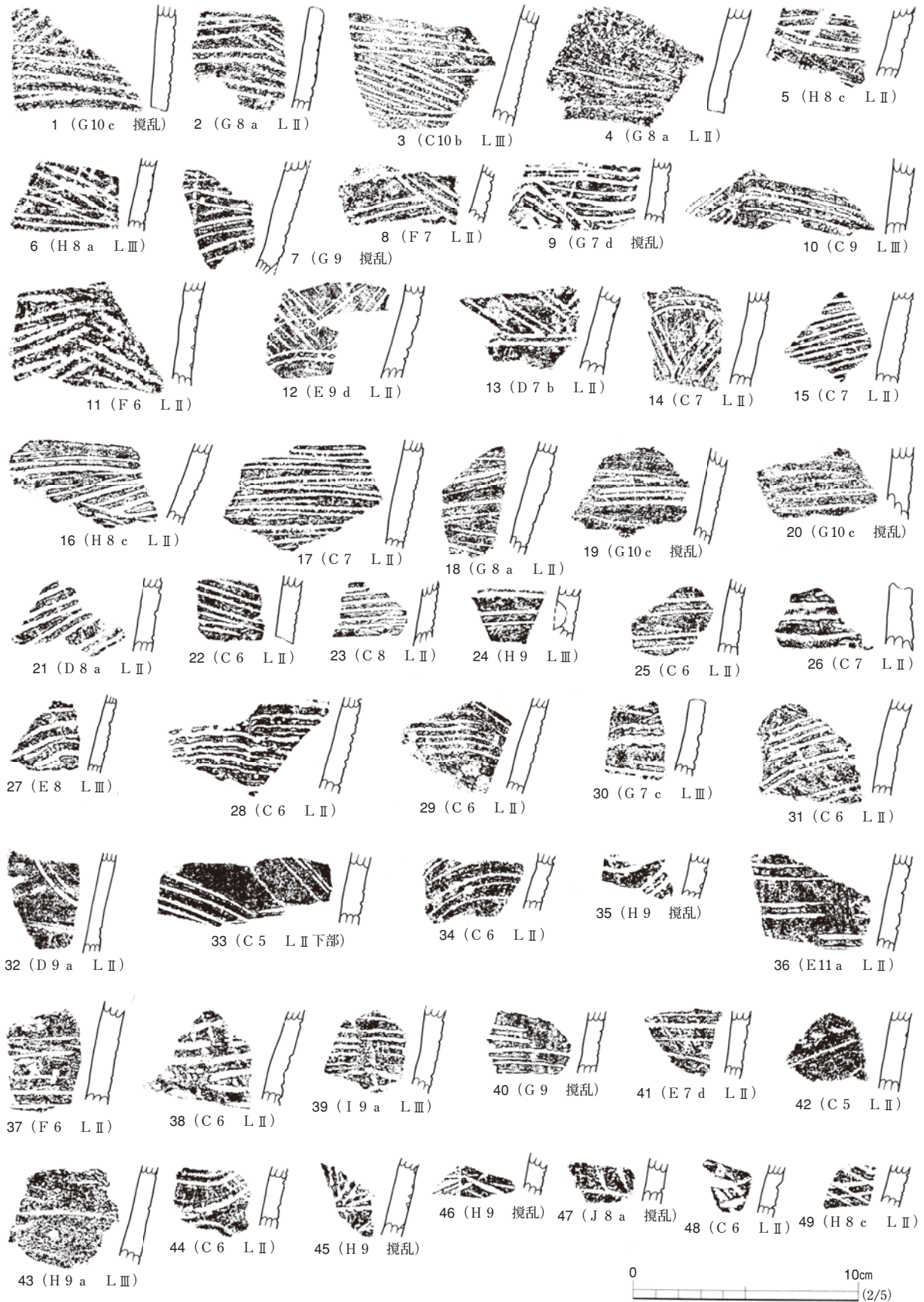


図55 遺構外出土遺物 (8)

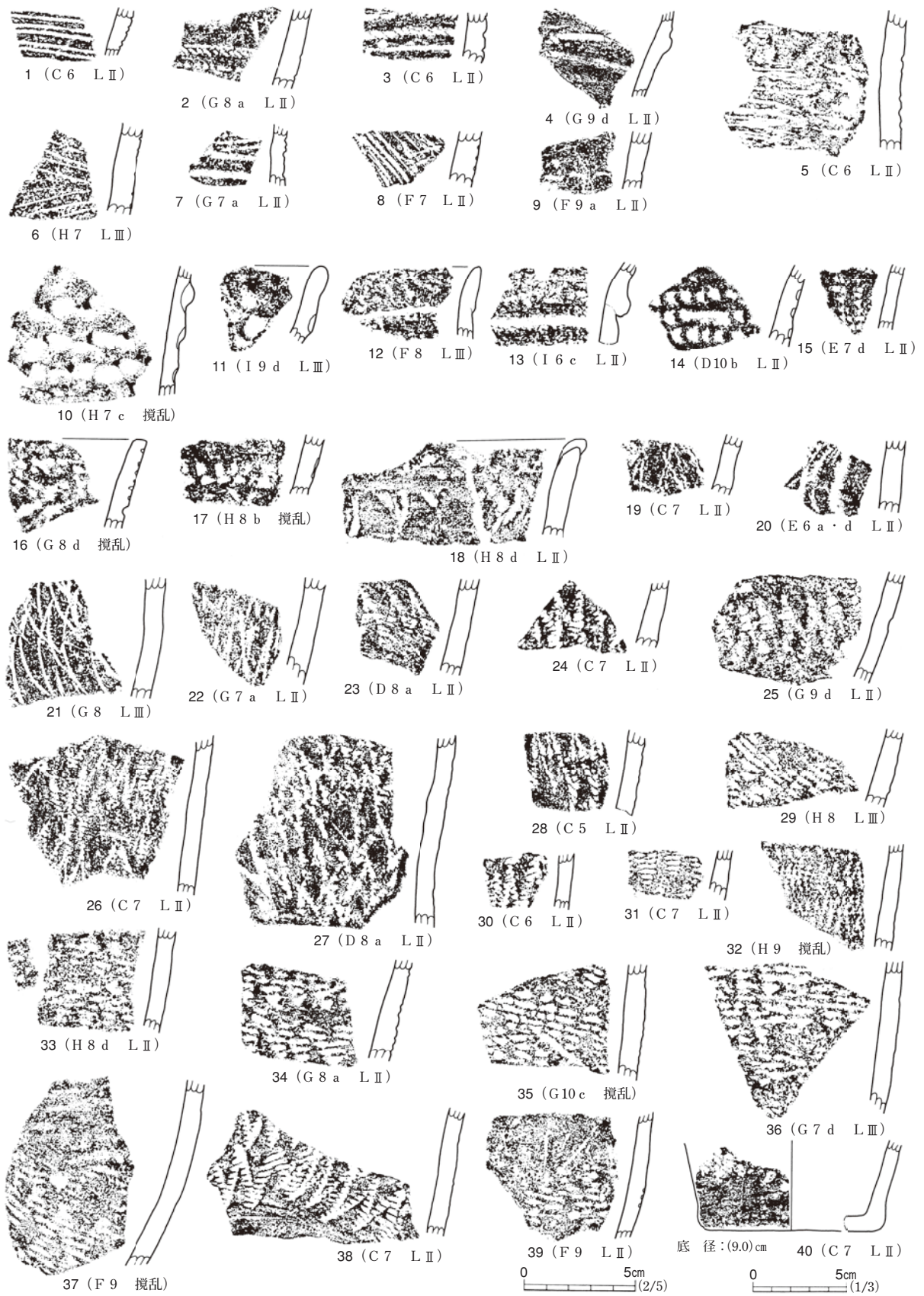


図56 遺構外出土遺物 (9)

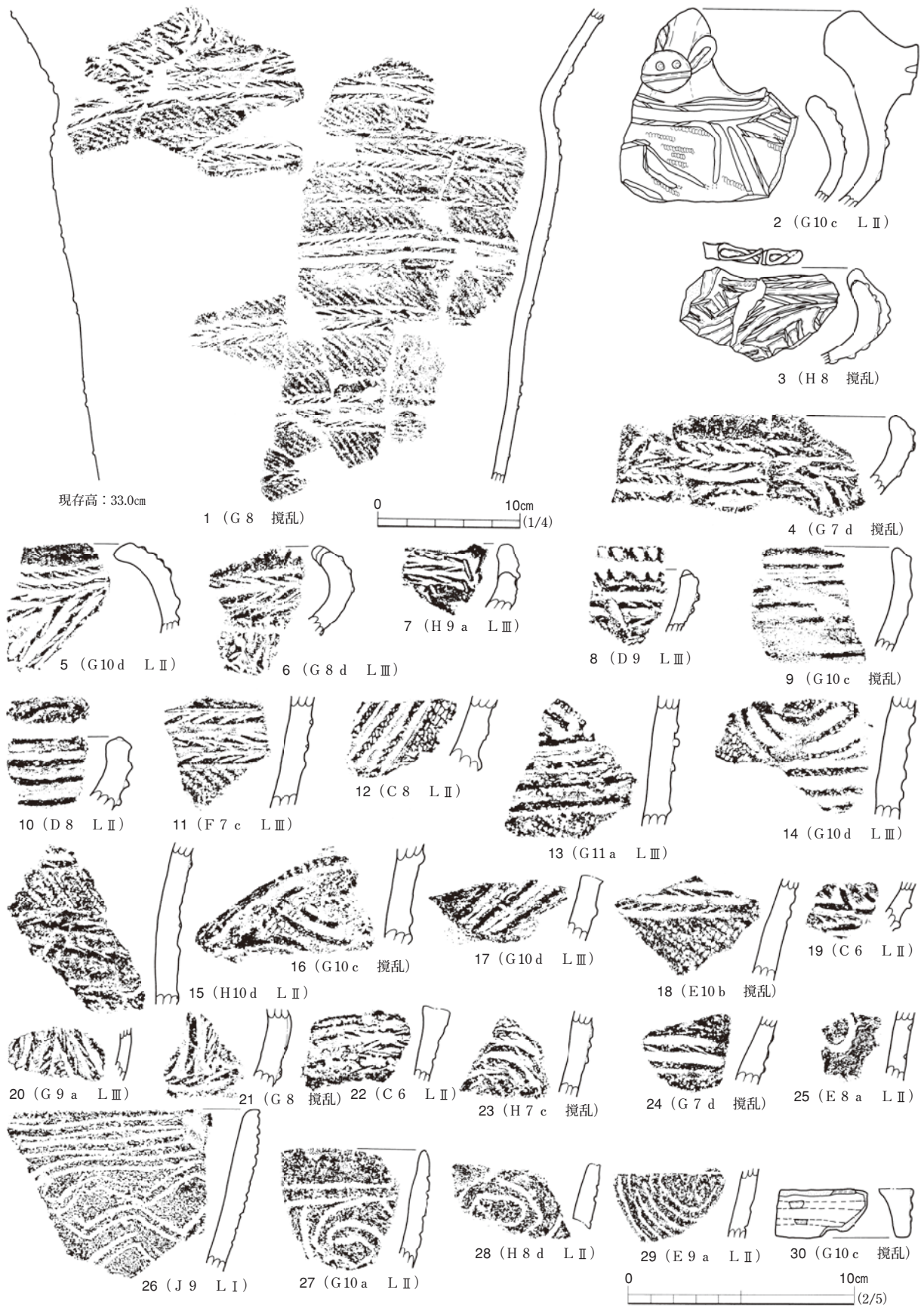


図57 遺構外出土遺物 (10)

唇部には粘土紐が施され、3の粘土紐は「8」の字状に貼付されている。6・7の口唇部上には小さな突起が見られる。8の口唇部には刺突が施されている。12～14、16の浮線文上には縄文が施文されている。30は高台となる底部片で、器面には僅かであるが浮線文と浮線文の剥がれた痕跡が観察される。25～29は沈線文の多用と胎土の特徴が本群1類に近似するが、沈線の施文や渦巻文等の特徴から本類に含めた。これらは、沈線により弧状の曲線文に描くものである。26・27は口縁部片である。26には、口縁に沿って水平に近い平行沈線と、その下に山形の平行沈線がいずれも3段ずつ描かれている。27は口縁部を無文部とし、単沈線が口縁沿いと、渦巻文が描かれている。25・28は27のように単沈線で渦巻文を描くのに対し、29は平行沈線により渦巻文を描くものである。

3類 (図58～図60-22) 大木式系の土器を一括した。文様の特徴からa～d種の4つに細分した。これらの土器の胎土中には、植物繊維痕の有無が認められ、胎土中の植物繊維の量はⅡ群土器に比べてかなり少ない。

a種 沈線文を特徴とするものである。図58-1～図59-7が相当する。口縁部と胴部の境を波状沈線や横位の平行沈線文で区画するものや、口縁部無文帯や縄文地文上に沈線文が施される。口縁部資料はいずれも平縁である。a種はd種と共に本群3類の主体を占めるものである。

波状沈線文が施されるものは、図58-1、3～16、19～26、28～32、34～37、40、図59-1・2である。波状沈線文により、口縁部と胴部の境を区画し、口縁部が無文帯となるものは、図58-1・6・11・15・19・31・32・40、また、波状沈線により、口縁部と胴部の境を区画し、口縁部が胴部と同様の縄文地文となるものは、図58-20～26・28・30である。口縁部と胴部の境を区画するものは不明であるが、口縁部無文帯に波状沈線が施されるものは、図58-3～5、7～10、12～14・16・29であり、図58-29の波状沈線下には縦位の沈線が認められる。また、縄文地文上に波状沈線が施されるものは、図58-34～37、図59-1・2である。図59-1・2は地文である撚糸文の原体と沈線の工具から同一個体と考えられる。以上の波状沈線文は、平行沈線によるものと単沈線によるものがあり、図58-1・6・26・40の4点は平行沈線によるもので出土量が少なく、それ以外は単沈線によるものである。

横位の平行沈線が施されるものは、図58-2・3・17・18・27・38・39、41～47である。横位の平行沈線により、口縁部と胴部の境を区画し、口縁部が無文帯となるものは、図58-21・38・42・43である。また、口縁部無文帯に横位の平行沈線文が施されるものは、図58-2である。この他に、図58-17・18・27・39・41、44～47は、Ⅲ群1類で有節平行線文としたものであり、17・18・39・41、44～46では沈線の溝底に刺突を施すもの、27・47はロッキング手法によるものものである。

縦位の沈線が施されるものは、図59-3～7である。3は口縁部と胴部の境が横位の有節平行線文で区画され、縦位は同様の有節平行線文で区画される。4・5は縄文地文上に緩やかな波状沈線文が施されている。6は弧状の沈線から縦位の山形沈線が垂下するものである。7は縄文地文上に縦位沈線と斜めの短沈線が描かれ、その下には円形竹管文が施されている。

b種 刺突文主体とするもので、図59-8～12が相当する。8・9・12は半截竹管により連続刺突

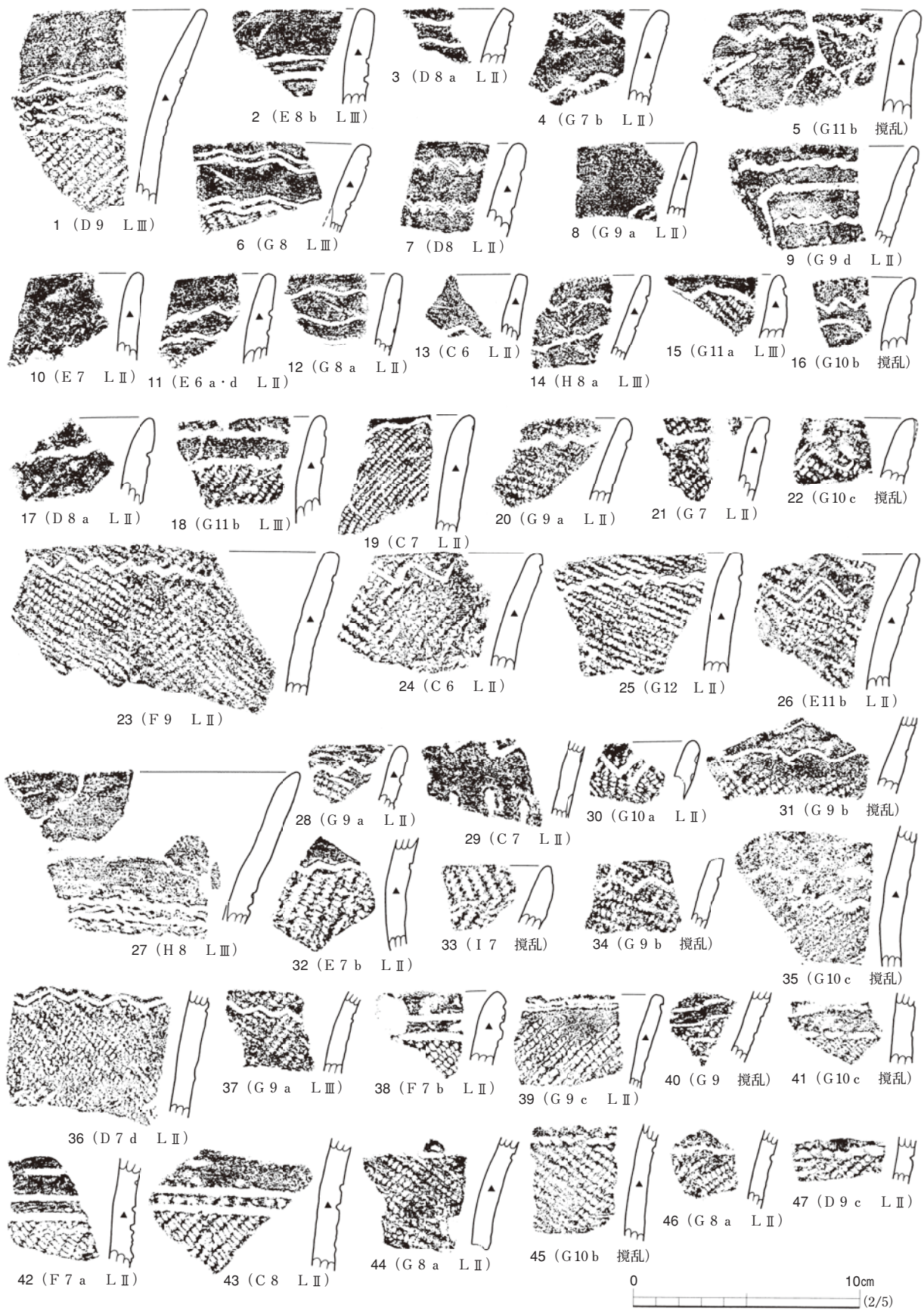


図58 遺構外出土遺物 (11)

されたものであり、9・12は工具や胎土の特徴から同一個体と考えられる。8の口唇部には縄文が施文されている。10・11は角状工具により斜位や縦位の連続刺突文が施されている。

c種 粘土紐による貼付文を特徴とするものである。図59-13~20が相当する。本類の中では量的に少ないものの、本種では口縁部資料のものが多く、13~16, 18は口唇部から口端にかけて貼付文が見られ、18には環状の貼付文が見られる。17・19・20は細片のため貼付文の詳細は不明である。

d種 口縁部と胴部の区画文様として、結節回転文を施しているものである。図59-21~43, 図60-1~22が該当する。

図59-21~25は、平縁の口縁部無文帯となるものであり、図40-1の様に無文帯の幅が本類a種のものに比べて広いことから、これらの土器は本類d種に含めることとした。このうち、21・25の口唇部には刺突が加えられている。

口縁部と胴部の区画文様として、主に口縁無文部に結節回転文が施文されているものは、図59-26~28, 31・32・35・37, 40~43, 図60-1, 3~7, 9・10・22であり、このうち、口縁部無文帯が形成されるものは、図59-26~28, 31, 図60-5・38である。特徴的なものとして、図59-26の口縁部には山形突起が付き、図59-27の口唇部には刻み状の刺突、図59-41の無文部には隆帯、図60-38には補修孔が認められる。縄文地文上に結節回転文が施文されているものは、図59-29・30・33・34・36・38・39, 図60-2・8, 11~21, 図61-26であり、このうち、図60-21は羽状縄文上に結節回転文が施されている。以上、結節回転文には、多段に施文されるものが多く、その間隔は密である。逆に、図60-18のような結節回転文の間隔が広いものは少ない。

4類 (図66-23~図62-9) III群土器に該当するものと思われる破片・胴部資料であり、いずれにも縄文地文が施されている。おそらく、大部分のものが、縄文地文を主体とする3類に相当すると思われる。これらの土器は、縄文地文の施文の特徴から、斜行縄文、縦位・横位縄文、撚糸文、羽状縄文が施され、主体となるものは斜行縄文である。斜行縄文はLRの縄文とRLの縄文に分けられ、LRの縄文のものは、図60-25・26・28・29, 図61-14~16, 18~25, 27~29, RLの縄文のものは、図60-27・31, 39~45, 図61-2~4, 6~13である。このうち、図61-28・29は縄文施文部の直下に無文部が認められることから胴部下半の土器片に相当し、図60-27には貫通していない補修孔と思われるものが認められる。縦位の縄文となるものは図60-23・30, 図61-1・5, 図62-3~5, 横位の縄文となるものは図61-17, 図62-2が相当するが、図61-1・5・17, 図62-2は、図40-1の縄文にも見られるように施文方向が少しずつ異なるものである。撚糸文は、図60-33~37であり、この中には、本類の前段階に相当するまばらな撚糸文は出土していない。羽状縄文は横位に展開する図58-33と縦位に展開する図60-24・32が認められ、いずれも、同一の原体の方向を変えて施文しているものと思われる。図62-6~9は無文部の土器であるが、斜行縄文を伴う図61-28・29のように胴部下半に相当するものと考えられる。このため、これらを4類に含めることとした。

5類 (図62-10~33) III群土器に該当するものと思われる底部資料を一括した。底部は、いずれ

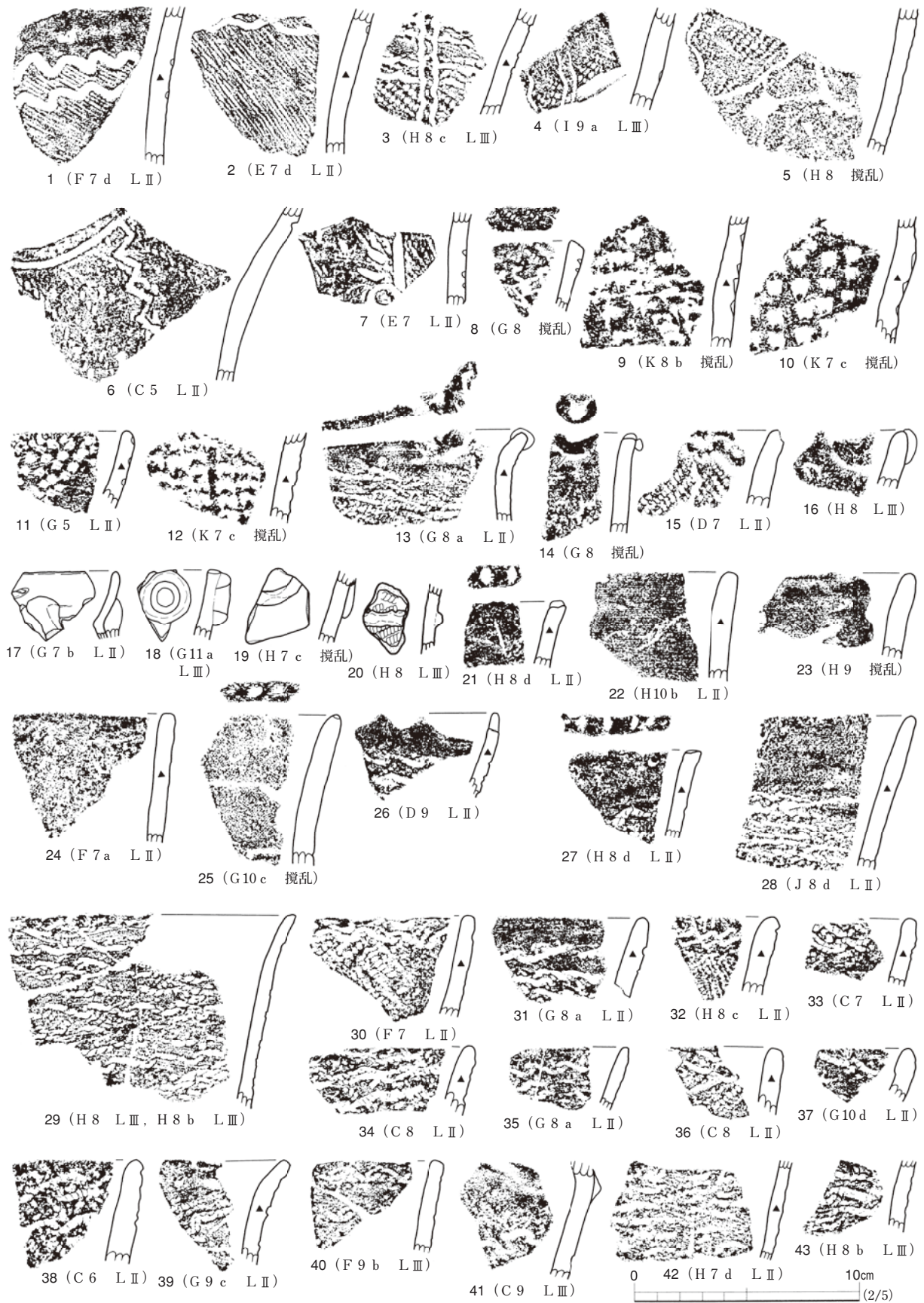


図59 遺構外出土遺物 (12)

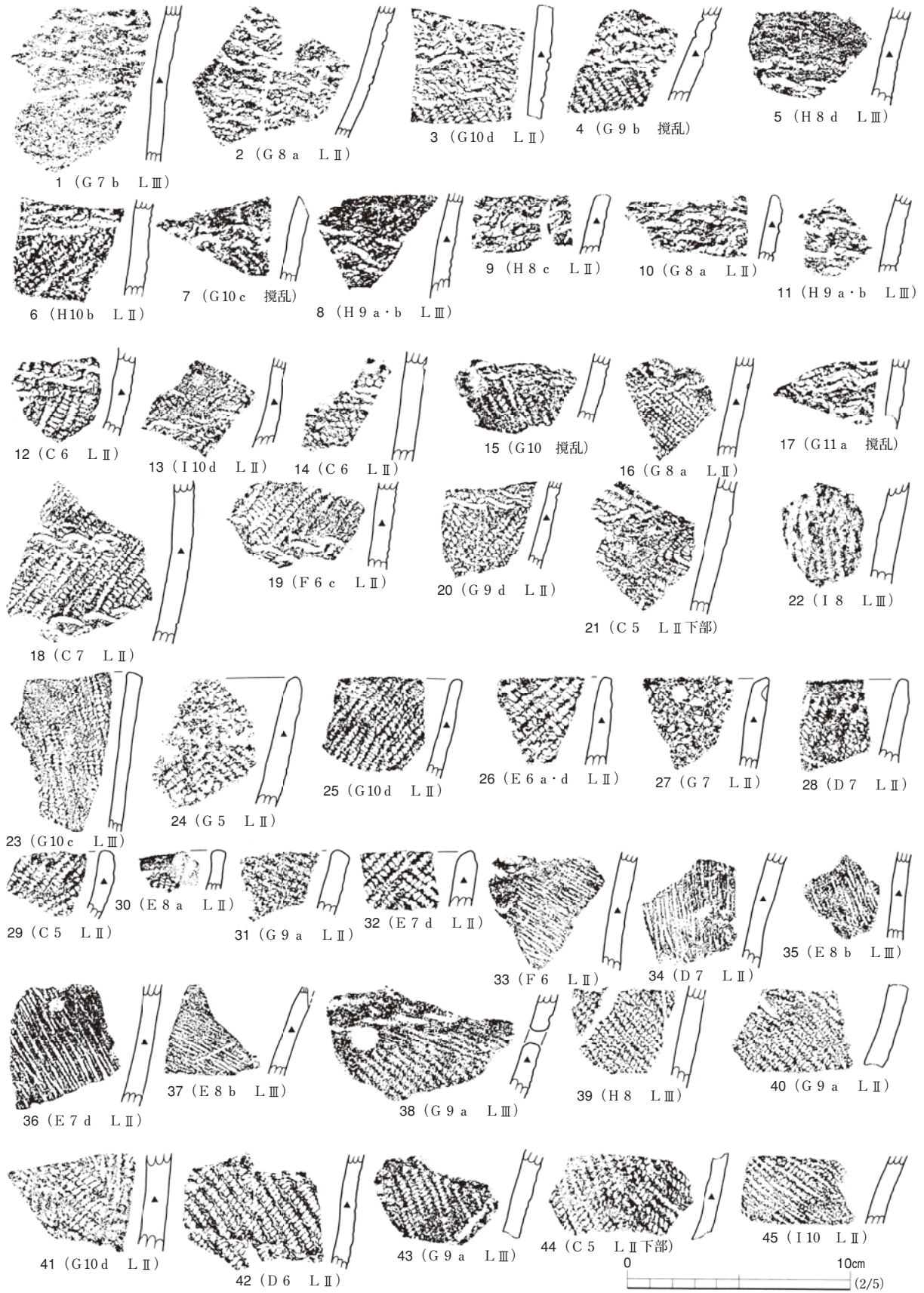


図60 遺構外出土遺物 (13)

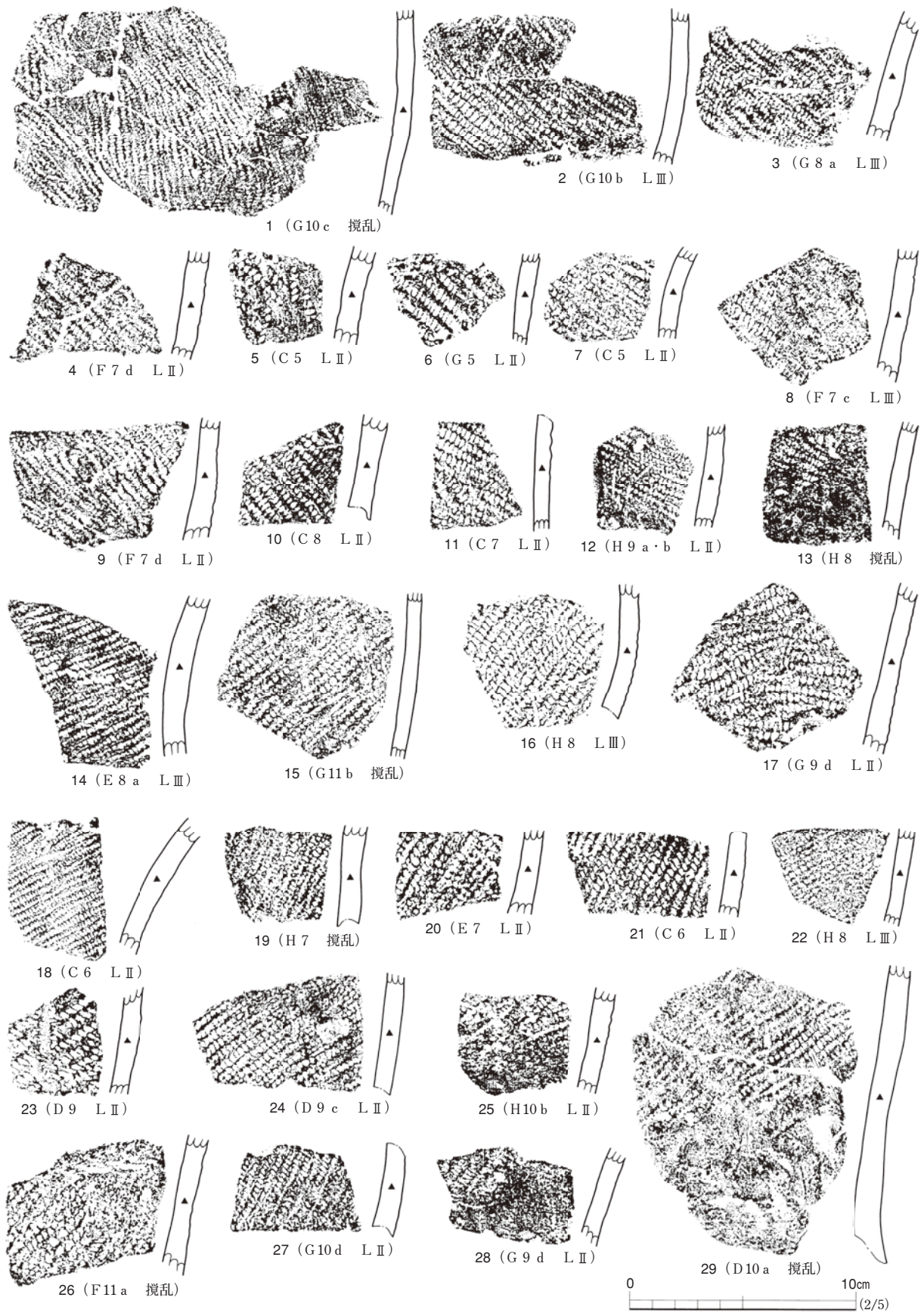


図61 遺構外出土遺物 (14)

も平底である。底部資料については、遺存する底部から胴部が立ち上がる特徴から、外傾あるいは外反するもの、直立気味に立ち上がるもの、内傾して立ち上がるもの、内傾後に外傾するもの、判断できないものに分けられる。

外傾あるいは外反するものは、11・18・20・22・23・25・28である。直立気味に立ち上がるものは、12・14・19・24・26・27、内傾して立ち上がるものは29である。内傾後に外傾するものは21・33である。判断できないものは、10・13、15～17、30・32である。底部の立ち上がり以外の特徴では、10は高台が取り付くもので、胎土に含まれる植物繊維の量から本群に含めている。11・12は底径が小さいことから小型の土器と思われる。18・20・24の胴部には斜行縄文が施されている。底部には網代痕が残る18～20、木葉痕が残る22が認められる。

Ⅳ群土器 (図63) 縄文時代中期～晩期の土器群である。時期や土器の特徴から1～7類に細分した。

1類 (図48-4, 図63-1～3) 凹線あるいは隆凹線により文様を描くものであり、縄文時代中期末葉の土器である。図48-4は、胴部半ばから口縁部にかけて遺存し、胴部から内湾気味に立ち上がる器形を呈する。口縁部と胴部の境は、隆線により区画され、口縁部には無文帯を構成し、胴部には斜行縄文が施されている。斜行縄文は、施文方向を変えている特徴から縄文時代中期末に位置付けられる。1・2は凹線により縄文部と無文部が区画され、無文部には丁寧な磨きが施されている。3には無文の口縁部と胴部を区画する隆凹線が認められる。

2類 (図63-4・6・8) 口縁部に貫通孔が施されるもので、縄文時代後期前葉の土器である。6・8は波頂部に貫通孔が施され、8には隆線が縦・横位に貼り付けられている。

3類 (図63-5・7, 9～14) 沈線で区画されるもので、後期中葉の土器である。5・7・10は横位の沈線により、口縁部と胴部が区画されて弧状の曲線文が描かれている。また、5には隆帯上に盲孔が認められ、7には垂下する沈線が見られる。13は沈線間に刻み状の連続刺突文が施され、14は蛇行沈線が施されるものである。

4類 (図63-13) 沈線間に刻み状の連続刺突文が施されるもので、後期後葉の土器と思われる。13は壺状の器形を呈し、胴部が無文部となるものである。

5類 (図63-15・16) 口縁部に彫刻的な沈線により、三叉文を有するものである。晩期前葉の土器である。これらは、精製あるいは半精製土器の口縁部資料であり、器壁が7mm前後と薄く、入り組み三叉文が施されている。大洞B式期に比定される。

6類 (図63-17～31) 本群の粗製土器を本類に一括した。これらは、条線文地文のもの、無文のもの、縄文地文のもの3つに分けられる。

条線文地文のものは、櫛歯状工具によるもので17～22・30・31が該当する。17・22は平行沈線により口縁部と胴部を区画し、胴部には垂下する条線が施されている。18～21は条線が垂下するものであり、18・19では条線がS字状に施されている。31は横位の細かい条線が施されている。無文部としたものは、いずれも平縁の口縁部資料で23～25、27が該当する。縄文地文のものでは、26・29

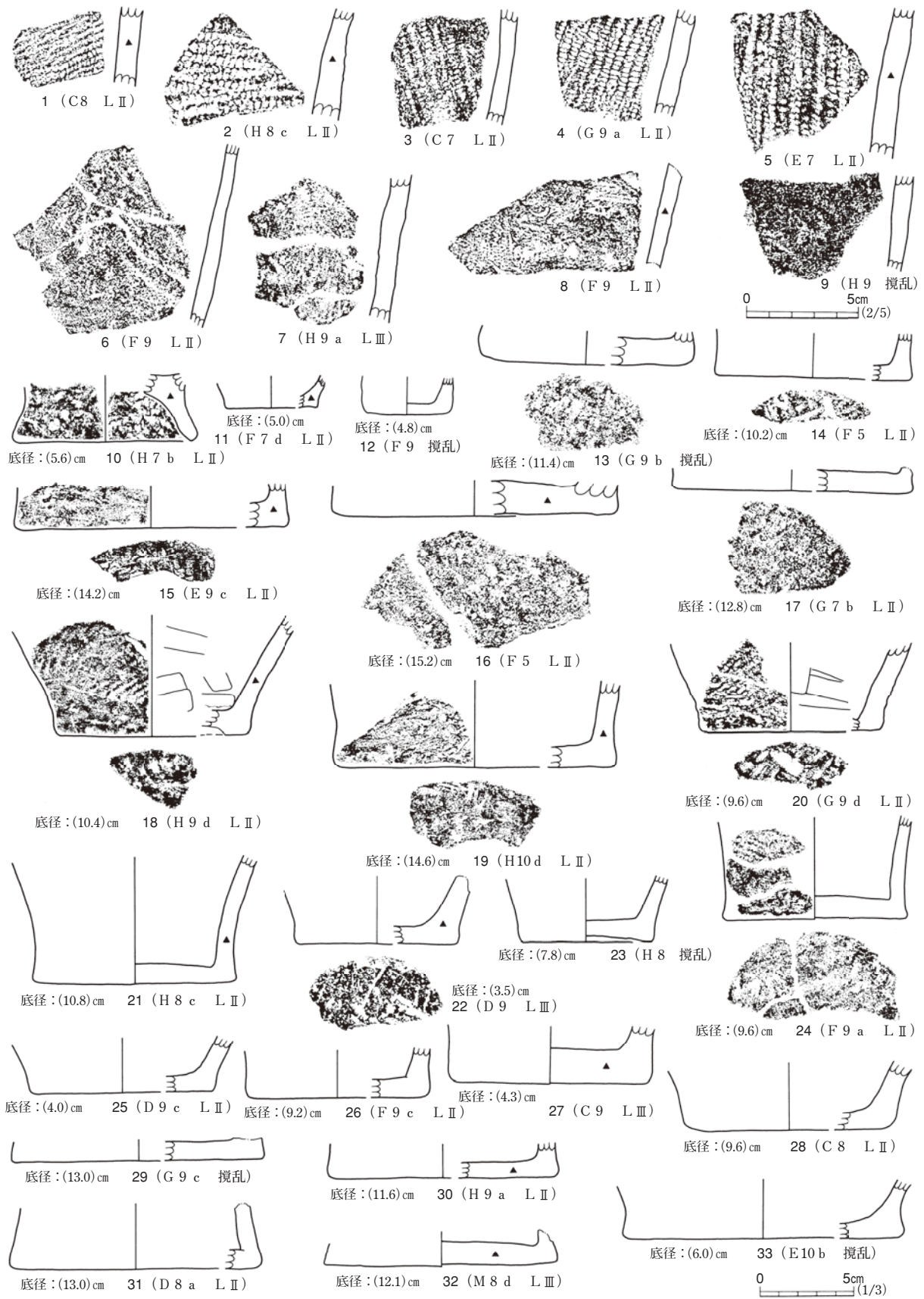


図62 遺構外出土遺物 (15)

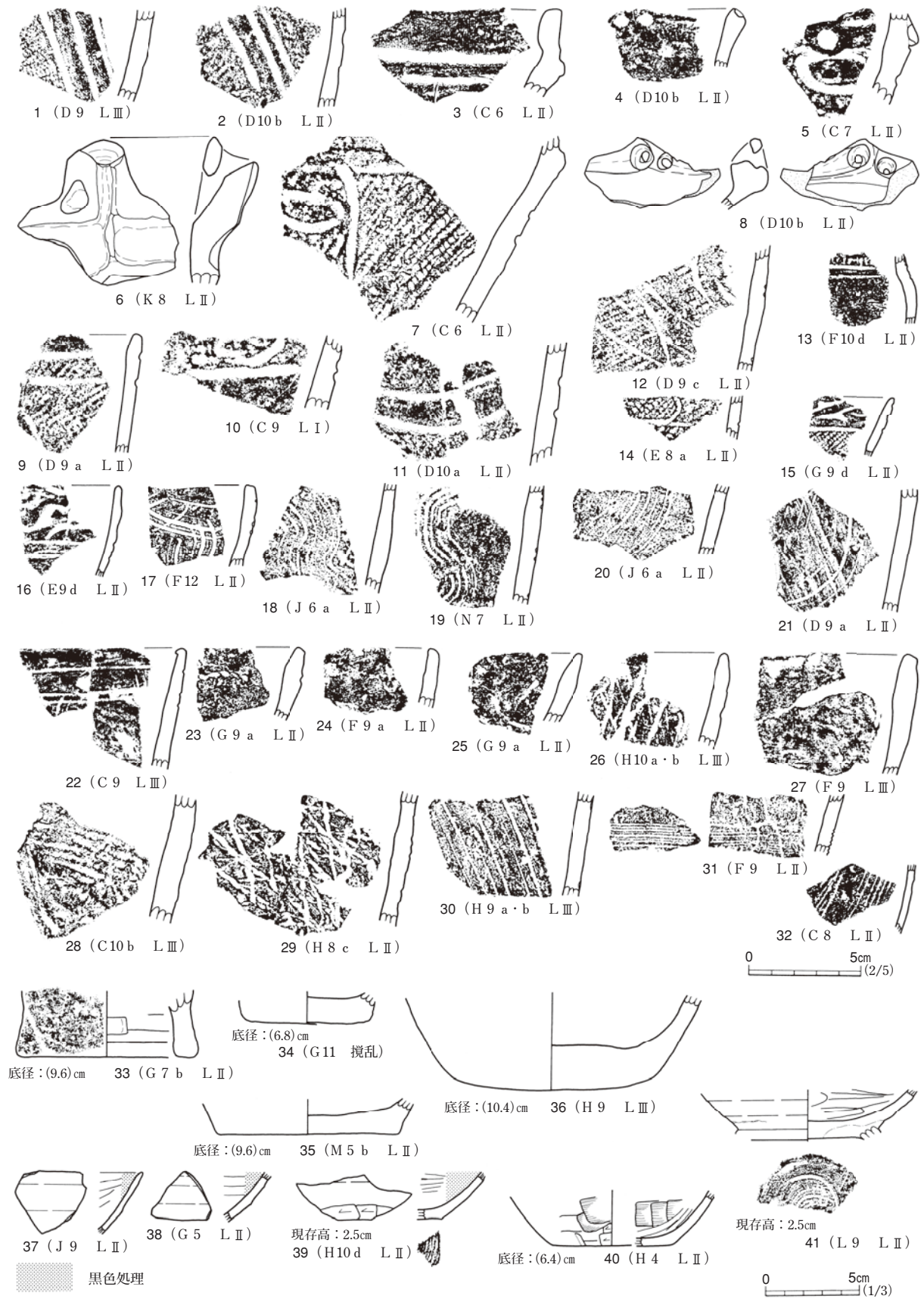


図63 遺構外出土遺物 (16)

が網目状撚糸文、28は斜行縄文が施されている。

7類 (図63-33~36) IV群土器に該当すると思われる底部資料を一括した。33は高台が取り付け、内面にはナデ状の調整痕が認められる。34~36は平底のもので、35・36は底部から外傾気味に立ち上がる。36の底部はかなり厚手のものである。

V群土器 (図63-32) 弥生時代の土器群である。32は胴部破片と思われ、弥生時代後期の櫛描文系の土器と思われる。櫛歯状工具により弧状の曲線文が描かれ、弧文と弧文の間の無文部には赤色塗布されている。 (国 井)

VI群土器 (図63-37~41, 写真73) 平安時代の土師器を一括した。器種は杯と甕である。

平成9年度の試掘調査で出土した土師器は9点、今回の本調査で5点が出土した。器種は杯と甕のみである。試掘の土師器片はすべて4号トレンチから出土し、本調査でもその付近から同時期と推定される土師器片2点が出土した。竪穴遺構の周辺から出土しており、この遺構に伴うものと考ええる。他の4点については、それぞれ北側斜面や南側斜面上から出土している。

図63-37~39, 41は土師器杯である。37~39は、ロクロ成形による破片で、内面にはヘラミガキ後、黒色処理が施され、37は器壁が4mmとかなり薄いものである。39は底部が回転糸切りにより切り離され、外面の体部下端には手持ちヘラケズリが施されている。40は土師器甕である。非ロクロ成形による底部破片で、外面にはヘラケズリ後ナデが施され、内面にはナデの後にヘラミガキが施されている。41は、ロクロ成形による高台付杯で、高台と口縁部を欠損する。底部は、回転糸切りにより切り離され、底部から内湾気味に立ち上がる器形を呈する。内面には、太めのミガキが施され、黒色処理は観察できなかった。 (関)

石 器 (図64~69, 写真74~77)

遺構外から出土した石器は、第2章第1節1において石器類と示したように647点である。その内訳は、石鏃(未成品を含む)16点、石錐1点、削器2点、搔器1点、不定形石器1点、打製石斧2点、磨製石斧2点、磨石・凹石16点、石皿1点、砥石2点である。その他601点の剥片と石核1点、砥石3点が出土している。図64~図69まで石器を図示しており、併せて個別に計測値・石質を掲載しているため、石器ごとの項目では特徴的なことのみ記述する。

剥片石器では、石鏃が16点出土している以外は1・2点出土しているのみで、礫石器では磨石・凹石が17点と比較的多く出土している。石質は、剥片石器類で最も多いのは流紋岩で、ついで黒色頁岩が多く見られる。珪質頁岩・鉄石英・チャートは極少数である。礫石器類では流紋岩・デイサイト・安山岩・花崗岩・花崗閃緑岩など様々なものが使われており、花崗閃緑岩が若干多いものの大きな片寄りは見られない。

石 鏃 図64-1~図65-1までが石鏃もしくは未成品である。図64-12~15は未成品であるが、図64-10・11, 図65-1も未成品と考えられる。完成品の基部形態は図64-1~5が凹基, 6が凸基, 7~9が平基で凹基のものが多い。また完成品と考えられるものの中にも、7・8のように

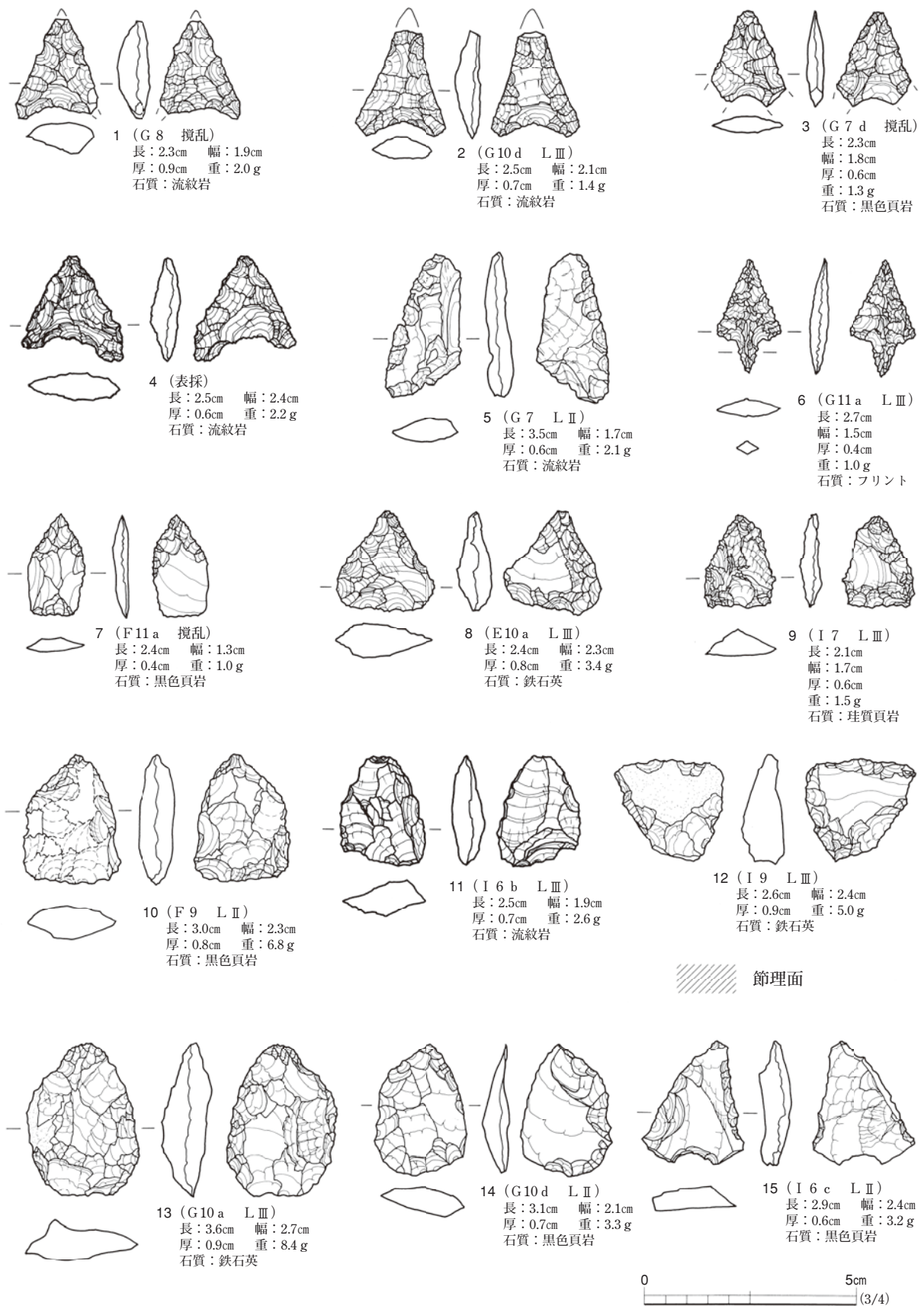


図64 遺構外出土遺物 (17)

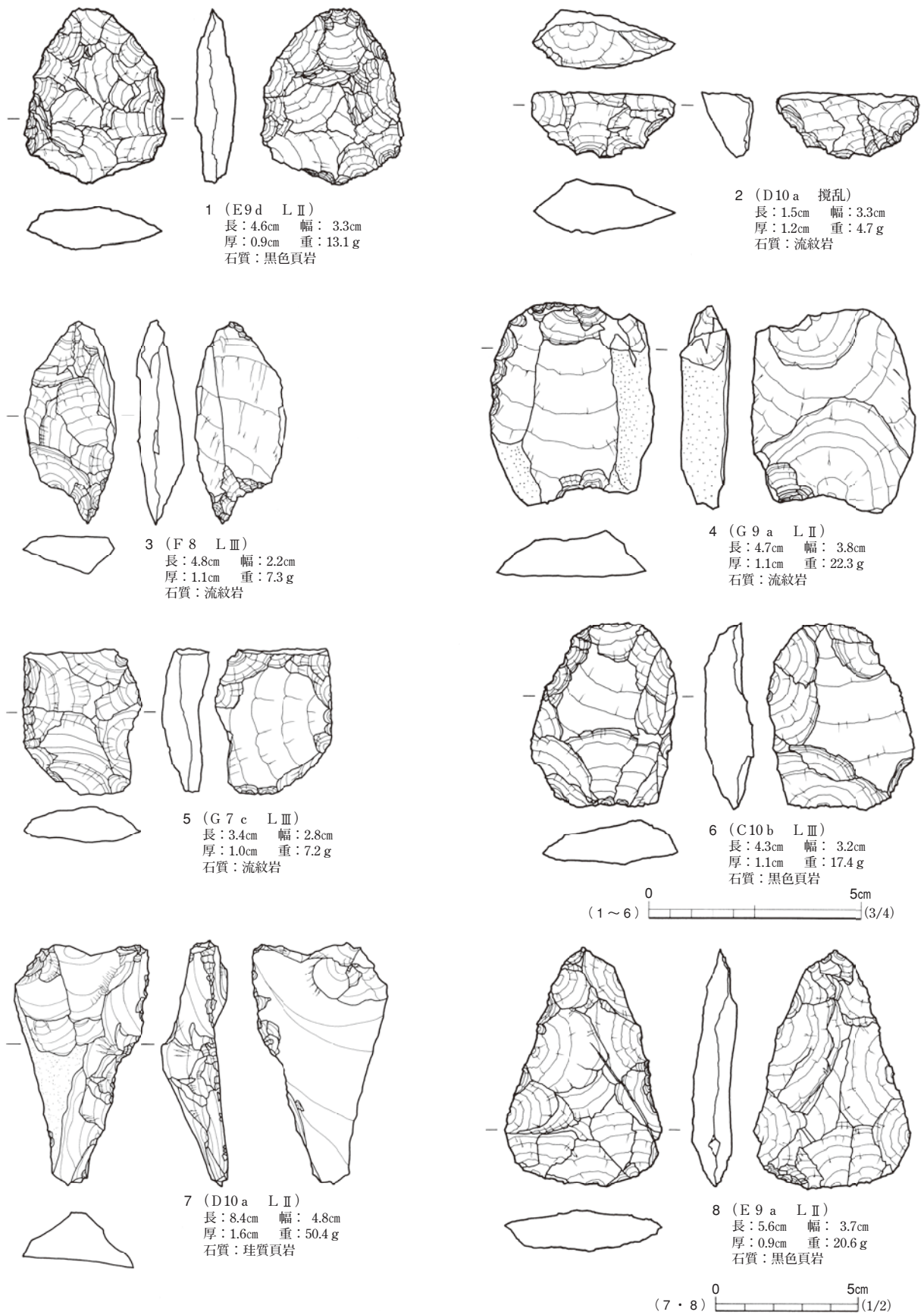


図65 遺構外出土遺物 (18)

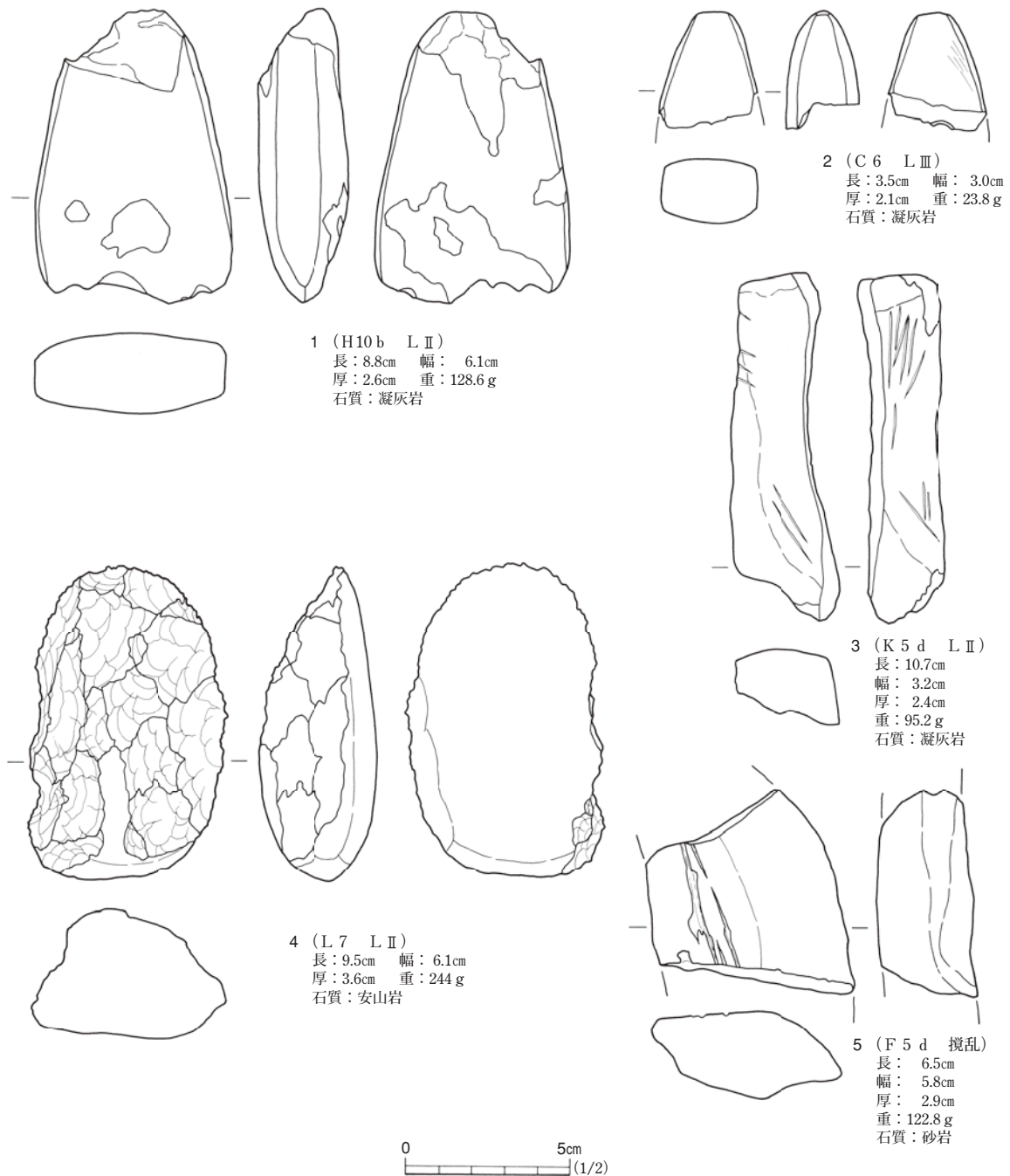


図66 遺構外出土遺物 (19)

主要剥離面を残すものもあり形態は様々である。

石 錐 図65-3, 1点のみである。楕円形の剥片の一端を両側から調整しているだけで、他の側縁の調整が甘く使用に堪え難いことから、未成品だと考えられる。

削 器 図65-4・5に図示してある。どちらも側縁に刃部が作出される以外は細かい調整が見られない石器で、部分的な調整のみで道具として利用している。刃部は他の側縁に比べて鋭角である。4は左側縁の刃部が摩滅している。

搔 器 図65-6に図示してある。比較的全体に剥離が認められるが、石器下部にやや刃部作出

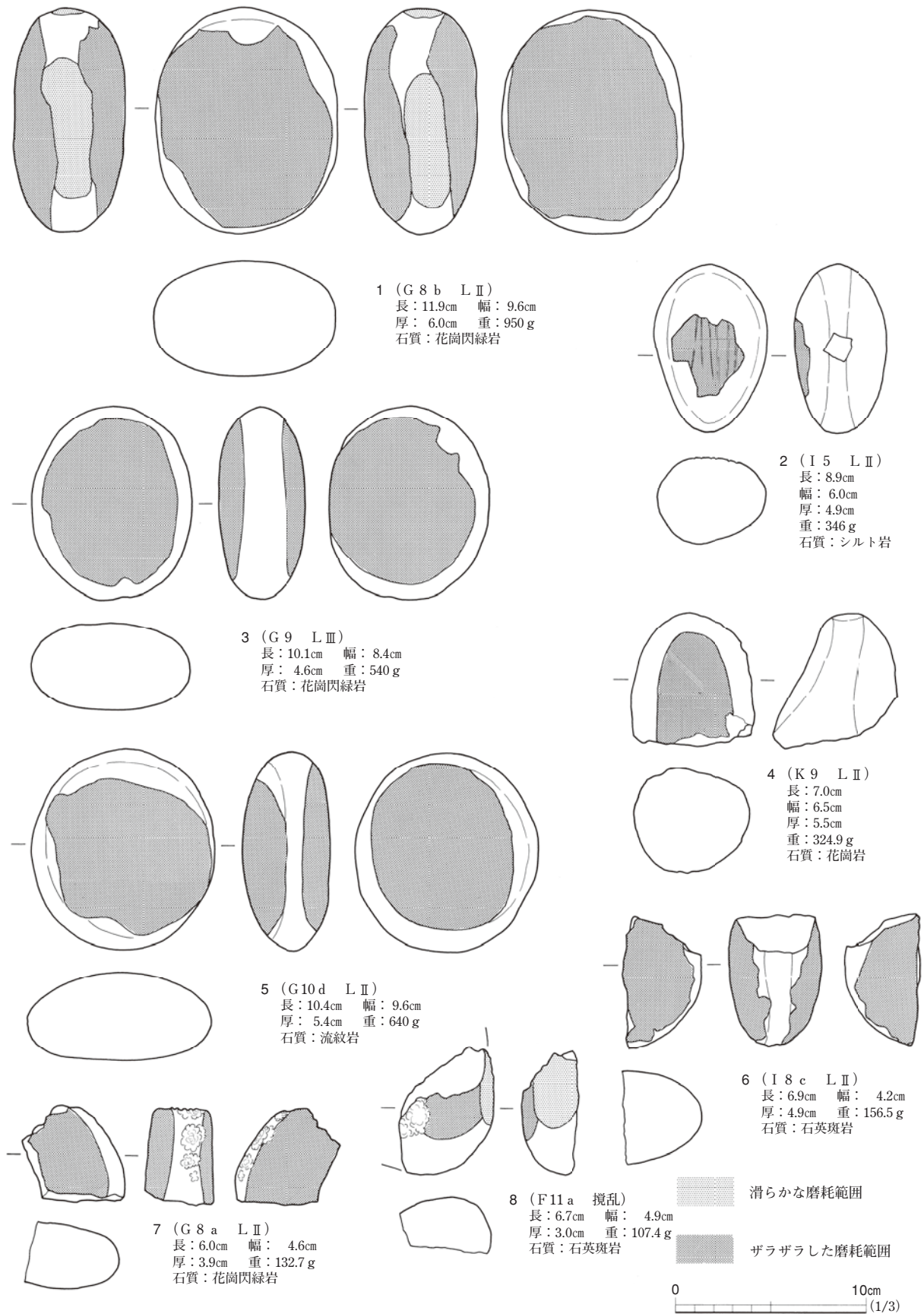


図67 遺構外出土遺物 (20)

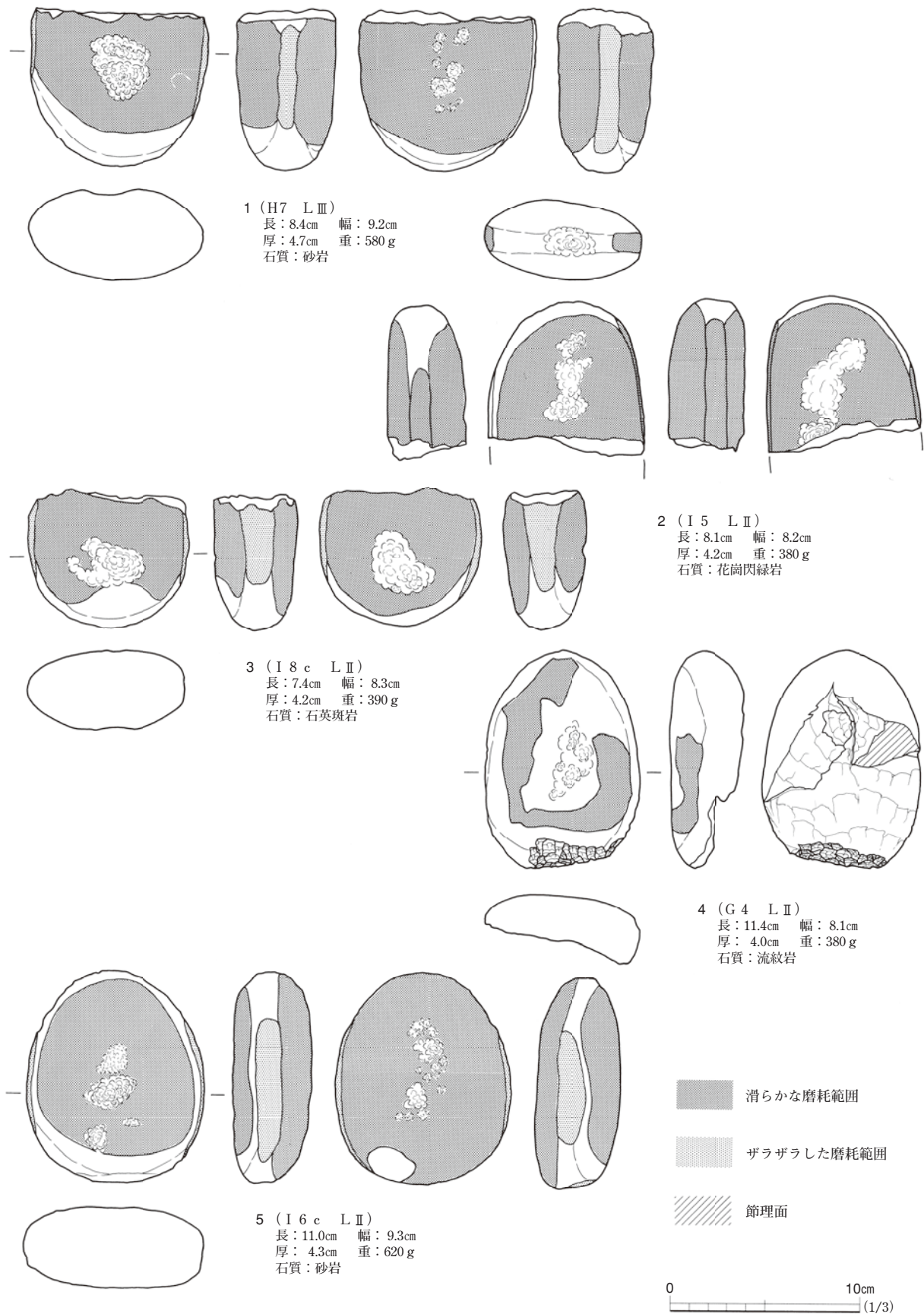


図68 遺構外出土遺物 (21)

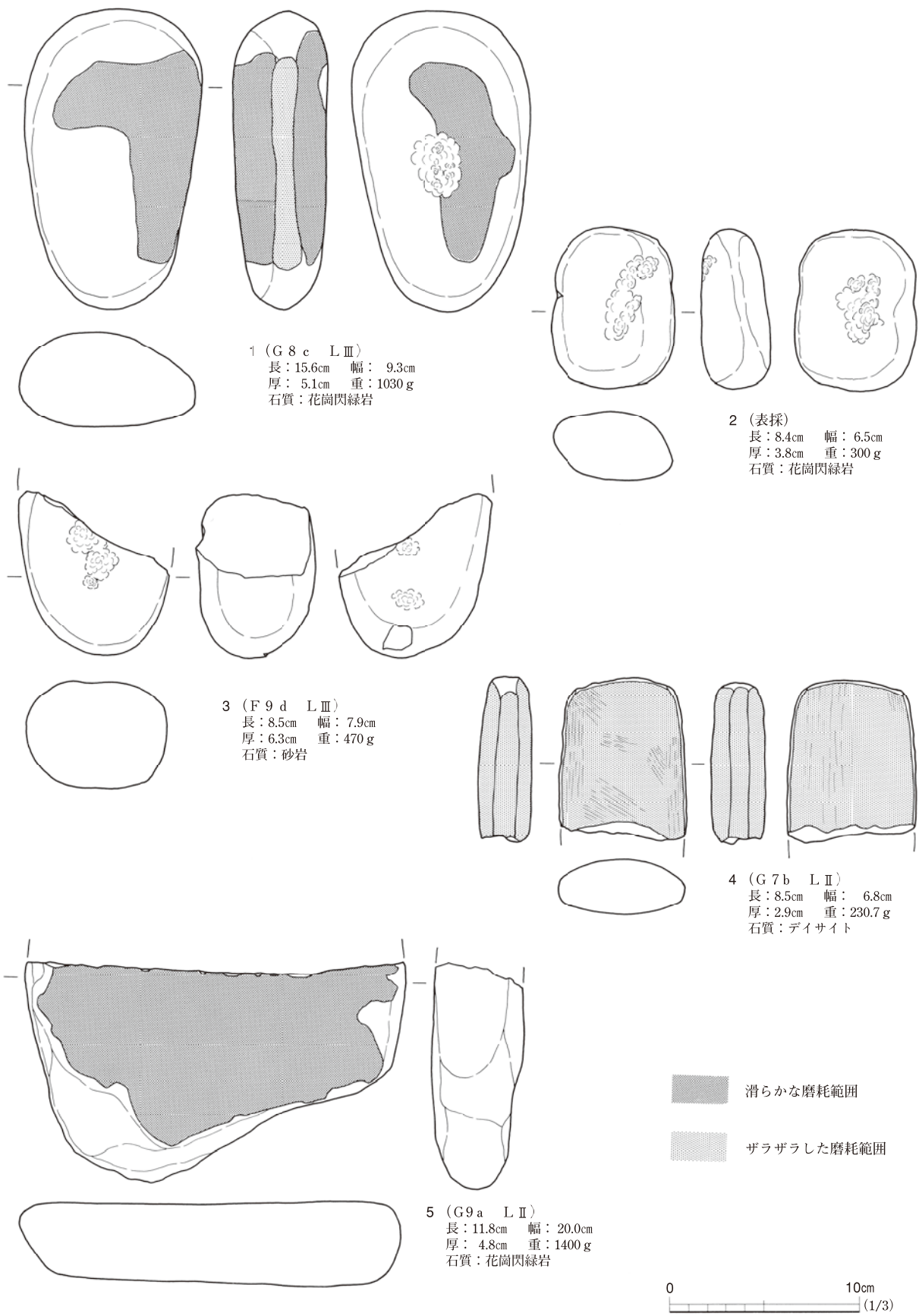


図69 遺構外出土遺物 (22)

の調整が多く見られ直線的な刃部になっている。刃部は両面から加工されており鋭い。側縁の加工より端部の加工が明瞭であるため搔器としたが、左側縁も鋭く調整されていることを考慮すると、削器として利用していたことは否定できない。

不定形石器 図65-7に1点示してある。自然面を残していることや調整の入り具合を見ると、何らかの未成品である可能性が高いと考える。

打製石斧 図65-8と図66-4に示してある。図65-8は小形の石斧で側縁の調整が丁寧に施され形が整えてある。刃部には細かな剥離が見られ、使用した痕跡とも考えられる。図66-4は磨石の可能性のある礫を素材として作られた石斧で、側縁から調整加工をして成形し、一端部は自然面を残した片刃の石斧もしくはその未製品である。先端部が若干摩滅しているが使用の痕跡は明瞭ではない。

磨製石斧 図66-1・2に示してある。2は欠損品で基部と思われる。1はほぼ完形品であるが、凝灰岩製であるためか風化して部分的に欠損している。ただ表面の刃部付近に見られる1cm程の円孔は、貫通していないものの意図的に開けられている可能性が高いため、当時すでに石斧としての機能を消失していたものと考えられる。

磨石・凹石 図67-1～図69-4まで図示してある。全部で17点である。内訳は磨石7点、磨石と凹石を兼ねるものが8点、凹石2点である。磨石は両面を使用するものが大半で、片面のみ使用のものは少ない。磨石・凹石兼用のものは、欠損して全体像が不明なもの以外両面に磨面・凹みが見られる。図67-7のように側縁に凹みが見られるものや、図68-4のように片面中央から割れた後、一端部に調整を加えて刃部を作り出し、別な用途を持つ石器へ転化したと考えられるものもある。図69-4は欠損しており、全体像がつかめないため磨製石斧の可能性も捨て切れないが、磨石に含めて考えた。また、熱を受けていると考えられるものが4点あるが皆共通して割れている。

石 皿 図69-5, 1点のみ出土している。欠損しており本来の形態は不明だが、使用面が平坦で均一であることからおそらく片面全面を使用していたと考えられる。また、熱を受けている可能性が考えられるが判然としない。

石 核 図65-2に1点示してある。流紋岩製の小形のものである。上面は平坦に調整されており側縁からは様々な方向から剥離が入っている。

砥 石 図66-3・5に示してある。5は片面に線条痕が認められる有溝砥石と考えられる。3は金属器に使用されたものと考えられるが、本遺跡では平安時代の遺物も出土していることからこれに伴うものと思われる。

(新 海)

土 製 品 (図70, 写真73)

図70-1の1点のみである。1は土偶の胴部片と思われる。胎土には植物繊維がわずかに混和されることから、本資料は、Ⅲ群土器の時期に近いものと考えられる。表面には粘土紐の貼付文があり、裏面には半截竹管による平行沈線が施されている。器面には、2つの貫通孔があり、この孔は

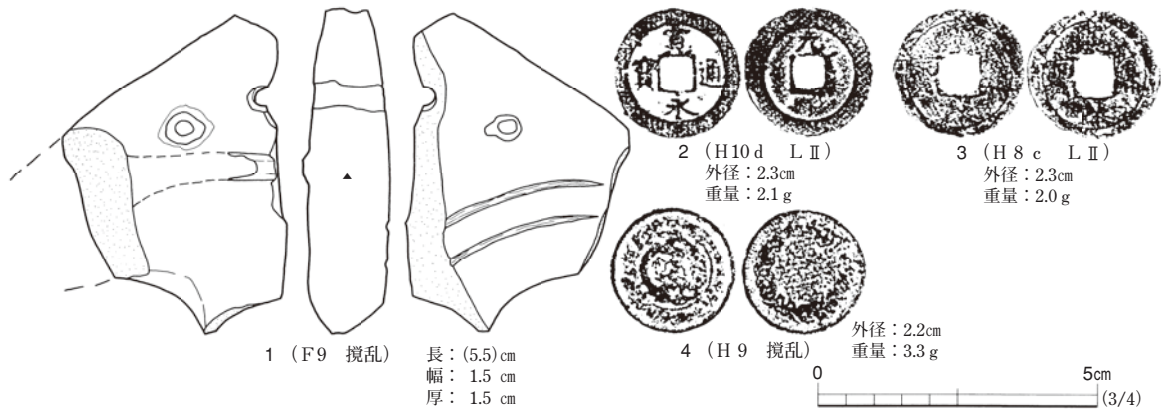


図70 遺構外出土遺物 (23)

製品の焼成後に穿孔されている。

(国 井)

銭 貨 (図70, 写真73)

図70-2～4は銭貨で、2と3は「寛永通寶」である。いずれも表面の「寶」の「貝」の下がカタカナの「ハ」になるため、これらは新寛永通寶と呼ばれるもので1697～1747年、1767～1781年に鑄造されたものである。2は背面に「元」字のある3期の新寛永である。4は、明治十四年の半銭銅貨(1/2sen)で、表面には竜の図柄が描かれている。

(細 山)

第7節 試掘調査出土遺物

本遺跡の試掘調査は、第1章第2節で述べた通り、平成9年・10年の2回にわたって行われている。この試掘調査の報告(1998:高橋他, 1999:岡田他)では、出土遺物が全く掲載されていないため、今回の発掘調査報告で掲載することとした。遺物は、トレンチNo.順に並べて図71・72に示した。土器の説明については、本章第1節-3に示した分類で報告する。出土遺物は縄文土器54点、土師器9点、石器2点である。

土 器 (図71・72)

I群土器は図71-1, 図72-5が該当し、器面に条痕文が確認されることから2類土器に相当する。いずれも、胎土には植物繊維が混和されている。図71-1は条痕文地文の上に口縁部と胴部を区画する刺突列が施され、口縁部には粗い平行沈線による山形文が描かれ、口唇部には刺突が施されている。

II群土器は図71-2, 図72-7・10が該当し、いずれも、胎土には植物繊維が混和されている。図71-2は口縁部と胴部を区画する隆帯が施され、口縁部には結束羽状縄文が施文されている。また、隆帯上には連続する刺突が施されている。本資料は胎土に植物繊維を含み、結束羽状縄文の特徴から2類に比定される。図72-7は異原体により羽状縄文, 10は斜行縄文が施され、これらの原

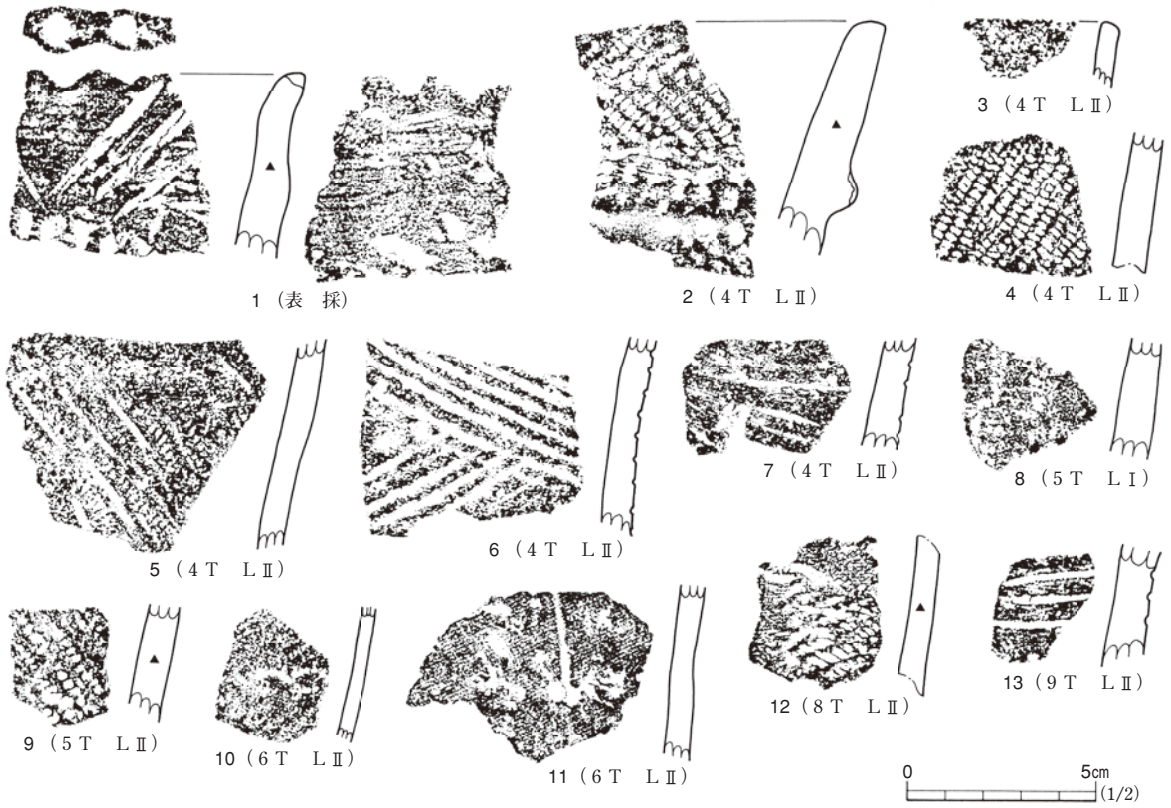
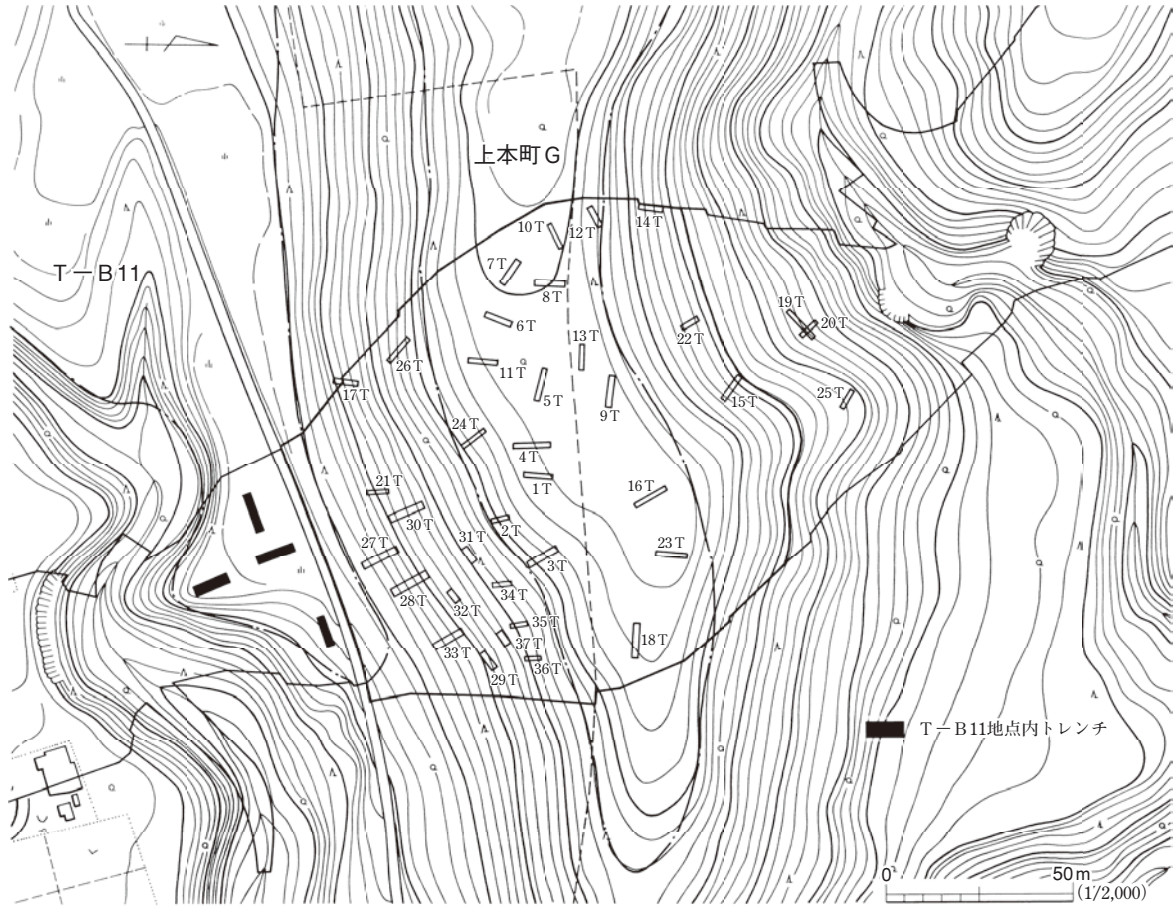


図71 試掘トレンチ配置図および出土遺物

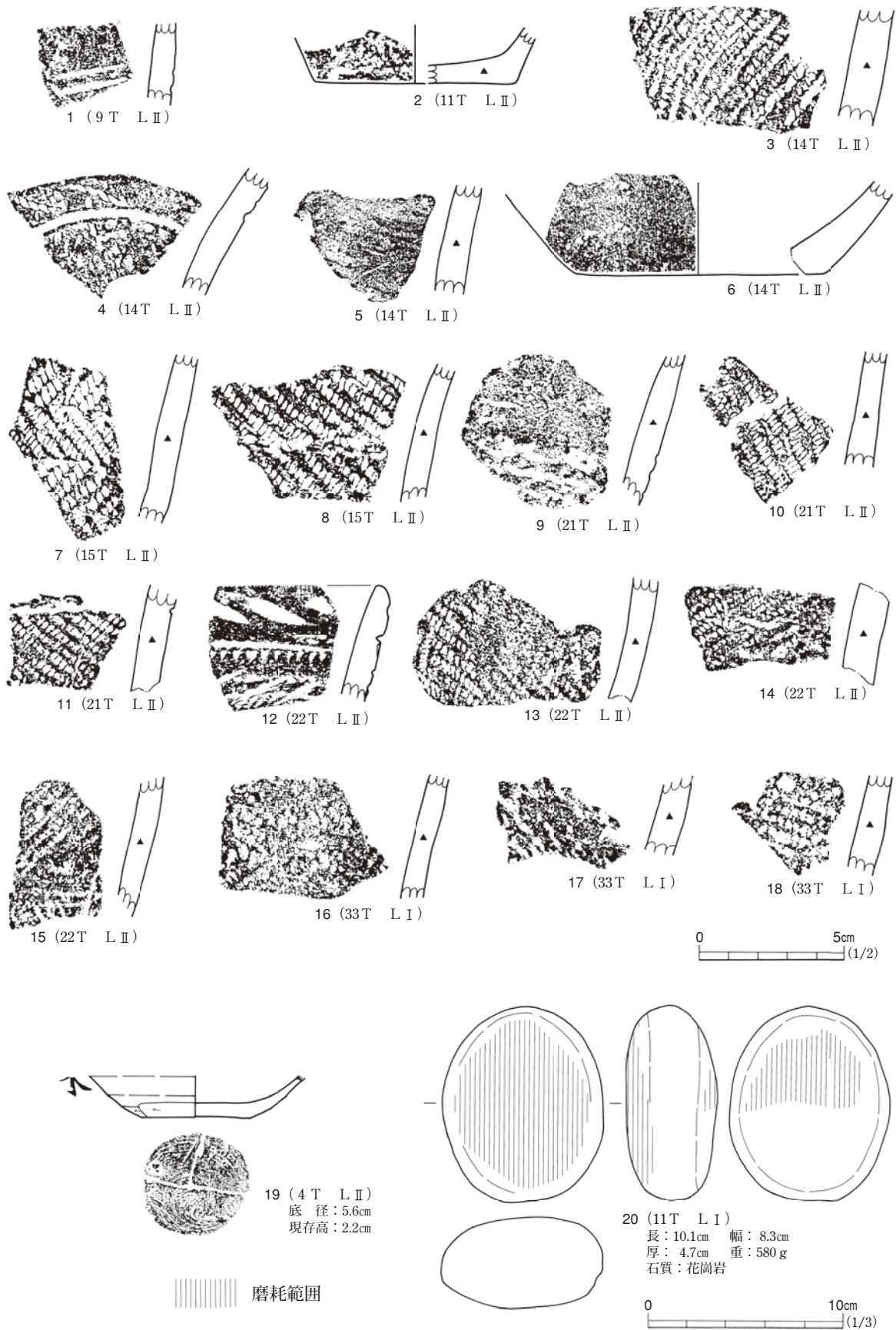


図72 試掘出土遺物

体には、いずれも0段多条が使用されている。

Ⅲ群土器は図71-3~9, 11~13, 図72-1~3, 8・9, 11~14, 16~18が該当する。これらの中には、胎土に植物繊維の混和痕の有無が認められる。

1類は浮島式系土器であり、図71-6・7・13, 図72-12は平行沈線文や変形爪形文が施されていることからa種, 図71-8は波状貝殻文が施されていることからd種に該当する。3類は大木式系土器であり、図72-1・11は沈線文が施されていることからa種, 図71-12, 図72-9は結節回転文が施されていることからd種に該当する。4類はⅢ群土器に該当するものと思われる破片・胴部資料であり、図71-3~5, 9, 図72-2・8・13・14, 16~18が該当する。5類はⅢ群土器に該当するものと思われる底部資料であり、図71-11, 図72-3が該当する。

Ⅳ群土器は縄文時代中期~晩期の土器群であり、図71-10, 図72-4・6が該当する。図72-4は縄文時代後期中葉に比定され、3類に相当する。図71-10は器壁の薄さや結節回転文が施文される特徴から縄文時代晩期前葉の大洞BC式期に比定され、4類に相当する。図72-6は胎土の特徴から5類に相当するものと思われる。

Ⅴ群土器は平安時代の土器群であり、図72-19が該当する。19はロクロ成形により、底部が回転糸切りにより切り離されている。器形は底部から外傾気味に立ち上がり、内面の底部下端には手持ちヘラケズリが施されている。また、外面には墨書が確認されているが、何らかの文字が書かれていたものと思われる。

石 器 (図72)

図72-20は磨石である。河原石を使用したものと思われ、表裏面には滑らかな磨り面が観察される。

(国 井)

第3章 考 察

第1節 遺構について

1 竪穴住居跡

上本町G遺跡より検出された竪穴住居跡は全部で11軒あり、時期ごとに分類すると早期後葉の可能性のあるもの1軒(S I 07)、前期前葉；宮田Ⅲ群期のもの1軒(S I 02)、前期後葉；大木4式・浮島Ⅱ式期のもの5軒(S I 01・03・04・06a・09)、不明4軒(S I 05・06b・08・10)である。検出数や遺物の出土傾向などを併せて考えると、前期後葉段階の資料が主体を占めているといえる。今回は、前期後葉段階の竪穴住居跡について、本遺跡検出の住居跡と、隣接する本町西A遺跡の竪穴住居跡をベースにして、県内の類例との比較を通して、前期後葉の住居跡を考えてみたい。

1. 各遺跡の前期後葉大木4式併行期の竪穴住居

[上本町G遺跡検出の前期後葉の竪穴住居跡]

平面形と規模	炉の数と形態	柱 構 造	備 考
S I 01 楕円形 (4.0×3.0m)	1基 掘り窪みあり	壁際に5本	南側斜面崩落と風倒木により一部欠失
S I 03 楕円形 (6.1×4.5m)	3基 掘り窪みナシ	壁際に8本 中央に3本 中央よりに5本	北壁の半分が風倒木により欠失
S I 04 楕円形 (4.6×3.6m)	1基 掘り窪みあり 1基 掘り窪みナシ	壁際に4本以上 中央よりに1本	北東部が風倒木により欠失
S I 06a 楕円形 (4.6×6.8m)	2基 掘り窪みナシ	壁際に6本以上	東壁の半分風倒木により欠失・S K 20が重複
S I 09 楕円形 (5.4×4.0m)	焼土が確認されないが 弱い掘り窪みあり	壁際に10本 中央よりに2本	焼土や炭化物出土状況より焼失家屋の可能性あり

[本町西A遺跡検出の前期後葉の竪穴住居跡]

平面形と規模	炉の数と形態	柱 構 造	備 考
S I 01 不整長楕円形 (8.9×4.3m)	2基 掘り窪みナシ	壁際に10本 中央に1本 中央よりに4本	東側一部が調査区外にのびるため不明
S I 02 隅丸長方形 (7.0×3.0m)	3基 掘り窪みナシ	壁際に9本 中央に1本？ 中央よりに2本	南角に踏み締まり部分があり、入り口部と考えられる
S I 03 不整楕円形 (7.0×4.6m)	2基 掘り窪みナシ	壁際に8本 中央に1本 中央よりに4本？	

平面形と規模	炉の数と形態	柱構造	備考
S I 04 不整楕円形 (6.0×3.5m)	2基 掘り窪みあり	壁際に4本 中央に1本 中央よりに1本	北東壁1/4を消失
S I 07 方形or長方 (4.5×1.6m)	不明	壁際に1本以上 中央よりに3本以上	北西側が破壊されている

以上、上本町G遺跡と本町西A遺跡の諸特徴を列記した。これらの諸特徴より共通点と相違点を以下に抜き出す。

(1) 共通点

平面形 楕円形・不整楕円形・隅丸長方形など、概ね同様な形態を有する。

規模 両遺跡全体から長径(長軸)が、4.5~6.0mのものがほぼ中規模の住居として捉えられる。

炉跡 一住居内に2~3基の炉跡を持つものがほとんどである。

柱構造 全ての住居が壁際に壁柱を巡らしており、住居中央部に柱を1本持つものも多く見られる。

(2) 相違点 (主に上本町G遺跡と本町西A遺跡間に見られる相違点。)

規模 本町西A遺跡では長径(長軸)が、7.0~8.9mの大形のものが目立つ。

炉跡 上本町G遺跡では掘り窪みを持つものが多いのに対し、本町西A遺跡では掘り窪みを持たないものが多い。

柱構造 本町西A遺跡のほうが上本町G遺跡より柱の本数が多い

以上の共通点・相違点を念頭に置き、続いて県内の他遺跡の例を見てみる。

以上、羽白D遺跡・宮内A遺跡・仲ノ縄B遺跡で検出された前期後葉の竪穴住居跡の諸特徴を列記した。

[羽白D遺跡(飯館村)検出の前期後葉の竪穴住居跡] (鈴鹿1988)

平面形と規模	炉の数と形態	柱構造	備考
S I 23 ワラジ形 (7.9×4.3m)	5基 掘り窪みあり	壁際に7本 中央よりに11本以上	東壁が欠失しており正確な平面形・規模は不明
S I 31 長方形 (5.4×3.5m)	4基 掘り窪みナシ	壁際に5本以上 中央よりに10本以上	北東壁が欠失しており正確な平面形・規模は不明

[宮内A遺跡(飯館村)検出の前期後葉の竪穴住居跡] (鈴鹿・能登谷1990)

平面形と規模	炉の数と形態	柱構造	備考
S I 13 楕円形 (5.1×4.3m)	1基 掘り窪みナシ	壁際に12本以上 中央よりに8本以上	北西側に一段高いテラスがある

[仲ノ縄B遺跡（船引町）検出の前期後葉の竪穴住居跡] (山岸1993)

平面形と規模	炉の数と形態	柱 構 造	備 考
S I 11 楕円形 (3.0×2.3m)	1基?掘り窪みあり	壁際に4本 中央よりに1本	南西壁が欠失しており正確な平面形・規模は不明
S I 12 楕円形 (5.0×2.8m)	1基 掘り窪みあり	壁際に1本 中央に2本	南壁が欠失しており正確な平面形・規模は不明
S I 13 楕円形 (4.4×2.9? m)	1基?掘り窪みあり	住居外に3本 壁際に2本 中央に1本 中央よりに1本 住居外に4本	南壁が欠失しており正確な平面形・規模は不明

平面形は、楕円形を基調としておりワラジ形も概ね同形と考えられる。規模は長径（長軸）が、羽白D遺跡S I 23が7.9mで大形であること、仲ノ縄B遺跡S I 11が3.0mと小形であること以外は、中規模のものが主体を占めている。炉跡は、数の面では羽白D遺跡では4・5基と複数見られるのに対し、宮内A遺跡・仲ノ縄B遺跡では1基ずつで、それぞれにばらつきが見られる。炉の形態では羽白D遺跡・宮内A遺跡では掘り窪みが無く、仲ノ縄B遺跡では掘り窪みが見られる。柱構造は、羽白D遺跡・宮内B遺跡では壁際に柱を巡らす傾向が見られるが、仲ノ縄B遺跡では全体的に柱が少ないことから、壁際には巡らない、ただ住居プラン外に類似する配置が見られる。

以上の5遺跡の比較から成果を挙げると、以下の①～⑤が考えられる。

- ①平面形は楕円形基調で、少々の変更が見られる程度である。
- ②規模の面では、長径（長軸）が7.0m以上のグループ、6.1～4.4mのグループ、4.0m以下のグループに分かれることから、これで大形・中型・小形のグルーピングができる。
- ③炉跡は、1基のタイプと2・3基が主体であり、4・5基伴う羽白D遺跡の構造は特殊である。
- ④炉の形態で、掘り窪みを持つものが主体の上本町G遺跡・仲ノ縄B遺跡と、掘り窪みを持たないものが主体の本町西A遺跡・羽白D遺跡・宮内A遺跡と、遺跡単位で差が見られる。
- ⑤柱構造は、いずれも壁際に巡らせる点では共通するが、中央に柱を持つタイプや主柱になる柱を持つタイプがあり、種別が考えられる。

現時点において、①・②は概ね規則性を持つと考えてよいのではないと思われる。また③も、炉跡が1基のもの、2・3基のものは分布や類例の点からそれぞれ規則性を持つものと考えられる。⑤についても、壁際に柱を配置する形態をベースに中央に柱を持つタイプと持たないタイプが主体的な柱構造ではないかと考えられる。以上は福島県域における縄文時代前期後葉（大木4式併行期）の竪穴住居の類型と諸特徴ではないかと思われる。それに対し、③の羽白D遺跡の炉跡4・5基や、⑤の主柱になる柱などは特異な様相であるし、④は遺跡単位で大きく差が見られるなど、不明確な点が残る。以降この点を問題点として提起し検討してみる。

2. 長方形大形住居の観点

③で提起した羽白D遺跡のS I 23・S I 31は、⑤の主柱になる柱の特徴を併せ持つ住居跡であり、報告者も羽白D遺跡の考察中では検討も慎重だが、宮内A遺跡の考察において大形住居の一形態として考えている。羽白D遺跡のS I 23・S I 31の最大の特徴は柱の棟通りが整然としており、竪穴のプラン内に掘立柱の柱構造をそのまま当てはめて建物にしていると形容することもできる。炉跡の配置も、棟通りに平行して列点状に位置しており規格性が強く見られる。規模の面からこの2つの住居跡は、いわゆる長方形大形住居の形態を有するものだと考えられる。規模や柱配置でこれに近い遺構として、本町西A遺跡のS I 01・S I 02・S I 03が候補に挙げられるが、主柱になりそうな柱の棟通りが左右対称の企画性の点で弱く、羽白Dとは同列では扱えないことから、前述の②の分類の観点で大形の住居に属すると考えたほうが良いと思われる。

県内で長方形大形住居と考えられる遺構は早期末葉段階から確認されており、三春町春田遺跡・飯館村羽白C遺跡などがこれに該当する。前期初頭では羽白C遺跡。前期前葉では相馬市段ノ原B遺跡・福島市獅子内遺跡。前期中葉では福島市宇輪台遺跡に可能性のある住居が認められるが、これらは規模の面で抽出できたもので柱構造は統一性が認めにくく、羽白D遺跡の住居跡と直結して考えるには資料的根拠に根ざした系統性が弱い。今後、それぞれの時期ごとに資料の増加を待たないと特長や傾向は抽出できないものとする。

3. 炉の形態について

④で提起したように炉の形態にはほぼ遺跡ごとに差があり、一つの傾向として捉えられることから、掘り窪みを伴う炉が検出される遺跡と検出されない遺跡では何らかの差があるかを考えてみる。また炉の名称として掘り窪みを持たない炉は、住居床面を燃焼面にしているため「地床炉」と呼べるが、掘り窪みを持つ炉は、住居床面を掘り込んでその底面を燃焼面にしていることから、「掘込炉」(目黒1982)と呼ぶのが適当であるので今後この呼称を用いる。

遺構の点で考えると、住居構造上掘込炉の有無とタイアップして変動する要素は上述の遺構一覧を眺めても看守できない。また集落様相を考えようにも資料は乏しい。それで遺物から考えると、出土土器の傾向で一つ注意すべき要素がある。それは報告書掲載遺物の範囲内になってしまうが前期後葉大木4式併行期の土器で大木4式土器と浮島Ⅱ式土器の遺跡ごとの出土傾向が違う点である。顕著なのは羽白D遺跡と宮内A遺跡で、大木4式併行期土器全体に占める浮島Ⅱ式土器の割合が少ない。この2遺跡は掘込炉が全く検出されておらずこの点で符合するといえる。ただ本町西A遺跡の場合は、上本町G遺跡や仲ノ縄B遺跡と同様の浮島Ⅱ式土器の出土量が多いにも関わらず、掘込炉を持つ住居跡が1/5と低い割合になっており、上述の傾向と一致しない。地域的に言い替えて、羽白D遺跡や宮内A遺跡の所在する飯館村は県北に属し、上本町Gの所在する富岡町や仲ノ縄B遺跡の所在する船引町が県中に属するという線引きも、上本町G遺跡と本町西A遺跡が隣接している以上何ら意味が無い。大まかに大木4式土器と浮島Ⅱ式土器の出土傾向に原因があると指摘す

るにとどめるしかないと思われる。この点については、浮島Ⅱ式土器の主体的分布圏である茨城県の石岡市大谷津A・B遺跡と外山遺跡、ひたちなか市遠原貝塚などで検出された竪穴住居内の炉を検討すると方向性が見出せる。これらの遺跡では浮島Ⅰ～Ⅲ式までの住居跡が検出されているが、それらの住居内の炉は大部分が掘込炉であるものの、時々地床炉も検出されており、両者が並存する様相が見られる。即ち浮島式土器分布圏の特徴として掘込炉を持つ住居跡が主体ではあるが、地床炉も割合的に少ないものの存在するという傾向が認められる。この特徴が、上本町G遺跡と本町西A遺跡の相違に結びつくものと考えられる。さらに、福島県域では大木4式土器が主体的に分布する地域が多いことから、その点で羽白D遺跡や宮内A遺跡の様相が捉えられるものと考えられる。

なお参考までに、福島県内の大木3・浮島Ⅰb式期の住居跡は須賀川市関林A遺跡・小野町柳作B遺跡・福島市宇輪台遺跡で検出されているが、これらの掘込炉の検出例は無い。また、大木5・浮島Ⅲ・興津Ⅰ式期の住居跡が矢吹町白山A遺跡・会津高田町冑宮西遺跡・飯館村松ヶ平B遺跡で検出されているが、これらにも掘込炉の検出例は無い。前後両時期とも資料が少なく増加を待つて検討すべきではあるが、現在のところ掘込炉の伴う割合は少ないと考えられる。

4. ま と め

以上、簡単ではあるが福島県内の大木4式併行期の竪穴住居構造を、平面形、規模、炉跡、炉形態、柱構造の点から検討してみた。その中で楕円形（ワラジ形）の平面形、6.1m～4.4mの規模、1～3基の炉跡、壁際に柱穴を巡らすなどを共通点として抽出した。一方相違点として把握した特性のうちピックアップしたものは、長方形大形住居が、7.0m以上の規模で、掘立柱状の構造柱を持ち、柱列と平行方向に列点上に炉が作られる特徴を有する羽白D遺跡S I 23・S I 31のタイプがこの時期を代表するものと考えられること。また炉跡については、形態の分類をすると地床炉と掘込炉の2種類あり、そのどちらが主体になるかは遺跡ごとに違いが見られることが分かり、浮島式土器の分布と何らかの関連性が認められることが指摘できた。

共通点として抽出した内容は、大木4式併行期の最も典型的な住居構造を示しているものと考えられる。長方形大形住居も、羽白D遺跡S I 23・S I 31の構造が大木4式併行期における典型例と考えている。これらについては追加される資料がよほど違った様相を見せない限り、変更することはないと思われる。それに対して、地床炉、掘込炉の分布状況は、単に地図上での分布としては捉えられず、出土遺物（特に今回は土器）の様相に絡む問題と考えられることから、今後の資料増加に注目したい。

今回は福島県内の資料のみを検討資料として用いたため、隣接各県のより広い範囲の竪穴住居の様相をほとんど提示することができなかった。本県の場合、大木4式土器と浮島Ⅱ式土器が両方分布する地域であり、本来ならば大木4式土器分布圏と浮島Ⅱ式土器分布圏それぞれの竪穴住居の様相を把握してから検討すべきであろうが、時間的問題もあり上述の範囲で収めた。今後も、大木式土器分布圏と浮島式土器分布圏の竪穴住居の様相が福島県内ではどう展開するかを、検討課題とし

て考えていきたい。

2 土 坑

上本町G遺跡より検出された土坑は全部で33基あり、ほぼ縄文時代前期前葉と前期後葉の時期のものと考えられる。今回はこれらの中でも特徴的な、S K 09・16・19・27を取り上げて検討してみたい。

時期・形態で分けてみるとS K 16・19は前期前葉で底面施設を伴い最下層堆積土に焼土を多量に含むタイプで、S K 09・27は前期後葉で底面施設を持たず最下層堆積土に焼土を多量に含むものに分けられることから、各自分けてまとめることにする。

1. 床面施設を伴う土坑

S K 16は上場の規模が1.48×1.34mで、検出面からの深さ68cmを測る。最下層の堆積土は多量に焼土粒を含み、全体的に赤褐色を呈している。底面中央部にはピットが1基あり、底面壁際には周溝が巡る。S K 19は上場の規模が2.64×2.32mで、検出面からの深さ90cmを測る。最下層の堆積土は多量に焼土塊と炭化物を含み、ドーナツ状に分布している。床面中央やや東よりにピットが1基ある。両者は規模と周溝の有無に差があるものの、最下層に焼土を多量に含む点、底面にピットを持つ点は共有している特異点である。どちらも宮田Ⅲ群期に属する遺構であるので、時期が近い県内の類例を扱って比較してみる。

底面施設を伴う土坑を抽出してみた。形態はほぼ円形状を呈しており、規模は径130～180cmの範

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
廣谷地B	S K 40	宮田Ⅲ群期	1.58×1.47 m	66cm	ピット 2 基	焼土・炭化物を多く含む

葛尾村（馬目・山田1980）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
段ノ原B	S K 296	宮田Ⅲ群期	1.88×1.61 m	105cm	ピット 1 基	焼土・炭化物を多く含む

相馬市（吉田他1995）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
猪倉B	S K 37	宮田Ⅲ群期	1.80×1.40 m	80cm	ピット 1 基 溝 1 条	焼土・炭化物を多く含む

相馬市（吉田他1996）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
羽白C	S K 436	宮田Ⅲ群期	1.34×1.28 m	78cm	ピット 1 基	炭化物粒を含む

飯舘村（鈴鹿他1988）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
青宮西	S K 40	前期前葉	1.70×1.61 m	80cm	ピット 1 基 溝 1 条	黄褐色土、自然堆積周溝あり

会津高田町（目黒他1984）

囲が多い。深さはばらつきが見られるが、これは遺跡の削平具合によって検出面と生活面が一致しないことがよくあるので、相対的に土坑上端径と深さを比べた場合に上端幅の方が長いと捉えておく。ちなみに場合にもよるだろうが、この観点と平面形を合わせて考えれば陥とし穴状土坑とは区別できるものとする。底面施設は、土坑中央部にピット1基を持つタイプが典型だが、ピットを複数持つものや溝を併設するもの、さらに周溝を伴う場合もありバリエーションが豊富である。最下層堆積土は、焼土・炭化物を多く含む人為堆積層になるものが多いが、自然堆積で埋没しているものもある。

次に比較のために前後の時期の類例を挙げてみたい。

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
八重米坂A	S K 180	早期後半	1.16×1.08 m	52cm	ピット1基	明黄褐色、人為堆積 橙色土、自然堆積
	S K 203	早期後半	1.01×0.95 m	65cm	ピット1基	

原町市（藤谷他1994）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
廣谷地B	S K 59	早期末葉～ 前期初頭	1.62×0.93 m	52cm	ピット1基	焼土・炭化物を多く含 む 焼土・炭化物を多く含 む
	S K 65	早期末葉～ 前期初頭	1.19×1.18 m	58cm	ピット1基	

葛尾村（馬目・山田1980）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
羽白D	S K 79	前期初頭	1.40×1.36 m	95cm	ピット1基	黄褐色、褐色混土、自然堆積

飯館村（鈴鹿他1987）（鈴鹿他1988）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
獅子内	S K 185	大木2 a 式 期	1.80×1.70 m	53cm	ピット1基	にぶい黄褐色土、自然堆積

福島市（鈴鹿他1996）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
中ノ沢A	S K 103	大木2 a 式 期	1.80×1.74 m	120cm	ピット8基	焼土・炭化物を多く含 む

郡山市（本間他1989）

遺跡名	S K 番号	時期	上場規模	深さ	底面施設	最下層堆積度
宇輪台	S K 87	前期中葉	1.37×1.34 m	117cm	ピット1基	暗褐色土、自然堆積

福島市（丸山他1993）

早期後半や早期末葉～前期初頭にかけての資料は、平面形はほぼ円形で類似しているものの、規模は100～120cm代の小形のものが目立つ。上端幅が深さよりも長いのは変りが無い。床面施設はピット1基が基本で前期前葉の在り方と共通である。大きく違うのは最下層堆積土で、廣谷地B遺跡以外では焼土・炭化物を伴わず、自然堆積の場合も多い。前期中葉の資料は宇輪台遺跡一例のみであるが、形態や床面施設は前期前葉の資料と大差ない。最下層堆積土は暗褐色土の自然堆積である。ただ前期中葉段階は資料が少ないため、今後の資料増加を待って検討すべき問題である。

以上の結果、資料が多いのは早期末葉～前期前葉にかけての時期で、土坑の形態や床面施設は概

ね同様であるといえる。最下層堆積土は早期後半や前期初頭の例によると、特徴的な焼土や炭化物が投棄されない場合もあり、必ずしも底面施設を伴うものが特殊な堆積土を持たないことが分かる。底面施設は上述の時期以外に、法正尻遺跡（大木7a式）などにも見られることから、早期後半（貝殻沈線文系）～中期初頭まで存在している可能性が考えられる。ただ全体的に資料が乏しく、全く資料の無い時期もあることから時間的・系統的な検討は先送りしなければならない。底面施設の種類は、ピット・底面中央を横切る溝・周溝があり、ピットが最も多く溝や周溝は極端に少ない。底面施設の機能についてはいずれの場合も貯蔵穴と考えており、それに付属する施設という考え方が前提にある。周溝を伴う数少ない例である胃宮西遺跡S K 40は、『胃宮西遺跡』（注1）の考察で「排水溝付土坑」として考えられており、秋田県や岩手県のまとまった検出例と共に掲載されている。土器が出土していないため上述しなかったが、猪倉B遺跡S K 108・128のピットや溝も除水効果を考えている。これらは、いずれも溝が併用されるもので、溝を伝ってピットに水が溜まるというシステムが考えられている。これに対しピットのみが設置される土坑は、検出数の割には積極的に機能について論じられていない。『胃宮西遺跡』考察中に見る床面施設の分類でもピットのみ土坑は含まれていないことから、これらについては新しい問題設定が必要であると考えられる。

2. 最下層堆積土に焼土・炭化物を多量に含む土坑

S K 09は上端の規模が2.00×1.66mで、検出面からの深さ60cmを測る。最下層の堆積土は多量の炭化物粒を含み焼土塊も見られる。また、堆積土中に多量の土器が出土している。S K 27は上端の規模が2.00×1.80mで、検出面からの深さ72cmを測る。これも堆積土中に半完形の土器が出土している。最下層の堆積土は炭化物粒・焼土粒を多量に含む。隣接する本町西A遺跡のS K 15も上端の規模が1.58m×1.49mで、検出面からの深さ62cmを測る。最下層堆積土は焼土・炭化物が主体で構成される。いずれも床面施設を伴わない土坑で、この点が前期前葉のS K 16・19とは違う点である。そのためこれらの遺構の場合、最下層堆積土に焼土及び炭化物が多量に含まれるという特徴から類似資料を抽出することになる。規模は径が1.2～2.2mで、上端幅のほうが深さよりも長い。また、前期後葉の資料が少ないため、早期末葉～前期前葉の資料を主に取り扱う。

中ノ沢A遺跡	S K 51	早期後半
八重米坂A遺跡	S K 100	早期末葉
羽白D遺跡	S K 57	前期初頭
段ノ原B遺跡	S K 05・56・61・63・135・136・259	前期前葉

以上の資料に、先述の廣谷地B遺跡S K 59・65（早期末葉～前期初頭）、同遺跡S K 40（前期前葉）段ノ原B遺跡S K 296（前期前葉）、猪倉B遺跡S K 37（前期前葉）、上本町G遺跡S K 16・19が含まれる。

いずれの最下層堆積土にも共通するのは、当然のことながら人為堆積であり、土坑廃絶後の2次

的な利用法であることである。それに対し、相違点として挙げられるのは堆積状況の違いである。大まかに分けると、炭化物を含む焼土を土坑内に意図的に設置するタイプと、単に焼土・炭化物・土塊をまとめて廃棄するタイプということになる。前者の顕著な例は、段ノ原B遺跡S K 296で底面より20cm程の高さに焼土を貼り、踏み固めて、最後に土器を埋設している。墓坑として2次的に利用している。これに類似する例には猪倉B遺跡S K 37があり、私的な判断になるが最下層土の堆積状態から中ノ沢A遺跡S K 51,八重米坂A遺跡S K 100はこれらに含まれるのではないかと考える。上本町G遺跡S K 09・16・19,本町西A遺跡S K 15も同様な可能性を考えている。ただ段ノ原B遺跡S K 296の場合は埋設土器を伴っているが、他の例は明確な埋設土器を持たない。しかし、半完形の土器が検出されている例は先の上本町G遺跡S K 09でも挙げたとおりで散見される特徴である。掘形を伴わないで土器を設置する可能性も考えられるのではなかろうか。後者の廃棄タイプと考えられるものは、最下層土に焼土や炭化物が多量に含まれるものの、主体の土は黒褐色または褐色などであり焼土・炭化物はあくまで含有物の範囲を出ない。また、これらについては、廃棄土を整地したような形跡がないことも挙げられる。

3. ま と め

上本町G遺跡で検出された土坑を通して、早期後半～前期後半にかけての、①床面施設を伴う土坑、②最下層堆積土に焼土・炭化物を多量に含む土坑を見てきた。底面施設（ピット・溝・周溝）は、特に溝・周溝の場合排水施設としての捉えられ方がなされているのに対し、ピットのみの場合同列で扱われていないことが分かった。今後は、遺跡ごとに土坑底面の傾斜を細かく検討してピット一つでも排水効果が見込めるか検証しなくてはならない。さらに、排水施設を持つ土坑と持たない土坑がある原因は何か言及しなくてはならないだろう。最下層堆積土に焼土・炭化物を多量に含む土坑は、いずれも2次的な利用の結果である。一つは埋没途中の穴を整地し墓坑として利用する場合。もう一つは単なるごみ捨て穴である。墓坑として利用されていると考えられる穴は、主に焼土の純層を意図的に設置しており踏み締りが認められる場合もある。ただ今回は墓坑として資料を当てはめたが、墓坑としての決め手になる遺物が出土しているわけではないので、より広い考え方を可能にするには祭祀・儀礼行為として扱ったほうがいいかもしれない。ごみ捨て穴となるものは、焼土を多量に含むものでも焼土粒の状態であることから、主体となる土は別色であり、墓坑と考えられる場合の焼土純層とは明らかに差がある。

以上、特殊な土坑についての問題提起をしてきた。新所見といえるものはほとんど導き出せなく、結果的にこれまで判明している事実に本遺跡の事例を当てはめることに終始した。資料が乏しいこともその理由であるが、筆者の見落としもあるかもしれない。今後、より確実な集成資料化と他地域資料との比較を行えるようにしたい。

(新 海)

(注1) 秋田県杉沢台遺跡, 岩手県長者屋敷遺跡, 岩手県塩ヶ森遺跡, 岩手県西田遺跡の底面施設を

伴う土坑を取りあげて形態分類を行っている。分類は、Ⅰ：周溝のみ、Ⅱ：周溝とピットを持つ、Ⅲ：周溝とピットと溝をもつ、Ⅳ：溝をもつ、Ⅴ：ピットと溝をもつ、に分けられている。ピットは、周溝や溝または両方と併存する資料が紹介されているが、ピット単独の資料については触れられていない。

第2節 遺物について

土 器

1. Ⅰ群土器について

1類は沈線文系の田戸下層式である。図49-6・7は地文に擦痕状の条痕が認められ、他の土器に比べて新しいものである。

2類は条痕文系土器である。図40-12, 図49-8~10, 13, 図71-1は半截竹管により沈線が多用されるもの、口唇部の外角に刺突を施すもの、隆線上に刺突を施すものがあり、このような特徴から茅山下層式期に相当するものと思われる。

2. Ⅱ群土器について

1類は花積下層式である。図49-22・23のように蕨手文の中に円形竹管文が施され、また、図10-3, 図49-26のように文様帯の幅が広がることから、これらの土器は花積下層式土器の中でも新しい段階に位置付けられよう。本類の縄文地文には非結束羽状縄文が施され、この施文された原体の幅には図10-6, 図37-3のようになりに狭いものが認められる。

2類では図10-5や図48-1のように胴部上半の器形がわかるものが見られる。これらの土器は、刺突文を多用して文様帯が描かれているものが多い。本類土器は、従来、相馬郡小高町宮田貝塚出土第Ⅲ群土器として広い時間幅の土器群でとり扱われていたが、その後の資料の増加に伴い、良好な資料としては相馬郡相馬市段ノ原B遺跡、福島市獅子内遺跡等が挙げられる。特に、獅子内遺跡では、土器の中に前段階の文様要素と、それと同居する文様要素を古い段階としたⅡ群2 a類土器、幅の広い重層ループ縄文地文帯が地文部と無文部の組み合わせにより幾何学的図形の文様帯が形成されるものや、地文部を部分的に磨消して形成された無文部の図柄が描かれているもの、また、地文にはループ縄文が多用されるⅡ群2 b類土器の2つに分けている(鈴鹿1999)。これを参考に見ると、本類土器から地文以外の文様要素には刺突文を多用する図10-5や図48-1, 図49-29~36があり、また、無文部を形成する図51-14・18は、刺突文とループ縄文の間に無文部が形成される図48-1と同様のものと考えている。このことから、本類土器は、獅子内遺跡Ⅱ群2 a類土器に相当するものと思われる。

3類土器は瘤状の粘土貼り付けと沈線文により梯子状に描かれ、その特徴から関東系の関山式土器の古い段階の土器群と思われる。

4類は地文の違いにより非結束羽状縄文、結束羽状縄文、ループ縄文、斜行縄文に分けられてい

る。これらの中で、原体幅の狭い非結束羽状縄文は本群1類に相当するもの、それ以外は、本群2・3類に相当するものと思われる。

5類は底部資料であり、丸底のものではなく、いずれも平底を呈するものである。底部には、刺突文や縄文が施文され、本群2・3類に相当するものと思われる。

3. Ⅲ群土器について

本群土器は、縄文時代前期後葉の土器で、本遺跡出土土器の中で主体を占めるものである。これらの土器群は、東関東地方を中心に出土する浮島式系土器（1類）、北関東地方から中部地方を中心に出土する諸磯式系土器（2類）、東北南部を中心に出土する大木式系土器（3類）からなる。その多くは、大木式系土器が主体となるため、浮島式系土器・諸磯式系土器が異系土器とされているが、会津地方南部、中通り南部、浜通りの地域によっては浮島式系土器が大木式系土器よりも出土量が上回ることがある。本遺跡では、浮島式系土器と大木式系土器が同じ割合で出土するのに対し、諸磯式系土器の出土量は極端に少ない。本県では、これらの土器が一緒に出土するケースが多いため、ここでは各土器群の特徴をまとめ、同時期の遺跡との比較検討を行う。

①浮島式系土器 1類土器は、a種とした平行沈線文と変形爪形文を施すものが最も多く、続いてd種とした貝殻文が多い。その他には、b種の輪積痕、c種の刺突文が見られる。1種の土器を見ると、図20-1、図37-21、図53-7のように口唇部や口端に斜めの刻みの有無はあるものの、2段の変形爪形文の間に斜めの刻みが入り、その下には平行沈線文により菱形あるいは山形状に描かれることが多い。器形は、平縁と波状口縁からなり胴部上半から口縁にかけて大きく外反あるいは外傾する。このような土器の特徴は、茨城県美浦村浮島貝ヶ窪貝塚（西村1965）の第2群土器に相当することから浮島Ⅱ式に比定される。本類は、土器の文様要素から古い特徴と新しい特徴が確認できる。古い特徴として、斜めの刻みや低隆起帯が認められる。斜めの刻みと、図53-41、図54-2、図56-4のような低隆起帯は、前段階の浮島Ⅰb式から見られる。新しい特徴として、図53-11~14は、前述した土器の特徴とほぼ同様であるが、口唇部や口端に細い斜めの刻みが入り、次段階の浮島Ⅲ式に認められる条線帯につながるものと思われる。また、3種の刺突文では、図20-12、図25-9、図56-16・17のような粗雑な三角文が認められる。この他に、1種とした図53-27は、変形爪形文の下に刺突文が残るものの、細い条線帯が縦方向に施された浮島Ⅲ式の特徴が認められる。以上のことから、本類土器の主体は浮島Ⅱ式であり、一部ではあるが浮島Ⅱ式から浮島Ⅲ式にかけての土器がみられる。

②諸磯式系土器 2類土器は、諸磯b式に比定されるものである。文様としては、浮線文と沈線文が施される土器からなり、地文には単節斜行縄文が施されている。器形は、図57-1や図57-2~10の口縁部資料から、口縁が小さく開くキャリパー形を呈するものと推測される。また、本資料には、口縁が内折するものは認められない。この他に、浮線文には浮線上に羽状の刻みを持つものと縄文が施文されるものがあり、浮線文土器の波頂部には獣面把手が付くものがある。また、図57-30の様に高台が取り付くものが出土していることである。

このように、本類土器は、爪形文や集合沈線を施す土器がなく、口縁が大きく開く器形が出土していないことから、松田氏の諸磯式土器編年(松田1999)を参考にすると諸磯b式中2前段階に相当するものである。

③大木系土器 3類土器は、大木4式に比定される。胎土には植物繊維混和痕の有無が認められる。文様としては、沈線文を主体とするものとして、図36-1のように口縁部を無文帯として胴部に沈線文が描かれるもの、図38-7、図58-2~20、27~32、38~47等のように、口縁部を無文帯として沈線文が無文帯の中あるいは無文帯と縄文地文との境に施されるもの、図58-21~26、34~37、図59-2~7のように縄文地文上に沈線文が施されるものが見られる。また、量的には少ないが、図59-8~12のような刺突文を施すもの、図59-13~20のような粘土紐による貼付文を施すものがある。この他に、図36-2、図59-26~図60-22のように結節回転文を施すものがある。このように本類土器では、沈線文を主体とする土器が多く、貼付文の土器が少ない特徴が見られ、この特徴について相馬郡飯舘村岩下D遺跡報告(鈴鹿1986)では、「同村の柏久保遺跡に見られた隆線により加飾されるものが欠落することで大木4式土器の中における時間差」として指摘している。このような例は、本遺跡に隣接する富岡町本町西A遺跡、田村郡船引町仲ノ縄B遺跡でも確認されている。このような特徴から、ここでは、本類の沈線文主体の土器群を大木4式古段階として考えられる。これに対し、貼付文の土器は、後出的要素を持ち、胎土内に植物繊維を含まないため、大木4式新段階と考えられる。

以上のような本類土器群に近いものとして、岩下D遺跡、本町西A遺跡、仲ノ縄B遺跡が挙げられる。これらの出土土器について比較をすると、本遺跡の図53-11~14の口唇部あるいは口端に斜めの条線帯と変形爪形文の間に見られる浮島Ⅱ式土器は、本町西A遺跡では認められるものの、岩下D遺跡、仲ノ縄B遺跡では全く認められない。このような土器は、南会津郡下郷町豊後海遺跡から大木4式の貼付文と結節回転文の土器と共に出土している。また、本遺跡の27・33号土坑では大木4式の結節回転文土器と共に出土しているが、沈線文主体の土器は出土していない。このことから、比較資料として量的には少ないが、このような条線帯をもつものは、浮島Ⅱ式土器の中でも、後出的要素が認められるため、本遺跡や本町西A遺跡は岩下D遺跡や仲ノ縄B遺跡よりも遺跡の存続期間が長かったものと考えられる。

4. IV群土器

1類は、図63-1・2が大木9式、図48-4は中期末葉~後期後葉に比定される。2類は縄文時代後期前葉の綱取Ⅱ式に比定される。図34-7は、同期の器形がわかる良好なものである。3類は後期中葉のものと思われ、図63-11・14は加曾利B式に比定される。4類は、図63-13の1点のみで、刻み状の連続刺突文から後期後葉の新地式期と考えられる。5類は図63-15・16に見られる入組三叉文から大洞B式に比定される。6・7類の粗製土器については、縄文時代後期後葉~晩期に比定できるものである。

5. V群土器

本群は弥生式土器であり、2点のみ出土している。図63-32は弥生時代後期の櫛描文系土器に比定される。

6. VI群土器

平安時代の土師器杯のみである。いずれも遺構外から出土し、杯の器形や調整の特徴から9・10世紀代に比定される。(国 井)

第3節 ま と め

本遺跡は、平成9年～11年度まで三次にわたる試掘調査により、縄文時代早期の土器の出土する遺跡として認識された遺跡で、調査範囲は工事区内にあたる14,100㎡である。試掘の成果については、本書の第2章第7節に詳しく採録した。遺跡の広がり自体、調査区からさらに西へ広がることが確認されているが、今回の調査で遺跡の一部でも明らかにし得たものと考えている。

さて、本遺跡の周辺には南側の沢を挟んだ本町西A遺跡や、さらに南の本町西D遺跡など縄文時代早期～前期の遺跡が多く存在する。しかし、周辺の同時期の遺跡との相違は、他の遺跡は丘陵上でも比較的平坦な面にあるのに対し、本遺跡は標高もひとときわ高所に立地する。今後、周辺の同時代遺跡との性格の相違など、課題が残るであろう。また、遺構が調査区の中央部や西寄り部分に集中し、また住居跡の周りに貯蔵穴と見られる土坑があるなど、集落構造の上からも興味深い。

なお、調査区の東境界に沿って丘陵を南北に横断するように、堀切が確認された。中世頃の城館かと思われたが、関連する遺構は検出できなかった。

富岡町内の城館跡は、現在の国道6号線沿いや県道小野・富岡線周辺に分布するが、本館跡は沿岸部と内陸部をつなぐ赤木街道沿いの城館として注目されてよいだろう。

報告書執筆に際し、地形区分については平成13年2月21～23日に行われた常磐自動車道遺跡発掘調査関連段丘区分調査の成果を活用した。(宮 田)

引用・参考文献

- | | | |
|--------|------|---|
| 西村 正衛 | 1966 | 「茨城県稲敷郡 浮島貝ヶ窪貝塚」『学術研究』15 早稲田大学 |
| 興野 義一 | 1967 | 「大木式土器理解のために」『考古学ジャーナル』24 |
| 馬目 順一他 | 1979 | 「廣谷地B遺跡調査報告」葛尾村教育委員会 |
| 西村 正衛 | 1979 | 「貝ヶ窪貝塚」『茨城県史考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 |
| 川崎 純徳他 | 1980 | 『遠原貝塚の研究(本編I)』勝田文化研究会 |
| 竹内 理三他 | 1981 | 『角川日本地名辞典7 福島県』角川書店 |
| 山本 静男他 | 1982 | 「大谷津A・大谷津B・外山遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団 |
| 鈴鹿 良一他 | 1984 | 「柏久保遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター |
| 目黒 吉明他 | 1984 | 『冨宮西遺跡』会津高田町教育委員会 |
| 鈴鹿 良一他 | 1986 | 「岩下D遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター |
| 鈴鹿 良一他 | 1987 | 「稲荷塚B遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター |

第1編 上本町G遺跡

- 鈴鹿 良一他 1987 「羽白D遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告X』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白D遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白C遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 富岡町史編纂委員会 1988 『富岡町史 第3巻 考古 民俗編』
- 福島県教育委員会 1988 『福島県の中世城館跡』福島県文化財調査報告書第197
- 塚本 師也他 1988 「鹿島脇遺跡」『鹿島脇遺跡・追の窪遺跡』栃木県教育委員会
- 松本 茂他 1988 「松ヶ平B遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一 1989 「福島県の早期後半から前期初頭の土器について」『第4回縄文文化検討会シンポジウム資料』縄文文化検討会
- 鈴木 敬治他 1989 『福島県 地学のガイド』コロナ社
- 本間 宏他 1989 「中ノ沢遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告4』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 本間 宏他 1989 「天光遺跡」『横断自動車道遺跡発掘調査報告5』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 鈴鹿 良一他 1990 「宮内A遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XV』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 福島 雅儀他 1990 「春田遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告3』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局
- 丸山 泰徳他 1993 「宇輪台遺跡」『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告』福島市・福島市教育委員会・(財)福島市振興公社
- 山岸 英夫他 1993 「仲ノ縄B遺跡」『横断自動車道遺跡発掘調査報告19』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 庄司吉之助他 1993 『日本歴史地名辞典7 福島県の地名』平凡社
- 藤谷 誠他 1994 「八重米坂A遺跡（3次調査）」『原町火力発電所関連遺跡発掘調査報告IX』福島県・教育委員会・(財)福島県文化センター・東北電力株式会社
- 松田光太郎 1995 「浮島式土器の研究」『古代探業IV』早稲田大学出版部
- 吉田 秀亨他 1995 「段ノ原B遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告III』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団
- 吉田 秀亨他 1996 「猪倉B遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告IV』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団
- 鈴鹿 良一他 1996 「獅子内遺跡（1次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告II』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
- 国井 秀紀他 1999 「白山A遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 国井 秀紀他 1999 「柳作B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 吉田 秀亨他 1999 「関林A遺跡」『福島空港公園遺跡発掘調査報告II』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 松田光太郎 1999 「神奈川県における諸磯 a・b 式土器の様相」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 鈴鹿 良一他 1999 「獅子内遺跡（第4次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告VIII』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所
- 高橋 信一他 2000 『豊後海遺跡発掘調査報告』下郷町文化財調査報告第10集 下郷町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 2000 『山内清男考古資料11 浮島貝ヶ窪貝塚資料』
- 三浦 武司他 2002 「本町西A遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告32』福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団 日本道路公団

第2編 ^{かみ} ^{もと} ^{まち} 上本町 F 遺跡

遺跡記号 TO-KMM・F

所在地 双葉郡富岡町本岡字上本町

時代・種類 縄文時代・平安・中近世 集落跡

調査期間 平成12年4月17日～9月14日

調査員 富田 修・高橋幸司・鈴木弘子
井 憲治・丹治篤嘉・門脇秀典

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

上本町F遺跡は、双葉郡富岡町大字本岡字上本町地内に所在する。富岡町は、浜通り地方の中部、双葉郡のほぼ中央に位置し、北は大熊町、南は楢葉町に接する。東京電力福島第二原子力発電所を有する町である。遺跡はJR常磐線の夜ノ森駅から南西に約2km、東京電力新福島変電所から南東に約1.8km、国道6号線から西に約2.5kmの地点に位置する。また、遺跡の北約100mには富岡川が流れている。

遺跡が所在する一帯の地形を見ると、西側から阿武隈高地、丘陵地帯、河川に沿った段丘、そして扇状地などから成っている。さらに富岡川を中心に地形を見た場合、その南北で景観が大きく異なっている。南側は新世代第三紀富岡層を基盤とする丘陵地で、小河川によって樹枝状に開析された複雑な地形を示し、一方北側は中位Ⅱ・Ⅲ段丘面に相当する平坦な扇状地が、東に向かって標高を減じながら続いている。

上本町F遺跡は富岡川の右岸、新世代第三紀富岡層を基盤とする丘陵末端の段丘上に営まれている。段丘面は低位Ⅰ面に相当し、標高は46mである。遺跡の立地する面は北向きの緩斜面となっており、その広がり東西約450m、南北約250mを測る。遺跡の現況は宅地・水田・畑地を中心に山林が広がり、その南側開析谷は水田として利用され、北側は45mの等高線を境にして急な段丘崖となり富岡川に達している。その比高差は10mほどである。遺跡の周囲には北西方向に前川原遺跡、南東方向に上本町D・G遺跡、本町西A遺跡が立地する。 (高橋)

第2節 調査経過

上本町F遺跡は、平成6年度に福島県教育委員会が実施した表面調査で登録された遺跡である(福島県教育委員会;1995)。奈良・平安時代の散布地として204,500㎡が遺跡の推定範囲とされ、平成8年と平成9年度の2次にわたる路線内の試掘調査が行われた。その結果、縄文後期～晩期と奈良・平安時代を主体とする集落跡の存在が指摘された(福島県教育委員会;1997・1998)。ただし、この段階では、遺跡のほぼ中央の水田部分(2,600㎡)が未試掘であったため、正確な遺跡の範囲は確定されなかった。予定路線範囲内における遺跡の要保存面積は不確定であったが、未試掘部分と遺跡南半を除いた4,160㎡について、4月1日付けで県教育委員会から指示書が提示された。

発掘調査に先立ち、日本道路公団東北支社いわき工事事務所富岡工事長ならびに県教育委員会文化課立会のもと、調査区範囲や路線幅の確認、条件整備等について事前協議を行った。その結果、①遺跡中央の水田部が未試掘であること、②路線内には廃土置場が殆どないこと、③駐車場・プレ



図1 遺跡周辺地形図

ハブ・トイレ設営場所が限られることなどの制約があった。そのため、①については県内分布調査事業班との協議のうえ、4月当初から調査に着手し、路線内における遺跡範囲の確定を早急に行う運びとなった。その調査成果を踏まえて、調査範囲の確定と③についての対応を行うこととなった。また、②については、南側の路線内（調査Ⅰ区）へ一時廃土を仮置きし、その後ストックヤードへの土砂搬出を余儀なくされた。

4月19日～24日には、未試掘部分である2,600㎡について調査がなされ、それを受け5月12日付けで遺跡南半部を含む2,840㎡の追加指示書が提示された。この結果、上本町F遺跡の調査対象面積が7,000㎡と確定された。調査工程上、①・②の問題があったため、北側調査区（Ⅱ区）を優先的にを行い、その後南側の調査（Ⅰ区）に着手する運びとなった。

今回の上本町F遺跡の調査は、平成12年4月中旬から開始した。調査区確認と縄張りを行い、基本土層の第Ⅱ層上面までの表土剥ぎを重機によって実施した。4月下旬には調査Ⅱ区北側の平坦部を中心に重点的に掘り込み精査作業を行った。その間、作業員・調査員の休憩は仮設テントを設営して対処した。本格的な調査が実施されたのは、試掘調査が終了し、要調査対象面積が確定した5月の段階である。連絡所・駐車場・仮設トイレ・安全掲示板・標識旗掲揚塔の設置を行い、グリッド杭の設定と水準点の移動を随時行った。Ⅱ区の遺構検出作業は、北西端から行い、縄文時代晩期の資料が多く認められた。東半の平坦部は、基盤層である礫層が一部露出しており、この部分では遺構の遺存状態が悪く、出土遺物も希少であることが判明した。

5月下旬～6月上旬には、清水遺跡の試掘調査に伴う作業員の動員と、上郡B遺跡の条件整備等も重なり、調査の進捗がやや遅延気味となった。6月上旬からは、上郡B遺跡へ調査員2人を配置し、上本町F遺跡との同時進行で調査を行った。Ⅱ区の掘り込み調査の継続と併行して、6月中旬からは重機により南側調査Ⅰ区の表土剥ぎを行った。廃土処理は、農道田の口線を挟んだ南側ストックヤードへダンプカーにより随時搬出した。表土剥ぎがほぼ終了した6月下旬には、Ⅱ区からⅠ区へ作業員の大半を導入し、遺構検出・精査作業を行った。

7月には、調査Ⅰ区南東に幅約5m、深さ約3mの溝跡（SD1）が検出された。溝跡の掘り込み調査と併行して、7月下旬からはⅡ区北東斜面S～U-12・13グリッド付近の調査も行った。厚く再堆積した基本土層第Ⅰb層からは、縄文晩期の資料が比較的まとまって出土した。溝跡が完掘した8月上旬には、古環境研究所により自然科学分析（火山灰テフラ分析）がなされた。

お盆明けの8月後半には、調査Ⅰ・Ⅱ区の掘り込み作業を継続し、Ⅰ区東半部分から円筒形状の土坑や畝状遺構が認められた。遺構の検出・掘り込み調査が終盤となった9月上旬には、1つの土坑（SK31）から大小合わせて25枚の灯明皿も検出された。また、上郡B遺跡と合わせてラジコンヘリによる空中撮影を行った。

9月中旬には、全面的に遺構の検出面を下げ、遺構の再確認を行った。その後、地形測量を行い、町道隣接部分や溝跡の危険地帯について、一部埋め戻し作業を行った。また、上繁岡山根遺跡の条件整備についても協議を行い、準備に着手した。9月22日には、発掘器材の撤収・移動とプレ

ハブ解体を行い、調査の全行程を完了させた。

10月17日には、いわき工事事務所、県教育庁文化課、県文化センターの関係職員で調査終了状況を確認し、引き渡しを行った。(井)

第3節 調査の方法

上本町F遺跡で今回調査を実施したのは、対象となる7,000㎡である。調査地区は東西に長く、中央に調査不要地を挟んで2地区に分かれることから、中央を走る私道を目安として東側をⅠ区、西側をⅡ区としている。

調査に際しては、本遺跡並びに隣接する各遺跡との位置関係を正確に把握するために、国土座標軸を基本とした。調査で使用する座標の設定にあたっては、調査区南西外に位置する国土座標X：150,200・Y：101,700の地点を起点とし、XをN（北）、YをE（東）と読み替え、それぞれ国土座標の下3桁と下4桁を用いて調査区内の座標を表示することとした。したがって、調査区内のN360・E1,800はX：150,360・Y：101,800の位置であることを示している。ちなみにN220・E2,010の座標点は18号土坑の遺構内にあたる。

グリッドの設定にあたっては、座標の設定によってできた東西10m、南北10mのマスを一単位とし、上記の起点から東西方向に西から東へアラビア数字1・2・3…、南北方向に南から北へアルファベットA・B・C…という記号を与え、その組み合わせで表示することとした。なお、Ⅰ区南端はX：150,200、つまりAの列よりも1グリッド分だけ南に及ぶが、この地区についてはA'とした。今回の調査区は、東西が6～37、南北がA'～Uの範囲であり、ちなみにN365・E1,805の座標点はQ11グリッド内に位置している。

本調査では、表土剥ぎは主に重機を使用し、遺構検出及び遺構掘り込み精査などの作業は人力を基本として作業を行った。その際の廃土処理は、不整地運搬車・一輪車等を用いて運搬した。各遺構の掘り込みは、平面で他の遺構との重複の有無を確かめたあと、堆積土観察用の畦を残し、遺構内に堆積した土を排除した。住居跡については遺構軸を基本に十字形に、土坑や小遺構については半截して観察した。そして土層の記録を行ったあとで畦を掘り込んでいる。検出された遺物は、遺構外出土のものについては上記のグリッドを単位として基本層位を基準に、遺構内出土のものについては土層観察用ベルトの層位を基準に取り上げ、良好な出土状況については写真撮影及び出土状況の作図を行った。基本層位はローマ数字を用いてLⅠ・LⅡ…と表し、遺構内の層序はℓ1・ℓ2…と表した。

遺構調査の記録写真は調査の進捗に併せて、検出状況・土層観察用ベルト・遺物出土状況・完掘状況の撮影を行った。35mm判の一眼レフカメラを基本に撮影を行ったが、遺構の全景写真など必要に応じて6×4.5判の中判一眼レフカメラを用いた。使用フィルムはモノクロームとカラーリバーサルを併用している。また、ラジオコントロールヘリコプター搭載カメラによって、遺跡全景や調

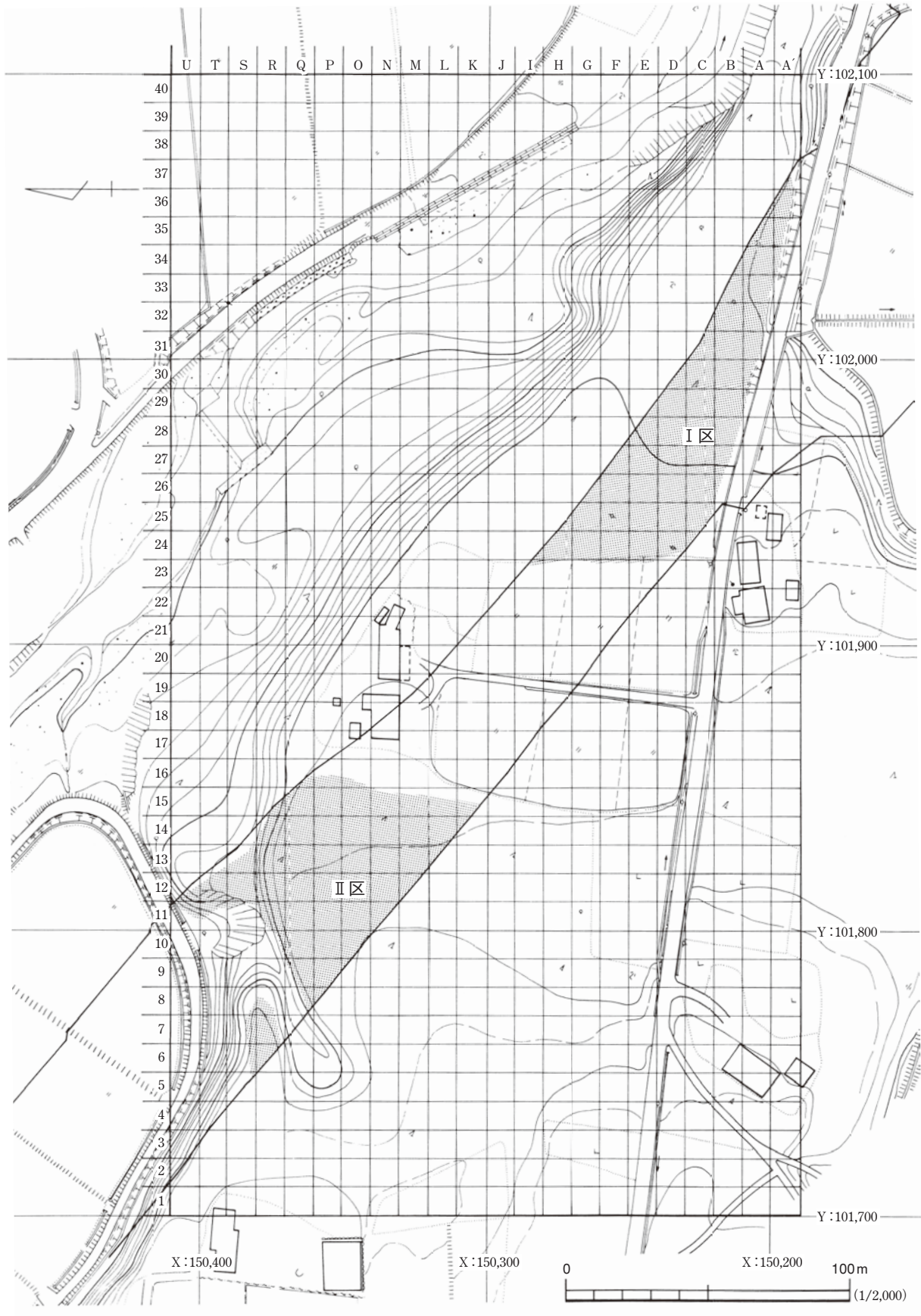


図2 調査区グリッド配置図



図3 I区遺構配置図

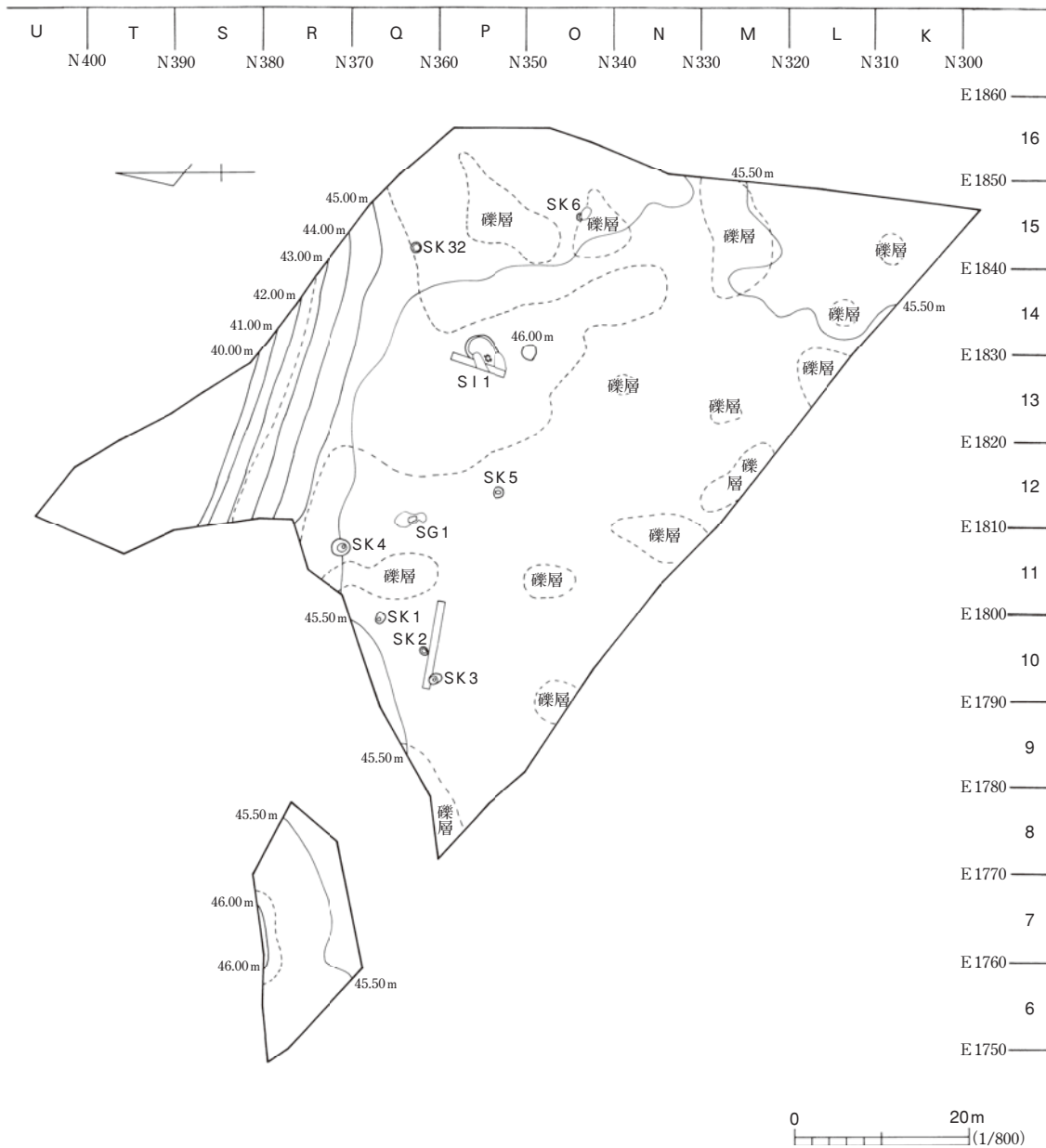


図4 II区遺構配置図

査区各部の撮影を実施している。

遺構図面は、上で述べた座標を基準とした簡易遣り方測量で1/20の縮尺を基本として作図し、遺物出土状況・炉などの細部については1/10の縮尺も採用した。なお、遺跡全体の地形図については1/400の縮尺で行った。等高線は50cm間隔を基本としているが、II区の北側斜面については1m間隔で作図した。出土遺物については、図化した中で遺存が良好なもの、あるいは特徴的なものを、6×7判の一眼レフカメラで撮影を行って、本報告書に掲載している。使用フィルムはモノクロームである。

発掘調査で得られた記録・遺物写真などの資料は、当センターの整理基準に準拠して整理を行い、報告書作成終了後、それぞれの台帳を作成し、収蔵施設に保管する予定である。(丹 治)

第2章 遺構と遺物

今回の調査では竪穴住居跡1軒、柱列跡1軒、土坑33基、焼土遺構2基、溝跡1条、性格不明遺構9基、ピット12基、畝状遺構などが検出されている。調査範囲は私道を挟んで東西に分かれているため、東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称している。竪穴住居跡はⅡ区で検出されたが、全体としてⅠ区の方が遺構密度は高い。集落跡としては希薄であったが、土坑の分布から集落の中心はⅠ区の北側に存在すると考えている。

第1節 基本土層 (図5・6, 写真17)

本遺跡は大部分が低位Ⅰ面に比定される段丘面に位置するが、段丘崖も一部含まれている。そのため、各々では堆積や分布の状況は若干異なる様相を示すが、基本的に共通する層を大きく4層に分層し、LⅠ～LⅣと表記した。LⅠとLⅡについては、色調・堆積要因などによりそれぞれ2層・3層に細分し、アルファベット小文字を付して表記した。このように細分した層は、Ⅱ区北側の段丘崖に限られている。

本遺跡の基盤を形成しているのはLⅣとした黄褐色土層である。LⅣの下層は段丘礫層で、さらにその下の層に関してはⅡ区の段丘崖で観察した。礫層の下はいわゆる大年寺層で、LⅣと異なる黄褐色粘質土になり、その後、徐々に色調が薄くなり褐色土を呈する。

基本土層はⅠ区のC31、D30・31グリッドの調査区北壁を主としたほか、14地点(A' 34・37、A29、B33、E24・28、H24、K15、N11・16、P8、Q16、R6・8グリッド)の土層もあわせて観察した。それらの土層断面図・柱状図を図5・6に掲載している。また、全体と異なる堆積を示すⅡ区北側の段丘崖については、調査区の北壁で断面図を作成した。実際は調査区が直線でないため、数回に分けて作図しているが、図6ではそれらを真直ぐにつなぎ合わせて掲載している。各層の特徴は以下の通りである。

LⅠa：木や笹の根を多く含む現表土である。締まりのない黒色土で調査区全域に分布している。

層厚はⅠ区では15～70cmとばらつきがあるが、Ⅱ区では7～20cmを測り、ほぼ均等に堆積している。縄文土器・土師器・陶磁器の細片が少量出土している。

LⅠb：LⅣに基因する再堆積層である。砂礫を多量に含み、色調はLⅣに比べやや暗く、褐色土を呈する。分布はⅡ区北側の段丘崖でもS12・13、T12・13、U12グリッドに限られている。層厚は20～85cmを測り、T12グリッドで最も厚く堆積している。縄文時代の遺物を包含している。

LⅡa：締まりのない黒褐色土を呈する。Ⅱ区では全体に分布するが、Ⅰ区ではC30・31、D29・

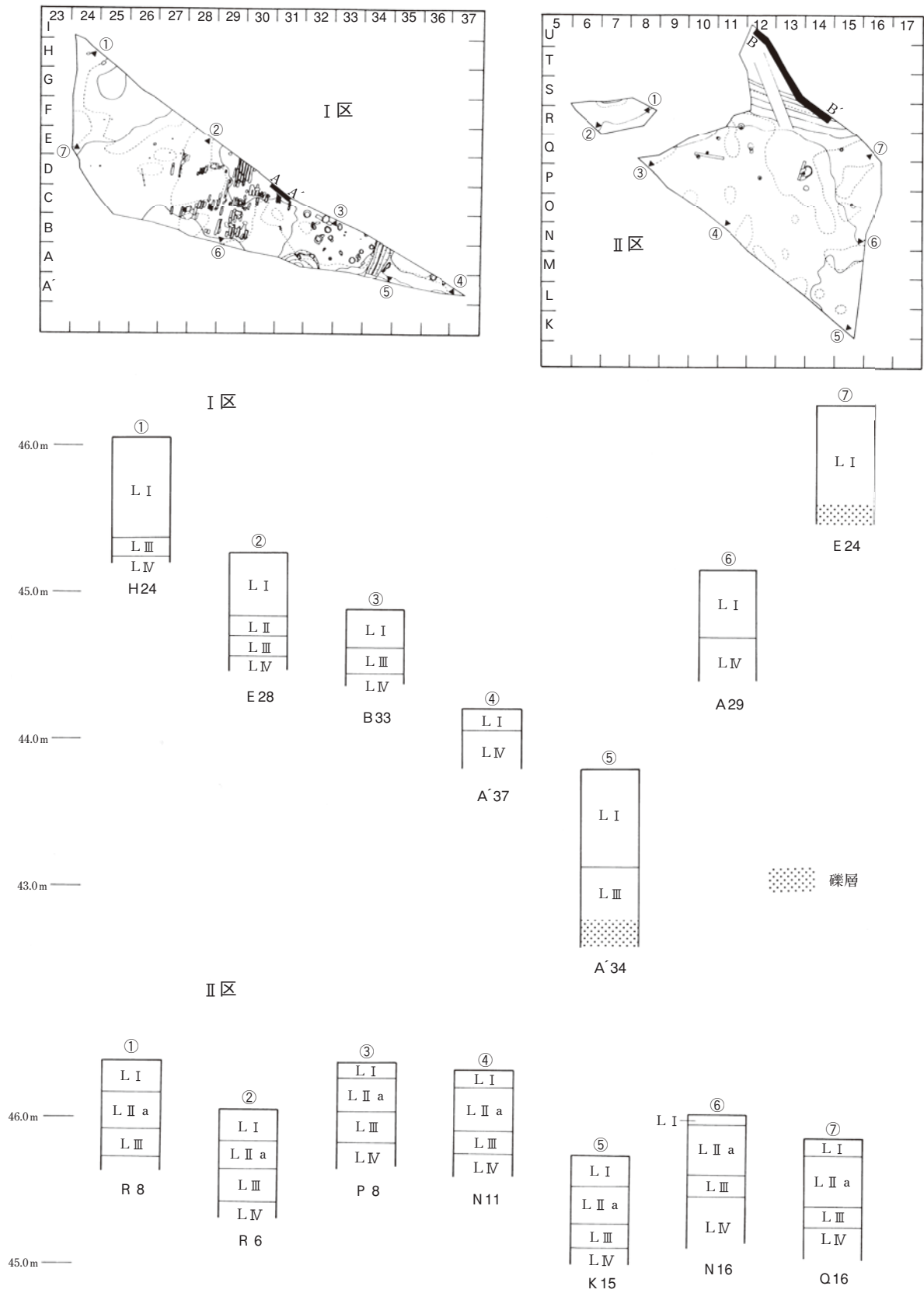


図5 基本土層柱状図

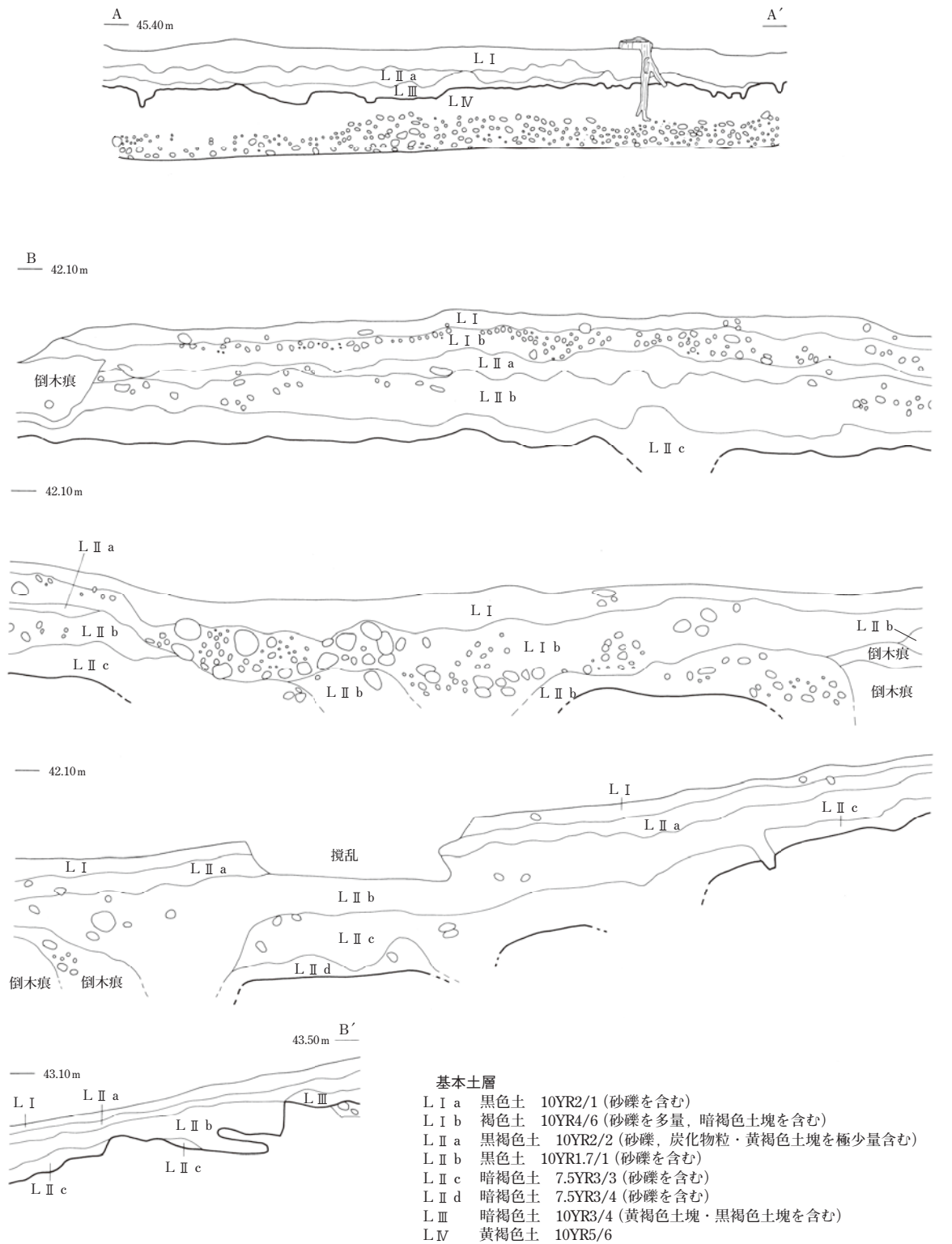


図6 基本土層

30グリッド付近に確認されるに過ぎない。層厚はⅠ・Ⅱ区ともほぼ均等で、それぞれ15～20cm前後を測る。縄文土器・土師器が出土している。

- LⅡb：堅く締まる黒色土で、礫を多く含んでいる。Ⅱ区北側の段丘崖に分布する。層厚は15～85cmを測り、段丘崖の上位では薄い、下位では厚く堆積している。縄文土器が少数ながら出土している。
- LⅡc：Ⅱ区北側の段丘崖に分布する暗褐色土である。LⅡbと同じような堆積状況を示し、小礫も含むが、LⅡbほど締まりはない。層厚は20～60cmを測り、遺物の出土はない。
- LⅡd：層厚20～30cmを測る暗褐色土。Ⅱ区北側の段丘崖にわずかに確認される。無遺物層。
- LⅢ：LⅣへの漸移層と判断した。暗褐色土を呈する。Ⅱ区では全体に分布するが、Ⅰ区では北壁際を中心として部分的に確認されるに過ぎない。層厚はⅠ区・Ⅱ区ともほぼ均等で、それぞれ15cm前後を測る。縄文土器片が少量出土している。
- LⅣ：調査区全域に分布し、本遺跡の基盤を形成している黄褐色土層である。大半の遺構はこの層の上面で平面プランを確認している。LⅣは下位になるにつれて礫の含有が多くなり、ついには礫の単一層となる。しかし、今回の調査範囲ではLⅠ～Ⅲを除去した段階で、LⅣとともに礫層が露出している箇所が多い。礫層までの層厚は深い土坑で確認した限りでは、最も厚いところで1.5mを測る。LⅣ以下から遺物は出土していない。(丹 治)

第2節 竪穴住居跡

今回の調査では、調査Ⅱ区から住居跡が1軒確認されている。遺存状態は悪かったが、調査Ⅰ区で確認された2号焼土遺構についても、本章第5節において住居跡であったと推察している。従って、本遺跡で検出された住居跡は、調査Ⅱ区で検出された縄文晩期の住居跡1軒と、調査Ⅰ区で検出された平安時代の住居跡1軒の計2軒と判断される。

1号住居跡 SⅠ1

遺 構 (図7, 写真3・4)

本住居跡はⅡ区P13・14グリッドにおいて、LⅣ上面を検出中に、黒褐色を呈する直径3m位の円形状の輪郭を確認したため、精査を開始した遺構である。しかしながら検出面であるLⅣに多量に含まれる礫が遺構内堆積土にも混在しており、さらに西側は攪乱により削平を受けていたことから、この時点で遺構の平面形を把握することはできなかった。

そこで、黒褐色土の広がりを中心に、東西および南北方向にそれぞれ1本の土層観察用のベルトを設定し、遺構の輪郭・周壁の立ち上がりを確定することとした。その結果、遺構の平面形が長軸長4.5m以上、短軸長3.2mの規模を有する長楕円形を呈することがわかった。南北軸はN-52°-Eを示す。周壁は多くの礫を含むLⅣに構築されていたために、北壁中央で35°、東壁中央で30°と緩や

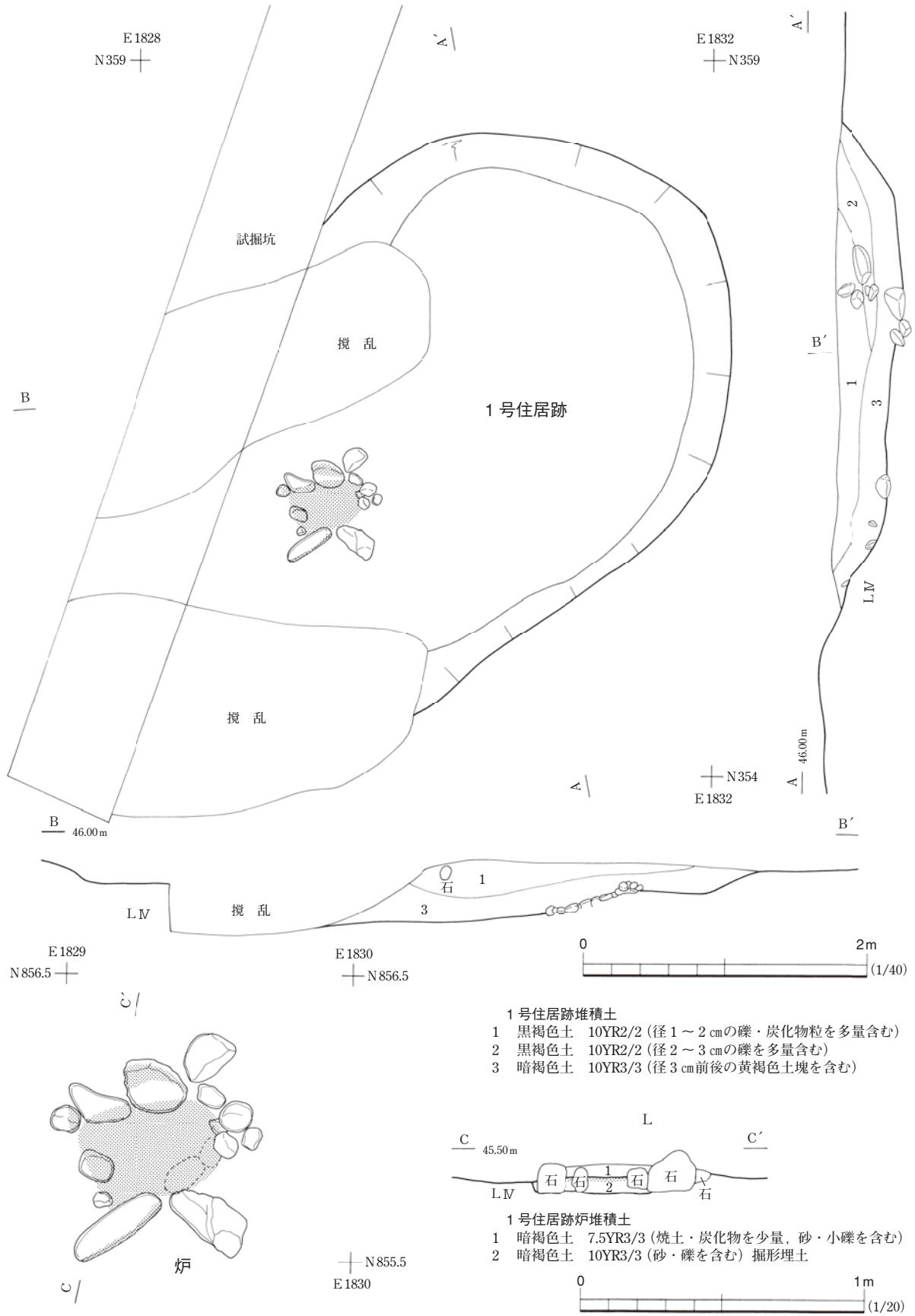


図7 1号住居跡

かに立ち上がっている。壁高は約40cmである。2か所の攪乱により壊されていたが、他に重複する遺構はなかった。なお周囲の遺構は、北東側14mに32号土坑、西側16mに5号土坑、南東側17mに6号土坑がある。また西側20mには1号焼土遺構がある。

遺構内堆積土は3層に分けられる。ℓ 1・2は黒褐色土で、1～3cm大の礫・岩片を多く含んでいる。土色や包含物の特徴からL IIに起因するとみられる。その下位と外側に、炭化物や礫を含む暗褐色土主体のℓ 3が遺構内全域に堆積している。中央部がくぼむ堆積状況を考慮すると、本遺構の堆積土は自然によるものと考えている。

床面は概ね平坦ではあるが、東から西に若干傾斜している。また、礫を多く含むL IVに構築されているために細かな凹凸がある。床面から検出されたピットはなかった。床面中央の位置から、垂円礫を巡らした石囲炉が検出された。炉の大きさは径約80cmの円形を呈する。良好な遺存状況を示

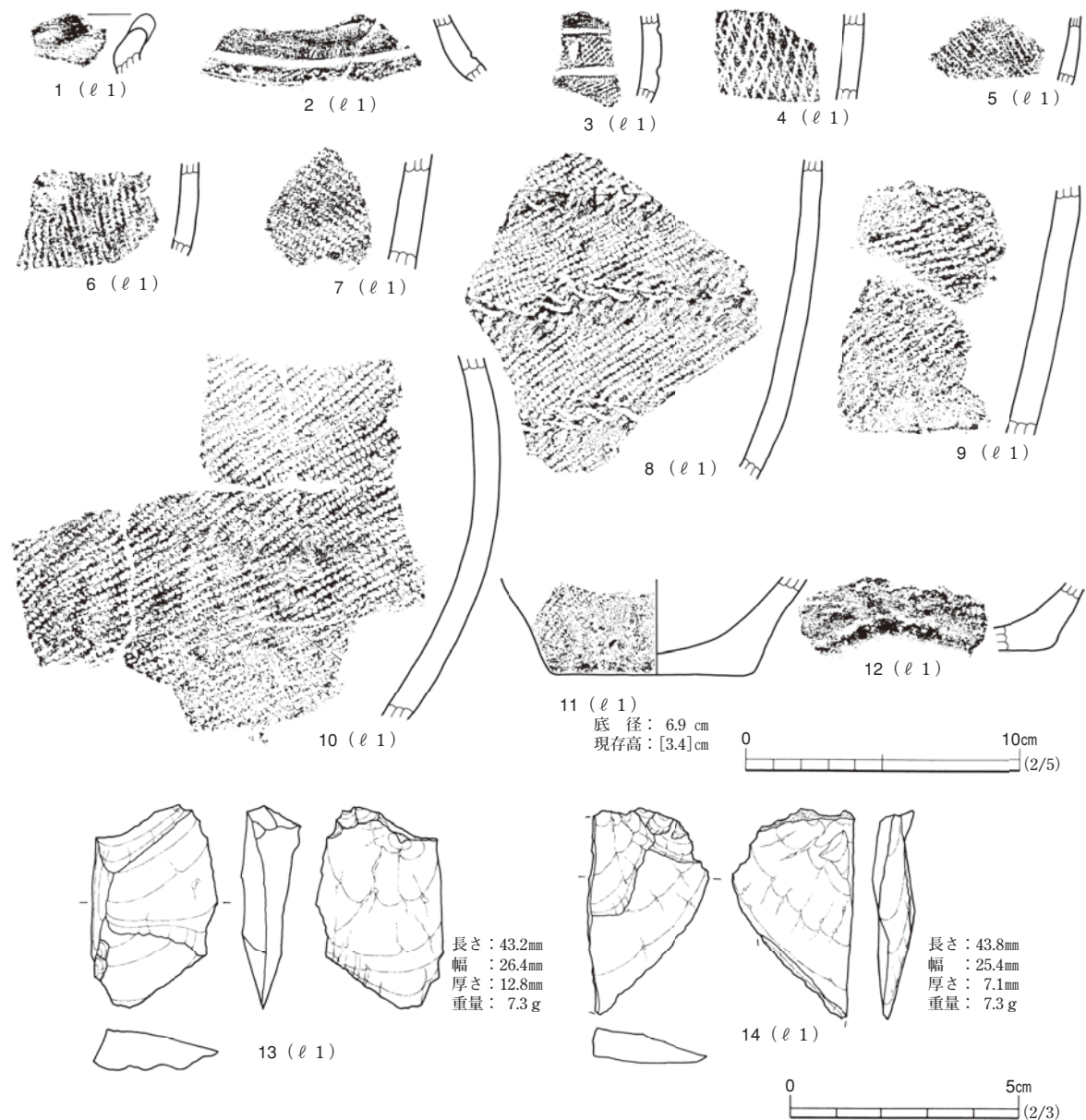


図8 1号住居跡出土遺物

さず、炉に用いられた石は原位置をとどめていなかった。炉の中央、直径50cmの範囲には焼土粒の広がり認められた。断ち割りの結果、明確な掘形は確認できず、縁石は周囲をわずかに掘り窪めて構築されたと推察される。なお炉床の東南側、点線で示した箇所には縁石の抜け痕とみられる窪みが認められた。また焼土粒は炉床から5mmにも満たない厚さで堆積していた。

遺物 (図8, 写真18)

本遺構からは、縄文土器片33点、剥片2点が出土した。出土遺物のうち、14点を図化した。床面に貼り付いて検出されたものや石囲炉から出土したものはなく、住居廃絶後、堆積の過程で流れ込んだものと考えている。

図8-1~12は縄文時代後期後半~晩期に比定される資料である。1は口縁部片、2は頸部から胴部上半の資料である。1~3は鉢あるいは壺形土器と思われる資料である。1は口縁端部が瘤状に隆起している。2・3の器面には磨消縄文が施され、3の沈線間には斜め方向からの刺突が加えられている。加曾利B3式に比定されるものであろう。4~10は胴部資料である。4は網目状撚糸文、5は撚糸文が、6~10は単節斜縄文が施文されている。8には「S」字状結節文が認められる。11・12は底部片で、11の底面には網代編圧痕がわずかに認められる。

13・14は、ガラス質安山岩製の剥片である。風化は浅く、表面の色調は黒灰色を呈する。13の打面は多剥離面で構成され、14は礫面打面である。14の腹面右側面は、剥片剥離時の同時割れ面とみられる。

まとめ

本住居跡は、長楕円形を呈する竪穴住居跡である。炉は石囲炉であったが、縁石は原位置をとどめていなかった。住居跡の所属時期は、明確には判断できないが、出土した土器の主体が縄文晩期に比定されることを考慮すると、この頃に機能した住居と考えられる。(門 脇)

第3節 柱 列 跡

1号柱列跡 SA1 (図9, 写真5)

本遺構は4基の柱穴からなる柱列跡である。D26グリッドのLⅣ及びLⅣ下位の礫層上面で検出された。他遺構との重複関係は認められない。北約9mには31号土坑が位置し、その周辺に少数ではあるがピットが存在する。本遺構の東側には畝状遺構、土坑群が立地するが、西側での遺構は希薄である。両端に位置するP1-P4の距離は5.5mで、各柱穴間の距離は南からP1-P2、P2-P3がそれぞれ1.8m、P3-P4が1.9mとほぼ等間隔である。主軸方位はN21°Eを示す。

各柱穴の平面形はほぼ円形で、長径は34~36cm、短径は32~34cmである。検出面から底面までの深さは21~26cmでほぼ揃っているが、P1・P4がP2・P3よりもやや深めに掘り込まれている。柱穴の堆積土はいずれも1層のみで、周辺の土層に類似するとみられる暗褐色土や黒褐色土および黒色土で、褐色土塊や礫が混入している。なお、本遺構から遺物は出土していない。

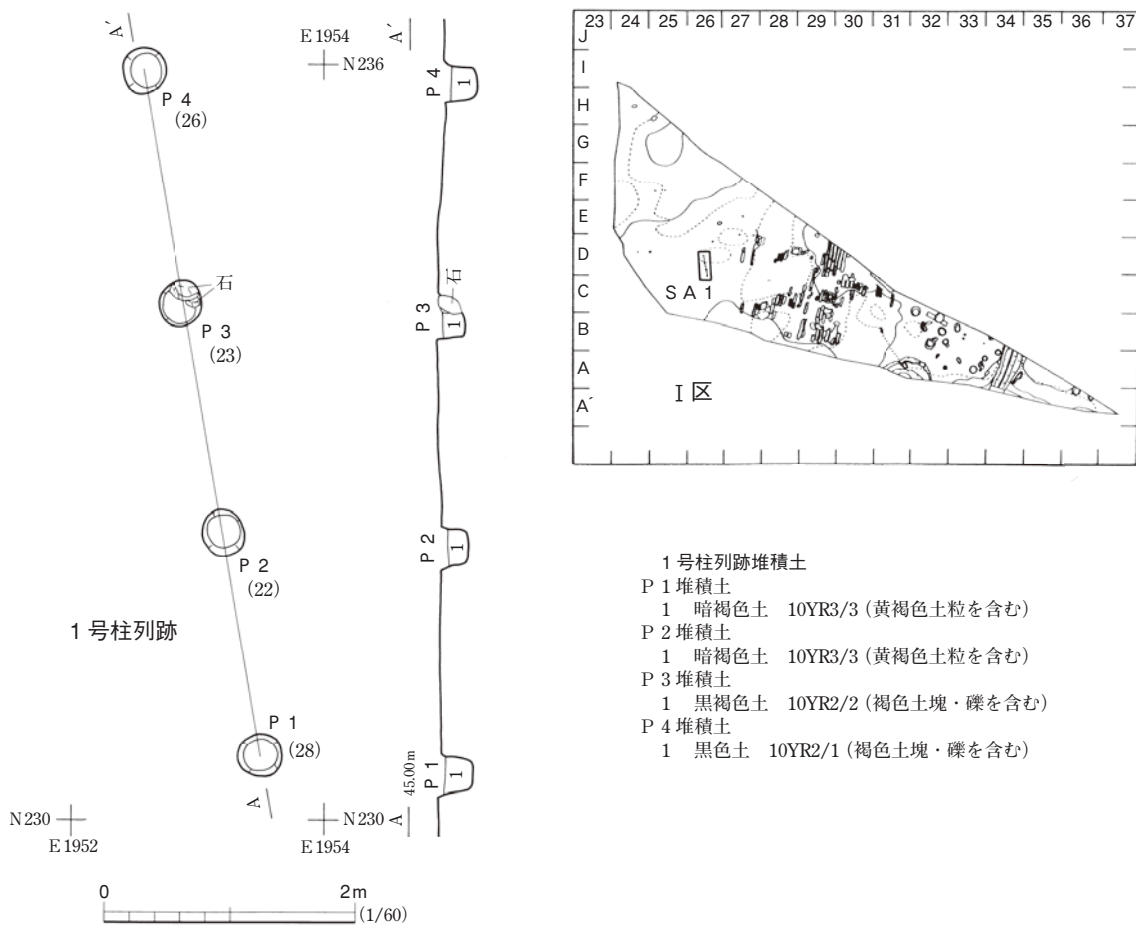


図9 1号柱列跡

本遺構は小規模な柱穴が直線的に並ぶ柱列跡である。周辺にこれと類似する遺構が認められない点や、所属時期を推定する遺物が出土していないことから不明な点が多い。しかし、性格については、畝状遺構の西端に位置することから、周辺のピットとともに畝状遺構と有機的に関連していたと推測され、柵や目隠し塀、あるいは作業小屋の柱穴ではないかと考えている。(高橋)

第4節 土 坑

本遺跡から検出された土坑は、調査Ⅰ区から26基、調査Ⅱ区から7基の総計33基である。分布的には、調査Ⅰ区の南東側では形態・規模が類似する土坑(8~14・18・19号土坑)が集中する傾向はあったが、調査Ⅱ区では散在していた。

1号土坑 SK 1 (図10, 写真5)

本土坑は調査Ⅱ区北西部、Q12グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面で、炭化粒と焼土粒を含む黒褐色土として検出した。他の遺構との重複は見られない。本土坑と隣接して、南西にはSK 2・3が弓形に並列している。遺構内堆積土は4層である。ℓ 2・ℓ 4は壁崩落土と考えられ、基本

土層のLⅣに近似する。その他は黒褐色土を主体とする土である。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えた。

平面形は不正楕円形を呈し、規模は長軸長1.11m、短軸長0.83mある。検出面から底面までの深さは40cmを測る。底面は北西方向に緩やかに窪んでおり、断面形は楕円形の形態である。

本土坑からは遺物が出土していないために、時期は特定できない。また、土坑の性格についても不明である。(富田)

2号土坑 SK2 (図10, 写真5)

本土坑は調査Ⅱ区北西部、Q11グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した。他遺構との重複関係はない。本土坑が位置する周辺には、SK3が近接する。遺構内堆積土は3層である。ℓ3は壁崩落土で、基本土層のLⅣに相当する。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と判断した。

平面形は不整な円形を呈する。規模は長軸長95cm、短軸長88cmで、検出面から底面までの深さは17cmを測る。壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がり、全体として楕円形の形態である。

本土坑からは遺物が出土していないために、時期は特定できない。また、土坑の性格についても不明である。(富田)

3号土坑 SK3 (図10, 写真5)

本土坑は調査Ⅱ区北西部、Q11グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複は見られない。本土坑の北東にはSK1・2・4が位置する。遺構内堆積土は4層である。ℓ3・4は壁崩落土と考えられ、基本土層のLⅣに相当する。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と判断した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長軸長1.47m、短軸長1.10m、検出面から底面までの深さは41cmを測る。壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がり、全体として楕円形の形態である。

本土坑からは遺物が出土していないために、時期は特定できない。また、土坑の性格についても不明である。(富田)

4号土坑 SK4 (図10, 写真5)

本土坑は調査Ⅱ区北西部R12グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複は見られない。本土坑の南東方向にSG1が位置する。遺構内堆積土は4層である。ℓ4は壁崩落土と考えられ、基本土層のLⅣに近似する。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

平面形は不整な円形を呈する。規模は、長軸長1.95m、短軸長1.86m、検出面から底面までの深さは28cmを測る。壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がり、中段に平坦面を持つ。

本土坑からは遺物が出土していないために、所属時期は特定できない。また、土坑の性格についても不明である。(富田)

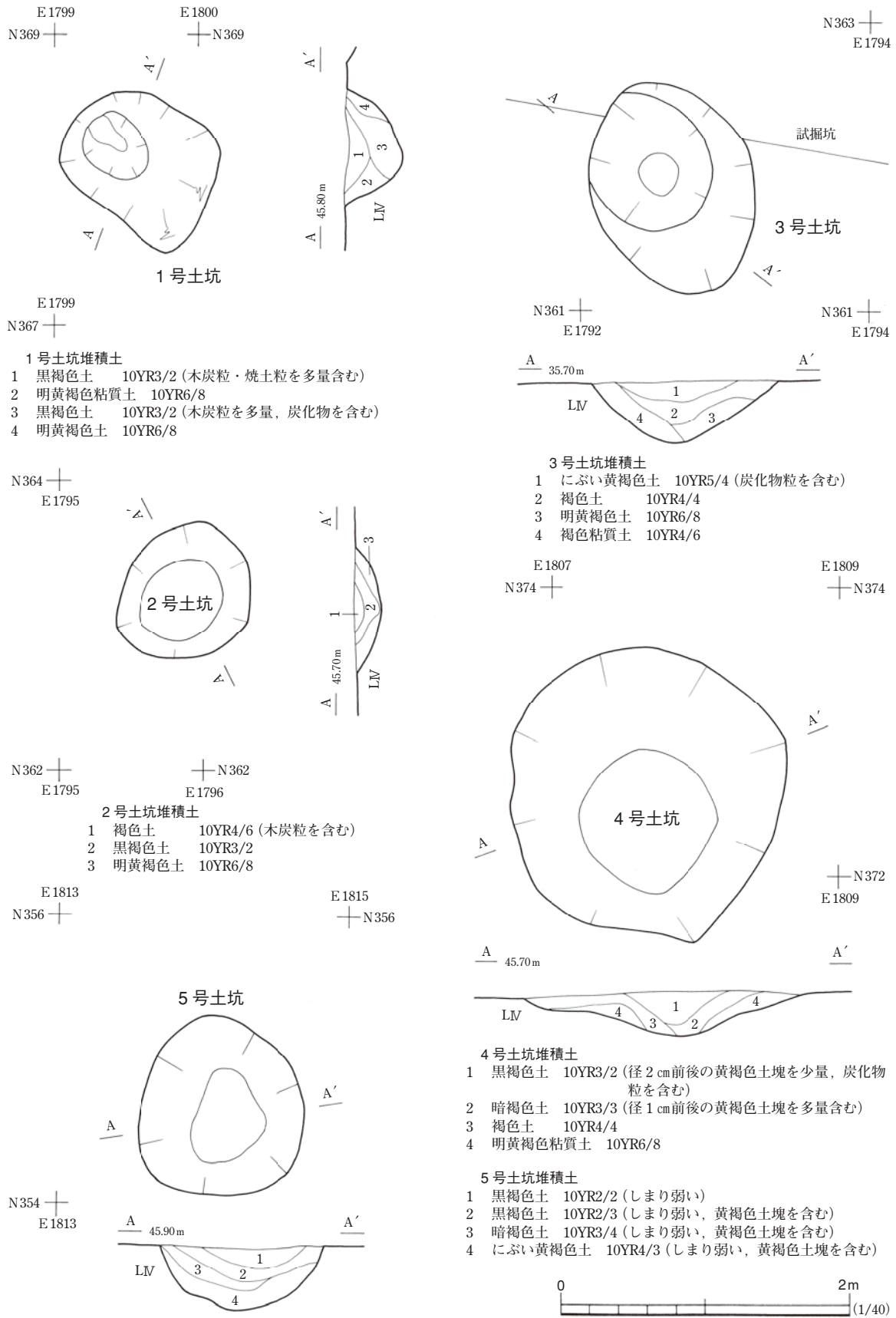


図10 1～5号土坑

5号土坑 SK 5 (図10, 写真6)

本遺構はⅡ区中央のP12グリッドに位置する。周囲の地形は平坦で、LⅣ上面で黒褐色土の不整形半円形プランが明瞭に確認された。重複する遺構はないが、周囲には東方16mに1号竪穴住居跡、北方10mに1号焼土遺構がある。

平面規模は長軸長1.24m、短軸長1.18mを測る。検出面から底面までの深さは約45cm程度で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は4層に分層した。いずれもレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積と考えている。ℓ1・2は締まりの弱い黒褐色土で、周辺からの自然流入土とみられる。この黒褐色土はLⅡに類似しており、1号住居跡のℓ1・2にも同様の堆積物がみられる。ℓ3は暗褐色土で、LⅣの黄褐色土を含む土層である。ℓ4は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土を含んでいることから、周壁からの崩落土であろう。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。しかし、その堆積状況が1号竪穴住居跡と近似している点が指摘できる。(門 脇)

6号土坑 SK 6 (図11, 写真6)

本遺構はO15グリッドに位置する。南側半分は攪乱によって壊されているが、LⅣ上面で暗褐色土の半円形プランとして検出された。周辺の地形はほぼ平坦である。重複する遺構はなく、周辺に分布する遺構も17m北西側に1号住居跡、18m北方に32号土坑が存在する程度である。

堆積土は4層に分層した。いずれも自然堆積と判断している。ℓ1・2は暗褐色土、ℓ3・4は褐色土を示すが、それぞれ含有物の大きさ・割合で細分した。ℓ1・2は周囲から流れ込んだような堆積状況で、中には2～4cm大の礫が少量含まれる。ℓ3・4は主に周壁の崩落土と考えている。

本遺構の平面規模は東西長1.5m、南北方向は残存長が0.94mである。底面は遺構の中央に向かって緩やかに傾斜し、検出面から底面最深部までの深さは53cmである。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。しかし、ℓ1・2が1号住居跡の堆積土と近似するため、1号住居跡と近い時期の所産と考えたい。(丹 治)

7号土坑 SK 7 (図11, 写真6)

本遺構はB34グリッドのLⅣ上面で検出された。周辺の地形は平坦である。重複する遺構はなく、東方3.5mに1号溝跡、3m南東側に8号土坑、4m南方に9号土坑がある。

堆積土は4層に分けられ、いずれも自然堆積と判断している。ℓ1・2はレンズ状に堆積している。ℓ3・4は壁の直下に緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁の崩落土と考えている。本遺構は北側が調査区外にあるため全体の形状は明らかにし得なかったが、確認できた範囲から南北に長い楕円形を呈すると推定している。また、東側に若干張り出す部分が確認される。調査区内での平面規模は長軸長1.45m、短軸長は0.8mである。底面はほぼ平坦で、検出面から

底面最深部までの深さは66cmである。

本遺構から出土遺物がないため、明確な所属時期は特定できない。また、本土坑の性格についても不明である。(丹 治)

8号土坑 SK 8 (図11, 写真6)

本遺構はA34・B34グリッドに位置する。LⅣ上面で黒褐色土の円形プランとして検出された。重複する遺構はなく、東方0.5mに1号溝跡、2.5m南西側には同様の規模・平面形を有する9号土坑、3m北西側に7号土坑がある。周辺の地形はほぼ平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から6層に分層した。レンズ状の堆積を示すことから、いずれも自然堆積と判断している。周壁は垂直近く立ち上がり、断面形は円筒形を呈する。遺構の平面規模は直径1.4m前後である。底面はほぼ平坦で、LⅣ下位の礫層が僅かながら北東壁際で露出している。検出面から底面までの深さは40cm前後である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する9・14・18・19・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

9号土坑 SK 9 (図11, 写真6)

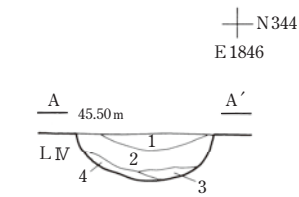
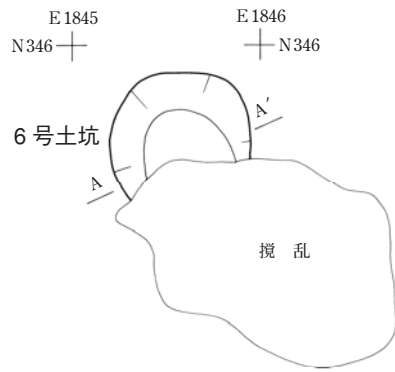
本遺構はA33グリッドに位置する。LⅣ上面で黒褐色土の円形プランとして検出された。重複する遺構はないが、周囲4m以内には7・8・11号土坑、1号溝跡、2・3号性格不明遺構があるなど、遺構が集中する。周辺の地形は平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合によって6層に分層した。いずれも自然堆積土と判断した。ℓ1～3はレンズ状に堆積することから、周囲からの流入土と考えている。ℓ4～6は壁の直下に緩やかに堆積し、周壁際に厚く堆積している。LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁の崩落土と考えている。断面形は若干オーバーハングしているが、ℓ4～6の堆積状況から本来オーバーハングはもったきつく、フラスコ形を呈していたと推測される。遺構の平面規模は直径1.4m前後である。底面はほぼ平坦で、LⅣ下位の礫層が北壁際で露出している。検出面から底面までの深さは80cm前後である。(丹 治)

10号土坑 SK10 (図12, 写真7)

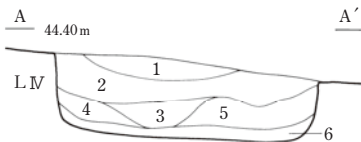
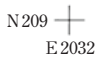
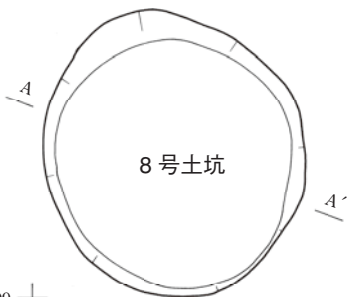
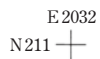
本土坑は調査Ⅰ区南東部、A'36グリッドに位置する。LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複は見られない。遺構内堆積土は7層である。ℓ5は壁土崩落土と考えられ、基本土層のLⅣに近似し、ℓ7は基本土層のLⅣ・Ⅴに近似する。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えた。

北西から南東部にかけての北側半分が調査区外となっており、現状で確認できる平面形は半円形を呈する。規模は長軸長1.57m、検出面から底面までの深さは最大で1.30mを測る。底面は礫層のLⅤに形成されているため、若干の凹凸があるもののほぼ平坦な状況である。壁は底面より急角度



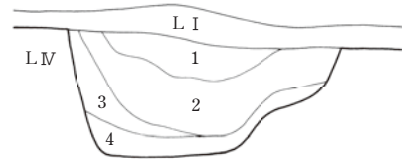
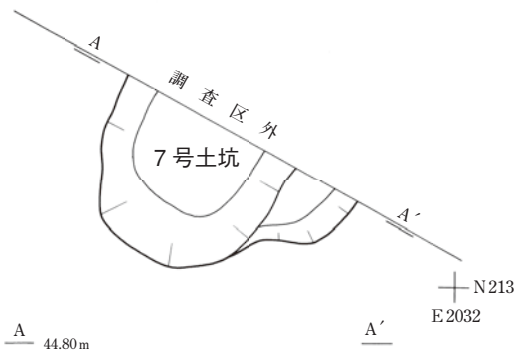
6号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5cm前後の黄褐色土塊を少量, 径2cm大の礫を少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5cm前後の黄褐色土塊を微量, 径2~4cm大の礫を少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/4 (径1~3cmの黄褐色土塊を少量含む)
- 4 褐色土 10YR4/4 (径0.5cm前後の黄褐色土塊を少量含む)



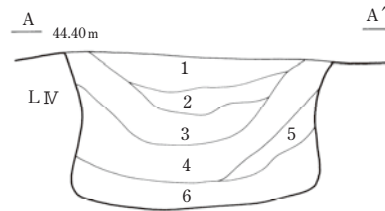
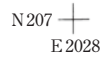
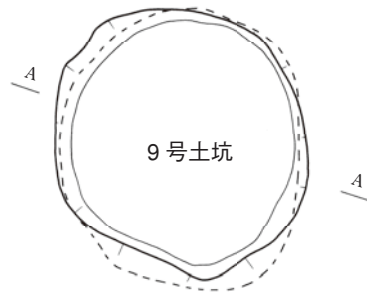
8号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量, 径0.5cm前後のにぶい黄褐色土を微量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量, 径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 5 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を含む)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5cm前後のにぶい黄褐色土塊を少量含む)



7号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (径2~3cmの黒褐色土塊を微量, 径0.5~1cmの黄褐色土塊を少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/4 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量含む)
- 4 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量含む)



9号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量, 径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を多量, 径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を含む)
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量含む)
- 5 褐色土 10YR4/4 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量含む)
- 6 褐色土 10YR4/4 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を含む)

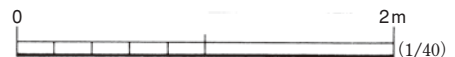


図11 6~9号土坑

で立ち上がり、断面形は袋形の形態である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8・9・11～14・18・19・33号土坑と同じ時期・性格と考えている。(丹 治)

11号土坑 SK11 (図12, 写真7)

本遺構はA33グリッドに位置する。L IV上面で黒褐色土の円形プランとして検出された。重複する遺構はないが、周囲3 m以内には9・25号土坑、1号溝跡、2・3号性格不明遺構があるなど、遺構が集中する。検出面はほぼ平坦であるが、南側は南東方向に向かって緩く傾斜し、L IV下位の礫層が露出している。

堆積土は4層に分層した。ℓ 1～3はレンズ状に堆積することから、周囲からの自然流入土と判断した。ℓ 2・3の周壁際にはにぶい黄褐色土や褐色土の塊が認められ、一部周壁から崩落した土も含まれていると考えている。ℓ 4は水平に堆積することから人為堆積の可能性がある。断面形は部分的に若干オーバーハングするが、8号土坑と同じ円筒形を呈する。遺構の平面規模は直径2 m前後と他の土坑に比して大型である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは60cm前後を測る。礫層を45cmほど掘り込んで構築しているため、底面及び周壁はL IV下位の礫層が露出している。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8～10・12～14・18・19・33号土坑と同じ時期・性格と考えている。(丹 治)

12号土坑 SK12 (図12, 写真7)

本遺構はB33グリッドのL IV上面で検出された。重複する遺構はないが、周囲3 m以内には13・14・19号土坑、6・7・8号性格不明遺構があり、遺構の集中する場所に位置する。また、北壁を風倒木によって壊されている。周辺の地形はほぼ平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から7層に分層し、全て自然堆積と判断した。ℓ 1～4・6は周囲からの流入土で、レンズ状堆積を示している。ℓ 5・7は壁際から緩やかに堆積し、L IVの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。周壁は東側の一部でオーバーハングする以外は垂直近く立ち上がっている。遺構の平面形は南北に長い楕円形を呈し、長軸長2.43m、短軸長は1.5mを測る。底面は西側に緩く傾斜し、北壁では20cmほど高い段が認められる。検出面から底面最深部までの深さは1 m前後である。なお、底面はL IV下位の礫層が東壁直下でわずかに認められる。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8～11・13・14・18・19・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。

(丹 治)

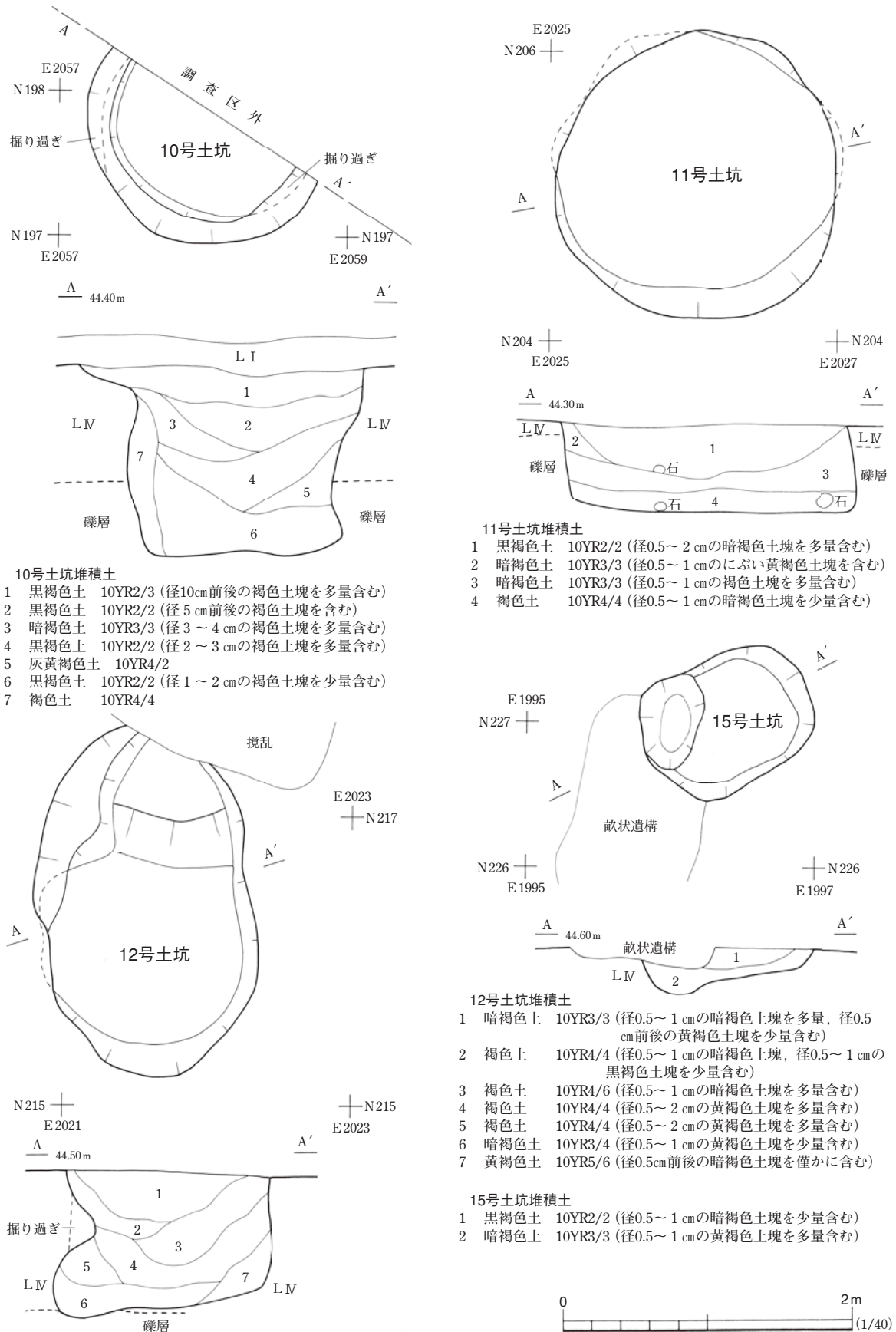


図12 10~12・15号土坑

13号土坑 SK13 (図13, 写真7)

本遺構はB32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、周囲には本遺構と同様に円形で平面規模が大きく、深い14・18・19号土坑が隣接している。また12・16・17号土坑が近接するなど、土坑の集中する場所に位置する。周辺の地形はほぼ平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から12層に分層した。ℓ1～5・7・8は自然堆積土と判断した。ℓ1～5・7はレンズ状の堆積を示す黒褐色土あるいは暗褐色土で、周囲からの流入土と考えている。ℓ8は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。ℓ6・9～12は人為堆積と考えている。ℓ6は黄褐色土塊を多量に含む混合土である。ℓ9～12は底面から水平に堆積し、褐色土と暗褐色土の互層になっている。ℓ6とℓ9～12の間には自然堆積のℓ7・8が入り、堆積状況も違う。そのため土層の性格は異なっている。ℓ6は遺構中央部にのみ堆積することから、投げ込まれたものと推測される。その時期は、ℓ7・8の堆積後であることから遺構機能停止後と判断される。ℓ10・12の暗褐色土からは形状を保った堅果類などは検出されなかったが、有機質のものが埋められていた可能性がある。したがって、ℓ9～12は遺構機能時の人為堆積土と考えている。周壁については、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。一方、それ以外では底面近くでわずかながらオーバーハングし、その後上端に向けて緩やかに立ち上がっている。土層の観察から周壁の崩落は大規模なものではなかったと推測されるため、現在の遺構の形は本来の形状をほぼ保っていると考えている。

遺構の平面形はやや歪んだ円形で、直径2.15～2.42m前後を測り、本遺跡では最大規模の土坑である。底面はLⅣ下位の礫層が露出しているため凹凸がある。検出面から底面までの深さは1.58m前後で、本遺跡の土坑の中では最も深い。なお、礫層はほとんど掘り込まれておらず、露出した段階で掘り込みを終了したものと考えている。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8～12・14・18・19・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

14号土坑 SK14 (図13, 写真7)

本遺構はB32・C32グリッドのLⅣ上面で検出された。明瞭な黒褐色土の円形プランとして確認された。重複する遺構はないが、試掘調査の際の断ち割りが幅20cmほどの範囲で入れられていた。周囲には本遺構と同様に円形で平面規模が大きく、深い13・18・19号土坑が隣接している。また、12・16・17号土坑もあるなど、土坑の集中する場所に位置する。周辺の地形はほぼ平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から7層に分層した。ℓ1～4・7はレンズ状堆積を示すため、周囲からの自然流入土と判断した。ただし、ℓ2から出土した多量の礫に関しては、中央部に集中することから、まとめて投棄されたものと考えている。ℓ5は、人為堆積土と判断した。遺構の中央部に盛り上がるように堆積し、径3～10cmほどの暗褐色土塊を部分的に含むな

ど不自然な堆積状況を示している。ℓ 6は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。周壁は一部でオーバーハングしているが、これは周壁の崩落によるものと推測され、本来は垂直近く立ち上がっていたと考えている。遺構の平面形はやや歪んだ円形を呈し、東壁が僅かに張り出す。直径2.3～2.6m前後を測り、本遺跡では最大規模の土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面から底面までの深さは1.2m前後である。また、礫層を5～25cmほど掘り込んでいるため、底面及び周壁の一部でLⅣ下位の礫層が露出している。しかしながら、遺構構築段階では礫層に達した時点で終了しようという意図があったと推察される。

ℓ 2からは縄文土器の胴部片が1点出土している。摩滅していたため割愛したが、横回転のRL縄文が施文されている。

本遺構の明確な所属時期・性格などは不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8・13・18・19・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

15号土坑 SK15 (図12, 写真8)

本遺構はC30グリッドのLⅣ上面で検出された。西側で畝状遺構と重複し、本遺構の方が古いことを平面プランで確認している。西壁上半部は畝状遺構によって壊されているが、下半部の壁の立ち上がり状況から全体の形状を把握することができた。周辺の地形はほぼ平坦で、8.5m南西側に26号土坑がある。堆積土は2層に分層した。堆積状況からℓ 1・2とも周辺からの自然流入土と判断している。

遺構の平面形は東西に長い楕円形を呈し、長軸長1.22m、短軸長は0.9mを測る。底面は西側に向かって緩やかに傾斜し、北西壁で一段深くなっている。検出面から底面最深部までの深さは32cmである。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。(丹 治)

16号土坑 SK16 (図13, 写真8)

本遺構はB32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、周囲3m以内には13・14・17・18号土坑があり、土坑の集中する場所に位置する。特に30cm西側には17号土坑が隣接している。周辺の地形はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層した。いずれも自然堆積土と判断している。ℓ 2・3は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。

平面形は南壁がやや歪んでいるが、東西に長い楕円形を呈する。長軸長1.78m、短軸長は0.72mを測り、底面はほぼ平坦である。検出面から底面最深部までの深さは20～30cm程度で、周囲の13・14・18号土坑に比して浅い。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明であるが、形状・深さ・堆積状況が近似する17号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

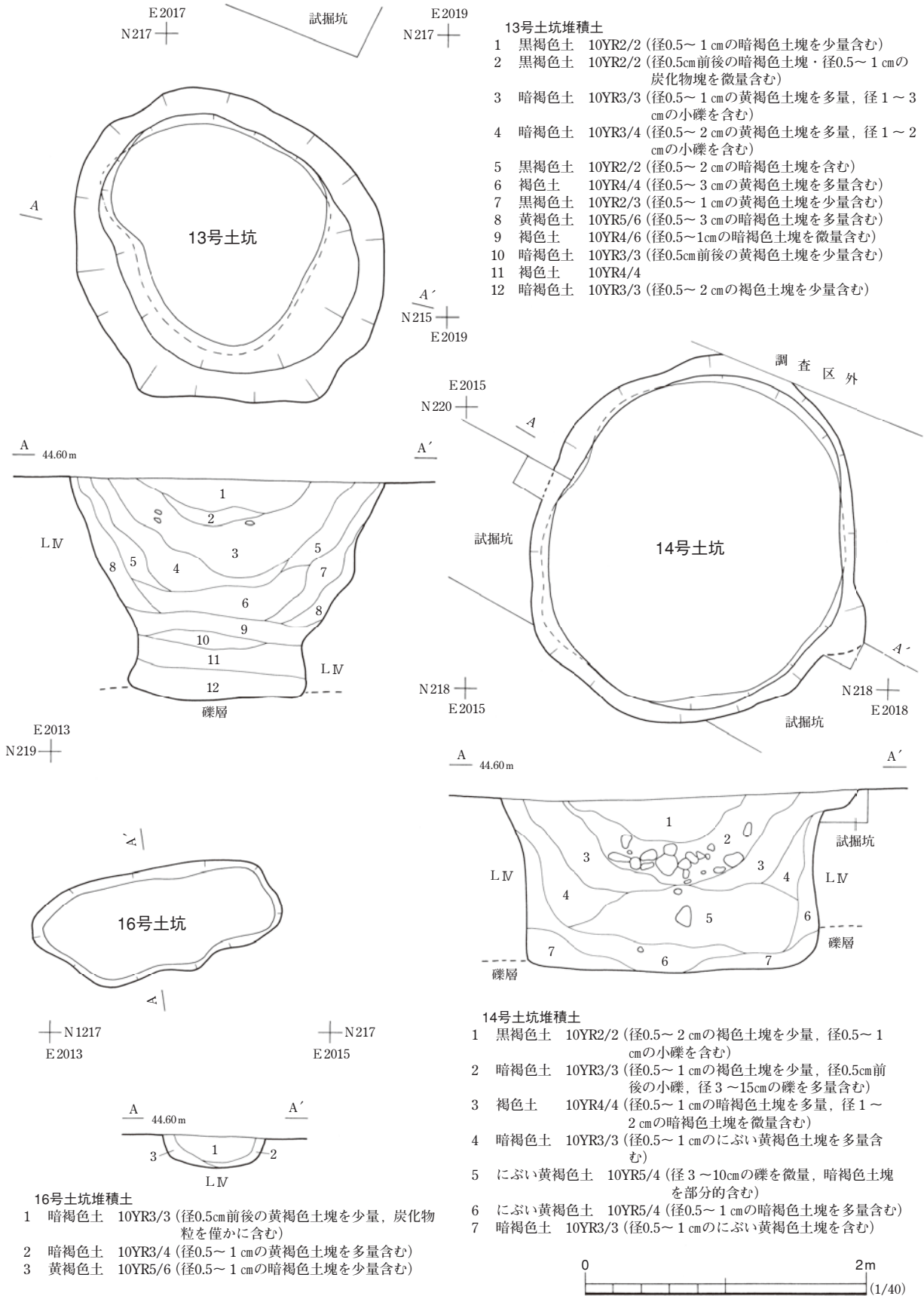


図13 13・14・16号土坑

17号土坑 SK17 (図14, 写真8)

本遺構はB32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、周囲3m以内には13・14・16・18号土坑、4号性格不明遺構があるなど、土坑の集中する場所に位置する。特に30cm東側には16号土坑が隣接している。周辺の地形はほぼ平坦である。遺構の平面形は西壁がやや張り出す不整楕円形を呈する。その平面の形状から複数の遺構が重複している可能性も考えたが、土層の観察から単独の遺構であることを確認した。

堆積土は2層に分層した。レンズ状に堆積することから、いずれも自然堆積土と判断している。ℓ2は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。平面規模は長軸長2.75m、短軸長は1.3mを測る。底面はほぼ平坦であるが、西壁際の外に張り出す箇所を中心に緩やかに窪んでいる。検出面から底面最深部までの深さは10～30cmほどで、周囲の13・14・18号土坑に比して浅い。なお、西側の窪む部分ではLⅣ下位の礫層が露出している。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明であるが、形状・深さ・堆積状況が近似する16号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

18号土坑 SK18 (図14, 写真8)

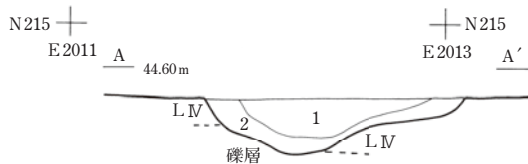
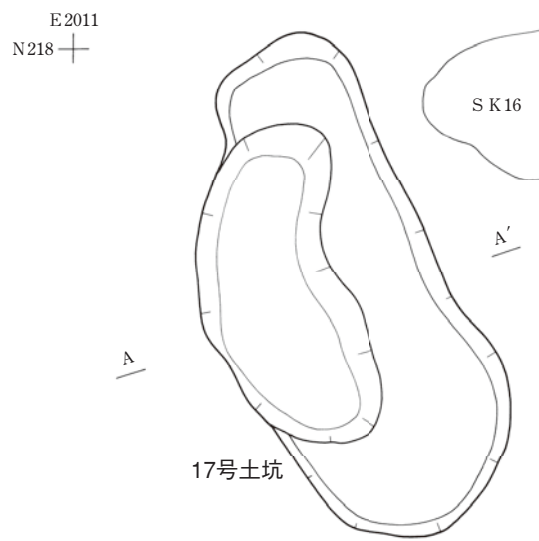
本遺構はB31・32, C31・32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、4m東方には本遺構と同様の形態・規模を有する14号土坑がある。また、2～3m南東側には16・17号土坑も隣接している。周辺の地形はほぼ平坦である。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から9層に分層した。全て自然堆積土と判断した。ℓ1～4はレンズ状に堆積することから、周囲からの流入土と判断した。いずれの層も小礫・礫を含むが、ℓ3は特に多く礫を含んでいる。ℓ5～9は周壁際から遺構中央部にかけて堆積している。LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁の崩落土と考えている。周壁は直線的に急角度で立ち上がる。しかし、ℓ5～9が堆積する土量からすれば、本来はオーバーハングし、フラスコ形を呈していたとも推測される。遺構の平面形は円形で、直径2.5m前後を測り、本遺跡では最大規模の土坑である。底面にはLⅣ下位の礫層が露出するが、それ以上掘り込まれていない。礫層に達したため、掘り込みを終了したものと考えている。なお、検出面から底面までの深さは1.2m前後である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8～14・19・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

19号土坑 SK19 (図14, 写真8)

本遺構はB32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、南東部分を風倒木で壊されていることを平面プランで確認した。周囲の地形はほぼ平坦で、土坑や性格不明遺構などの遺構が集中している。土層断面図は風倒木との新旧関係を明確にするため、風倒木を一部断ち割って



- 17号土坑堆積土
- 1 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5cm前後の黄褐色土塊を微量含む)
 - 2 褐色土 10YR4/4 (径0.5~1cmの黄褐色土塊を少量含む)

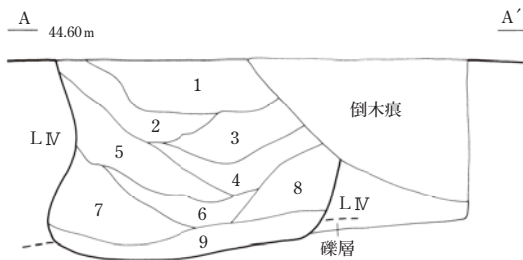
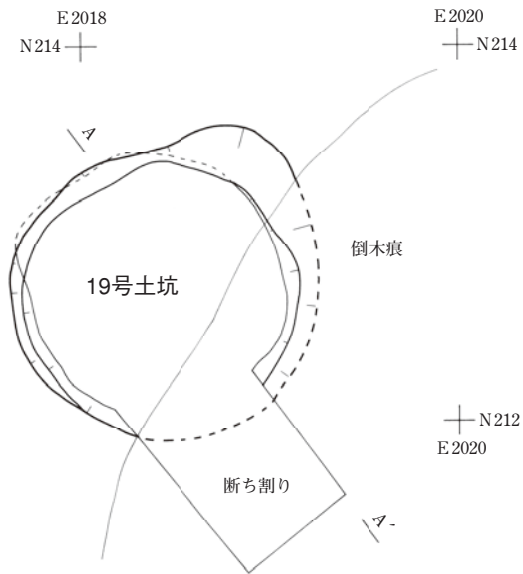
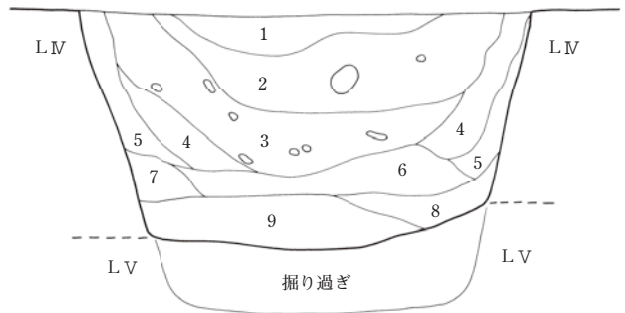
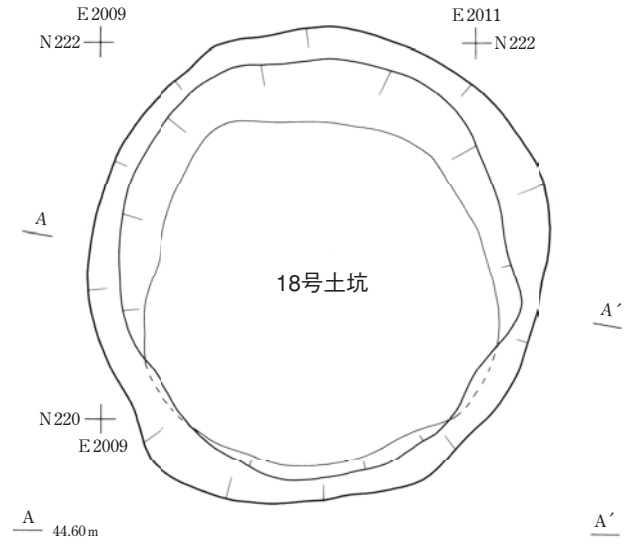


図14 17~19号土坑

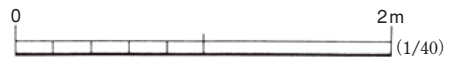


18号土坑堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (径0.5~3cm小礫を含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (径3~15cmの礫を含む)
- 3 褐色土 10YR4/4 (径2~10cmの礫を多量、暗褐色土塊を部分的含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊、径0.5~2cmの小礫を微量含む)
- 5 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (径0.5~1cmの黒褐色土塊を少量含む)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~3cmの小礫、褐色土塊を部分的含む)
- 7 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (径0.5~1cmの黒褐色土塊を少量含む)
- 8 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (黒褐色土塊を部分的含む)
- 9 褐色土 10YR4/6 (径2~5cmの礫を多量含む)

19号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量、径0.5~1cmの黄褐色土塊を微量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を多量含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を少量、径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 6 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を微量含む)
- 7 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (径0.5~2cmの暗褐色土塊を少量含む)
- 8 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量含む)
- 9 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)



作成した。その結果、平面プランで確認した新旧関係に矛盾は無かった。

堆積土は色調、含有物、含有物の大きさ・割合から9層に分層した。全て自然堆積土と判断した。ℓ1～6は周囲からの流入土で、レンズ状堆積を示す。ℓ2・5については、周壁際にLⅣに相当する黄褐色土塊が若干混入することから、周壁から塊状に崩落した土も含まれていると考えている。ℓ7～9は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。周壁は北西壁を中心に10cmほどオーバーハングするが、ℓ7～9の堆積状況から、遺構の上端幅はもっと狭く、断面形はフラスコ形を呈していたと推測される。

遺構の平面形は円形だが、北壁で一部張り出している。直径は1.6m前後を測る。底面は西側に緩く傾斜し、検出面から底面最深部までの深さは1.1m前後である。底面及び周壁の一部にはLⅣ下位の礫層が露出するが、ほとんど掘り込まれていない。礫層に達したため、掘り込みを終了したものと考えている。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8・10～14・18・33号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(丹 治)

20号土坑 SK20 (図15, 写真9)

本遺構は調査Ⅰ区北西隅のH24グリッドに位置し、LⅣ上面で検出された。周辺は遺構が希薄な場所で重複する遺構は認められない。近接する遺構は南東約5mに21号土坑がある。

土坑の平面形は東西に長い隅丸長方形で、その規模は長軸長1.23m、短軸長0.7m、検出面からの深さは最大で67cmを測る。底面は砂状でほぼ平坦である。周壁は開口部に向かって外傾するが、北側の壁は、開口部から底面に向かって緩やかに広がっている。遺構内の堆積土は黒色土のほぼ均一な層であるが、含有物によって3層に分層した。ℓ1・ℓ2には1cm大の礫が少量混入し、ℓ3には黄褐色土塊が含まれている。いずれも自然堆積と推定されるが、短時日に埋め戻された人為堆積の可能性もある。

本遺構の所属時期は、出土遺物がないため特定できない。また、その性格も不明である。(高 橋)

21号土坑 SK21 (図15, 写真8)

本遺構は調査Ⅰ区北西隅のH24グリッドに位置し、LⅣ上面で検出された。重複する遺構は認められないが、北西約5mに20号土坑が近接する。標高44.2～44.3mの緩やかな斜面に立地する。

土坑の平面形はやや変形した隅丸長方形で、その規模は北東-南西の長軸長が1.4m、南東-北西の短軸長が1m、検出面からの深さは最大で82cmを測る。底面は粘質土で礫を含んだ底丸型である。

周壁は開口部に向かって広がるが、東壁は階段状になっている。遺構内堆積土は3層に分層された。いずれも黒色土を基調としているが、各層には礫が混入している。壁際に沿ってレンズ状に堆積していることから自然堆積と推定される。

本遺構の所属時期は、出土遺物がないため特定できない。また、その性格も不明である。(高 橋)

22号土坑 SK22 (図15, 写真9)

本遺構はA32グリッドに位置する。LⅣ上面で暗褐色土の円形プランとして検出された。重複する遺構はなく、3m北東側には25号土坑、5m西方には24号土坑、3m北西側には9号性格不明遺構がある。周辺の地形はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層した。いずれも自然堆積土と判断している。ℓ2は壁際から緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。平面規模は直径1.1m前後を測る。底面はほぼ平坦で、検出面から底面最深部までの深さは25cm前後である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。 (丹 治)

23号土坑 SK23 (図15, 写真9)

本遺構は調査Ⅰ区中央北側、畝状遺構の西側にあたるE29グリッドに位置し、LⅣ上面で検出された。重複する遺構は認められない。本遺構の周辺は畝状遺構が集中し、その東側には土坑群が存在する。標高は44.4mである。

土坑の平面形は不整楕円形で、その規模は北西から南東の長軸長が1.16m、北東から南西の短軸長が0.96mを測る。底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦で、検出面からの深さは最大28cmを測る。周壁は開口部に向かって広がっている。遺構内堆積土は、東側で攪乱を受けているものの2層に分層できた。いずれも黒色土を基調としているが、ℓ2には黄褐色土塊が混入している。堆積の状況から、自然堆積と思われる。

本遺構は遺物が出土していないため、所属時期は特定できない。性格も不明である。 (高 橋)

24号土坑 SK24 (図15, 写真9)

本遺構はA32グリッドに位置する。LⅣ上面で暗褐色土の円形プランとして検出された。重複する遺構はなく、4m北方には4号性格不明遺構、3m北東側には9号性格不明遺構、5m東方には22号土坑、3m西方には28号土坑がある。周辺の地形は、北側はほぼ平坦であるが、南側には幅約13m、深さ最大1mの大きく窪んだ攪乱が認められる。本遺構の南側上部はこの攪乱により壊されている。特に南壁の残りはほとんどなく、2～3cmの立ち上がりが確認されるにすぎない。この攪乱については、地元の方の話によれば南側から簡易的な道があったとのことで、その造成の際に削られたものと推測される。

堆積土は3層に分層した。いずれも自然堆積土と判断している。ℓ3は北壁際を中心に緩やかに堆積し、LⅣの黄褐色土に類似するため、主に周壁からの崩落土と考えている。

平面規模は長軸長1.74m、短軸長1.2mを測る。底面はほぼ平坦であるが、細かい凹凸がみられる。検出面から底面までの深さは、遺存状態のよい北壁際で52cm前後である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。 (丹 治)

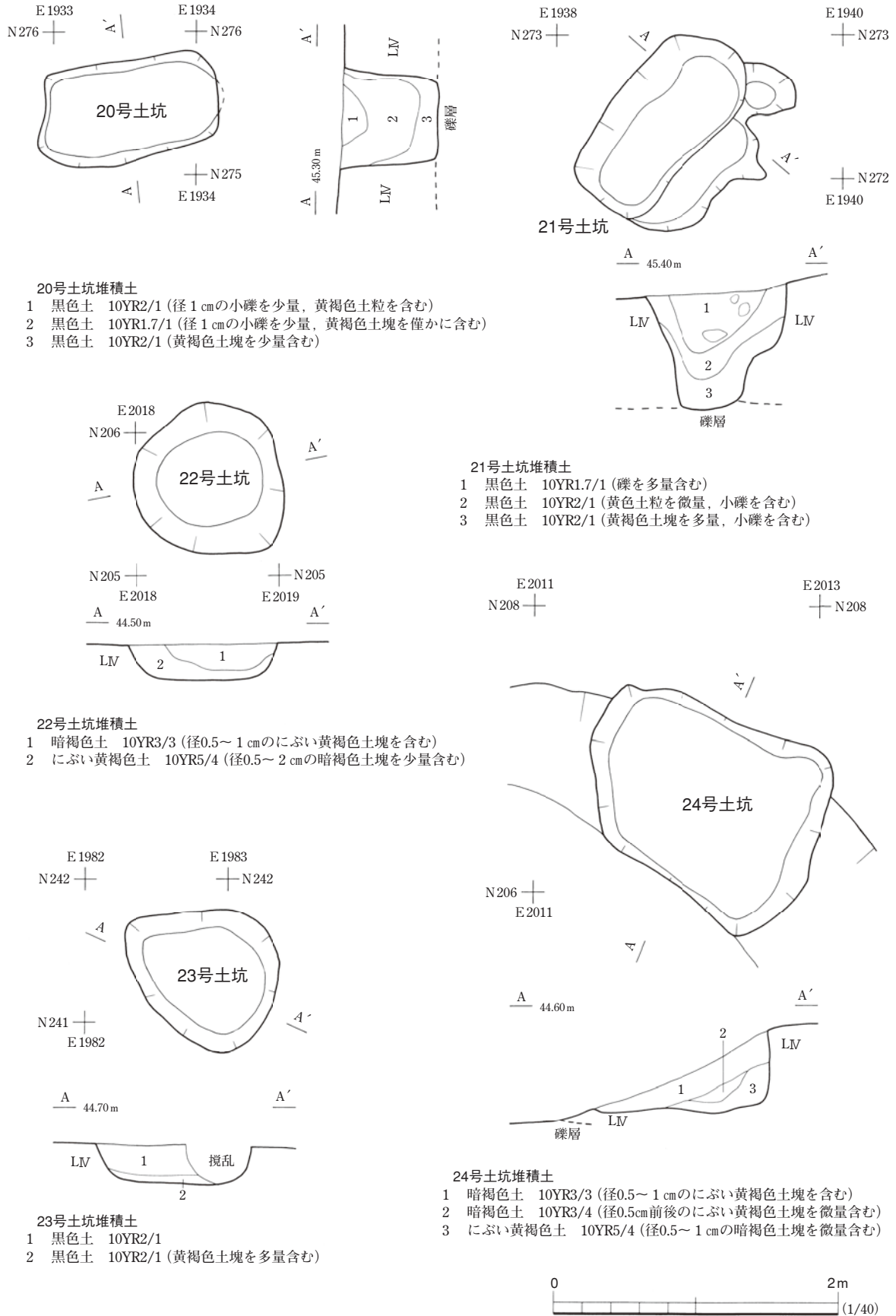


図15 20~24号土坑

25号土坑 SK25 (図16, 写真9)

本遺構はA33グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、5 m東側には9号土坑と3号性格不明遺構、3 m南東側には11号土坑、3 m南西側には22号土坑がある。周辺の地形はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層した。人為的に混ぜられた痕跡が確認されなかったため、いずれも自然堆積土と判断している。

遺構の平面形は南北に長い楕円形を呈する。長軸長1.68m、短軸長は0.9mを測る。遺構中央部は土層を観察する際に多少掘り過ぎてしまった。底面はほぼ平坦であり、検出面からの深さは20cm前後である。なお、北壁際では底面にピットが1つ確認されており、直径20cm前後、深さ15cmを測る。

ℓ2からは石鏃が3点出土している。図16-1は有茎の石鏃で、石質は珪質頁岩である。側縁は直線的に仕上げられ、平面形はやや細身の菱形を呈する。茎部は末端をわずかに欠くが、細長く作出されている。2・3は石鏃もしくは石錐の破片で、ともに乳白色の玉髄製である。2は石鏃であれば基部、石錐であれば先端部とみられる。3は石鏃もしくは石錐の先端部と推察される。明確な根拠に欠けるが、前者の可能性が高いとみているため、今回は欠損部を下にして掲載した。

本遺構は掘り込みが浅いため、図16-1～3が確実に遺構に伴うものとはいえない。しかし、堆積土は平安時代と推測される29・30号土坑とは異なり、古い遺構と推測されることから、縄文時代の所産と考えておきたい。遺構の性格については明らかにできなかった。(丹 治)

26号土坑 SK26 (図16, 写真10)

本遺構はC29グリッドに位置する。二条の畝状遺構と重複し、本遺構の方が古いことを平面プランで確認した。更に後世の攪乱を受けている。検出段階では平面形は判別できなかったが、攪乱と畝状遺構を掘り込んだ後に、暗褐色土の不整形プランが明瞭に確認された。検出面はLⅣである。周辺の地形はほぼ平坦で、畝状遺構の他には8 m北東側には15号土坑、2 m南方には30号土坑がある。堆積土は2層に分層した。ℓ1は自然流入土と判断した。ℓ2は黄褐色土がブロックで多量に混入している。人為的堆積と考えているが、周壁際に厚く堆積しているため、遺構構築廃土などが自然流入した可能性もある。平面規模は長軸長0.69m、短軸長0.74mを測る。底面ではLⅣ下位の礫が露出しているが、ほぼ平坦である。検出面から底面までの深さは45cm前後である。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明であるが、位置関係・堆積土からみて29・30号土坑と同じ時期の所産と推測している。(丹 治)

27号土坑 SK27 (図16, 写真10)

本遺構はB29グリッドに位置する。北壁～中央部にかけて畝状遺構と重複し、本遺構の方が古いことを平面プランで確認している。また南端の上部は攪乱によって壊されている。検出段階では平面形は判別できなかったが、攪乱と畝状遺構を掘り込んだ後に、暗褐色土の楕円形プランが明瞭に

確認された。検出面はLⅣである。周辺の地形はほぼ平坦で、畝状遺構の他には2 m北西側に29・30号土坑がある。

堆積土は3層に分層した。ℓ 1・2には部分的に褐色土塊や黒褐色土塊が混じるが、全体では少量のため周囲からの流入土と考えている。ℓ 3は暗褐色土塊との混合土であるが、東壁際から緩やかに堆積することから、遺構構築廃土などが自然流入した可能性があり、人為か自然か明確に判断できなかった。自然堆積の場合、西壁の立ち上がりが東壁に比して急角度なのは、東壁ほど崩落していないからと推測される。平面規模は長軸長2.08 m、短軸長0.95 mを測る。底面は北壁で10 cmほどの段がある他はほぼ平坦である。検出面から底面最深部までの深さは40 cm前後である。底面中央部ではLⅣ下位の礫層が若干露出している。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明であるが、位置関係・堆積土からみて29・30号土坑と同じ時期の所産と推測している。(丹 治)

28号土坑 S K 28 (図16, 写真10)

本遺構はA31グリッドに位置する。LⅣ上面で暗褐色土の楕円形プランとして検出された。重複する遺構はなく、3 m東方には24号土坑がある。周辺の地形は、北側はほぼ平坦であるが、南側には幅約13 m、深さ最大1 mの大きく窪んだ攪乱が認められる。本遺構の上部は24号土坑と同様に、この攪乱で削られている。特に南壁の残りはほとんどなく、2～3 cmの立ち上がりが確認されるにすぎない。堆積土は2層に分層し、いずれも自然流入土と判断している。ℓ 2にはLⅣに相当する黄褐色土塊が混入することから、周壁から塊状に崩落した土も含まれていると考えている。平面規模は長軸長1.87 m、短軸長1.07 mを測る。底面はほぼ平坦であるが、部分的にLⅣ下位の礫が露出している。検出面から底面までの深さは10 cm前後と浅い。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格などは不明である。(丹 治)

29号土坑 S K 29 (図17, 写真10・19)

本遺構はB29・C29グリッドに位置する。2条の畝状遺構と30号土坑と重複している。本遺構は畝状遺構よりは古く、30号土坑よりは新しいことを平面プランで確認した。遺構の変遷は古い方から30号土坑→29号土坑→畝状遺構の順である。更に南側では後世の攪乱を受けている。検出段階では平面形は判別できなかったが、攪乱と畝状遺構を掘り込んだ後に、褐色土の楕円形プランが確認された。検出面はLⅣである。周辺の地形はほぼ平坦で、畝状遺構・30号土坑の他には3.5 m北方に26号土坑、2 m南西側に27号土坑がある。

堆積土は褐色土の単一層である。焼土塊、暗褐色土塊、にぶい黄褐色土塊を多く含む混合土で、人為的に埋められたものと判断した。平面規模は長軸長1.55 m、短軸長1.0 mを測る。底面は西から東側に向かって緩やかに傾斜している。また、底面ではLⅣ下位の礫が露出している。検出面から底面までの深さは最大で22 cmである。

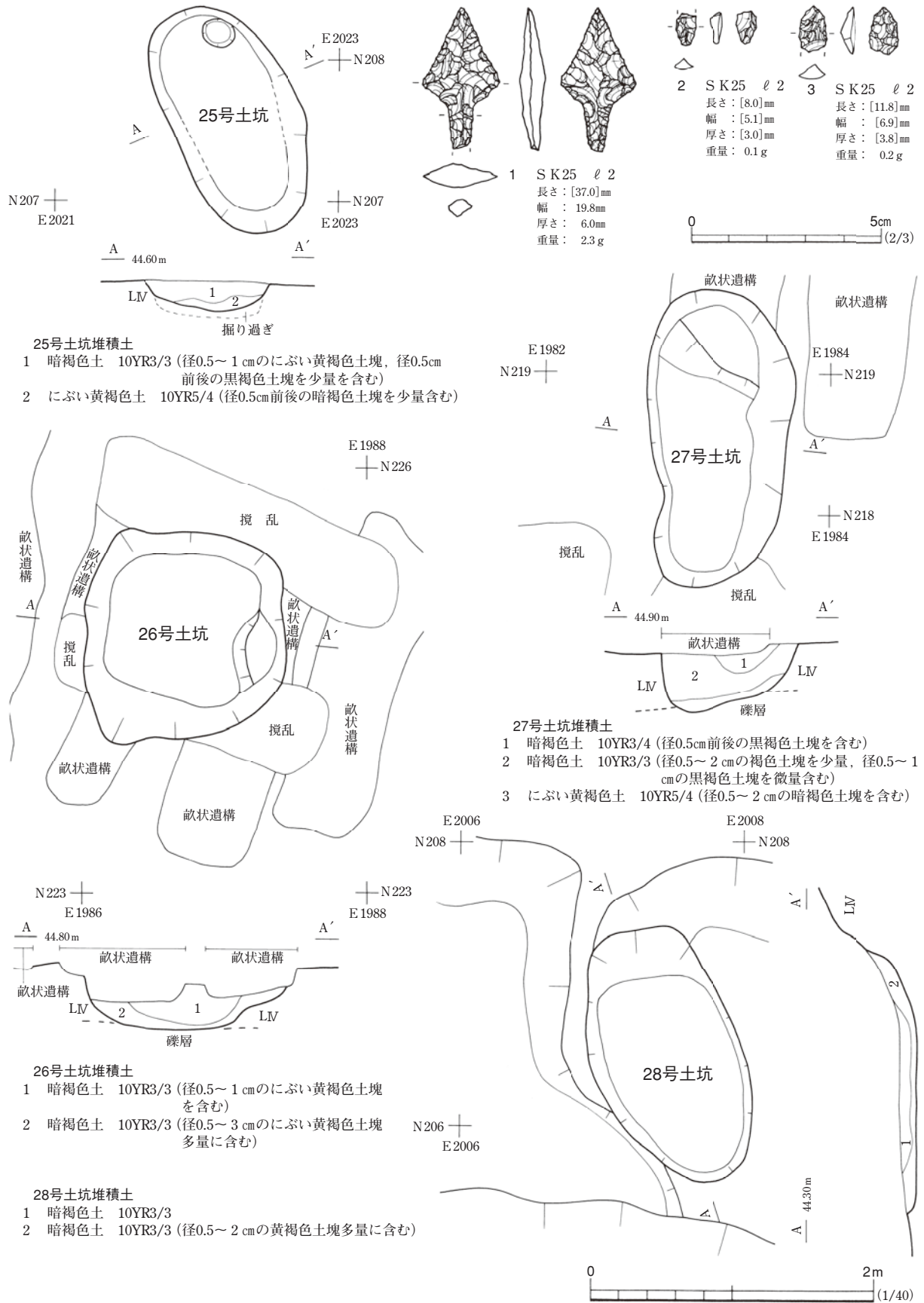


図16 25号土坑・出土遺物, 26~28号土坑

ℓ 1 から土師器片が35点出土している。このうち図化したものを図17に掲載している。30号土坑出土の土器片と接合するものも認められるため、30号土坑出土遺物もあわせて報告する。

1～3は土師器の杯である。全てロクロ成形で、ヘラミガキの後に黒色処理を施しているが、二次的な被熱のため1は全面、2は部分的に消えている。1は口縁部付近に煤らしき付着物が部分的に認められる。割れ口にも同様の付着物が認められることから、二次的な被熱の際に割れて付着したものと推測される。2は口径19.8cmと大型で、椀状の器形である可能性も考えられる。また、図化できなかったが、杯底部の破片で手持ちヘラケズリ再調整が施されるものがあった。

4は筒形土器である。口縁部のみの資料で、粘土紐積み上げ痕付近で割れている。外面には指オサエがわずかに認められる程度であるが、内面にはヘラナデが丁寧に施されている。

5～9は土師器甕である。全てロクロ成形である。5は3つの破片であるが、器形・器厚・調整などの特徴から1個体の資料と判断し、復元実測して掲載した。外面は胴部下端に横方向のヘラケズリが施されている。底部は摩滅のため不明である。内面はヘラナデ・ヘラミガキ調整の後に黒色処理を施している。またコゲの付着がわずかではあるが認められる。6は5ほどではないが、若干口唇部をつまみ上げるような意識が看取される。8・9の外面には器面調整の後に粘土が付着しているのが確認される。

出土遺物から本遺構は平安時代の所産と考えているが、性格などは不明である。 (丹 治)

30号土坑 SK30 (図17, 写真10・19)

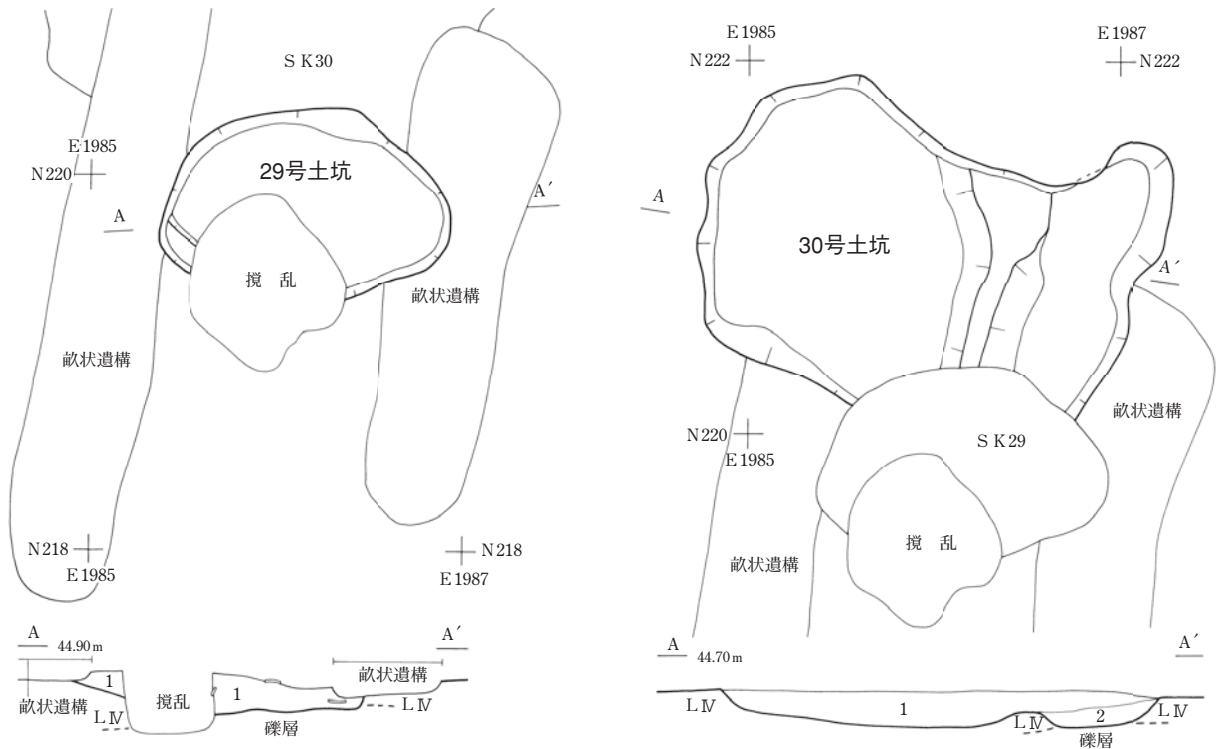
本遺構はC29グリッドに位置する。2条の畝状遺構と29号土坑と重複している。本遺構は畝状遺構と30号土坑より古いことを平面プランで確認した。遺構の変遷は古い方から30号土坑→29号土坑→畝状遺構の順である。検出面はLⅣである。周辺の地形はほぼ平坦で、畝状遺構・29号土坑の他には2m北方に26号土坑、2m南西側に27号土坑がある。

堆積土は2層に分層した。ℓ 1は暗褐色土を呈する。にぶい黄褐色土、黒褐色土、炭化物を含む混合土で、人為堆積と考えている。ℓ 2はLⅣに近似するにぶい黄褐色土で、水平に堆積することからℓ 1と同様に人為堆積と判断した。遺構の平面形は不整形で、規模は長軸長2.42m、短軸長1.45mを測る。底面は中央やや東側で陸橋状に掘り残されている以外はほぼ平坦である。また、東側の底面ではLⅣ下位の礫が露出している。検出面から底面までの深さは最大で20cmである。

なお、ℓ 1から土師器片が16点出土しているが、図化したものについては29号土坑で報告した。割愛した破片は甕がほとんどであるが、中には筒形土器片もみられた。これらの出土遺物から本遺構は平安時代の所産と考えているが、性格などは不明である。 (丹 治)

31号土坑 SK31 (図18～20, 写真11・20～24)

本遺構はF5・G5グリッドのLⅢ上面で検出された。周辺の地形は南東方向に緩く傾斜している。重複する遺構はなく、6m北方に4号土坑が、9m北東側に13号土坑がある。遺構内堆積土の



29号土坑堆積土

1 褐色土 10YR4/4 (径0.5~3 cmの焼土塊を多量, 径0.5~1 cmの暗褐色土塊を多量, 径0.5~3 cmのにぶい黄褐色土塊を含む)

30号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2 cmのにぶい黄褐色土塊・黒褐色土塊を少量, 径0.5cm前後の炭化物塊を微量含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (径0.5cm前後の暗褐色土塊を少量含む)

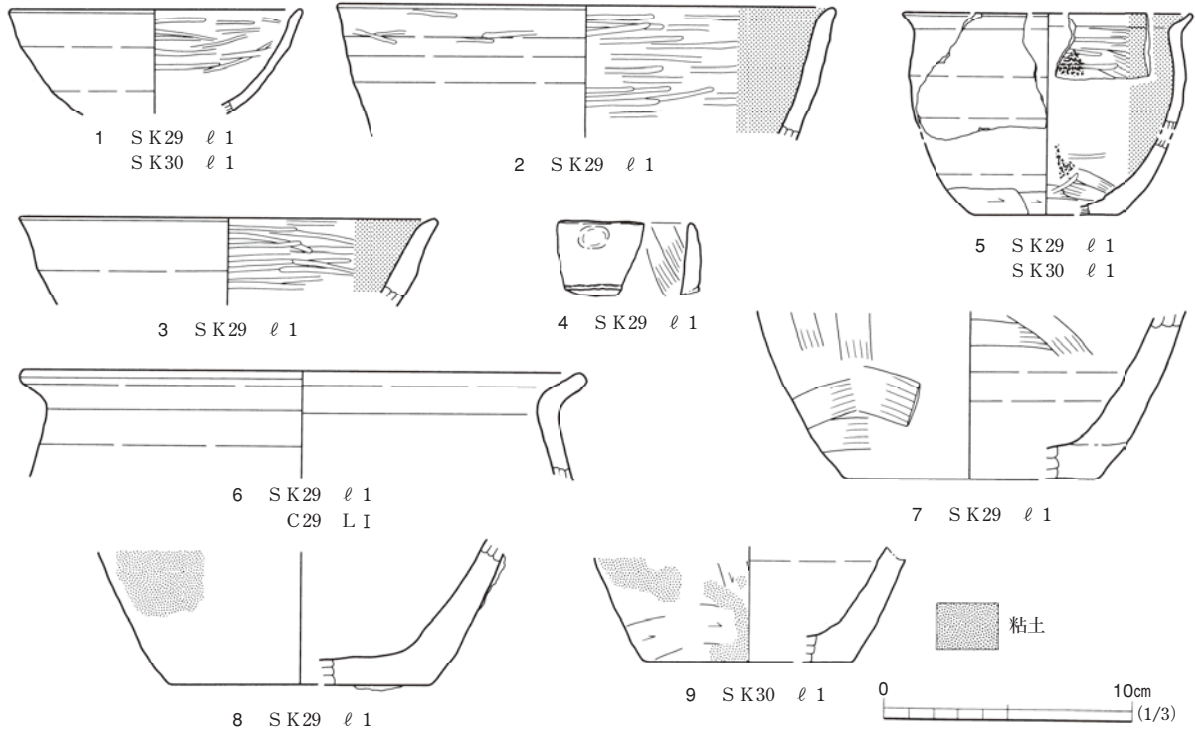
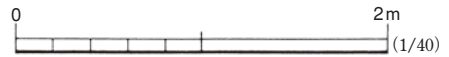


図17 29・30号土坑・出土土器

上部は後世の攪乱を受けた黒褐色土で、山芋が数本伸びていた。平面プランも明瞭であることから、調査当初は新しい時期の攪乱であると考えていた。遺構であると認識したのは、調査終了間際に駄目押しで掘り下げた時点である。そのため、上層のℓ1・2の土色などは確認していたものの、写真撮影などの客観的に示す記録を残すことができなかった。調査時の認識の甘さが招いた反省すべき点である。

図18に掲載した土層断面図は、参考のために分層の線を復元的に図化したものである。堆積土は3層に分けられ、ℓ1は上述した山芋などの攪乱を受けた層である。ℓ2は混ざりの少ない暗褐色土で、積極的に人為堆積と判断する根拠に欠けるため、自然堆積と考えている。ℓ3は水平に堆積する黒褐色土層である。霜柱の影響を受けているためか、LⅣの黄褐色土塊を多く含んでいる。遺物の大半はこのℓ3上面から出土している。取り上げた面の高さはほぼ同一で、標高にして約44.60mである。遺物は多くが口縁部を上にして整然とまとまって出土していることから、人為的に遺構内に置かれたものと判断される。ℓ3は、これらの遺物が配列される前に自然堆積していたとは考えにくく、水平に堆積する状況も考慮に入れると、人為堆積と考えるのが妥当であろう。

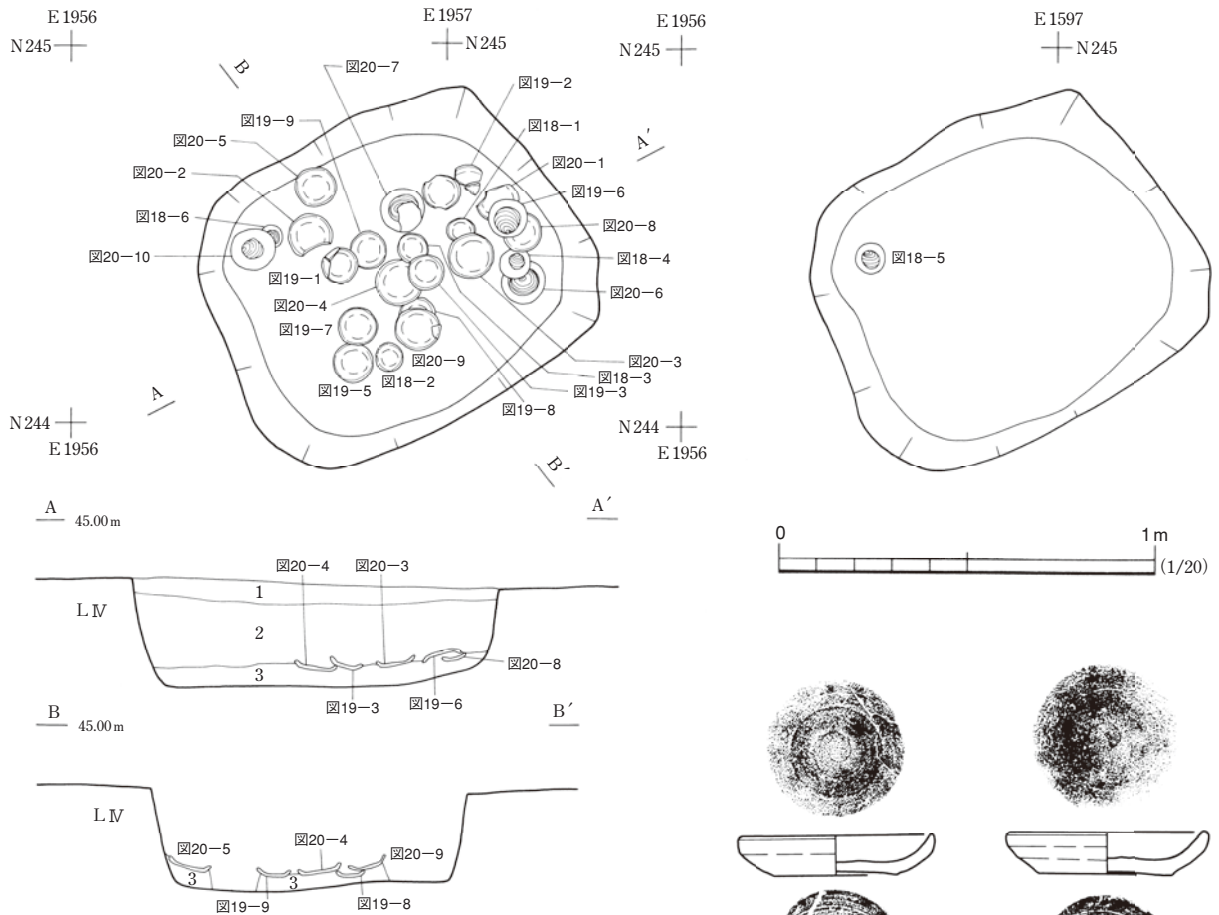
遺構の平面形はやや歪んだ方形で、長軸長1.1m、短軸長0.84mを測る。底面は平坦で、検出面からの深さは21～28cmである。底面は一部礫が混じるLⅣが露出している。

本土坑からは25枚のかわらけが出土した。ほぼ完形のものがほとんどであるが、山芋などの攪乱の影響で、割れているものや一部欠損する資料もみられる。第3章で詳しく触れるが、これらの出土遺物は法量から大・中・小の3つのまとまりに分かれる。そこで、図18～20には小～大の順にそれぞれ分けて掲載した。

これらの遺物は全て右回転のロクロ成形で、底部外面には回転糸切り痕が残るという特徴がある。回転方向は内面中央部のロクロ目からうかがえるため、明瞭なものについては、図18-1・2などのように拓本で示している。底部には切り離しの際に出たと思われる粘土が、回転糸切り痕の上に付着しているものが見受けられ、特に図19-7・9、20-8では顕著である。

外面は、切り離した後に体部下端～底部にかけて若干のナデを施しているが、丁寧に施すものあまり丁寧ではないものがみられる。調整として示すほどのものではないと考えているため、実測図では省略した。このナデの影響もあってか、底部～体部にかけての立ち上がりは明確に認められるものは少ない。しかし、18-2～4などの小型のものでは明瞭に観察される。一方、18-5に限っては、体部下端に回転ヘラケズリ調整を施している。内面は、ロクロ目も認められず丸くなっているものと、ロクロ目が残るものがある。前者の資料が多いが、後者については18-6、19-6～9、20-5～10で観察される。そして後者の中でも、19-8・9では明瞭にロクロ目が確認できる。

この19-8・9は口縁部が外方に開き、端部を上につまみ上げている特徴がある。他の資料と口縁部形態が異なっており、意識して形作られていると推察される。しかし、切り離しの際にめくれ上がった粘土が、ナデによって糸切り痕の上に重なっている状況が観察されるなど、底部に関してはそれほど丁寧ではない。他に形態で特徴的なものは18-6である。18-6の外面には、焼成前に棒



31号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~2 cmの黄褐色土塊を含む)
- 2 暗褐色土 10YR2/2 (径0.5~1 cmの黄褐色土塊を微量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (黄褐色土粒子を多量含む)

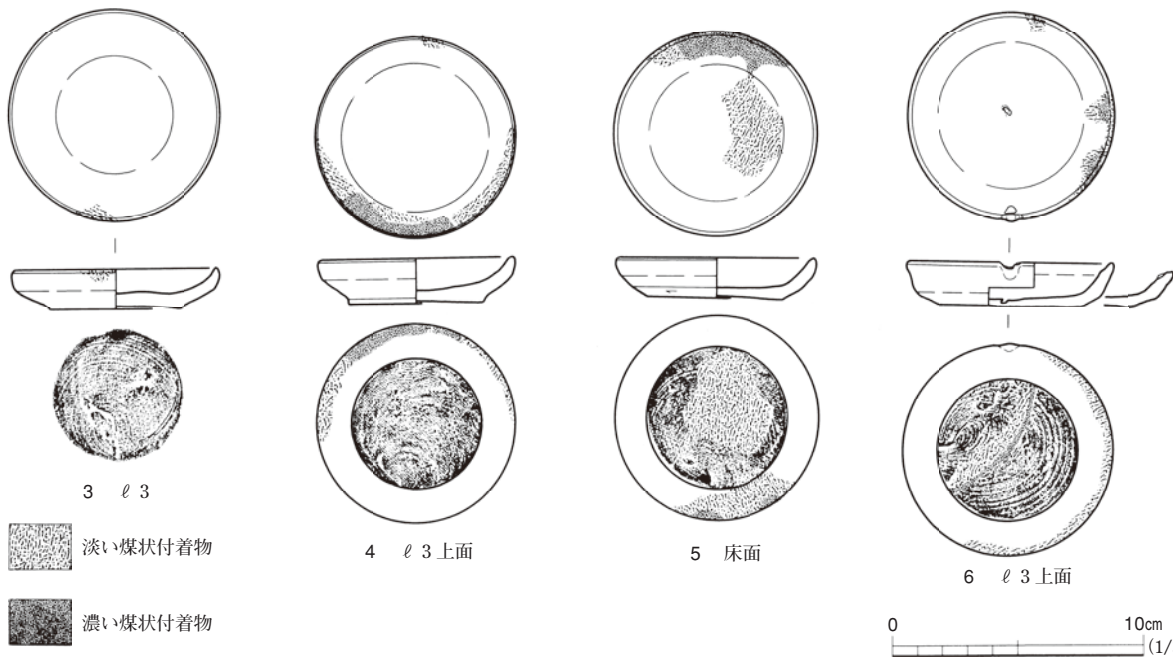
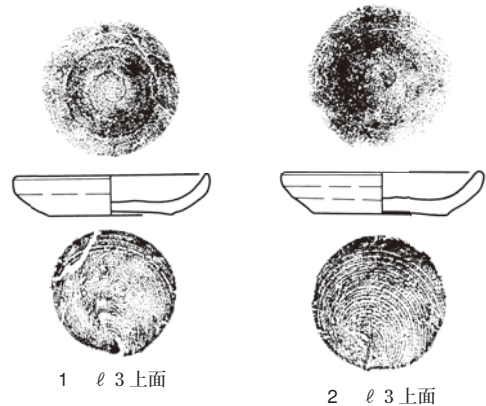


図18 31号土坑・出土遺物(1)

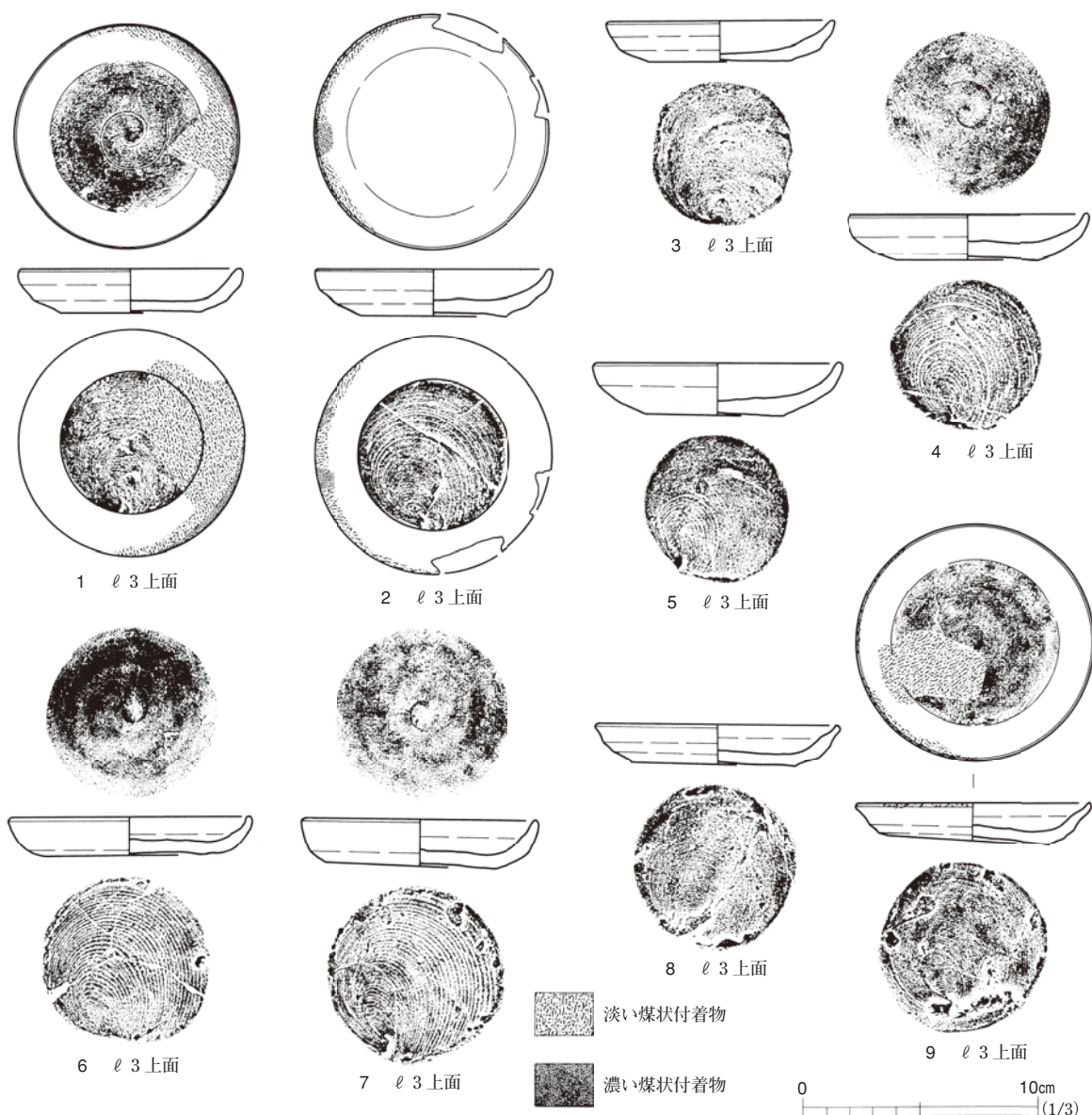


図19 31号土坑出土遺物（2）

状の工具を押し当てて、抉り部を作出している。そして、この抉り部の直下には、わずかながら粘土の付着が認められる。この厚さを断面図に、範囲を内面の展開図に示した。また、内面中央には刺突状の窪みが1箇所認められる。貫通してはいないが、底部は外側に若干盛り上がっている。

これらの遺物の中には、煤と思われる黒色の付着物が観察できるものがある。灯明具として使用された痕跡と推察している。付着物は薄い部分と濃い部分とが観察されるため、二種類のトーンの濃淡で示した。明瞭なものは18-4~6, 19-1・2, 20-1・2の7点であるが、不明瞭ながら灯明の痕跡の可能性のあるものについても、同様にトーンで示している（18-3, 19-9, 20-5・9）。なお、18-5・6など拓本と重複する箇所については、煤の付着範囲を優先して示している。付着物の範囲は主に口縁部に限られるが、18-5, 20-2では内面にも明瞭に及んでいる。20-2では付着の濃い部分が放射状に広がっており、裏面にもこれに対応するように薄い付着物の範囲が

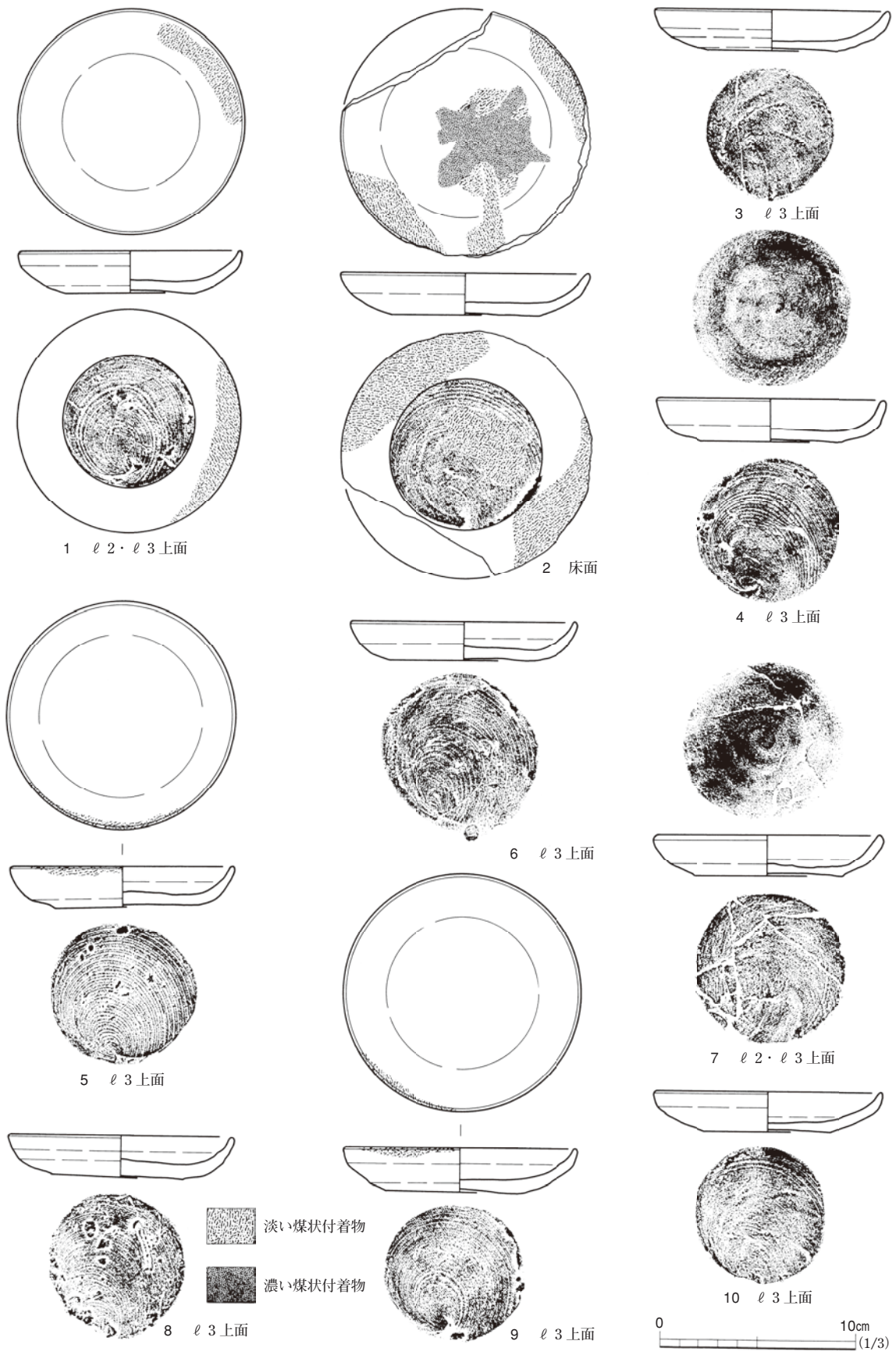


図20 31号土坑出土遺物 (3)

観察される。18-5でも内外面とも対応する部分が確認される。また、20-2は付着物の濃淡から、底部中央の薄い部分→底部中央から口縁部に延びる薄い部分→中央に放射状に広がる濃い部分、という付着の順序がうかがえる。

本遺構は長軸長約1mほどの小規模な土坑であるが、25枚のかわらけがまとまって出土した点が特筆される。所属時期については、出土遺物の年代観から、16世紀後半を中心とした時期と考えている。なお、周辺からは関連する時期の遺構・遺物ともに検出されていない。(丹 治)

32号土坑 SK32 (図21, 写真11)

本土坑は調査Ⅱ区、Q16グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複は見られない。遺構内堆積土は4層である。レンズ状に堆積しているところから自然堆積と考えられる。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は、長軸長1.07m、短軸長1.05m、検出面から底面までの深さは、最大で77cmを測る。底面は、若干の凹凸があるもののほぼ平坦な状況である。壁は底面よりほぼ垂

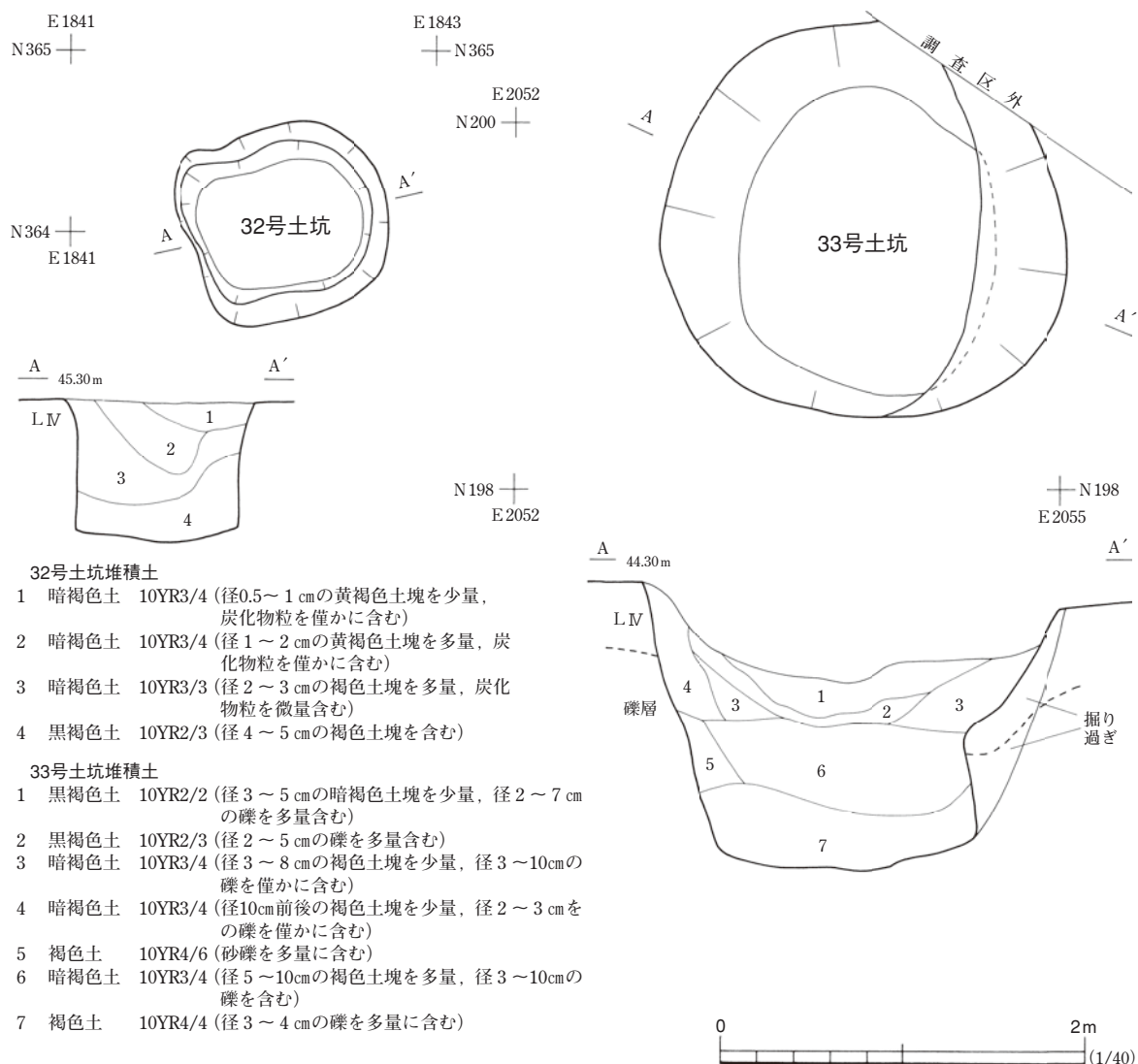


図21 32・33号土坑

直に立ち上がり、断面形は筒形の形態である。

本土坑からは遺物が出土していないため、所属時期・性格は特定できない。(富田)

33号土坑 SK33 (図21, 写真11)

本土坑は調査Ⅰ区、A30とA'36グリッドにまたがって位置し、LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複は見られない。遺構内堆積土は7層に細分した。堆積状況からすべて自然堆積と推測している。壁の崩落土と考えられるℓ4は基本土層のLⅣに、ℓ5は基本土層のLⅤに近似する。北東部の一部が調査区外となるが、平面形は円形を呈すると推測される。規模は、長軸長2.18m、短軸長2.15m、検出面から底面までの深さは、最大で1.50mを測る。底面は、礫層のLⅤに形成されているため細かい凹凸があるがほぼ平坦である。また一辺が約60cmの三角形をした巨石も自然状態で埋まっており、さらに掘り進めようとしたが、この巨石が障害となったとも考えられる。壁は、底面から急角度で立ち上がる。東側ではオーバーハングしながら立ち上がり、途中から緩やかに外反して検出面に至る。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、その規模・形態・堆積状況が近似する8～14・18・19号土坑と同じ時期・性格のものと考えている。(富田)

第5節 焼土遺構

今回の調査で検出された焼土遺構は、調査Ⅰ区・Ⅱ区から各1基の計2基が確認された。2号焼土遺構は、平安時代の遺物が集中的に検出され、遺存状態が悪かったが住居跡の可能性はある。

1号焼土遺構 SG1 (図22, 写真11)

本遺構はⅡ区のQ12グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。重複する遺構はないが、風倒木痕の上面で検出された焼土遺構である。焼け面の範囲は、長軸長88cm、短軸長54cmに及ぶ。最大15cmまで焼土化が認められ、中央付近は酸化状況が顕著である。

本遺構の周囲にはピットなどの遺構はなく、上屋構造物を伴う可能性は低い。所属時期は、検出時における伴出遺物もないことから、不明といわざるを得ない。(門脇)

2号焼土遺構 SG2 (図22)

本遺構はB29グリッドのLⅣ上面で円形プランとして検出された。重複する遺構はないが、北側に隣接して畝状遺構が、3.5mにはB29-P1が位置する。周辺の地形はほぼ平坦であるが、南側はLⅣ下位の礫層が露出している。焼け面は、直径40cm前後の範囲で確認され、厚さ2～3cmまで焼土化していた。

本遺構はその性格上、焼土遺構として取り扱った。しかし、本遺構が検出された周辺に限って遺

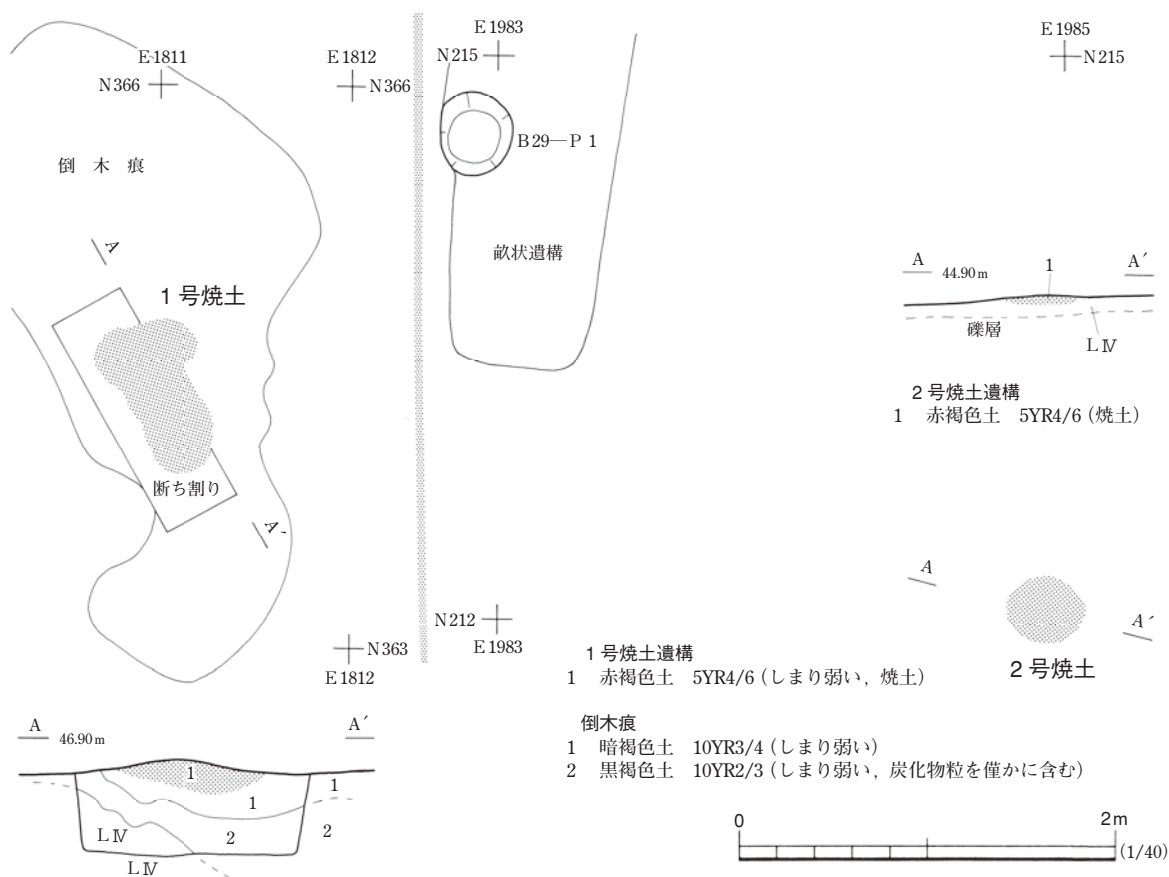


図22 1・2号焼土遺構

物が多く出土しており、B29-P1のように上屋構造を示唆するピット等も認められている。このことから、遺存状態は非常に悪かったが、住居跡カマド跡の可能性が高いと判断している。時期的には、検出時における伴出遺物の年代観から、平安時代の9世紀代と考えている。(丹治)

第6節 溝 跡

1号溝跡 SD1 (図23・24, 写真12・13)

本遺構はA'34・A34・B34グリッドのL IV上面およびL IV下位の礫層上面で検出された。本遺構を挟んで東側に1号性格不明遺構、西側に7～9・11号土坑と2・3号性格不明遺構が隣接するが、他遺構との重複関係はない。周辺の地形については、北側はほぼ平坦であるが、南側は緩く傾斜している。

遺構の主軸は概ね東に22°傾き、平面形は東側に緩い弧を描いている。全体の長さは調査区外に延びるため不明であるが、今回の調査範囲では11.4～12.8mを測る。断面形は薬研堀を呈し、上端幅は3.96～5.46mで南側に行くにしたがって幅が狭くなる。底面幅は0.2～0.37mと非常に狭い。本遺構はL IV下位の段丘礫層を1.6～1.95mほど、そしてその下の粘土層(大年寺層)を0.86～1.2mほど掘り込んでいる。本遺跡の土坑が礫層までで構築を終了しているのと対照的である。このように

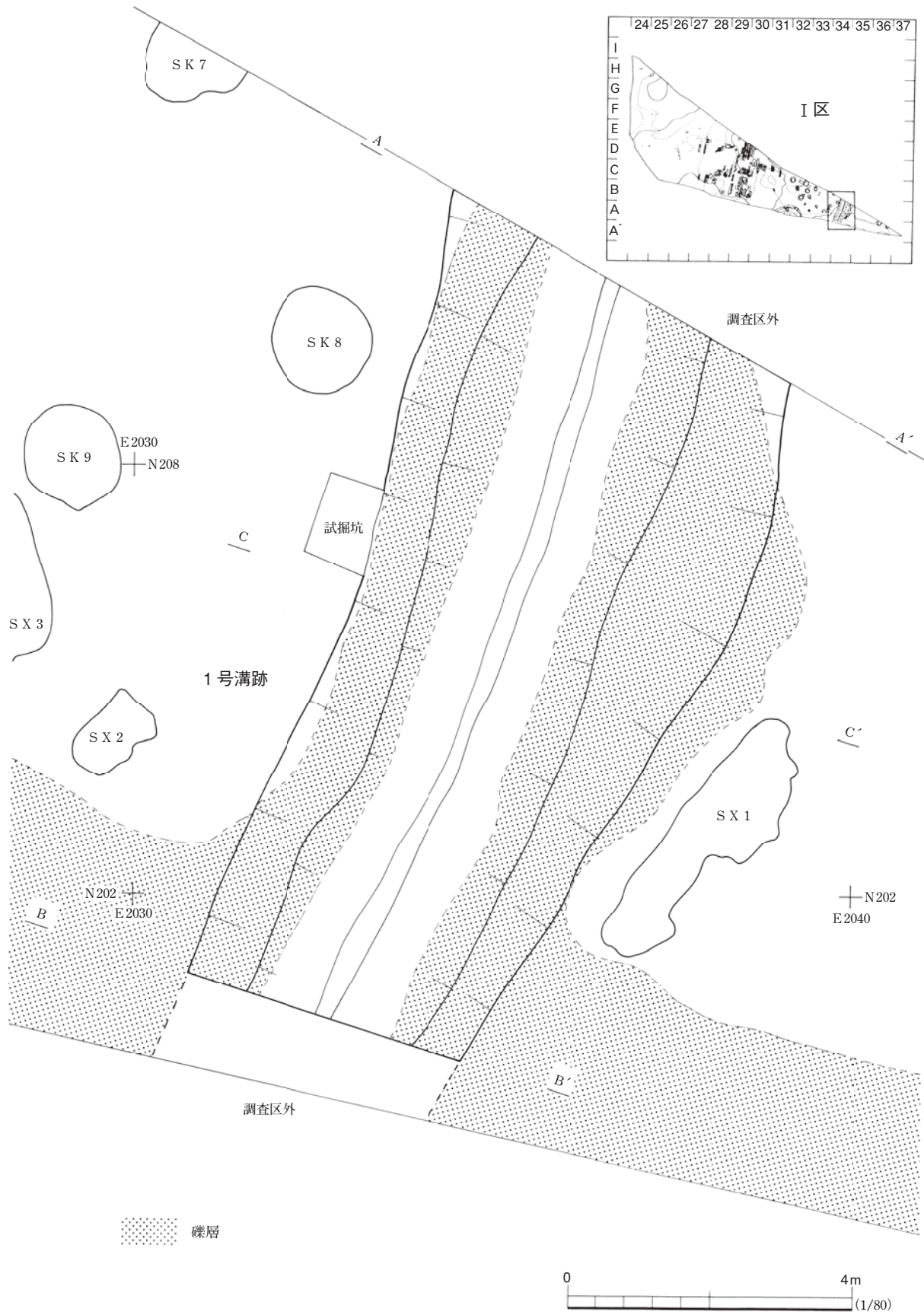
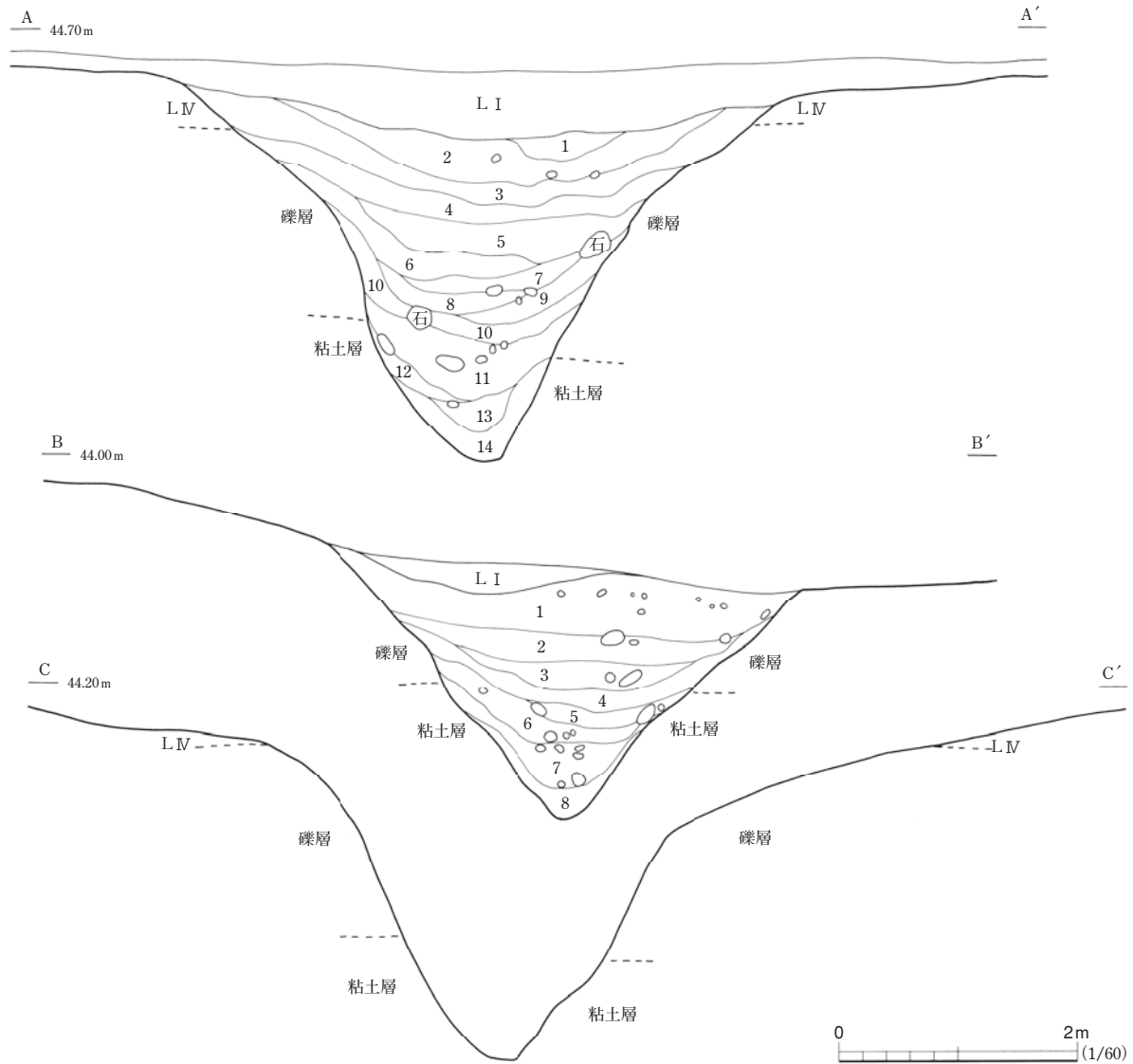


図23 1号溝跡



1号溝跡堆積土 (A A')

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を少量, 径0.5~2cmの黒褐色土塊を少量, 径0.5cm前後の炭化物塊を微量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5~3cmのにぶい黄褐色土塊を多量, 径0.5cm前後の炭化物塊を微量, 径3~4cmの礫を微量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を少量含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を微量含む)
- 5 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5cm前後のにぶい黄褐色土塊・小礫を少量含む)
- 6 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5cm前後の暗褐色土塊を微量含む)
- 7 暗褐色土 10YR3/3 (にぶい黄褐色土粒子を微量含む)
- 8 黒褐色土 10YR2/3 (径0.5~1cmの小礫を少量含む)
- 9 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を少量, 径0.5cm前後の小礫を含む)
- 10 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5cm前後のにぶい黄褐色土塊を少量, 径0.5~1cmの小礫を少量含む)
- 11 黒褐色土 10YR2/3 (にぶい黄褐色土粒子を微量, 径3~10cmの礫を含む)
- 12 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~1cmのにぶい黄褐色土塊を含む)
- 13 暗褐色土 10YR3/3 (径1~4cmの黒褐色土塊を少量, 径2~3cmの小礫を微量含む)
- 14 灰褐色土 7.5YR4/2 (径1~3cmの暗褐色土塊を少量含む)

1号溝跡堆積土 (B B')

- 1 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5~2cmのにぶい黄褐色土塊を多量, 径0.5~1cmの炭化物塊を少量含む, A A'の 礫 2に対応)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (径1~3cmの暗褐色土塊を多量, 径0.5~1cmの小礫を少量, 径5~15cmの礫を僅かに含む, A A'の 礫 4に対応)
- 3 暗褐色土 10YR3/4 (径0.5cm前後の小礫を少量, 径5~15cmの礫を微量含む, A A'の 礫 5に対応)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (径0.5~2cmの小礫・にぶい黄褐色土粒子を微量含む, A A'の 礫 7に対応)
- 5 暗褐色土 10YR3/3 (A A'の 礫 9に対応)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (径2~3cmの小礫を多量, 径5~10cmの礫を少量, にぶい黄褐色土粒子を少量含む, A A'の 礫 10に対応)
- 7 黒褐色土 10YR2/3 (径3~10cmの礫, にぶい黄褐色土粒子を少量含む, A A'の 礫 11に対応)
- 8 灰褐色土 7.5YR4/2 (径0.5~1cmの暗褐色土塊を少量含む, A A'の 礫 14に対応)

図24 1号溝跡断面

掘られた周壁残存高は1.96～3.22mと深いですが、周辺の地形にあわせて南側の立ち上がりほど浅い。底面の標高は40.96～41.08mで、差は僅かに12cmとほぼそろっているが、南側の方に緩やかに傾斜している。遺構の底面は平滑で丁寧に掘られているが、工具痕などは確認されなかった。なお、本遺構の底面付近は湧水点になっている。そのため調査中も水が染み出てきて調査が滞った。

土層断面図は北側と南側の調査区際でそれぞれ作成した。南側の土層も北側と基本的に変わらないが、礫の混入する割合が北側よりは多いなど細部で異なるためである。南側で礫が多く含まれるのは、礫層の崩落が北側に比べ多かったことによると考えている。以下北側の土層について述べるが、南側の土層が北側のどの層に対応するかは土層注記に示した。

堆積土は14層に大別される。ℓ 1・2が人為堆積、それ以下の層は自然堆積と判断した。ℓ 1・ℓ 2はLⅣに起因する黄褐色土のブロックを多量に含む暗褐色土である。ℓ 3が形成された時点でも、本遺構は埋まりきっていなかったため、窪みをなくすために埋めた整地層と考えている。ℓ 4は旧表土と推測される黒褐色土で、ℓ 3はその上にレンズ状に堆積している。ℓ 5～14は暗褐色土・黒褐色土を主体とする層で、含有物の径・割合で細分した。周囲から流入した状況が明瞭に観察される。ℓ 12・14については周壁の粘土層の色調に近似することから、霜などの影響による周壁の崩落土も含まれていると推察される。なお、混合土が遺構内に流入している状況は認められないため、土塁などの施設はなかったものと考えている。

本遺構から遺物は出土していないが、年代を推定するため火山灰分析を行っている。分析の結果、全ての層に浅間粕川テフラ（As-Kk）が、ℓ 6～11には榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）が含まれていることが明らかとなった。前者は1,128年に浅間火山から、後者は6世紀中葉に榛名火山から噴出したとされる。これらのテフラは純層をなさず混在して検出されているため、直接的な年代を示していない。遺構機能停止後に、混在したテフラが遺構内部に自然に流入したといえるにすぎない。このように、上限については明確な根拠がないため時期を特定することはできない。しかし、本遺構の何世紀にもわたっての継続は想定しにくいいため、浅間粕川テフラが降下する前後の時期と推測される。下限については遺構内堆積土の黒褐色土はLⅡに相当することから、LⅡが削平される以前ということが出来る。

本遺跡は丘陵の上部に位置するが、1号溝跡は丘陵の端部を切断するような形で構築されている。そして薬研堀を呈する形状も考慮に入れると中世の堀切り跡と考えて遜色ない。しかし、堆積土には土塁のようなものがあつた痕跡は認められなかった。明治17年の榎葉郡富岡村の地籍図にも土塁・溝ともにその存在は確認されない。また、周囲に有機的な関係を結んで機能していたと思われる遺構も皆無である。以上のことから、現段階では遺構の性格について特定することは困難といわざるを得ない。ただ、礫層を掘り込むのは簡単な作業でないため、本遺構はかなりの労力を要してまでも構築しなくてはならなかったものと言えよう。

(丹 治)

第7節 性格不明遺構

本遺跡では平面形・断面形が不整形なものを一括して性格不明遺構として取り扱った。全て調査Ⅳ区からの検出であり、堆積土が他の遺構とは明らかに異なっている。出土遺物を伴うものがほとんどなく、所属時期を断定できる資料は少ないが、比較的短期間に形成されたものが多い。

1号性格不明遺構 SX1 (図25, 写真16)

本遺構は調査Ⅰ区のA34グリッドに位置する。LⅣ上面で、暗褐色土の範囲として検出した。重複する遺構はないが、西側には1号溝跡が隣接している。遺構内堆積土は5層に細分される。ℓ2・3はℓ1と基本的に同じ層であるが、含有物の多寡によって分層した。レンズ状堆積を示すため自然堆積と推測される。ℓ4は基本土層LⅣに近似する。

平面形は、北西から南西方向へと緩やかに傾斜する不整楕円形状を呈している。西側の壁線は、1号溝跡に平行しているが、東側ではやや蛇行している。規模は長軸長3.94m、短軸長約1mを測る。周壁は、北西部で緩やかに立ち上がる他は、比較的急傾斜で検出面に至る。また、南西には平坦部を持ち、西壁の一部でオーバーハングしている。底面は、中央部は平坦であるが、左右の掘り込みが深い窪み部分は砂礫層が露呈しているために凹凸がある。深さは最深部で56cmを測る。

遺物が出土していないため、本遺構の所属時期は不明である。西側の1号溝跡と平行に近接することを考慮すると、溝跡との関連性も指摘される。(富田)

2号性格不明遺構 SX2 (図25)

本遺構は調査Ⅰ区のA33と34グリッドにまたがって位置する。LⅣ上面で、暗褐色土の範囲として検出した。重複する遺構はないが、西側には3号性格不明遺構が隣接している。遺構内堆積土は2層に区分される。ℓ2は基本土層LⅣの黄褐色塊を多く含むことから、人為堆積と判断した。

平面形は不整長方形を呈しており、規模は長軸長1.17m、短軸長0.7mを測る。周壁は「U」字形をして立ち上がり、途中で平坦部を伴って検出面に至る。北東部では底から垂直に立ち上がる。底面には、15cm前後の幅の細い溝が「T」字形を成している。検出面からの深さは、最大で32cmを測る。遺物が出土しなかったため、本遺構の所属時期は不明である。(富田)

3号性格不明遺構 SX3 (図25, 写真16)

本遺構は、調査Ⅰ区のA33グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、東側には2号性格不明遺構が隣接している。遺構内堆積土は、4層に区分される。レンズ状の堆積を示していることから、自然堆積と考えた。平面形は不整形を呈し、規模は長軸長1.5m、短軸長1.1mを測る。検出面からの深さは38cmを測り、底面は瓢箪ひょうたんに似た形をしている。周壁は緩や

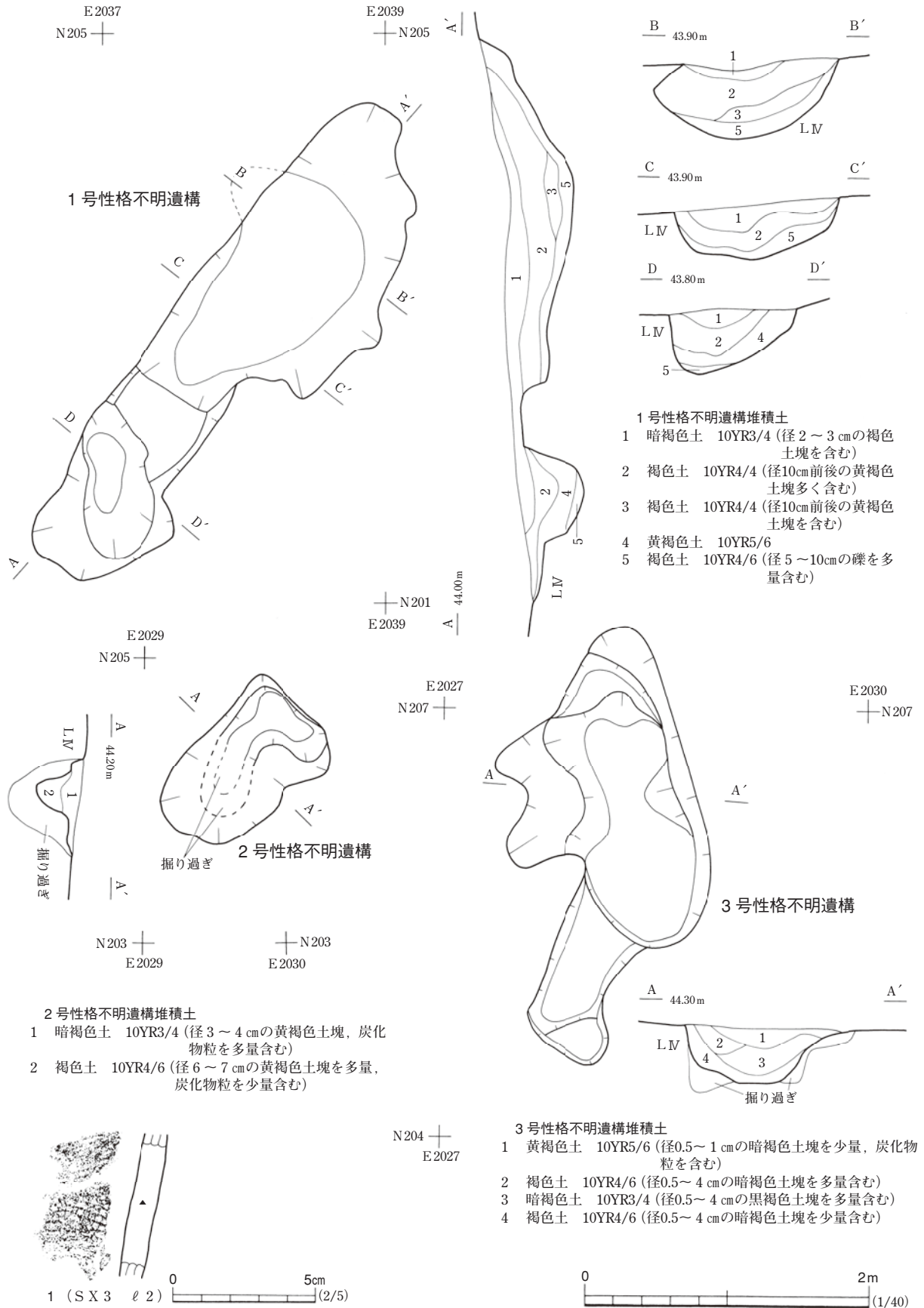


図25 1~3号性格不明遺構・出土遺物

かに立ち上がる。

遺物は流れ込みによるℓ2から縄文土器片2点が出土しており、1点のみ掲載した。図25-1は縄文早期後半の胴部下半の資料である。表裏条痕文で、胎土には繊維混和痕が観察される。器面へ施文される条間隔が一定していることから、絡条体条痕文と判断される。

本遺構の所属時期は明確には判断できない。また、その用途についても不明である。(富田)

4号性格不明遺構 SX4 (図26, 写真16)

本遺構は、調査I区のB32グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、北側の一部は攪乱を受けていた。調査当初、検出できた範囲が不明瞭であったことや、他の性格不明遺構と土層の堆積状況が類似していたため、本遺構も同様な遺構として取り扱った。

遺構内堆積土は12層に細分された。ℓ1・2は攪乱、ℓ3はLⅣの褐色土ブロックを多く混入し、一気に埋没した状況が観察できた。下層のℓ4～12は、基本的には類似する層相を呈する。基盤層であるLⅣの褐色土ブロックおよび周壁とともに炭化物粒が流れ込んだ混土層と判断される。上層のℓ3は人為的に投棄された土層、下層は自然堆積土と判断した。

平面形は不整形で、壁線は蛇行している。規模は長軸長3.92m、短軸長3.04mを測る。検出面からの深さは最深部で1.48mを測り、礫層であるLⅤまで掘り込まれている。底面には起伏はないが、緩やかに湾曲し、東側と西側の一部がオーバーハングしている。周壁は急角度で立ち上がり、北西部で平坦部が大きく張り出す不整形を成す。

本遺構の所属時期は、出土遺物がないため不明である。遺構の性格・用途は明確には判断できないが、規模や下層で認められた土層の堆積状況から判断すると、近隣で検出された13・14・18・19号土坑と類似しており、これらの土坑と同様の性格が想定される。(富田)

5号性格不明遺構 SX5 (図26)

本遺構はB31グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、北側にB31-P1が隣接している。堆積土はほぼ均一な層であるが、主体とする土色により2層に分層した。遺構の平面形は不整楕円形で、規模は長軸長0.72m、短軸長0.46mを測る。

遺構の性格は不明であるが、時期については、他の性格不明遺構と同様、比較的新しい時期の所産と考えている。(丹治)

6号性格不明遺構 SX6 (図26)

本遺構は調査I区のB33グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面で、重複する遺構はないが、7・8号性格不明遺構が近接する。遺構内堆積土は2層に分けられる。ℓ1は含有物の多い褐色土である。ℓ2は黄褐色土塊を多量に含むことから、人為的に埋め戻したものと考えられる。

平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長53cm、短軸長44cmを測る。周壁は底面から急角度で立ち上

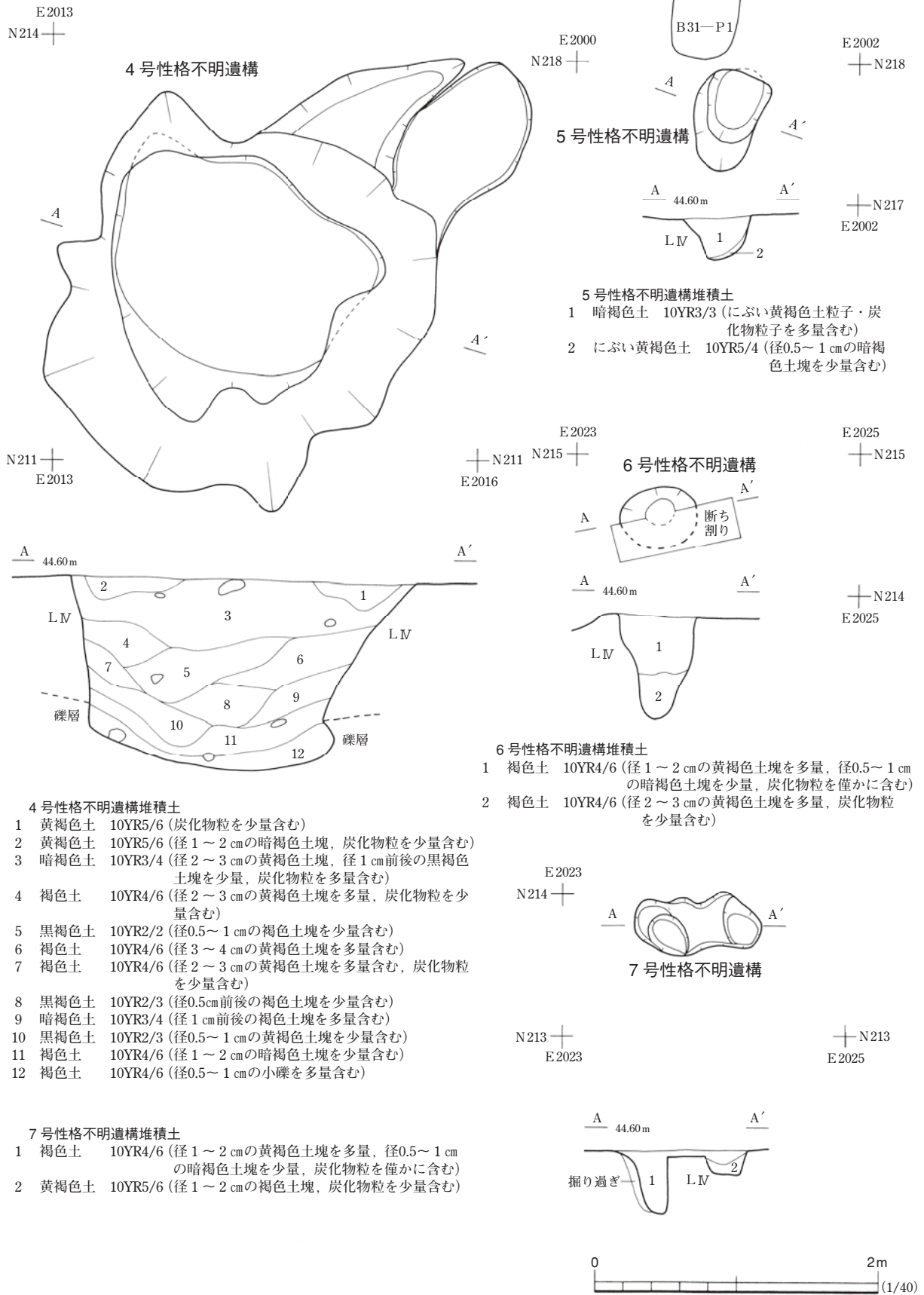


図26 4~7号性格不明遺構

がり、西壁付近は中位で外傾して確認面に至る。検出面から底面最深部までの深さは72cmを測る。
遺物が出土しなかったため、本遺構の所属時期は不明である。(富田)

7号性格不明遺構 SX7 (図26)

本遺構は調査I区のB33グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。重複する遺構はないが、6・8号性格不明遺構が近接する。遺構内堆積土は2層に分けられる。ℓ1は、6・8号性格不明遺構のℓ1と類似する褐色土で、ℓ2は基本土層のLIVに近似する。ともに自然堆積の様相を呈する。

平面形は不整形を呈し、中央の浅い平坦部を挟んで東西には窪みがある。規模は長軸長90cm、短軸長30cm、深さは16cm～43cmを測る。周壁は、いずれも底面から急角度で立ち上がっている。

出土遺物がないため、所属時期・性格は不明である。(富田)

8号性格不明遺構 SX8 (図27)

本遺構は調査I区のB33グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。重複する遺構はないが6・7号性格不明遺構が近接する。遺構内堆積土は6・8号性格不明遺構のℓ1と類似する褐色土の単一層で、自然堆積と判断した。

平面形は不整形を呈し、底面には3つの窪みを持つが中央部はほぼ平坦である。検出面からの深さは、24～33cmを測る。

遺構の性格は不明であるが、所属時期については、土層の堆積状況や遺構の立地から判断して他の性格不明遺構と同様に比較的新しい時代の所産と考えている。(富田)

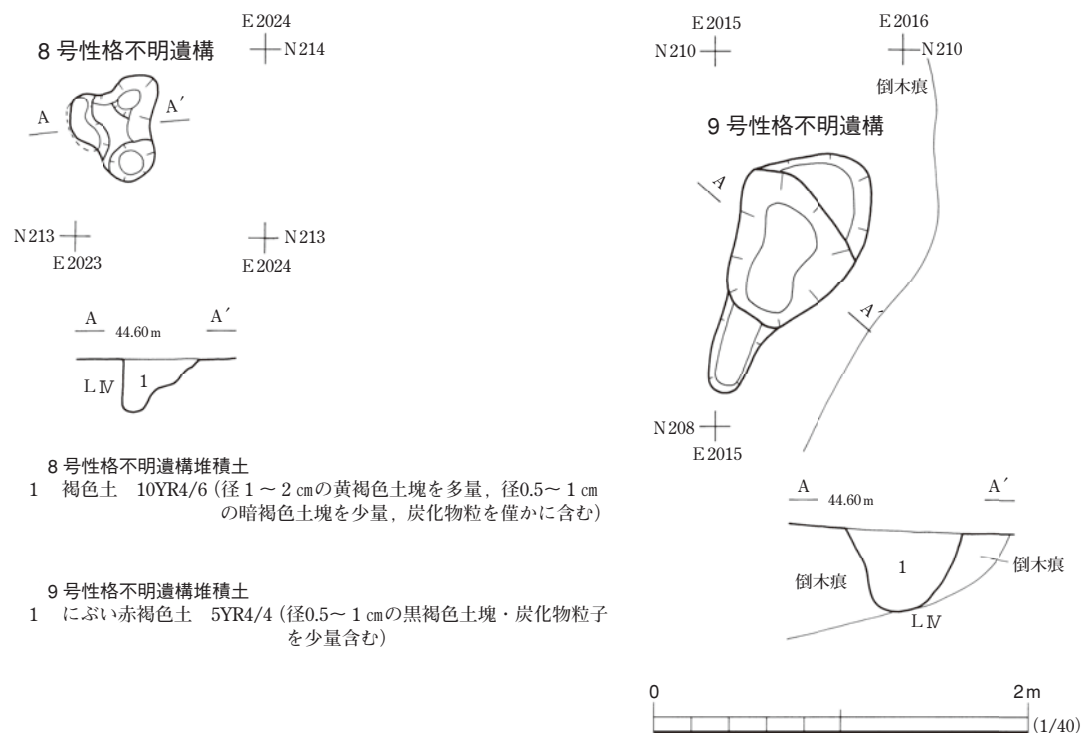


図27 8・9号性格不明遺構

9号性格不明遺構 SX9 (図27)

本遺構はA32グリッドのLⅣ上面で検出された。重複する遺構はないが、風倒木痕を掘り込んで構築されていることを平面プラン・土層断面で確認した。周囲の地形はほぼ平坦で、土坑や性格不明遺構などの遺構が集中している。

堆積土は、にぶい赤褐色土の単一層である。炭化物粒や黒褐色土塊を少量含んでいる。遺構の平面形は不整楕円形で、南北壁には浅い段が認められる。規模は長軸長1.37m、短軸長0.73mを測る。

本遺構からは出土遺物もなく、遺構の性格は不明である。また、本遺構と重複する風倒木痕に縄文時代中期頃の所産と推測している19号土坑が壊されている。そのため、時期については19号土坑よりも、さらに下った時期の所産と考えている。(丹 治)

第8節 その他の遺構

前節まで報告した竪穴住居跡や土坑などの他に、本遺跡からはピット12基および畝状遺構が確認されている。畝状遺構は、I区のほぼ中央部に位置し、ピットはその両側に散在して認められた。また、1号柱列跡の周囲から検出されたピットは、畝状遺構と何らかの関連性を有しながら機能していた可能性がある。

ピット (図28)

本遺構では柱列跡とした柱穴の他にも、同様のピットが少数ながら検出されている。これらは配列が不明で建物跡や柱列跡を構成するピットとして認識できなかったものである。検出されたピットの総数は12基である。全てI区からの検出で、そのうち5基がD26・E27グリッドに集中し、他の7基は散在している。ピットの検出面は、全てLⅣ上面もしくはLⅣ下位の礫層が露出している面で、周囲の地形はほぼ平坦である。なお、他遺構との重複関係はない。

ピットの平面形は円形で、直径が35～40cmほどの小規模なものが大半である。検出面からの深さはB29-P1が53cmであるが、それ以外は15～28cmと浅い。

F24・25、E27、D26グリッドのピットでは明瞭な柱痕は確認できなかった。しかしながら、周囲の1号柱列跡の堆積土に類似するしまりのない黒褐色土・暗褐色土で、掘形の径に近い太さの柱材を用いた可能性がある。これらのピットの多くが1号柱列跡の周囲に集中し、畝状遺構の西端に位置する。遺構に伴う遺物は出土していないため年代は不明であるが、性格についてはその位置関係から、1号柱列跡とともに畝状遺構に伴う作業小屋を構成していたと考えている。

また、第5節で述べたようにB29-P1は2号焼土遺構との関係で住居跡を構成していたと推察している。それ以外のピットは、検出面からの深さや堆積土からみて柱穴である可能性は低く、これらの性格については不明といわざるを得ない。(丹 治)

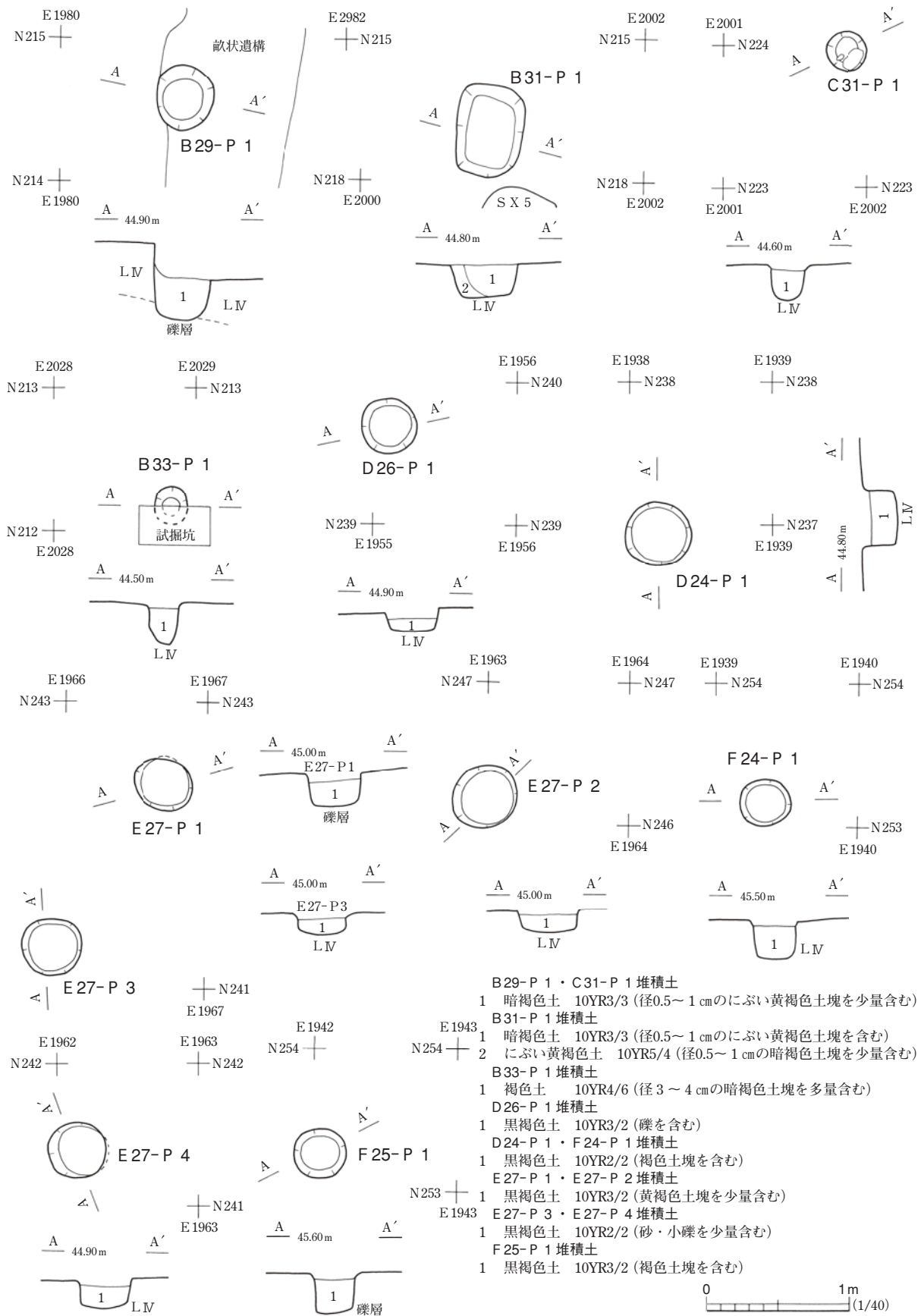


図28 ピット群

畝状遺構 (図29～31, 写真14・15)

本遺構はB27～29, C27～31, D27～30, E27グリッド, すなわちI区のほぼ中央に位置する。南北に延びる溝がほぼ一定の間隔で平行して存在することから, 畑の耕作に伴う鋤込み溝の可能性があると考えたが, 明確な根拠に欠けるため畝状遺構として取り扱うこととした。26・27・29・30号土坑と重複し, いずれも本遺構の方が新しいことを平面プランで確認した。なお, 畝状遺構の中での重複はなく, 一時期に営まれたものと判断している。これらの主軸は概ねN12°Eを示している。

検出面に関しては, 調査区北壁際の土層観察から本来的にはLⅡa上面であることがわかる。しかし, LⅡaおよびLⅢが残存する箇所が北側の一部に限られるため, ほとんどのところでLⅣ上面となっている。LⅡa・Ⅲの削平により南側の遺存は悪い。また, 本遺構は礫層が露出していないB29・C29・D29グリッドでは良好に分布しているが, 露出している箇所ではあまり認められない。そのため, 基本的には礫層が見えた段階で掘削を止めたと考えている。

畝状遺構を構成する溝跡の総数は36条である。検出面から底面までの深さは, LⅡaが残る北側の調査区際で最大52cmを測る。一方, D29・30グリッド以南では6～17cm程度と浅い。この南側の遺存状況からみても, LⅡa・Ⅲが削平されたのは本遺構が構築された後であるといえる。遺存が悪く本来の長さは不明だが, 最も長いところでは約10mである。幅はほとんどが底面近くで計測されるため, 30cm前後の狭い箇所もあるが, その多くは80cm前後である。溝跡の底面には鋤先状の工具痕など, 顕著な耕作の痕跡は確認できなかったが, 不規則ながら細かい凹凸や一段低くなる部分がみられた。

遺構内堆積土については, 遺存が良好なD29・30グリッドでは人為的に埋められている状況が観察された。すなわち径3～20cmの礫が大半を占め, その上にLⅣに相当する褐色土を主体とする混合土が礫層に蓋をするかのように堆積している。礫の下には黒色の腐食土が認められるため, 遺構機能停止後一定の期間の後に埋められたと考えている。D29・30グリッドの南側では遺構内の堆積土は1層もしくは2層がほとんどで, 黄褐色土の塊を含む黒褐色土を主体としている。この土は混合土であるが, 周囲から流入した可能性もある。堆積土が薄いため自然堆積か人為堆積かは判断で

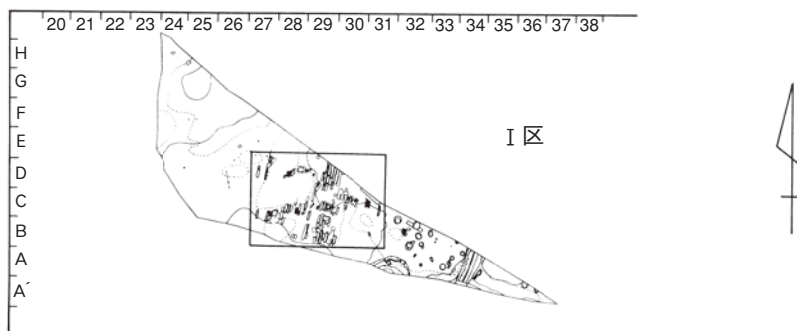


図29 畝状遺構位置図



図30 畝状遺構

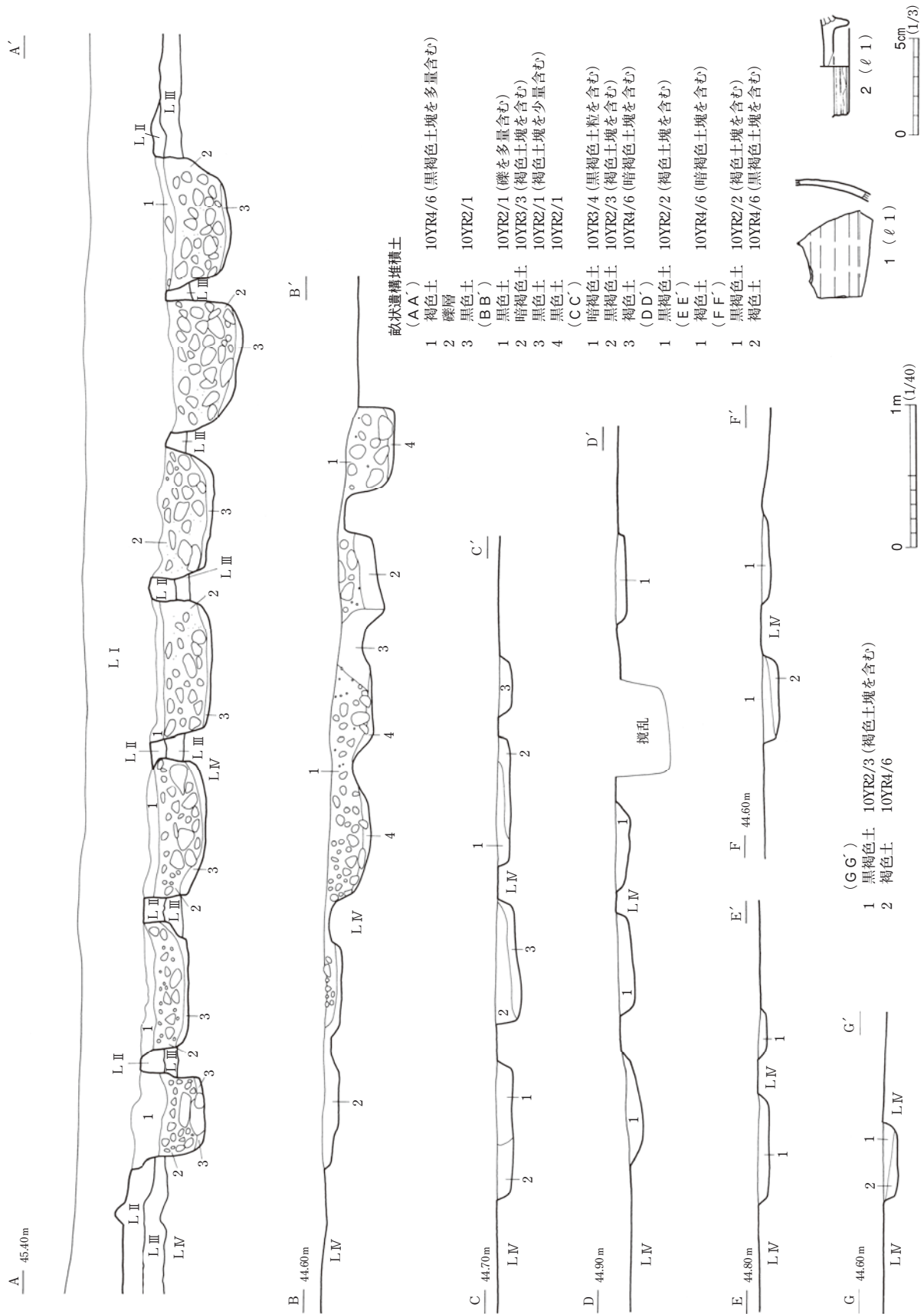


図31 畝状遺構土層断面図・出土遺物

きないが、礫層の下の黒色土とは異なっていた。なお、後世の削平のため上部が礫で埋められていたかどうかは不明である。

本遺構からはB29グリッド部分のℓ1から陶磁器が2点出土している。図31-1は灰釉陶器の碗で、内外面とも全面に釉の付着が認められる。周辺の窯跡の製品と推定され、18世紀後半に比定される。2は肥前系磁器碗で、内外面とも釉が付着するが、外面の高台端部にだけ付着が及んでいない。時期は18世紀代と推察している。

本遺構の時期は、切り合い関係から平安時代の所産と考えられる29・30号土坑よりは新しいといえる。また、量は少ないが、今回の調査範囲の中でも中世・近世以降の遺物は本遺構の周囲から集中して出土している。以上のことから、根拠ははなはだ希薄ながら中・近世以降の所産と考えておきたい。
(丹 治)

第9節 遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外から出土した遺物は、調査I区およびII区を合わせて総破片点数2,474点である。その内訳は、縄文土器片2,216点、土師器・須恵器片222点、陶磁器片20点、羽口片2点、鉄製品1点、煙管1点、銭貨1枚、石器・剥片類4点などが出土している。

図32には、グリッド別および層位ごとの出土破片点数を掲載した。これを見ると、出土遺物は調査区内から散在して出土しているが、主に遺構が検出された周辺とII区T・U-11~13グリッドからの出土量が卓越している。

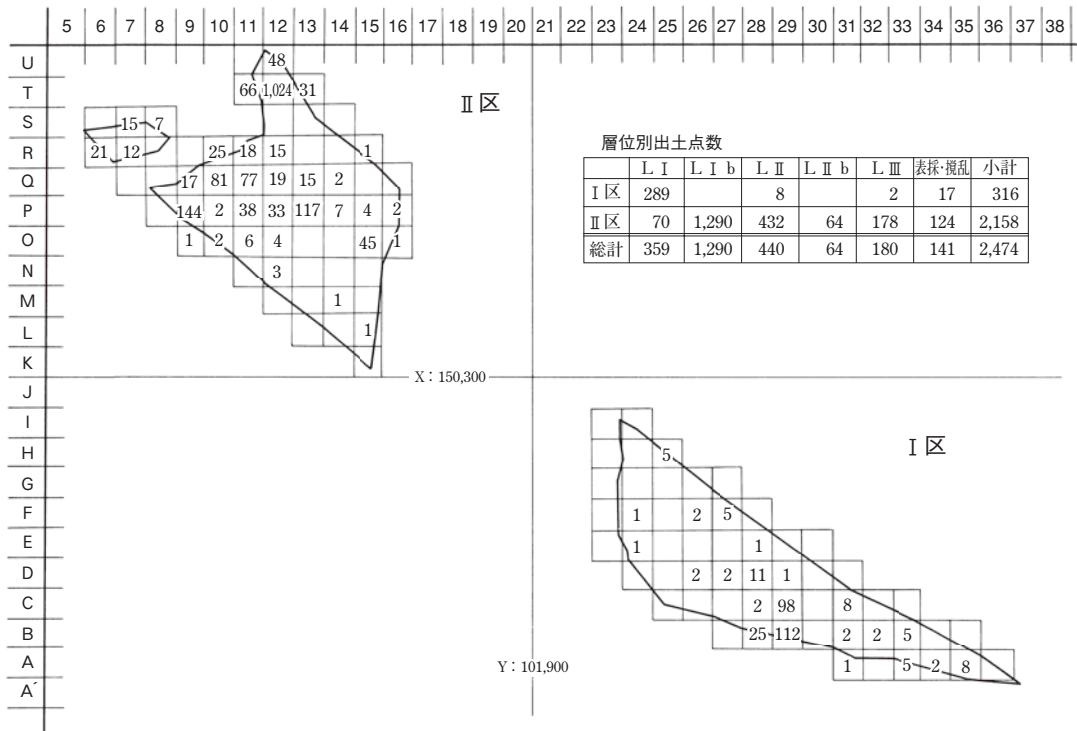


図32 グリッド別遺物出土状況

調査Ⅰ区では、焼土跡や畝状遺構が検出されたB～D-28・29グリッド付近から土師器片や陶磁器類が比較的多く出土している。ごくわずかに出土した須恵器片や煙管、鉄製品、古銭等もこの近辺から出土したものである。また、北側の調査Ⅱ区では、縄文土器片が主体的に出土しており、段丘崖のT～U-11～13グリッドからの出土量が圧倒的に多い。

層位別出土量(図32右上)では、LⅠから359点、LⅠbから1,290点、LⅡから440点、LⅡbから64点、LⅢから180点出土している。このうち、LⅠbとLⅡbは前述した調査Ⅱ区のS～U-11～14グリッド付近のみに認められた土層であり、縄文晩期の資料の大半はこの層から出土している。該期の遺物の分布状況や地形から判断すると、段丘崖は調査区外の東部に連続して形成されているため、さらにこの区域まで遺物の散布範囲が広がるものと推察される。

図33～図40には、縄文土器片147点、土師器片10点、陶磁器片11点、銭貨1枚、石器類6点の計175点について掲載した。出土遺物の大半が破片資料のため、全体の器形を把握できたものは少ないが、底部資料は95点認められた。遺存状態の良い資料については、実測図あるいは拓影右下に法量を記載し、土師器・陶磁器については一覧表(表1)を作成している。以下、縄文土器・石器・土師器・陶磁器の順で説明する。

縄文土器 (図33～38, 写真25～30)

今回の調査で出土した縄文土器は、調査Ⅰ区から122点、Ⅱ区から2,094点の計2,216点である。出土した遺物総数の約90%を占め、大半が基本土層のLⅠbとLⅡbから出土したものである。時期的には、縄文晩期の資料が圧倒的に多く、74点の底部片が認められた。以下、古い資料から順次概説する。

図33には、縄文早期から後期の資料をまとめて掲載した。図33-1は胴部下半の破片資料で、単節斜縄文が施文されている。胎土には繊維混和痕が認められ、縄文早期末葉～前期初頭の資料と思われる。同図2～7は縄文前期の資料である。2～5の胎土には、繊維混和痕が認められる。5は連続する「ハ」字状の刺突列が施された資料と判断され、浮島Ⅲ式に比定されるものであろうか。

6・7は深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部無文帯以下の胴部には単節斜縄文が施され、口端部に小突起を有する。大木6式に比定されるものであろう。同図8～19は縄文後期に該当する資料で、10・11は文様構成・胎土等から判断して同一個体の可能性が高い資料である。10・11は縄文地文で渦巻状の沈線文が施された堀之内2式、他は後期後半の加曾利B式期に比定される資料であろう。8は波状口縁を呈し、刻み目のある隆帯が巡るもの、13・15・16は縄文を地文とし、平行沈線と曲線文が施されたものである。17～19は壺あるいは鉢形土器と考えられ、曲線で縁取られた磨消縄文が描かれている。前者が加曾利B2式、後者が加曾利B3式と思われる。

図34～図38は縄文晩期中葉から後葉に属する資料である。全体の器形が分かる資料は少なく、図34には精製土器および半精製土器、図35～図37には粗製土器の口縁部～頸部資料を、図38には該期の底部資料と思われるものを掲載した。土器組成は、壺・浅鉢・鉢・深鉢が主体を占め、注口土

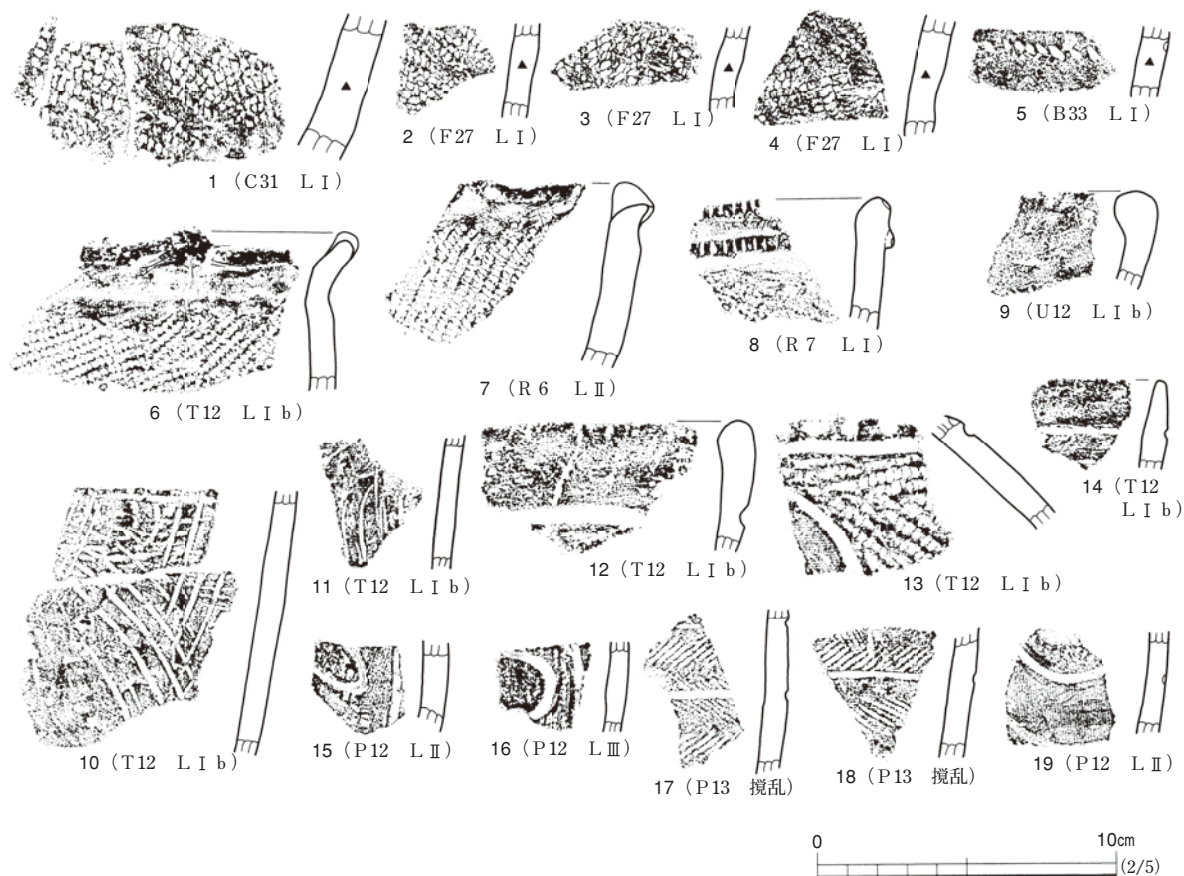


図33 遺構外出土遺物（1）

器・香炉形土器はごくわずか出土しているが、皿・台付土器などは認められなかった。精製土器の場合、小型の鉢形あるいは浅鉢形土器が大部分であり、やや大型のものは粗製系の深鉢形土器にほぼ限られている。口縁部は、平縁のものと小刻みな小波状口縁のもの、それに数単位の山形状突起を有するものがある。文様構成はほぼ胴部上半に限定され、雲形文・C字状入組み文・平行沈線文・工字文が比較的彫りの深い沈線によって浮線文的に付けられている資料が多い。羊歯状文やK字状入組み文、および変形工字文は認められない。いずれも薄手で、丁寧な調整を加えているものが多く、地文には撚糸文が多用されている。器表面に赤色塗彩されているものは認められなかった。

粗製土器および半精製土器の胴部には、撚糸文・網目状撚糸文・ハケメ状条痕などが多く認められるが、頸部が無文帯となるもの（図34-20~23・27, 図35）や無地のもの（図37-1~7）、単節縄文のもの、無節縄文のものも僅かにある。

図34-1は、算盤玉状の器形を呈する注口土器あるいは香炉形土器と思われる。地文には撚糸文が施され、刻みある隆帯が巡る。出土量は極めて少ない。2は長頸壺形土器と思われる。地文には撚糸文、頸部には工字文とその上下に横位の平行沈線文が施され、刺突が加えられている。3・4は浅鉢、6~11・13は鉢あるいは壺形土器、5・12・14~19は直立気味の口頸部を有する壺形土器になろうか。3・4・6~9・11には磨消縄文が認められ、9は胎土が他と異なる。図34-10・12・14・16・18・19には、横位の平行する沈線が数条施されており、12・19は他と比して太めの沈線で



図34 遺構外出土遺物 (2)

施文されている。4・5・12・14・21・24の口縁部内面には、波頂部に沿うように沈線が加えられている。図34-20・22・23・26は小刻みな小波状口縁を呈し、21・24・25・27～30の口端部には小突起が付く。21・27などの比較的厚い口端部を有する資料には、A突起と有節沈線が認められる場合が多い。13の肩部には2個1組の貼瘤が、24にも2個1組の小突起が付く。28・29は非常に類似する資料である。総じて、これらの資料は土器組成・文様構成などから大洞C2式～大洞A式を中心とする時期に比定されるものであり、図34-1・3・4・6～9が大洞C2式期、同図他が大洞A式期に該当するものであろう。



図35 遺構外出土遺物(3)

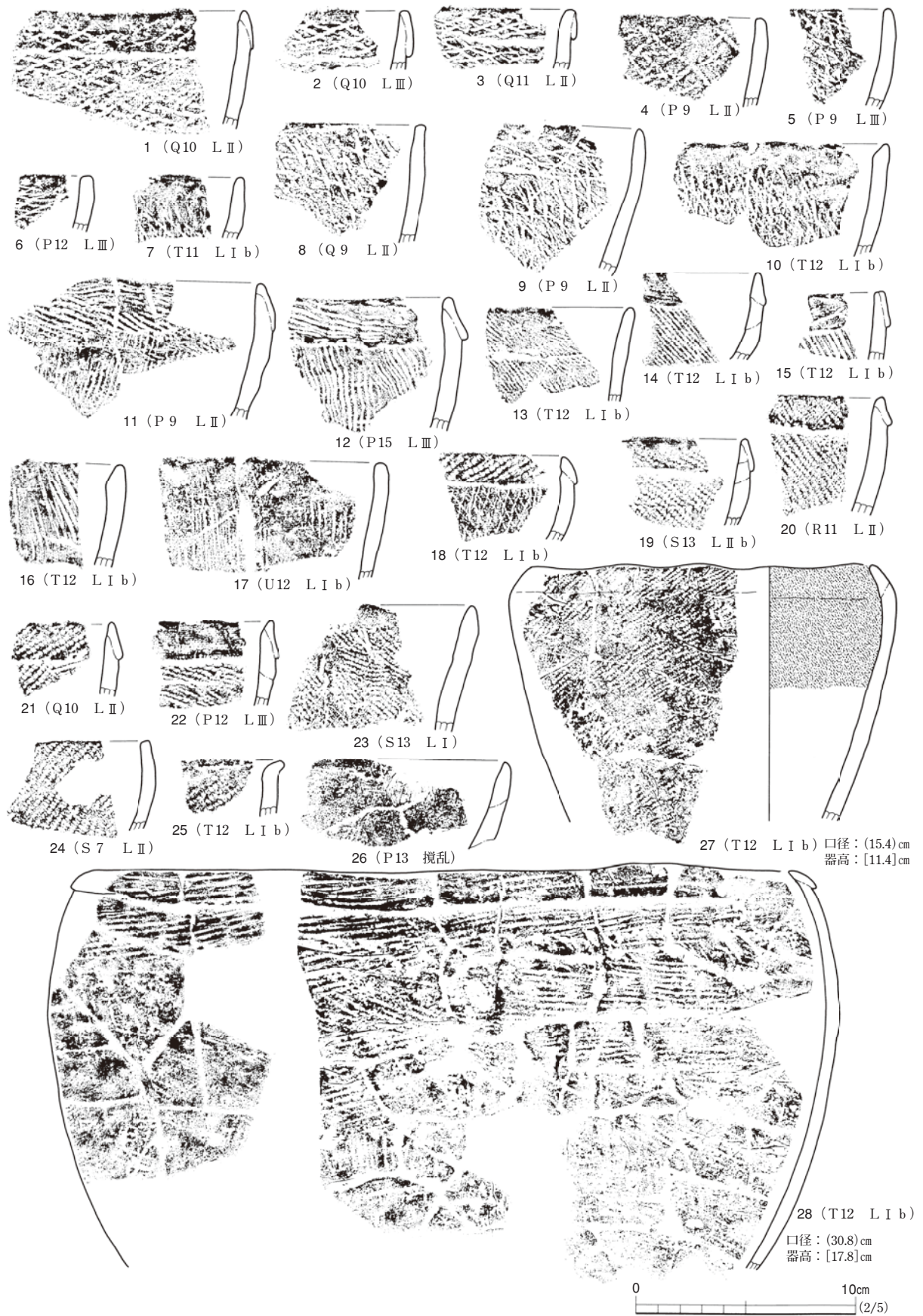


図36 遺構外出土遺物 (4)

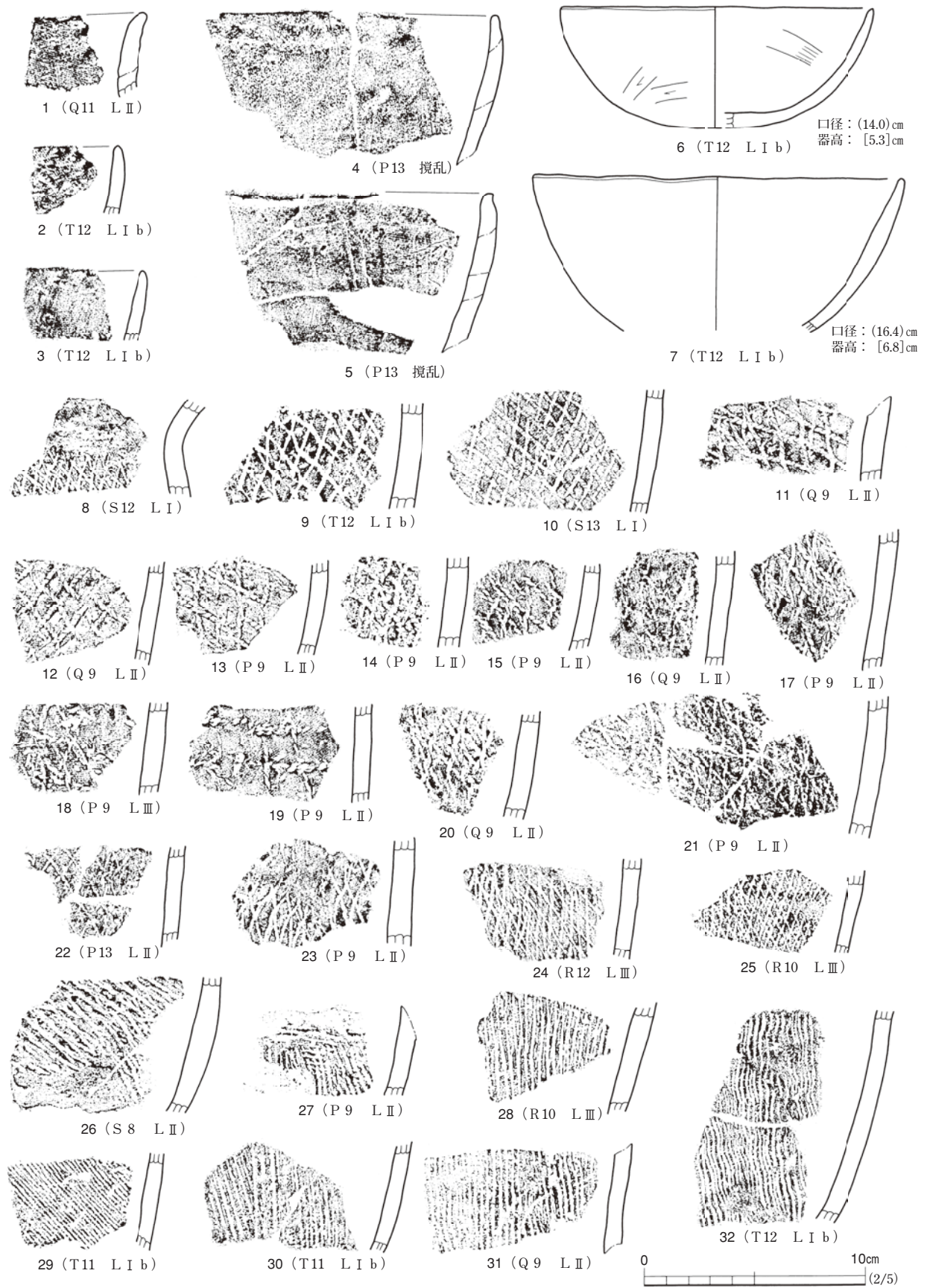


図37 遺構外出土遺物 (5)

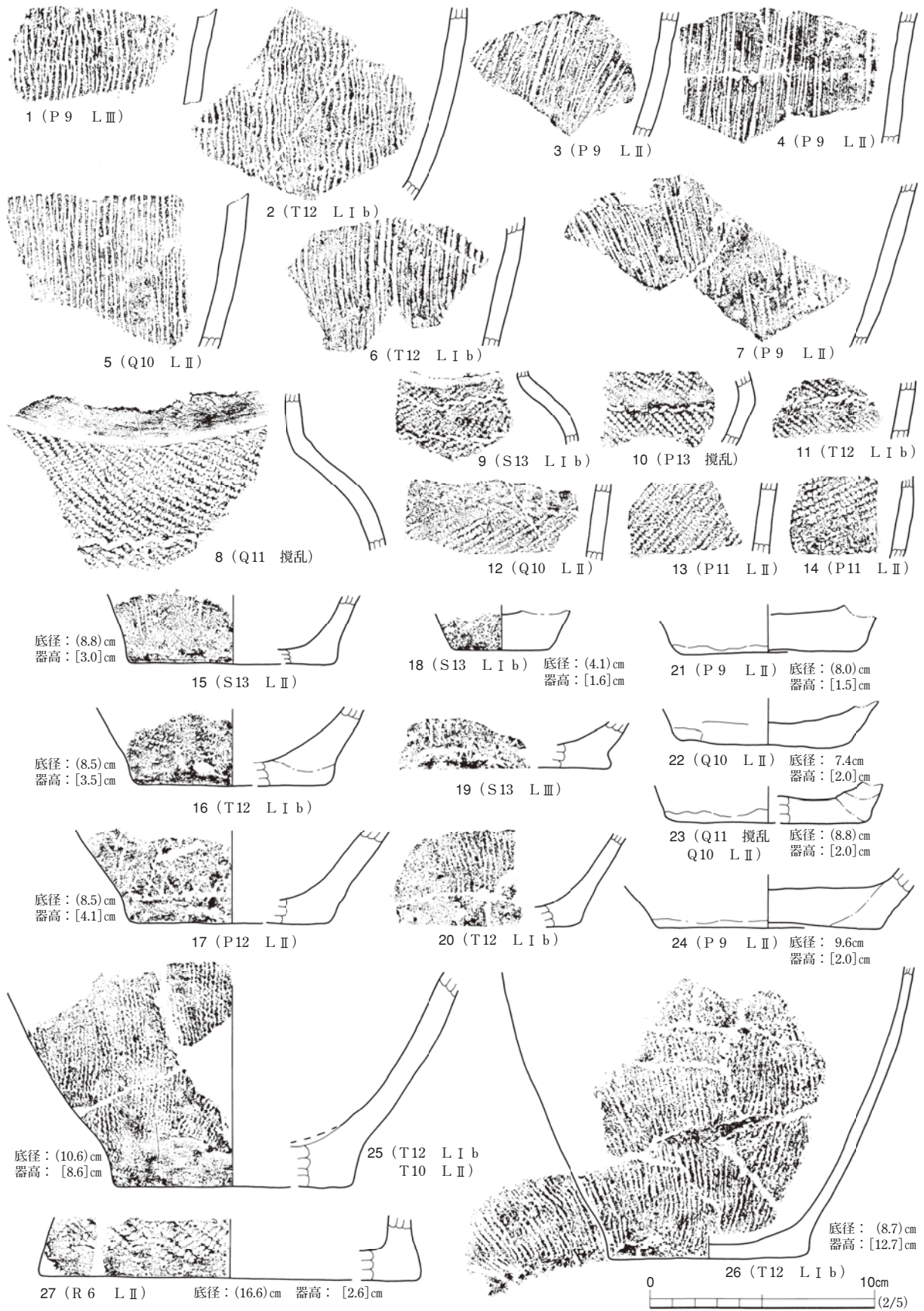


図38 遺構外出土遺物 (6)

図35～図38には、前述精製土器群に帰属する粗製土器を一括した。深鉢形土器が多く、直線的に外傾するもの、口頸部がやや内湾するもの（図36-24・27・28）、肩が張り屈曲するもの（図35）などがある。口縁部は平縁のほか、緩く波打つ波状口縁のものがあり、前者には口端部が角張ったもの（図36-4・6・8）がある。折り返し口縁（図35・図36-1～3・11・12・15・18～22・28）が多く、強く屈曲するものは図36-25以外ほとんどない。

胴部に施文される縄文・撚糸文は極めて条が細いものが多い。撚糸文（図35, 図36-10～13・28, 図37-26・27）および網目状撚糸文（図36-1～9, 図37-8～25）が多用され、ハケメ状あるいは楕円状条痕のもの（図36-14～17, 図37-28～32, 図38-1～7）、単節縄文が施されたもの（図36-19～25）、横位回転の結節縄文が認められるもの（図38-8～14）、無地のもの（図37-1～7）などがある。図36-18は口縁部折り返し部分に縄文、その下位の胴部に網目状撚糸文が施文された特異な例である。厚さは平均して0.6cmほどであるが、図36-16・20は他と比してやや厚手である。図36-22の内外面には粘土紐積み上げ痕が観察され、同図20・24・27などには顕著な煤・煮こぼれ状の付着物が認められる。

図38-15～27は底部資料である。底径は8cm前後のものが多いが、18のように小型のものや27のようにやや大型の器形になるものもわずかにある。底部調整は、粗い削り・ナデ調整を施すものが多く、網代痕や木葉痕が顕著に認められたものはない。（井）

石 器（図39, 写真31）

図39-1～3は、石庖丁の破片である。3点とも黒色で緻密な良質の粘板岩製である。2は片面、1・3は両面に平滑な研磨面をみせる。さらにその研磨面より新しく、2には下側縁に微細剥離痕が、1・3の周縁には二次加工痕がそれぞれ形成されている。また、1の表面側下半部は再研磨された面で、表面下側縁に新たに刃部を作出している。さらに、その再研磨面の右半部には、最終的な使用により形成されたとみられる擦痕が観察される。3の左側縁には7mm程の穿孔の痕跡があり、その縁辺部はやや摩滅している。また、この3点は、石質や最大厚（4mm弱）が近似することから、同一個体であった可能性がある。このことから3～5は石庖丁の破片に再研磨や二次加工を施し、再利用したものと考えられる。

4は、石英粗面岩製の二次加工のある剥片である。風化した器面は白色を呈する。打面部直下の打瘤はツインバルヴである。二次加工痕は、腹面右側縁下半部にみられる。5は、ガラス質安山岩製の微細剥離を有する剥片である。打面は円礫面、腹面末端はウートラパッセである。微細剥離痕は、背面左側縁に接続している。

6は黒色緻密の粘板岩製の砥石である。砥面は表面のみで、上・下・右側面は節理面、左側面は折断面である。（門 脇）

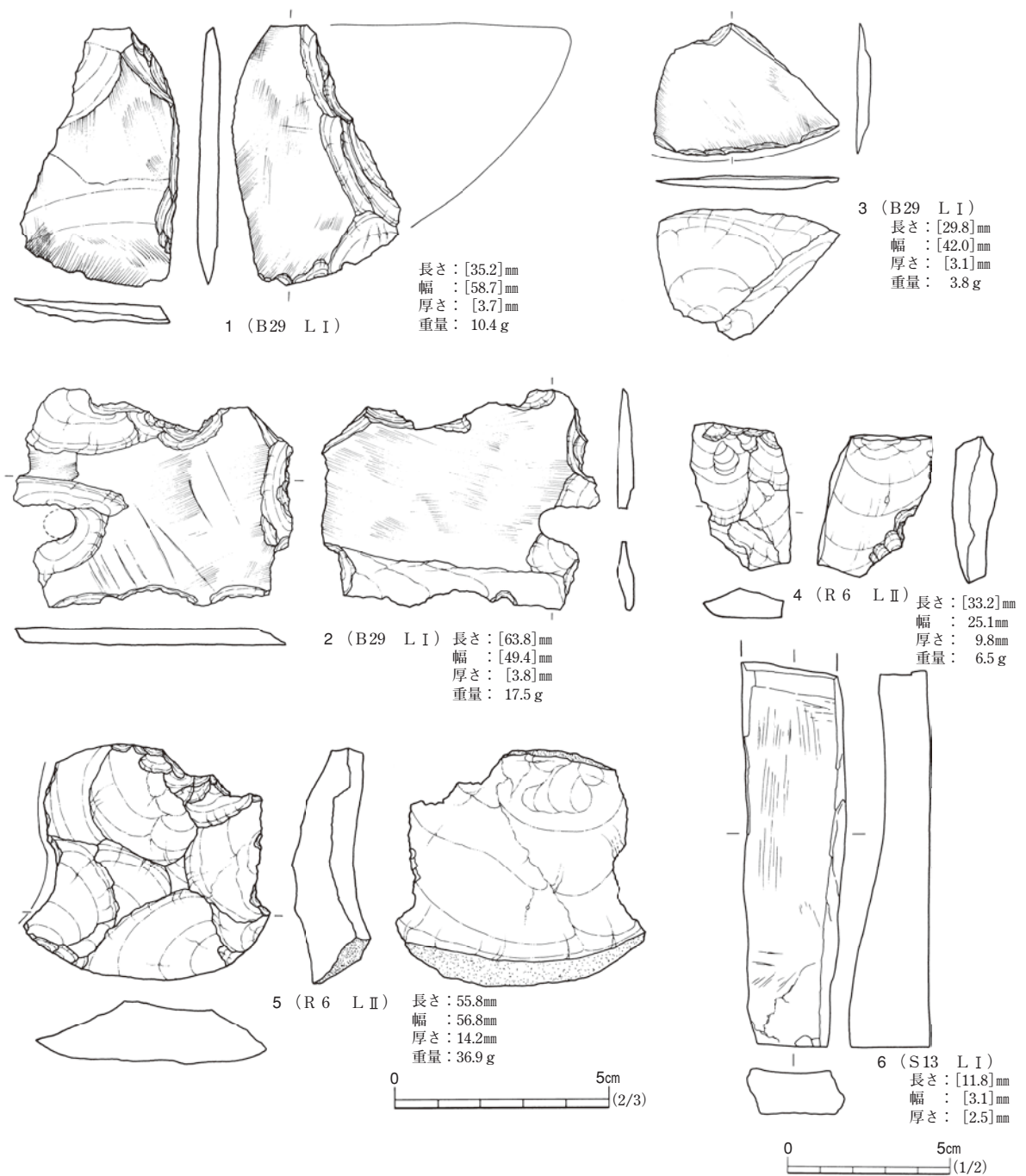


図39 遺構外出土遺物（7）

土 師 器 (図40, 写真31)

土師器片は、調査区内ではI区のB29・C29グリッドや、II区のO15グリッド周辺から比較的まとまって出土している。I区に杯・甕、II区に筒形土器の資料が多く散在していたが、該期の遺構の存在を裏付ける出土状況には至っていない。

図40-1～4は土師器杯である。全てロクロ成形で、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。1は二次的な被熱のため、黒色処理が飛んでしまっている。3の口縁部は1・2とは異なり、

外面に沈線状のものが巡り、これに対応する内面には若干段が認められる。4は底部外面に回転糸切り痕が残る。5～7は土師器甕で、それぞれ口縁端部に特徴がある。5は上方に摘み上げられ、わずかに外反している。6も若干上方に摘み上げられ、7は面取りされている。8～10は筒形土器である。外面には指オサエが確認される程度であるが、内面は横方向のヘラナデが施されるなど、外面に比して丁寧である。

陶磁器・銭貨 (図40)

本遺跡から出土した陶磁器片は、ほとんどがL Iや攪乱からの出土である。先述した通り、調査I区の畝状遺構周辺から出土しており、20点中18点がこの地点からの出土である。

図40-11～13は陶器挿鉢で、内面に卸目が施されている。11と13は卸目に明瞭な使用痕が観察され、よく使い込まれた様子がうかがえる。また、胎土は褐色を呈するが、内外面とも表面が1～2mmほど暗い色調を呈する。これは一見すると釉葉のようであるが、焼き上がりの違いと判断した。以上の胎土・使用痕の共通する特徴から、11・13は同一個体の可能性がある。常滑系の陶器で、14～15世紀の所産と推定される。12は小破片であるが、内面の卸目が7本1組であることが観察され

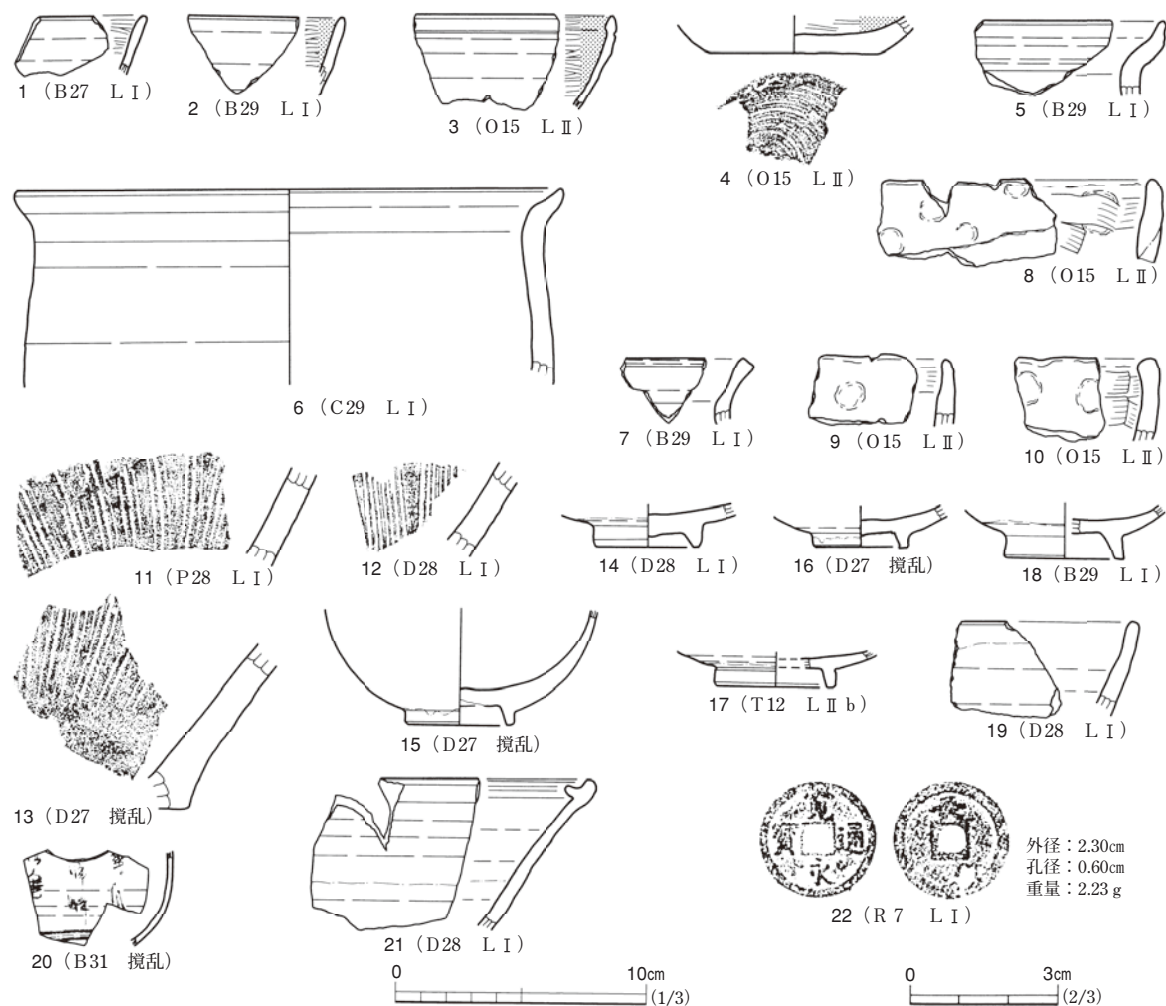


図40 遺構外出土遺物 (8)

る。還元作用を受けており、胎土は灰褐色を呈する。近世の所産と考えている。

14～19は陶器碗である。19が口縁部片である以外は底部片の資料である。いずれも内外面に釉薬が施釉されるが、高台部には付着が及んでいない点で共通する。釉薬の種類は14・17が鉄釉、15が海鼠釉、16・18・19が灰釉である。14の内面にはトチンなどの窯道具を置いた重ね焼き痕がある。福島市岸窯系の陶器碗と推定され、時期は17世紀中頃と考えている。15は内外面とも海鼠釉が施釉されているが、外面は再酸化を受け変色している。相馬系陶器と推定され、18世紀代に比定される。16も15同様、相馬系陶器で18世紀後半、17は周辺の窯跡の製品で19世紀代の所産と考えている。18は内面の釉がケロイド状になっている。焼き損じて投棄されたものであるかもしれない。19は灰釉が施されているが、胎土が悪いため発色が黄色くなっている。18・19ともに在産と推定され、18世紀後半～19世紀代の所産と考えている。

20は土瓶か徳利と推測される磁器で、外面にはコバルト釉による手描き文字が認められる。また、内面の一部と外面の下部には釉の付着が及んでいない。21は内外面とも口縁部に鉄釉の施された土鍋である。20・21とも19世紀代の所産と考えている。

22は明瞭に「寛永通寶」と判読できる銭貨である。「寶」の字の下端が「ハ」の字状になることから、新寛永通寶と考えられる。また、錆の付着により明らかではないが、背に「文」らしき文字がみえる。これが「文」であれば、初鑄年が1668年の、いわゆる「文銭」と呼称されるものといえる。

(丹 治)

表1 上本町F遺跡出土土器一覧(1)

挿図番号	遺物名	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	遺存度	外面の特徴	内面の特徴	備考
図17-1	土師器	※杯	S K 29 S K 30	ℓ 1	(11.6)	—	[4.2]	20%		ヘラミガキ	
2	土師器	鉢	S K 29	ℓ 1	(19.8)	—	[5.3]	5%	ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	
3	土師器	杯	S K 29	ℓ 1	(16.6)	—	[3.5]	5%		ヘラミガキ 黒色処理	
4	土師器	筒型土器	S K 29	ℓ 1	—	—	[2.9]	5%	指オサエ 粘土紐積み上げ	ヘラナデ	
5	土師器	小形甕	S K 29 S K 30	ℓ 1	(11.4)	(5.8)	[8.1]	15%	手持ちヘラケズリ	ヘラナデ後 ヘラミガキ	内面にコゲ付着
6	土師器	甕	S K 29 C 29	ℓ 1 L I	(23.4)	—	[4.3]	5%		黒色処理	
7	土師器	甕	S K 29	ℓ 1	—	(10.0)	[6.7]	5%	ヘラナデ		
8	土師器	甕	S K 29	ℓ 1	—	(10.4)	[5.8]	5%			粘土付着
9	土師器	甕	S K 30	ℓ 1	—	(8.4)	[4.6]	5%	ヘラケズリ		底部調整等不明
図18-1	かわらけ	皿	S K 31	ℓ 3 上面	7.6	4.9	1.5	95%			底部回転糸切り
2	かわらけ	皿	S K 31	ℓ 3 上面	7.8	5.3	1.7	100%			底部回転糸切り
3	かわらけ	※皿	S K 31	ℓ 3	8	5.2	1.6	95%			底部回転糸切り
4	かわらけ	※皿	S K 31	ℓ 3 上面	7.9	5.3	1.75	100%			底部回転糸切り
5	かわらけ	※皿	S K 31	床面	7.7	5.4	1.6	100%			底部回転糸切り
6	かわらけ	※皿	S K 31	ℓ 3 上面	8	5.6	1.7	100%	回転ヘラケズリ	刺突状のくぼみ	底部回転糸切り

注：※…ススが付着するもの、()…推定値、[]…残存値、単位…cm

表1 上本町F遺跡出土土器一覧(2)

挿図番号	遺物名	器種	出土位置	層位	口径	底径	器高	遺存度	外面の特徴	内面の特徴	備考	
図19-1	かわらけ	※皿	S K31	ℓ 3 上面	9.3	6.0	1.8	100%			底部回転糸切り	
	2 かわらけ	※皿	S K31	ℓ 2 ℓ 3 上面	9.8	6.1	1.9	90%			底部回転糸切り	
	3 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	9.4	6.0	1.7	100%			底部回転糸切り	
	4 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	9.9	6.0	1.9	90%			底部回転糸切り	
	5 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	10.2	5.9	2.2	100%			底部回転糸切り	
	6 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	10.1	6.9	1.6	95%			底部回転糸切り	
	7 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	9.8~10.3	7.2	2.1	100%			底部回転糸切り	
	8 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	10.1	6.8	1.7	95%			底部回転糸切り	
	9 かわらけ	※皿	S K31	ℓ 3 上面	9.7	6.7	1.8	100%			底部回転糸切り	
図20-1	かわらけ	※皿	S K31	ℓ 2 ℓ 3 上面	11.2	6.7	2.1	95%			底部回転糸切り	
	2 かわらけ	※皿	S K31	床面	12.5	7.6	2.1	85%			底部回転糸切り	
	3 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	11.8	6.5	2.05	100%			底部回転糸切り	
	4 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	11.5	7.2	2.2	100%			底部回転糸切り	
	5 かわらけ	※皿	S K31	ℓ 3 上面	11.3	7.2	2.1	95%			底部回転糸切り	
	6 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	11.4	7.7	1.9	95%			底部回転糸切り	
	7 かわらけ	皿	S K31	ℓ 2 ℓ 3 上面	11.4	7.6	2.1	95%			底部回転糸切り	
	8 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	11.3	6.8	2.2	95%			底部回転糸切り	
	9 かわらけ	※皿	S K31	ℓ 3 上面	11.8	7.0	2.15	95%			底部回転糸切り	
	10 かわらけ	皿	S K31	ℓ 3 上面	11.5	6.4	2.0	100%			底部回転糸切り	
図30-1	陶器	碗	B31畝状遺構	ℓ 1	—	—	[3.9]	5%			灰釉	
	2 磁器	碗	B31畝状遺構	ℓ 1	—	(4.7)	[1.4]	10%				
図40-1	土師器	杯	B27	L I	—	—	[2.3]	5%		ヘラミガキ 黒色処理	底部回転糸切り	
	2 土師器	杯	B29	L 1	—	—	[3.0]	5%		ヘラミガキ 黒色処理		
	3 土師器	杯	O15	L II	—	—	[3.7]	5%		ヘラミガキ 黒色処理		
	4 土師器	杯	O15	L II	—	(6.6)	[1.4]	5%	摩滅のため不明	ヘラミガキ 黒色処理		
	5 土師器	甕	B29	L 1	—	—	[2.9]	5%				
	6 土師器	甕	C29	L I	(21.6)	—	[7.8]	5%				
	7 土師器	甕	B29	L 1	—	—	[2.5]	5%				
	8 土師器	筒型土器	O15	L II	—	—	[3.4]	5%	指オサエ	指オサエ ヘラナデ		
	9 土師器	筒型土器	O15	L II	—	—	[2.7]	5%	指オサエ	ヘラナデ		
	10 土師器	筒型土器	O15	L II	—	—	[3.3]	5%	指オサエ	ヘラナデ		
	11 陶器	擂鉢	P28	L I			[3.5]					
	12 陶器	擂鉢	D28	L I			[3.7]					
	13 陶器	擂鉢	D27	攪乱			[6.5]					
	14 陶器	碗	D28	L I	—	4.2	[1.7]	10%				鉄釉
	15 陶器	碗	D27	攪乱	—	(4.2)	[4.6]	15%				海鼠釉
	16 陶器	碗	D27	攪乱	—	(3.6)	[1.6]	20%				灰釉
	17 陶器	碗	T12	L II b	—	(4.6)	[1.5]	10%				鉄釉
	18 陶器	碗	B29	L I	—	(4.7)	[2.2]	10%				灰釉
	19 陶器	碗	D28	L I	—	—	[3.7]	5%				灰釉
	20 磁器	土瓶・徳利	B31	攪乱	—	—	[3.7]	5%				
	21 陶器	土鍋	D28	L I	—	—	[6.0]	5%				鉄釉

注：※…ススが付着するもの、()…推定値、[]…残存値、単位…cm

第3章 考 察

本遺跡から検出された遺構・遺物の総数は少ない。そのため、各時期の遺構の変遷については、改めて述べるまでもないと考えている。そこで、本章では特徴的な遺構・遺物について若干の考察を加えて、本遺跡の調査成果のまとめにかえたい。

1 円形を呈する土坑について

調査Ⅰ区東部では8・14・18・19・33号土坑のように、円形を呈し平面規模が大きく深い土坑が集中している。これらの土坑は、平面形や土層の堆積状況に類似性が認められ、同様の性格を有すると推察されるが、遺構に伴う遺物が出土していないため、厳密な意味での所属時期は不明である。また、遺物が出土していない場合、土層の堆積状況を比較検討し、遺跡内での遺構の所属時期をある程度推測することがしばしば行なわれているが、本遺跡内では、これらの円形を呈する土坑以外で、似たような堆積状況を示す時期が特定できる遺構例がないため、比較検討資料に乏しい。ただ、福島県内において、このような形態・規模の土坑で、本遺跡のように①集中して分布する、②周囲に住居跡が認められない、③出土遺物がほとんどない、という特徴を示すものは、縄文時代と古墳時代の類例を確認している。

縄文時代の資料では、郡山市仁井町・上納豆内遺跡（鈴木他1982）やいわき市タタラ山遺跡（今野他1996）などで確認されている、円形土坑と呼称される縄文時代中期頃の貯蔵穴がある。縄文時代中期末葉の集落構成については、貯蔵穴の用途を持つ土坑の構築域と居住域とは、分離して存在する傾向があることが指摘されている（鈴木他1990、本間他1990、井1996）。そして、縄文時代の円形土坑では、タタラ山遺跡や郡山市堂後遺跡（高田他1989）のように居住域と分布を異にする場合は、遺物がほとんど出ない場合がある。本遺跡の円形を呈する土坑群の在り方は、このような状況ともみられる。なお、住居跡群が存在する場合は、調査区外でも北側の段丘面上にあると推測され、これは後述する古墳時代の類例でも同様と考えている。

古墳時代の遺跡で検出されている、この種の円形を呈する土坑も、用途は貯蔵穴と考えられている。しかし、古墳時代においては、郡山市東山田遺跡（嶋原他1996）、矢吹町白山A遺跡（藤谷他1999）、東村佐平林遺跡Ⅷ区（大越1980）、天栄村舞台遺跡（玉川1981）や山崎遺跡（香川他1990）などにみられるように、古墳時代中期・後期の各住居跡に近接して1～3個の土坑がセットとして検出されるのが一般的である。そしてセットとして考えられる根拠として、これらの土坑からは住居跡とほぼ同時期の土師器片が出土している。一方、佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区（目黒1978）では、住居跡群と離れた位置に集中して構築されており、遺物も出していない。このような在り方から、本遺跡例あるいは資料が古墳時代のものであれば、佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区のような状況といえる。ただ、上述

した①～③の特徴を示すものは、管見では現在のところ佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区しか確認していない。

以上のように、本遺跡の円形を呈する土坑群は、1つの可能性として縄文時代あるいは古墳時代のものであることを指摘したが、やはり住居跡や遺物が検出されない状況で時期を推測するのは困難であり、かつ危険でもある。しかし、住居跡や遺物が検出されないからといって時期や性格が不明とするだけでは、その遺構・遺跡の評価はそれで終わってしまう。したがって、上述したように可能性を指摘することはあながち無意味なことではないと考えている。今回は縄文時代と古墳時代に限って検討を試みたが、他の時期の異なる性格のものであることも充分考えられる。この種の土坑については類例を調べ、今後さらに検討していきたい。

2 1号溝跡について

1号溝跡は東西に伸びる段丘面上に立地する。この段丘面は東側に行くにしたがって幅が狭くなっており、1号溝跡はその端部を南北に切断するような形で構築されている(図41)。このように、段丘面が伸びる方向と直交して溝が構築されている例としては、鹿島町中館・浪江町権現堂城・植葉町井出城などの堀切跡(小林他1988)が挙げられる。また、断面形は薬研堀を呈し、規模は

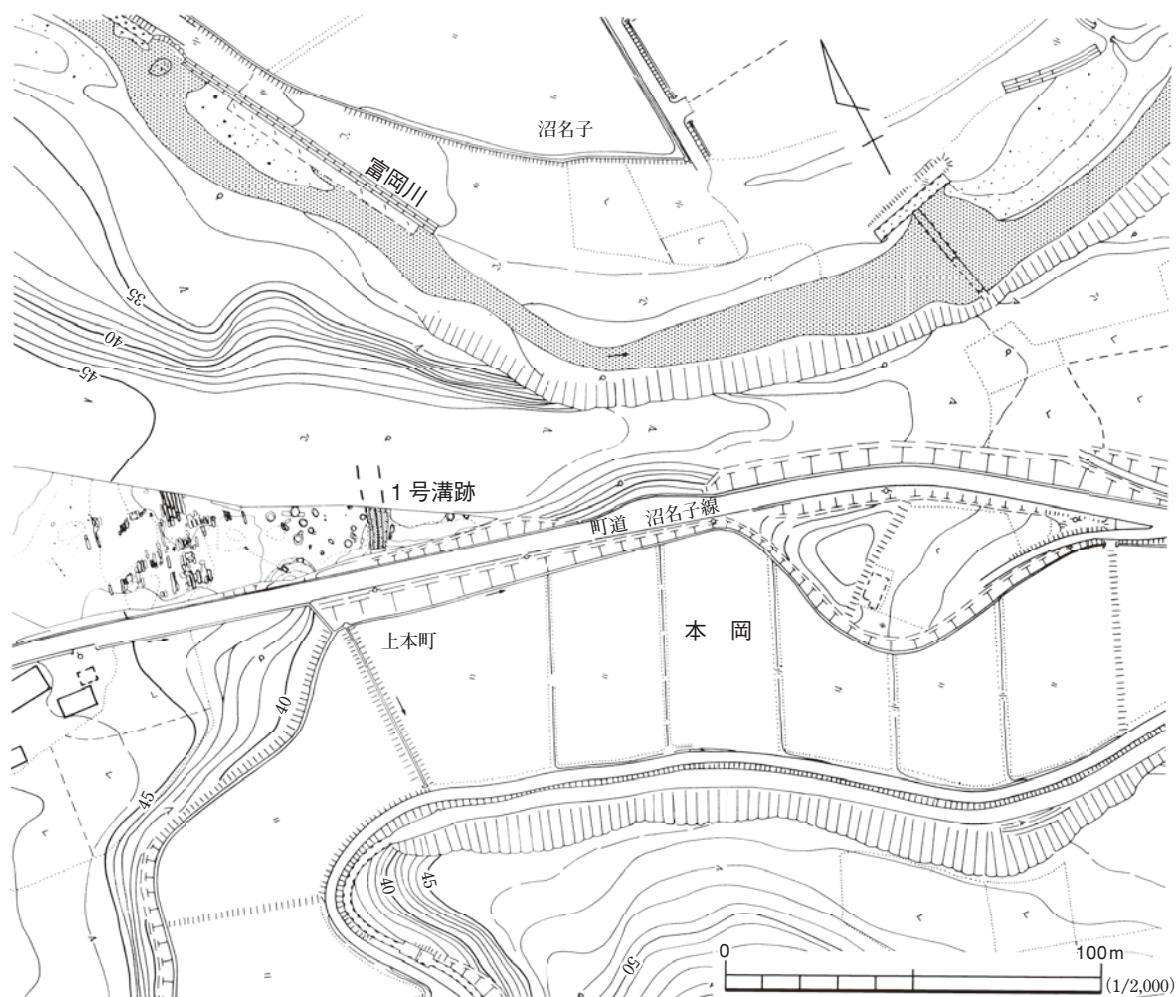


図41 1号溝跡と周辺の地形

上端幅3.96～5.46m、深さ1.96～3.22mを測る。この深さのため、落ちたら這い上がるのは難しい。

以上の立地状況や断面の形態からは、中世城館跡の堀切的な機能が推察される。ただ、この1号溝跡に関連する明確な建物跡や遺物は確認されておらず、積極的に城館跡と考える材料に乏しい。しかしここでは、段丘礫層を掘り抜き、更には基盤の大年寺層までも掘り抜くという多大な労力を要してまで構築されていることを考慮に入れ、堀切跡の可能性を指摘しておきたい。

堀切跡と考えた場合、調査区内では他に同様の規模・形態の溝は確認されておらず、本遺構の東側にも幅が狭くなるという地形を考えると、1号溝跡以外の存在の可能性は低いと推測される。以上のことから、本遺構は堀切跡であれば、単郭式の城館跡に伴う施設といえるだろう。また、本遺構内の土層には混合土が流入している状況は観察されないことから、土塁などの施設はなかったものと考えている。そのため、堀切跡であったとしても防御設備としての効果はあまり高いとはいえない。

また、蛇足ではあるが、本遺構の底面付近は湧水点となっており、調査時も大年寺層と段丘礫層の境目まで水が溜まった。そのため、調査区外での遺構の形態にもよるが、構築された当時水堀として機能していた可能性も考えられる。

3 31号土坑出土遺物について

製作技法・年代

31号土坑からはかわらけ25枚が出土しており、これらは基本的には同じ製作技法でつくられている。しかし、この中で図19-8・9は他の資料と口縁部形態が異なっている。外傾した口縁部の端部を上につまみ上げている特徴があり、意識して形作られている。これらの形は京都系第2波と呼ばれる京都系土師器皿（かわらけ）の影響を受けているものとされる（飯村均氏のご教示による）。京都系第2波の受容は各地で多少のばらつきはあるが、概ね16世紀前葉あるいは中葉から16世紀後半にかけて行なわれており、東北地方に関しては16世紀第2四半期～16世紀代とされている（日本中世土器研究会1999）。ただ、図19-8・9が京都産の土器そのものを見て模倣したのか、二次的な資料を更に模倣したのかについては判断する材料に欠け、不明である。

福島県内のかわらけの編年については、福島県考古学会中近世部会による一連の成果があり（福島県考古学会中近世部会1996・1997、以下中近世部会編年と略す）、これを参考に本土坑出土資料の編年的位置付けを行なうことにする。本土坑出土のかわらけは、外面底部の板状圧痕や内面の見込みナデなどが認められないことから要素としては新しく、中近世部会編年の6期以降、すなわち15世紀後半以降の所産と考えられる。また器高が低く、内面全体が丸くなっている点は、中近世部会編年の7期以降の近世的な特徴ともみられる。しかし、内面のロクロ目が観察される資料は25例中11例であり、「内面のロクロ目はまったくなく、丸い状態になる。」という7期よりは、「内面の底部と体部の境なく、ロクロ目も外面には残るが内面からは消された土器が多くなる。（福島県考古学会中近世部会1997）」という6期後半の特徴を示していると判断される。ところで、6期後半は16世紀後半～

17世紀前半，すなわち中世～近世への移行期と考えられているが，京都系第2波の影響を受けていることから，6期後半でも古い段階，すなわち16世紀後半頃の年代を考えておきたい。また，近世になると，かわらけの用途は「灯明皿」に限定されるという指摘（飯村1997）がある。本土坑出土資料は，後述するように灯明皿と推測されるものはそれほど多くないため，飯村の指摘を考慮に入れば，中世の枠組みでとらえられる資料であるといえる。以上の点からも16世紀後半頃とするのが妥当であろう。

法量分化

図42-1・2は31号土坑から出土したかわらけ25枚の法量グラフである。1が口径と器高，2が口径と底径をもとに作成した。これによれば，かわらけは大・中・小の3つのまとまりに分かれる（以後便宜的に，大皿・中皿・小皿と称する）。全体の平均は口径10.03cm，底径6.40cm，器高1.90cmで，それぞれのグラフに線を引いて示している。法量分化については，「京都では土師器皿の多法量化は15世紀より進展し，16世紀後半にはピークに達する（中井1999）」という指摘がある。上述した通り，本土坑出土資料自体が京都の影響を直接受けたものか，二次的な影響かは不明であるという問題はあるが，法量分化についても京都の影響を受けたものとみることができる可能性もあろう。なお，口径・器高に比して底径はややばらつきがある。これは切り離しという不安定な作業工程を反映した結果であり，底径は口径・器高ほど安定的な要素ではないことを示しているといえよう。また，この法量分化がどのような意味を持っていたのかは明らかではないが，後述する使用痕のある資料が考える一つの材料を提供している。

使用痕

本土坑出土資料には，煤とみられる黒色の付着物の存在から灯明皿として使用されたと考えている資料がある（25例中7例）。中でも図18-4と図19-1，図18-6と図19-2は口縁部に残る煤の痕跡からそれぞれ2枚重ねのセットとして使用されたと推測している。図43-1・2はその機能時の状況を復元的に図化したものである。これらの資料は，重ねる二枚の皿の法量が近いため，下皿の口縁部に上皿と同じ様に煤が付着したと考えている。そして中皿の内面中央には小皿が載せられるためか，煤の濃い付着範囲は及んでいない。図18-6の口縁部には窪みが1箇所あり，灯芯を置いた箇所ともみることができるが，その

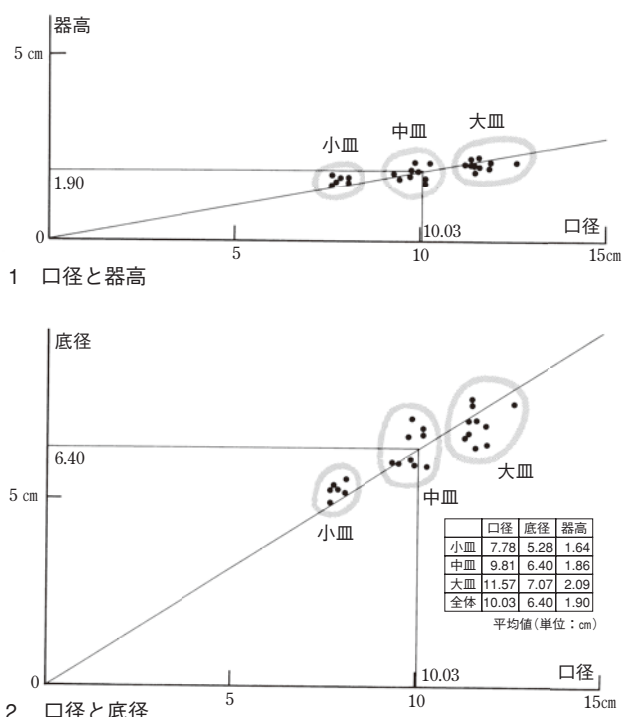


図42 31号土坑出土遺物法量グラフ

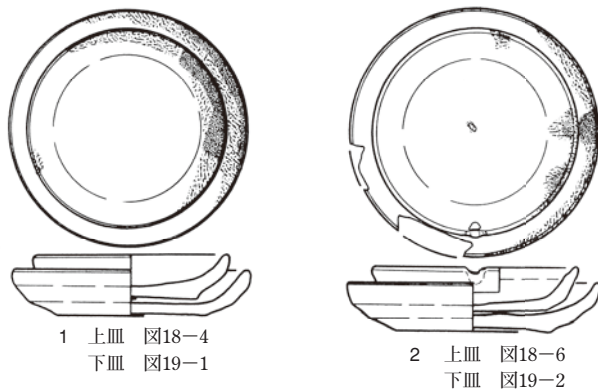


図43 灯明皿2枚重ね使用状況想定復元図

など一概に言い切れない面がある。

また、図43-1・2はともに中皿・小皿のセットであり、今回の資料の中では大皿とのセット関係は認められなかった。煤の付着した大皿の資料については図20-2が挙げられるが、中皿の図19-1・2と違って、煤の濃い付着範囲が内面底部中央に認められる。また、前章で触れた通り、煤の付着痕跡から使用の段階がうかがえることなど、大皿については、中皿・小皿の資料、すなわちセットとして使用された資料とは異なる使用状況があった可能性が指摘できる。

京都系土師器皿（かわらけ）の意識・評価

京都系の影響を受けた土器（かわらけ）については、その地域地域に広範に渡って分布するような土器群ではなく、政治的な権力によってもたらされたもの（服部1999）、あるいは、領国の首都のためにつくられた土器（服部1999）や戦国大名などの権力者と結びついたもの（品田1999、古賀1999）、戦国大名をはじめとする権力者の権威の象徴（重美1999）などと評価される。このように評価されるのも、戦国大名に関連する城館や寺院に限定的に出土する傾向が確認されたり（服部1999、重見1999）、その分布が戦国大名の本拠地周辺に集中するからである（古賀1999、塩地1999）。その一方で、近畿地方においては一般集落からの出土も多い（中井1999）らしい。

上記のことを念頭に入れて本遺跡に目を移すと、本遺跡の1号溝跡について城館跡の施設の可能性があるが、あくまで可能性であるし、年代についても31号土坑と関連する時期であるという確証もない。調査区外に該期の遺構がある可能性も否定できないが、調査区内では他に該期の遺構は認められず、城館跡や寺院遺構との関連については不明といわざるを得ない。また、相双地区でこの種の遺物が出土したのは今回が初めてであり、しかも、この地域の土器群の様相が明らかになっているとはいえない状況である。そのため、本遺跡出土の土器が地域として影響を受けているものなのか、分布が限られているかさえも明確ではない。

以上のことから、京都系の流入に際してどのような社会的な背景があったかについては判然としない部分が多く、今後の課題として残る。しかし、31号土坑出土遺物の示す年代、16世紀後半といえば、岩城親隆が相馬氏より日向館を奪回した後か（1547年説）、奪回した（1570年説）時期に当たる（富岡町1988）。日向館跡は本遺跡から南東約2.4kmの距離に位置するため、あるいは両者に何らかの

部分に煤の痕跡は確認されなかった。

これらの資料が、法量の違いを利用してセットとして使用されていたことが妥当であれば、前述の法量分化によって期待されていた役割の一端を窺うことができる。しかし、全てが灯明皿として使用されているわけではないため、結果的に法量の違いを利用しただけかもしれないし、図18-3・5のように具体的なセット関係が把握できない資料もある

関連性があったのかもしれない。

土坑への大量廃棄

前章で触れた通り、25枚のかわらけは人為的に遺構内に廃棄されたものと考えている。そして使用痕のあるものも、その出土位置や状況に特別な傾向は認められないため、廃棄にあたっては他の資料と区別されることはなかったとみている。かわらけの多くがⅡ3上面から出土しているが、Ⅱ3は黒褐色を呈する土で、有機質のものが腐食して形成された層と考えている。底面から出土した図18-6と図20-2については、有機質が比較的少なかった箇所とみることもできよう。

中世において土坑などへのかわらけの廃棄行為は、京都系の影響を受けた土器については一般的に認められる現象である。東北地方の例を引くと、中世都市平泉では盛期を迎える12世紀頃が多く、13世紀以降は減少することが指摘されている（八重樫1996）。また、飯村均は岩手県平泉町柳之御所跡では中核的な建物跡の周辺に位置する「井戸状遺構」が、かわらけなどの廃棄のための遺構であった可能性があるとしている（飯村1998）。さらにさかのぼって平泉以前ということになると、10世紀代の宮城県多賀城市山王遺跡の例が挙げられており（村田1995、飯村1998）、山王遺跡は平泉への連続性を示すものと評価されている。

これらのかわらけは、武家の儀式や饗宴の器として使用されたものが廃棄されたものとみられており（河野1994、吉岡1994、服部1999）、饗宴の器としての廃棄行為は近世前期まで行なわれたらしい（吉岡1994）。服部実喜はかわらけが使用された儀式や饗宴を、「戦国大名や地域権力化した領主層にとって主従関係の確認など武家社会の身分制的秩序を維持する上で必要不可欠なもので、京都系土器はその権力を具現化する装置の一つとして重要な役割を担ったもの（服部1999）」と評価している。一方、かわらけの廃棄行為そのものについては「大量投棄が高貴な宴のあとを示すもの（脇田1994）」、「大量に使い捨てることが都市内におけるかわらけの特性といえるかもしれない（清水1994）」との意見もある。

本遺跡では該期の遺構が他に認められないため、具体的な性格を検討すべき材料に欠ける。しかし、人為的に土坑内に廃棄されていること、京都系の影響を受けた土器であることなどから、25枚のかわらけは、これまでに指摘されているような饗宴儀礼や宗教的な儀礼に使用されたものである可能性が考えられる。これが妥当であれば、Ⅱ3は儀式の際に出た食物残渣であるともみられ、少量の灯明皿の出土も考え併せると、土坑内には一連の儀礼に使用されたものがまとめて廃棄されたものと推測することもできよう。

（丹 治）

引用・参考文献

- 目黒 吉明 1978 「佐平林遺跡（第1次）」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 大越 道正 1980 「佐平林遺跡（Ⅶ・Ⅷ区）」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会（財）福島県文化センター

- 玉川 一郎 1981 『舞台』天栄村教育委員会
- 鈴木 雄三他 1982 「仁井町遺跡・上納豆内遺跡」『河内下郷遺跡群Ⅱ』郡山市教育委員会
- 小林 清治他 1988 『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会
- 富岡 町 1988 『富岡町史第1巻 通史編』富岡町史編纂委員会
- 高田 勝他 1989 「堂後遺跡」『郡山東部9』（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 香川 慎一他 1990 「山崎遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告5』福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1990 「宮内A遺跡（2次）・上ノ台B遺跡・上ノ台C遺跡・上ノ台D遺跡・日向遺跡（第2次）・日向南遺跡（第4次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XV』福島県教育委員会（財）福島県文化センター 福島県土木部
- 本間 宏他 1990 「牧場山遺跡（第2次）・北向遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告7』福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 吉岡 康暢 1994 「食の文化」『岩波講座日本通史第8巻 中世2』岩波書店
- 脇田 晴子 1994 「中世土器の流通」『岩波講座日本通史第9巻 中世3』
- 河野眞知郎 1994 「コラム鎌倉概説3」『考古学ジャーナル 381』ニュー・サイエンス社
- 清水 菜穂 1994 「土器・陶器の組成と変遷」『考古学ジャーナル 381』ニュー・サイエンス社
- 村田 晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古 第36号』福島県考古学会
- 八重樫忠郎 1996 「藤原氏以後の平泉」『考古学ジャーナル 407』ニュー・サイエンス社
- 井 憲治 1996 「真野川上流域における縄文中期末葉の集落構成」『論集しのお考古』論集しのお考古刊行会
- 今野 徹他 1996 「タタラ山遺跡（第2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告9』福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 鳴原 靖彦他 1996 『東山田遺跡』（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 福島県考古学会中近世部会 1996 「かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—（その1）」『福島考古 第37号』福島県考古学会
- 飯村 均 1997 「中世食器の地域性 2—東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』国立歴史民俗博物館
- 福島県考古学会中近世部会 1997 「かわらけ編年の再検討—11世紀から19世紀—（その2）」『福島考古 第38号』福島県考古学会
- 飯村 均 1998 「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究XIII』日本中世土器研究会編
- 古賀 信幸 1999 「中国地方の京都系土師器Ⅲ—戦国期の資料を中心として—」『中近世土器の基礎研究XIV』日本中世土器研究会
- 塩地 潤一 1999 「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究XIV』日本中世土器研究会
- 重見 高博 1999 「守護町勝端出土の土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究XIV』日本中世土器研究会
- 品田 高志 1999 「越後における中世後期の土師器Ⅲ—京都系第2波の流入と展開—」『中近世土器の基礎研究XIV』日本中世土器研究会
- 中井 淳史 1999 「室町・戦国期における近畿地方の土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究XIV』日本中世土

器研究会

- 日本中世土器研究会 1999 『中近世土器の基礎研究XIV』 日本中世土器研究会
- 服部 実喜 1999 「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究XIV』 日本中世土器研究会
- 藤谷 誠他 1999 「白山A遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3』 福島県教育委員会
(財)福島県文化センター 福島県土木部

第3編 ひ日 な南 ごう郷 遺跡

遺跡記号 TO-HNG

所在地 双葉郡富岡町大字上手岡字日南郷・後田

時代・種類 縄文時代―落し穴 近現代―水路跡・溝跡

調査期間 平成12年10月3日～12月8日

調査員 宮田安志・細山郁夫・関 博人

第1章 位置と地形

第1節 遺跡の位置と周辺環境

1 地理的環境

日南郷遺跡は、福島県双葉郡富岡町大字上手岡字日南郷・後田に所在する。本遺跡はJR常磐線夜の森駅から西へ2.2km、富岡町の海岸線からは約6km内陸に位置する。遺跡の西側には一般に山麓線と呼ばれる県道いわき・浪江線が南北に延び、調査区のすぐ北側には県道小野・富岡線が東西に通る、遺跡の北西端付近で交差している。

本遺跡は、東は館山稲荷の付近から西は県道35号線の付近、南は大石原地区と境を接し、北は大熊町との境をなす丘陵に区切られており、総面積は332,000㎡を測る。

遺跡周辺の地形を見ると、阿武隈高地東縁の中位段丘上に位置し、西には阿武隈高地が連なり、南東方向に流下する富岡川左岸に広い段丘地形が発達し、中位Ⅱ段丘面とⅢ段丘面が富岡川に沿って延びてゆくのの確認される。

遺跡は中位Ⅱ段丘面に立地しており、その北側には阿武隈高地東縁から延びた標高105m前後の丘陵があるが、この残丘地形の丘陵上は、高位段丘面の残丘支脈の可能性はある。



図1 遺跡の位置と周辺地形

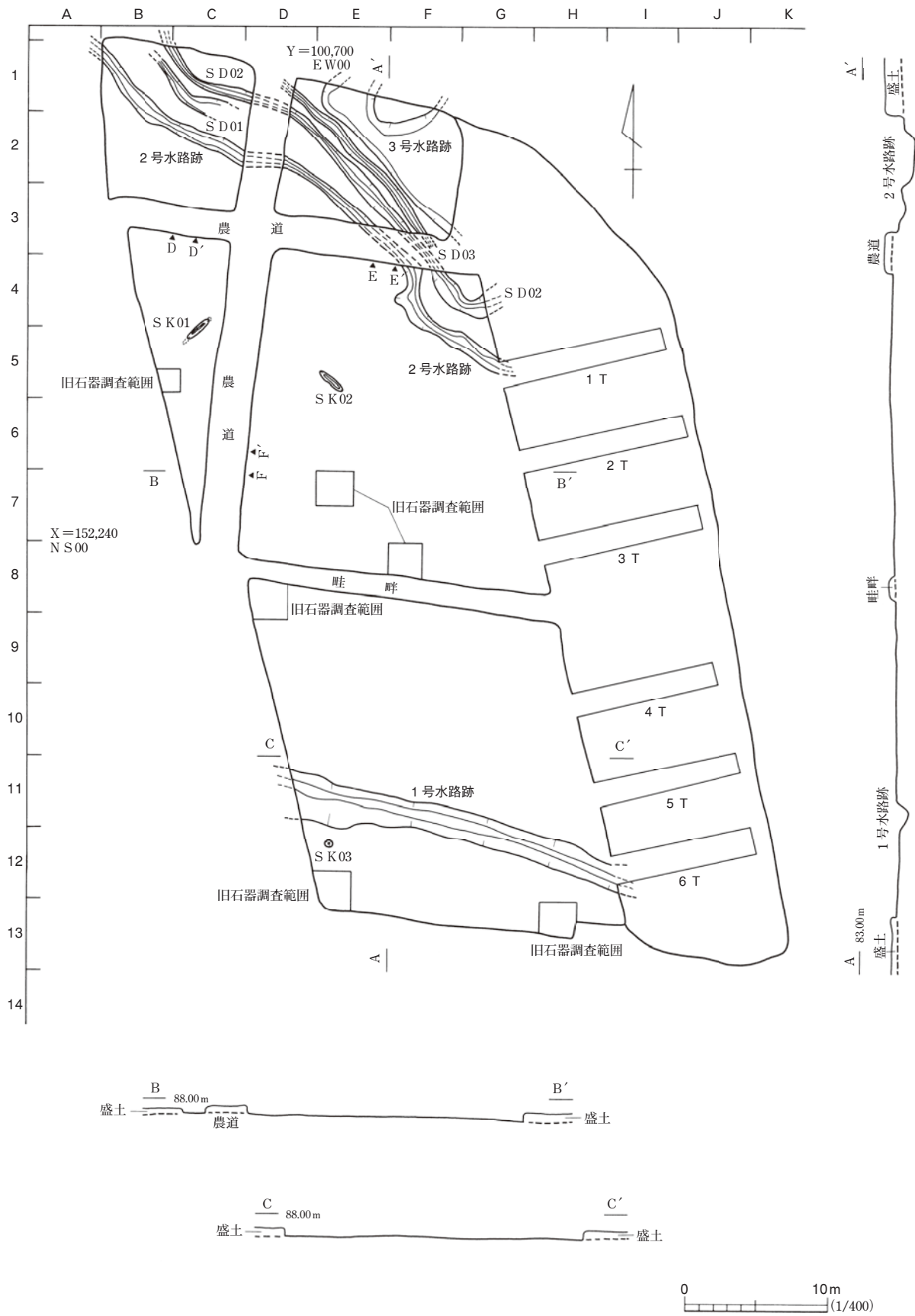


図2 遺構配置図

本遺跡はこのように西方と北方に丘陵を控えた、平坦な部分に位置する。

調査区は標高89m前後の平坦地で、調査前の現況は水田であった。遺跡周辺の表層地質は第四紀更新世に形成された砂や砂礫からなる段丘堆積層の上に、黒雲母花崗岩が風化した砂層が、その上部には粘土層が堆積している。

富岡町の気候的な特徴を簡単にふれておきたい。浜通り地方の気候は一般に、夏に雨が多く、冬には極めて少ないのが特徴といわれる。とくに冬の季節風は、極度に乾燥した西風となる。その結果この地域では、阿武隈高地方方向からの非常に強い西風にさらされることになる。地元ではこれを「日南郷の空っ風」と呼び、平坦なこの地区を直接吹き抜けてゆくために、発掘調査中はたえずこの風に悩まされ、その対策に終始する日もしばしばであった。



上：1号水路跡調査風景

下：確認調査風景

2 歴史的環境

本遺跡周辺には縄文時代の遺跡、古代の集落遺跡や近世の製鉄遺跡、館跡などが存在する。遺跡周辺の地形は、富岡川を中心とする平坦な沖積地となっているが、この平坦地は北・西・南東の3方向を丘陵に囲まれて、東に開けた地形上の単位をなしている。平地よりも丘陵の麓に、比較的多くの遺跡が分布するものの、あらゆる時代の遺跡が濃密にみられるというほどではない。

まず、本遺跡のすぐ北側の丘陵地に、縄文時代の後作B遺跡が存在する。麓山の南麓には、縄文時代晩期末頃の片倉遺跡がある。古代の遺跡としては、麓山の東山麓に茂手木遺跡がある。また先述の後作B遺跡は、奈良～平安時代の土師器の散布地でもある。

中世に目を転ずると、北東約1kmの所に館山稲荷と称する小祠が存する。ここは、南北朝頃に岩城領の北方の最前線とされ、同時期に築城されて建武4(1337)年に北朝方に攻略されたという高津戸館跡の可能性が指摘されており、土塁や井戸・升形などが遺存している。

本遺跡から西方の阿武隈高地東麓は、近世後期から近代初期頃の製鉄遺跡が集中して存在する所である。上手岡鉄山鋳炉遺跡は字大木戸川原に所在し、嘉永6(1853)年、南部藩の佐久間長左衛門により操業が開始され、県内では唯一耐火煉瓦を使用し、原料に砂鉄でなく鉄鉱石を用いた、近代的な製鉄炉である。ほぼ同時期の滝川製鉄遺跡は、県道小野・富岡線をさらに4kmほどさかのぼった山中にある。調査区内から、わずかな量であるが鉄滓が出土しているが、これらの遺跡と関連があるのかもしれない。

最後に考古学的に調査された遺跡ではないが、地元の信仰にかかわる寺社について若干触れておく。日南郷遺跡のほぼ西方向には標高232m、山容が整った円錐形をなす麓山がそびえたっている。現在は麓山祇神を祭神とする麓山神社が鎮座するが、元来は山自体が信仰の対象であり、広くこの周辺地域の信仰を集め、毎年8月15日に例祭が行われる。また、調査区から約1km東の県道小野・富岡線沿いには館山稲荷が鎮座する。また、調査区からおよそ1km南東に、真言宗寺院である円蔵院があり、もともとは調査区の西側約200mのあたりに存在したといい、最も古いものでは、江戸時代中期「享保」年間の碑銘を有する墓が現存している。(細山)

第2節 調査経過

日南郷遺跡は、平成10年度に(財)福島県文化センターが福島県教育委員会からの委託をうけて実施した常磐自動車道いわき市四倉～双葉郡富岡町間の遺跡分布調査の結果、遺跡として登録された。平成8～10年度にわたって試掘調査が実施され、陶磁器片や縄文土器片・旧石器時代の石器などが出土、また土坑やピットが検出されたため、集落遺跡の可能性が指摘されていた。

本遺跡の発掘調査は、平成12年10月3日から12月8日まで、延べ約42日間にわたって実施した。このうち、11月29日から12月8日までの7日間は、今年度調査を予定していなかった部分の確認調

査を併せて行った。調査区は試掘調査で確定した遺跡範囲のうち、センターラインから西側を主体とし、一部東側を含めた4,760㎡と、確認調査範囲2,840㎡の合計7,600㎡について実施した。

遺跡範囲全体が、昭和29年頃に行われた圃場整備事業で、盛土と削土が繰り返され、耕作土の直下にローム面が検出されたことから、遺構や遺物は大半が失われていると判断し、重機などを導入して作業の効率化を図った。

以下に調査経過の概要を記す。

10月3日～10月6日 調査範囲の確認を行い、同時に除草や駐車場用地の整備を行う。併せてセンター杭や幅杭の確認を行う。

10月10日～10月13日 器材を搬入、ユニットハウスや休憩所テントなどを設営。また作業員を導入して本格的に調査を開始した。

10月16日～10月20日 遺構検出作業を開始。土坑を確認。遺物は、L Iより縄文土器や陶磁器片などが出土する。ベンチ・マークの移動を行う。

10月23日～10月27日 調査区南側にて1号水路跡を検出、掘り下げを開始する。測量基準杭の打設を開始した。

10月30日～11月2日 1号水路跡の掘り下げ継続。水路内には護岸のためのしがらみが良好に残っていた。また砂礫層から非常に多くの遺物が出土した。また、試掘調査で石器が出土したとされる付近で、旧石器時代の石器ブロックがあるかどうかについて、調査を開始する。

11月6日～11月10日 調査区北側で縄文時代の落とし穴や2号水路を検出。調査区中央部で小穴を多数検出した。試掘調査で指摘された近世の集落遺構とは、この小穴群のことをさすと判断した。

11月13日～11月17日 先週検出した小穴群の調査を継続。建物の柱穴とするには配置に規則性がなく、また掘形も真っ直ぐでないなどの点から、人為的なものはとは考えにくく、自然のものとして判断した。また、聞き取りによって、かつて調査区の西側には、圃場整備直前まで民家があったことがわかった。

11月20日～11月22日 1号水路跡を完掘、全体写真を撮影、実測図作成終了。2号水路およびその周辺の調査が本格化する。3号水路跡を検出した。

11月27日～12月1日 北端部の2号水路跡の周辺で、溝状遺構を数条検出した。この北端部分では盛土が厚いため、再度重機を用いて掘り下げることとした。また北側では原地形が東へ向かって沢状に傾斜していることがわかった。29日からは今年度調査区の東側部分の2,840㎡について、確認調査を開始した。

12月4日～12月8日 2・3号水路跡と周辺の調査終了。全景写真を撮影、地形測量を行う。確認調査では遺構は検出されず、遺物も盛土層からごく少数出土したのみであった。このあと確認調査のトレンチ埋め戻し、とくに北端部分で深く掘り下げた箇所については、危険防止のための柵を設けるなどの安全措置を施した。また器材、テントなどを撤収し、日南郷遺跡の調査を終了した。

12月21日。日南郷遺跡の引き渡しを行う。

(細 山)

第3節 調査方法

調査開始にあたって、隣接農地境を保全するため、調査区西側で幅杭からやや内側を調査することとした。また農道と水路は保全することとした。排土は調査区の東半部に置くことになった。表土の除去に関しては、重機を使用した。表土を粗く削ったのち不整地運搬車を用いて、排土を運搬したあと、遺構検出面と推定されるLⅢ a 上面からは人力により草削りなどの道具を用いて丁寧に表面を削り、遺構・遺物の検出に努めた。その際、排土運搬には一輪車を使用した。なお、1号水路跡の排土には不整地運搬車を併用している。

遺構検出と併行して、調査範囲全域にグリッド杭を設定した。日本道路公団が設定した路線のセンター杭から、国土座標上に沿った基準点を計算して、これを測量原点とした。原点の座標は $X=100.700$ 、 $Y=152.240$ である。この測量原点を基点として調査区を取り囲む範囲に、一辺10mの正方形グリッドを設定した。グリッドの名称は、西から東へ向かってはアルファベットを用いA・B・C……とし、北から南へ向かっては算用数字で1・2・3……として、両者を組み合わせてA1・B2グリッドなどと呼称した。なお、遺構の位置を細かく表記するために、E8グリッドの北西隅を水糸番号の原点とし、そこから南北をNS00、東西をEW00として方位の略号と、1m単位で距離を示す算用数字を組み合わせて、調査区内での位置を表現した。たとえば、N10・W20は水糸原点から北へ10m、西へ20mの点を意味する。

ベンチマークは、調査区に最も近い2級基準点から調査区内に移設して、レベル原点として用いた。土層は土質や色調・混入物の違いを基準として分層し、色調の判別には標準土色帳を用い、目視により判別した。基本土層にはLⅠ・LⅡなどと表記し、遺物もこれに準じて扱った。遺構内の堆積土はℓ1・ℓ2などと表現した。遺物もこれに準じて取り上げている。

調査記録は、遺構配置図は1/400で作図した。水路跡・溝跡は1/100で、土坑は1/20で作図した。写真はすべて35mmカメラで、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。なお、地形がほぼ平坦なので、その状況をコンターではなく、エレベーションで図2に示すことにした。

(細山)

第4節 基本土層

日南郷遺跡およびその周辺は、昭和29年頃に大規模な圃場整備が行われたところで、大型機械を用いた盛土・削土行為により、調査区全体が耕作土・床土の直下はソフトロームの下部、もしくはハード・ロームの上面という状態であった。実際、床土の直下からは、圃場整備時の大型機械のキャタピラの跡が、畑の畝のように多数検出された。このような状態であったから遺構確認面はほとんど同じで、時期決定は出土遺物によるか、もしくは同種遺構との対比による推定の域を出ない

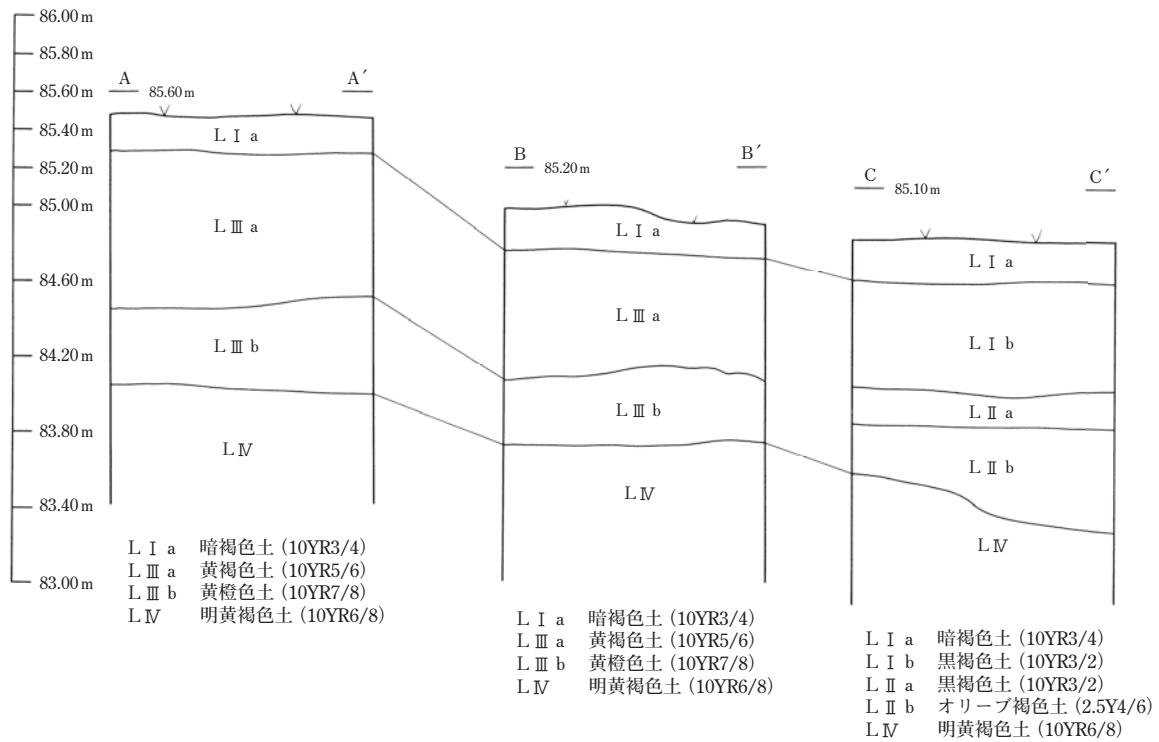


図3 基本層位柱状図

のが実情である。

以下、層序を追って、上から説明を加えて行く。

L I a ; 暗褐色土 (10Y R3/4) 現耕作土である。

L I b ; 黒褐色土 (10Y R3/2) 現水田の床土で遺跡全体を覆う。圃場整備時の盛土層である。

L II a ; オリーブ黒色土 (7.5Y R3/2) 圃場整備以前の水田の耕作土である。

L II b ; オリーブ褐色土 (2.5Y4/6) その水田の床土である。

L III a ; 黄褐色土 (10Y R5/6) 上部にソフトロームを含んだ黄褐色土である。

L III b ; 黄橙色土 (10Y R7/8) 砂礫を多く含む黄橙色土層である。

L IV ; 明黄褐色土 (10Y R6/8) 本遺跡の基盤をなす。礫層である。

第2章 遺構と遺物

日南郷遺跡では土坑3基、水路跡3条、溝跡3条を検出した。水路跡と溝跡との区別は、前者が幅2mを越え、深さも数十cmから1m以上を測るのに対し、後者は主に調査区北端付近で検出された幅約30cm、深さも10~20cm程度の比較的浅く狭い遺構をさしている。

出土遺物は縄文土器、土師器、陶磁器、瓦、金属製品、石器類、ガラス製品、鉄滓と多種類にわたる。しかし、そのほとんどが小片でそれぞれ少数であり、すべて二次堆積あるいは盛土中に混入したもので、本来の位置を保つ資料はなく、とくに分類基準を設けての説明はしない。

また図6には1・2号水路跡の、図7には1号水路跡と遺構外の遺物も併せて掲載した。

第1節 土 坑

1号土坑 SK01

遺 構 (図4, 写真5・6)

本遺構は調査区の北西寄り、C4・5グリッドにまたがって位置する。検出面はLⅢa上面で黒褐色土の広がりとして検出した。周辺に他の遺構はなく、また、重複する遺構もない。

平面形は長楕円形を呈し、北東から南西方向に主軸を有している。遺構の規模は長軸約360cm、短軸約45cm、検出面からの深さは深さ約80cmを測る。ただし、先にも述べたが、遺跡全体が削平をうけて、旧地表面は失われているため、本来の深さは不明とせざるをえない。

遺構内堆積土は10層に細分された。底面直上に堆積する ℓ 10は暗褐色土で、これが本土坑の掘り込まれた当時の旧表土に由来する層であろう。上の層になるにしたがい、しだいに水平に堆積する自然埋没の様相を呈している。

周壁は凹凸が著しくLⅢa・LⅢbを掘り抜いて、底面はLⅣ上面に達している。壁は約80°で立ち上がっている。

本遺構は出土遺物がなく、所属時期は不明である。遺構の性格は、遺構の存在する調査区の北端部一帯は、現在でこそ圃場整備のために削平され、水田地帯であるが、圃場整備以前には、調査区の北側低丘陵の南側に位置する段丘面であったと推定できる。そのことから、本遺構は丘陵南向き斜面に近接した位置に存することになり、斜面の等高線に直交するか、それに近い角度で掘り込まれたと推定する。

ま と め

本遺構の性格は、立地条件や形状から、縄文時代の落とし穴と推定しておきたい。(宮 田)

2号土坑 SK02

遺 構 (図4, 写真7)

本遺構は調査区の中央からやや北寄り, E 5グリッドに位置する。検出面はL III a 上面で, 暗褐色土の広がりから検出した。他遺構との重複はなく, 単独で存在する。

平面形は不整な長楕円形を呈する。遺構の規模は長軸330cm, 短軸42cm, 検出面からの深さ25cmを測る。周辺は削平され, 本来の深さは不明である。主軸は北西方向を向く。遺構内堆積土は3層からなっており, 壁際が三角堆積の様相を示すので自然埋没と考えられる。土坑の掘り込みの底面は, L III a 中に至る。底面はほぼ平坦で, ピットなどは検出されなかった。

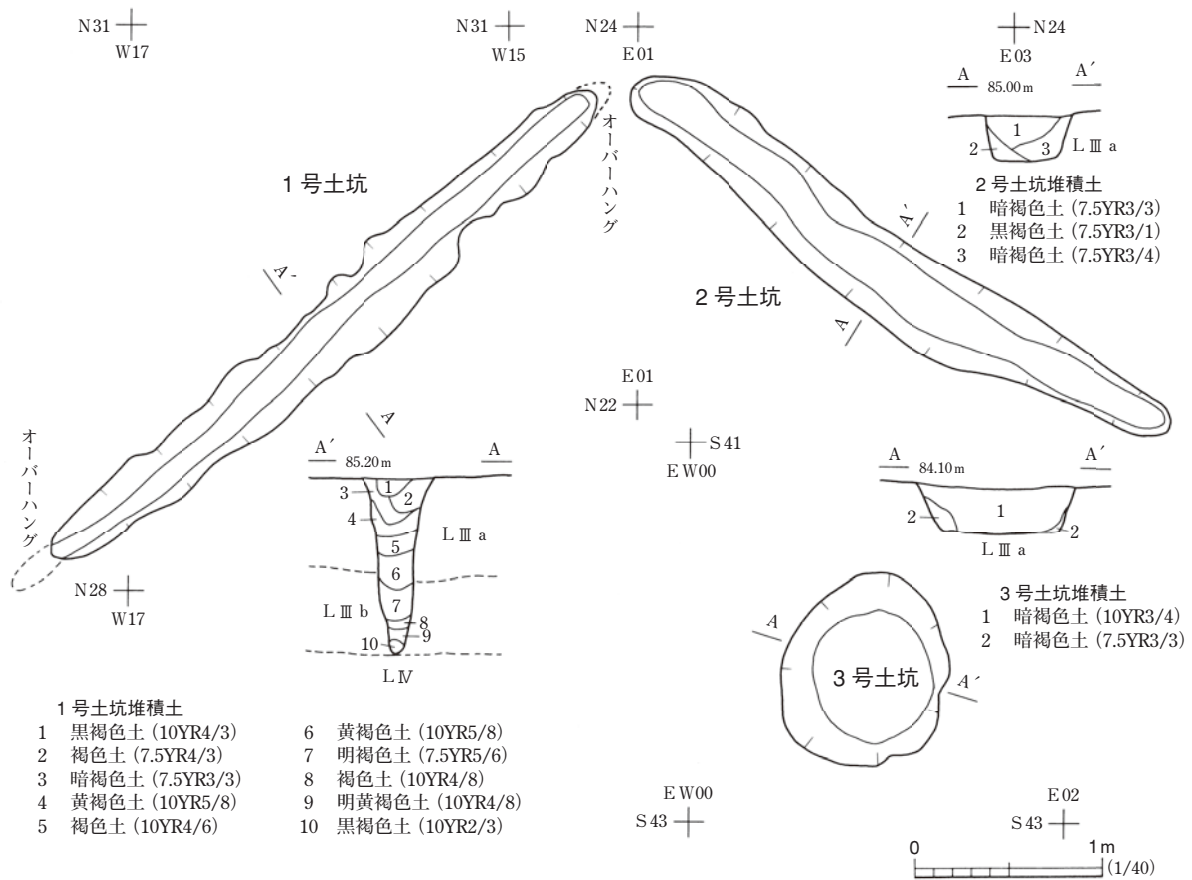
ま と め

本土坑は出土遺物もなく, 所属時期・性格等は明らかにできなかった。 (細 山)

3号土坑 SK03

遺 構 (図4, 写真8)

本遺構は調査区南端付近E12グリッドから検出され, 1号水路に接して存在する。L III a 上面から検出した。大きさは直径約100cmのやや不整な円形で, 深さは約30cmを測る。



遺構内堆積土は2層からなり、しまりは弱く、埋没後さほど時間が経過していない印象を受ける。底面は概ね平坦で、周壁は80°程度の角度でほぼ均等に立ち上がっている。

ま と め

本遺構からは遺物は出土していない。単独で存在するため他の遺構との対比も困難であるが、土質の状態から古い時期のものとは考えにくい。性格は不明である。(細山)

第2節 水路跡

本遺跡では、3条の水路跡が検出されている。溝跡と水路跡との区別は、主として規模の点から、幅広く長く伸びる遺構を水路跡、幅狭く比較的短く伸びる遺構を溝跡とした。1号水路跡は調査区南端付近に、2・3号水路は調査区北端で検出されている。

遺跡周辺の水田用水確保のためのものと考えられ、層位からみて大規模な埋め立て工事により、一斉に埋め立てられた状況が看取される。

また図示した遺物は大半が1号水路出土のものであり、その他は遺構外出土のものも含めてごく少数である。掲載にあたっては図6・7において、1号水路出土遺物と一括して示した。

1号水路跡

遺 構 (図5, 写真9・10)

本遺構は調査区の南寄り、D～Gのそれぞれ11・12, H12, I12グリッドにまたがって検出された。調査区の東西両方の外側にも伸びる溝跡である。検出面はLⅢa上面で、現水田の床土であるLⅠb直下から、東西に伸びる大量の砂や砂利が広がる範囲として確認された。

溝跡は調査区の西から、方向をやや南東へ向けて直線的に伸びる。上端の幅は4～6m、深さは120cm前後と一定している。底面での西端と東端の比高差は約40cmを測り、東端寄りが低い。

堆積土は4層に細分されたが、 ℓ 1は水田の床土、 ℓ 3は護岸工事の際の盛土で、それ以外は上流から流入堆積した砂礫層である。

溝跡全体の壁面は、南壁がやや緩やかで、北壁はこれよりもやや急な立ち上がりを見せるが、おおむね45°で立ち上がる。ただ底面は水流に削られたためか凹凸が著しい。

本溝跡では南北両岸に木杭を打ち込んだ状態が検出された。杭は径15～20cm程度の丸太材で、北岸ではおよそ20～50cm程度の間隔で並ぶが、ことにF・G12グリッド付近で杭が集中している。南側でも同様に杭が打たれている。北岸西寄りでは柵に用いたらしい長さ150～200cm程度の丸太材が横位で出土している。これらは護岸施設の一部であろう。矢板などは認められなかった。

遺 物 (図6・7, 写真13)

本水路跡の ℓ 2からは、比較的多くの遺物が出土した。種類も縄文土器・土師器・陶磁器・金属製品・石器と多種類にわたる。以下、掲載した図にそって説明を加えてゆく。

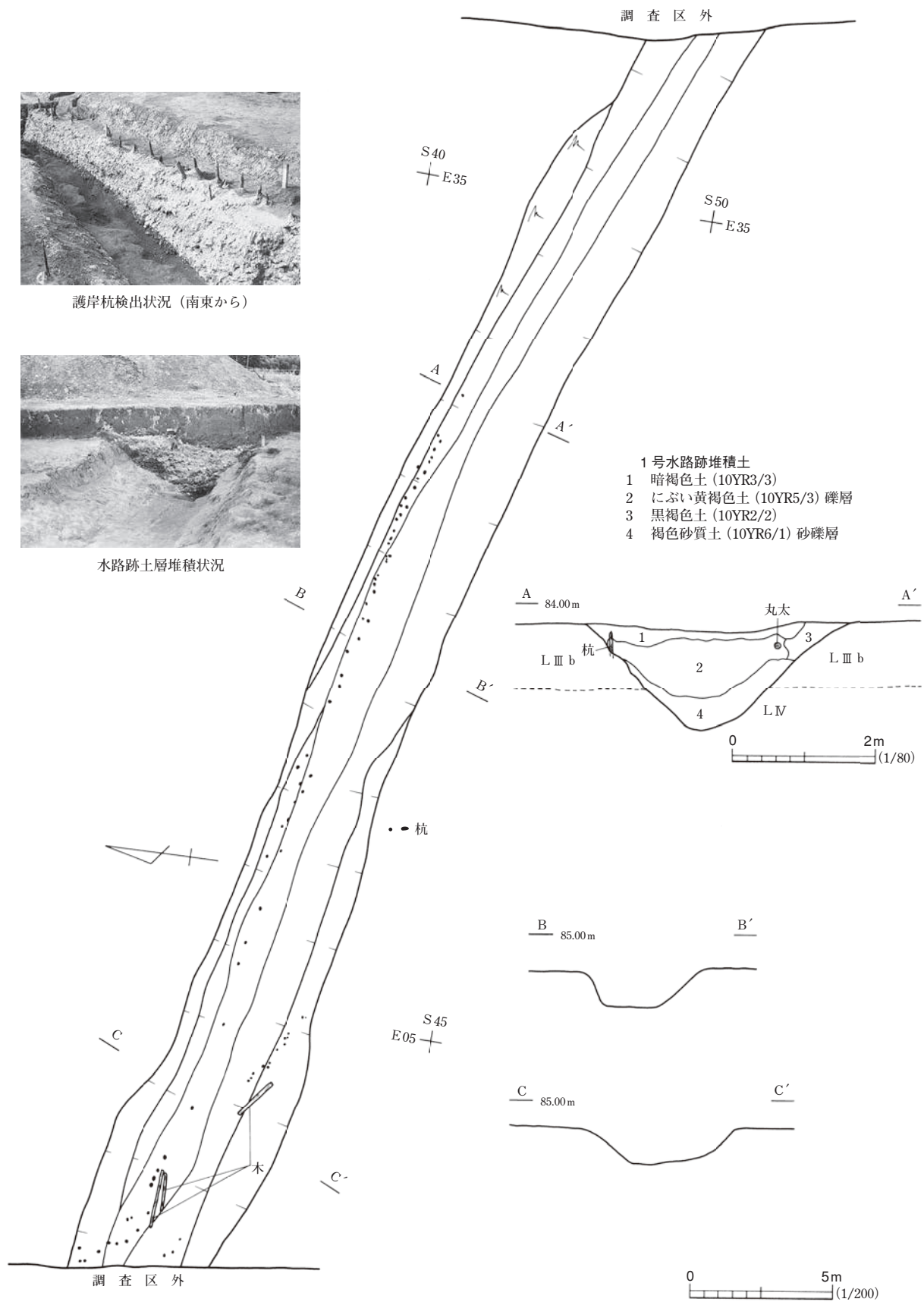


図5 1号水路跡

図6では文様が確認された縄文土器と石器類を一括掲載した。土器は早期・前期のものや中期・後期・晩期の資料がある。1は口縁部の破片資料である。早期田戸下層式土器に比定され、横位の平行沈線文を巡らし、櫛歯状の施文具による同時施文が行われる。3は口縁部片である。口唇部は平縁で、口縁直下の内外両面からの2箇所透かし状の穿孔と、支柱状の部分に1箇所盲孔が認められる。4は縄文時代後期の浅鉢で、波状口縁の頂部片である。口縁部から縦位に垂下する太い隆帯と、横位に走る太い沈線が認められる。5は縦方向に沈線を引く、胴部片資料である。4条の沈線がみられ、右側の1条がやや間隔が開くのにに対し、左側の3条がほぼ等間隔であることから、3条を1単位とする施文具を用いたとみられる。後期前葉頃に位置付けられる。6は胎土中に1～2mm大の砂粒や雲母を多く含み、わずかに斜行する縄文が認められる。7は縄文を地文とし、この上下を横位の沈線で区画するものである。さらに区画された以外の部分は地文を磨消している。8は部位不明ながら太い沈線が認められる。中期末から後期初頭頃の資料である。9は口縁部片である。胴部上位から外へ強く「く」字状に屈曲した口縁を有し、屈曲部には太い沈線が横走する。胎土中に砂粒が多く混入している。10は底部のみの破片資料である。11は地文の斜行縄文を太い沈線で区画する。後期に位置付けられよう。12は2条の沈線と貼り付け瘤を有する。13は文様が判然としないが、横走する縄文が施される。

14は晩期大洞B式に比定され、結節縄文が施される。胎土は黒色を帯びる。15は後期初頭頃の深鉢形土器の波状口縁部で、口縁部から縦位に太い隆帯を楕円形に垂下させ、その上に連続刺突を行う。16は後期初頭から前葉頃の破片資料で、強く外反する頸部から縦位に粘土紐を貼り付ける。屈曲部には斜め下方からの刺突が認められる。17は晩期大洞B式に比定され、結節縄文が施される。胎土は黒色を帯びている。18は自然礫を素材とした剥片の末端に押圧剥離により刃部を作り出した、鉄石英製の削器である。

図7は土師器・陶磁器・ガラス製品・金属製品をまとめた。

1～4は土師器の甕である。1は口縁部のみの破片資料で、直立気味の胴部からほぼ水平に強く屈曲する。2は胴部の資料である。1によりやや大ぶりな口縁は「く」字状に屈曲する。3はいわゆる球形胴部の甕と考えられる。4は甕の胴部下位から底部の資料である。5は外面に青銅色の釉を施し、取手の付いたいわゆる青土瓶の胴部で、相馬大堀焼と考えられる。6は内外両面に灰釉を施し、底部と高台部が露胎となった鉢である。7はガラス製の小瓶で、濃い青色を呈する。鋳型で造られたと考えられ、「神薬」・「富山薬業会社」の文字が陽刻されている。8は磁器碗の体部を円形に打ち欠いた玩具と考えられる。9と10は磁器の碗である。9はいわゆる端反り碗で、口唇部内側に茶褐色釉とコバルト釉による横位の染め付け、外面には口唇部直下と高台付近にコバルト顔料による染め付けがなされる。10はやや丸みを帯びた口唇部を有し、外面に型紙刷りによりと思われる雷文・鋸歯状文や松・帆架船や東屋などの絵画文様を描出する。11は内外面に灰釉を施した陶器碗で、高台部分は釉の施されない露胎、内面は釉をリング状に剥いだいわゆる蛇の目剥ぎとな

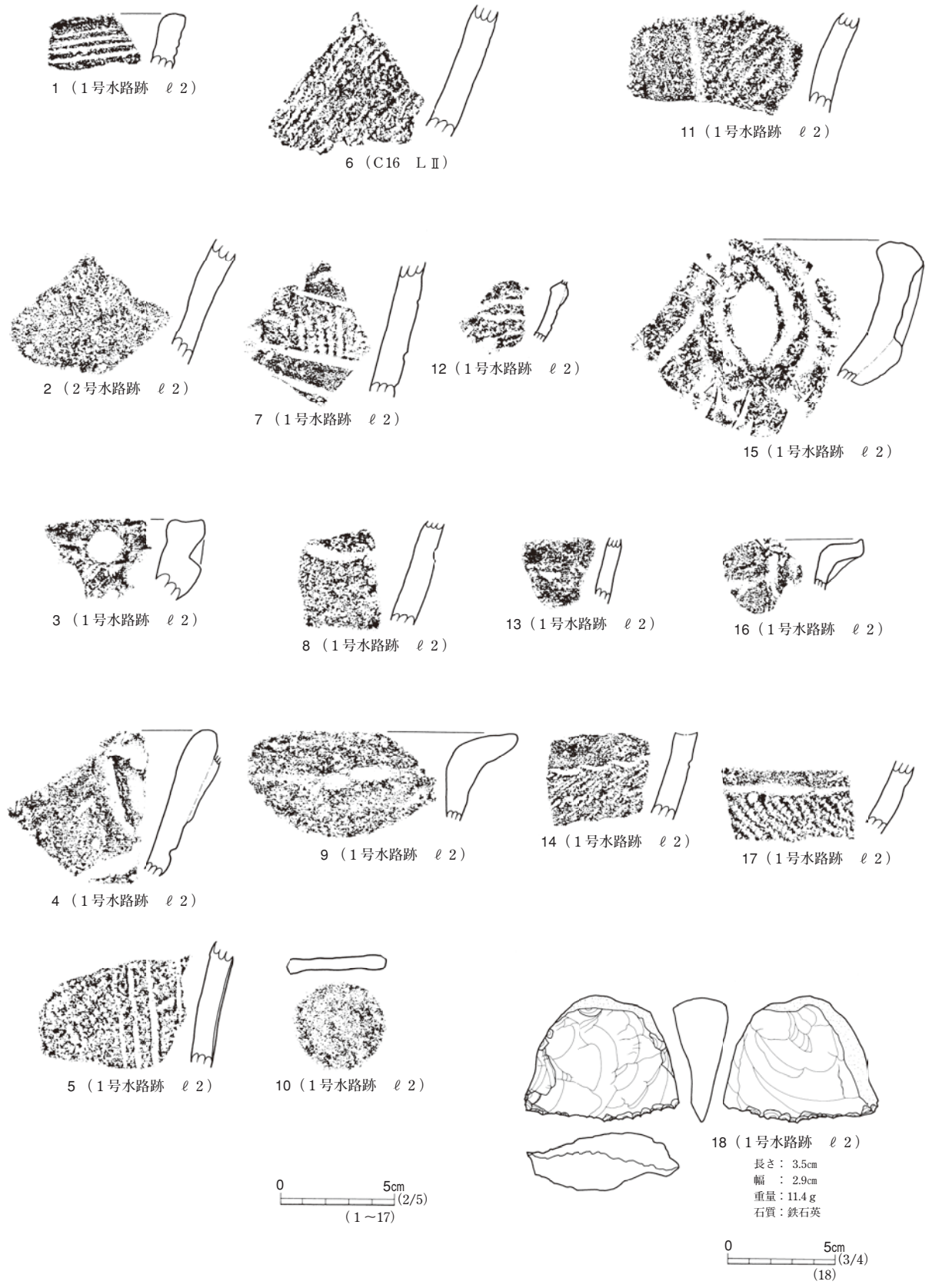


図6 1・2号水路跡及び遺構外出土遺物

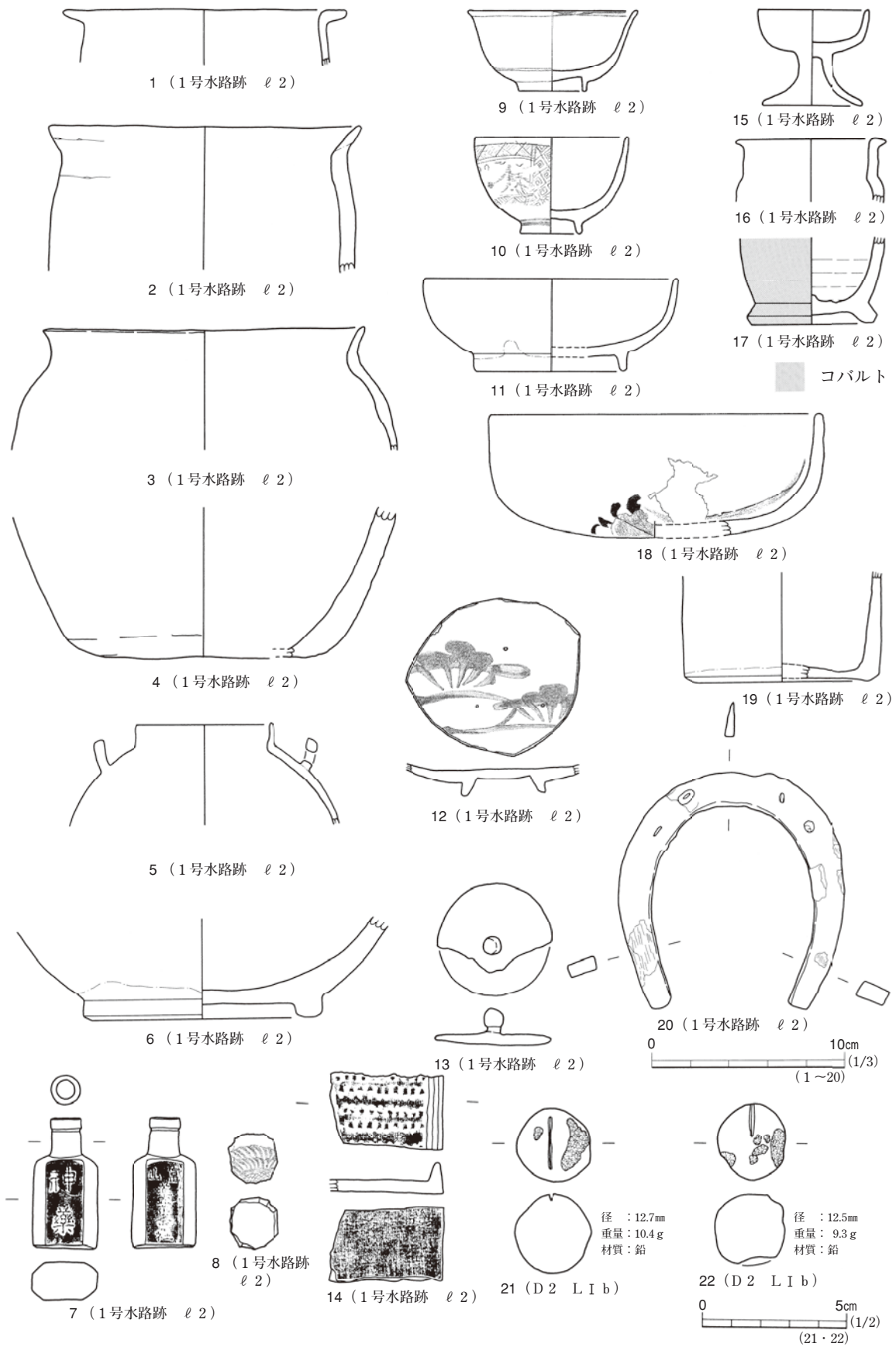


図7 1号水路跡および遺構外出土遺物

る。12は高台付きの皿の中央部分である。胎土はきめが細かく、鉄銹を顔料として山水文を意匠とした絵画を描き、その上から灰釉を施す。焼成用の窯道具の痕跡のピン跡が3箇所認められ、故意に円形に打ち欠いたと思われる。13は陶器製の急須の蓋とみられる。正円ではなく歪んだ円形である。僅かに緑色がかかった灰色の釉を施す。14は陶器製の卸金(皿)である。型押しによって製作され、内面と底面に細かい布目痕が観察される。見込み部分のみ暗褐色の鉄釉を施し、それ以外は露胎である。卸面のかえしは、櫛歯状の工具によって、左右両方向から交互に連続的に刺突を行っている。15は磁器染め付けの仏飯器である。脚部がラップ状に開く。器部の外面に青色と朱色の顔料で花卉様の文様を、脚部には朱色の条線を描く。16は磁器染め付け香炉(線香立て)である。口唇部と胴部外面に朱色顔料を施す。口唇部にはいわゆる口銹様に口縁直下に条線を、肩から胴部には朱色のほか青色や金色の顔料で文様を描いている。内面は口縁直下から下位は釉をふき取ったようである。17は磁器徳利の底部である。内面にロクロ成形の痕跡がみられる。外面はコバルト釉を施すが、内面は露胎である。高台が付されており、仏具の花瓶の底部かと考えられる。18は陶器製の鉢である。体部から口縁にかけて直立する器形である。内外面にいわゆる貫入がみられる。19は陶器製の徳利の底部である。底面部分のみ露胎でそれより上の部位では、灰釉を施している。

20～22は金属製品である。20は鉄製の馬蹄である。21・22はともに遺構外出土で、やや歪な球形を呈し、表面はやや灰色を帯びた白色で、鉛製と思われる。それぞれ2条の筋が認められるが、これは鑄造に用いられたタマガタと呼ばれる鑄型の痕跡であろう。22は表面の傷が著しいが、実際に発射されたかどうかは不明である。径は21が13.0mm、22はやや破損があるものの12.5mm、重さは21が10.4g、22が9.3gを測り、ほぼ3匁5分に相当する。いわゆる「三匁五分玉」で、狩猟に一般的に用いられた火縄銃の弾丸とされるものである。

ま と め

本水路跡は昭和20年代末ころまで農業用水として活用され、昭和29年に行われた大規模な圃場整備事業の際の埋め立てにより、廃絶したと考えられる。地元住民の中にはこの水路に関する記憶が鮮明な方も多く、聞き取りによって「ドンドン堀」と言ったとか、馬の脚を洗った、また岸辺に樹木が植えてあったなど名称や用途、景観等についての情報を収集できた。蹄鉄の出土は、この情報を裏付けるであろう。

溝跡内出土の遺物に関しては、主に陶磁器のなかに仏飯器や香炉などの仏具がやや多く見受けられる。このことは、調査区西端から約200m西側に、江戸時代後期頃の紀年銘を最古とする墓地があり、この地には安政3(1856)年建立と伝えられる地藏院という真言宗寺院があったとされるが、1号水路から出土した陶磁器の中には仏具も含まれ、この一帯で使用されていたのであろう。

本遺跡の地形の標高は、西側へ行くほど少しずつ高くなるが、縄文時代後・晩期以降、古代をへて近世・近代にいたるまでの生活の場が調査区の西側一帯に存在し、昭和20年代末以降、圃場整備事業という大きな改変に遭遇した。本水路跡から出土した遺物は、そこから廃棄されたものが二次的に堆積したものが多くを占め、大過はない。

(宮田・細山)

2号水路跡

遺 構 (図8, 写真11・12)

本水路跡は調査区の北端の、B 1 から G 5 グリッドにあり、F 4 グリッドあたりで東流する。

水路跡の規模は、長さ約69.0m、幅約160m、深さ約20cmを測る。L II a 上面で検出され、遺構内にL I b が堆積しており、人為的に埋められたと考えている。

溝跡内の東西2か所で、地山に打ち込まれた木杭列と、それに絡むように置かれた横木が出土した。西側のそれはB 1 グリッド内にあり、杭は径15~20cmの丸太で、さらにこれに長さ150cmほどの横木が絡まる。東側杭列は、流路が北から東へ転ずる位置にある。やはり丸太杭を打ち込んで岸沿いに横木を絡ませる。堰と考えられる、拳~人頭大の石を流路に直角に配した施設も検出された。

遺 物 (図6, 写真13)

図6-2は2号水路出土から出土した。胎土中に繊維を含み、深鉢形土器の胴部下位の資料である。平底部に接合する部分で、縄文時代早・前期の資料である。

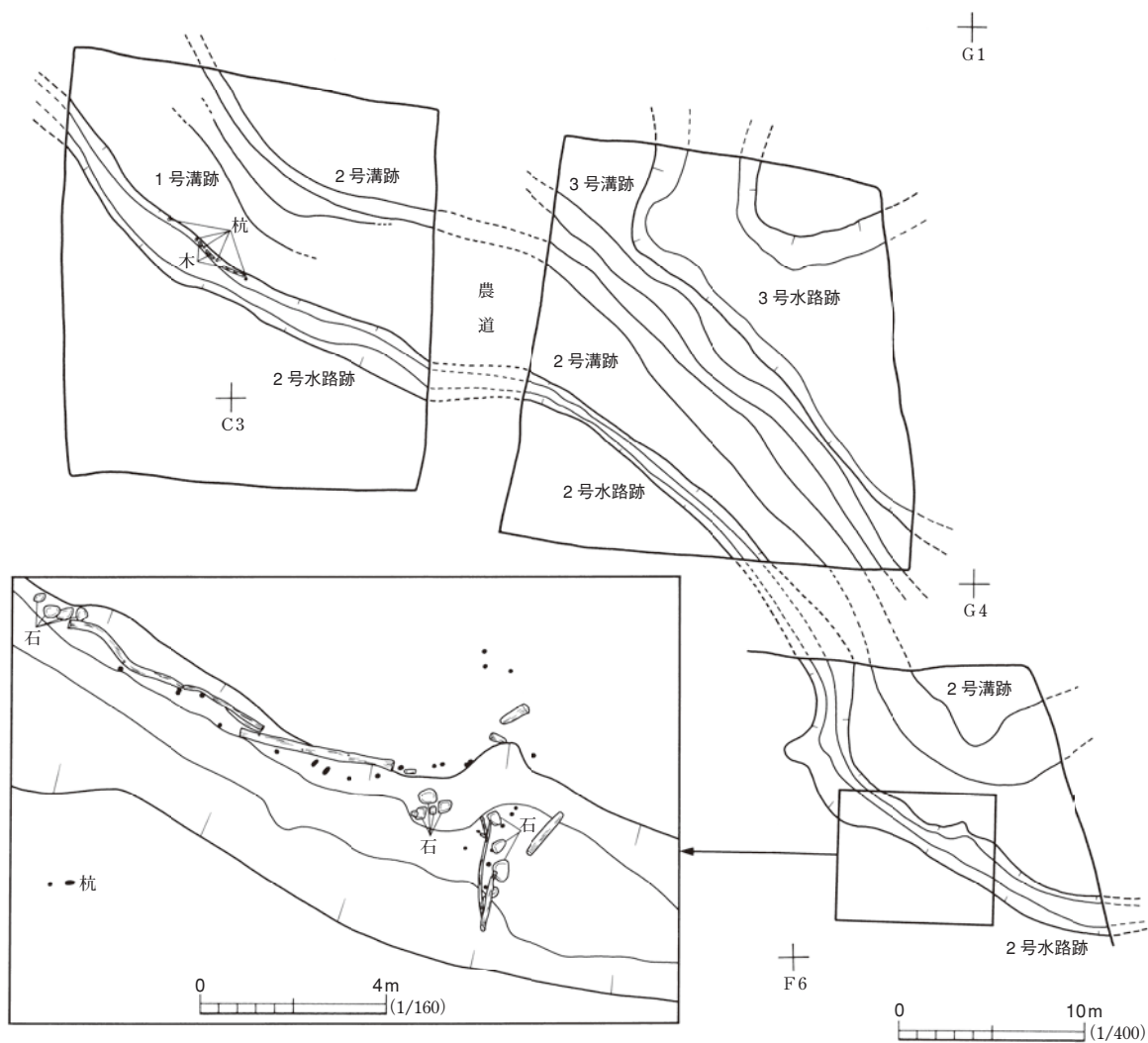


図8 2・3号水路跡及び2号水路東側堰跡詳細

ま と め

本水路の造られた時期は不明であるが、圃場整備が行われた昭和29（1954）年頃に廃絶したと考えられる。（細 山）

3号水路跡

遺 構（図8）

3号水路跡は調査区の北東端、E 1・2、F 2・3グリッドにまたがって位置する。検出されたのは北から東方向へと向きを変える部分である。位置的には2号水路跡とも極めて近い。

本遺構はL II aの下層から検出され、遺構内にはL II bが自然堆積している。このことから、2号水路跡より古いことがわかる。規模は北側で幅約5m、屈曲点で東に向かって幅を広げ、東側で幅約15mを測る。底面はL IVに達し、おおむね平坦である。深さは30～40cm程度と均等で、壁の立ち上がりは緩やかである。出土遺物はないが、流木が出土しており、また底面上に薄く砂が堆積しているなど、水流の痕跡が認められた。

ま と め

本遺構は性格を水路としたが、人工的な掘り込みとしては周壁が緩やかである。また流路ならば底面が流下方向に傾くはずだが、中央部がやや低い。この周辺は自然の沢地形であったらしく、現在でも付近に水路が掘られていることから、自然の沢を利用した人工的な水路の可能性が高い。（細 山）

第3節 溝 跡

1号溝跡 SD01

遺 構（図9）

1号溝跡は、調査区北端のB1、C 1・2グリッドに位置する。遺存度が悪く全容は不明である。検出面はL III a上面である。遺構の大きさは、長さ約11m、幅約150cm、深さ約20cmを測る。北西から南東に流下し、C 2グリッドの北側で東方へ流れる。溝跡内にはL I bが堆積していることから、人為的に埋められたものと考えられる。

ま と め

出土遺物はなく造られた時期は不明だが、昭和20年代末頃の圃場整備事業で廃絶したのであろう。（細 山）

2号溝跡 SD02

遺 構（図9）

本遺構は、調査区の最も北端から北東の、C1、D 1・2、E 2・3、F 3・4、G 4グリッドに位置し、検出面はL III a上面である。検出された規模は、全長約60m、幅40～200cm、深さは5～10

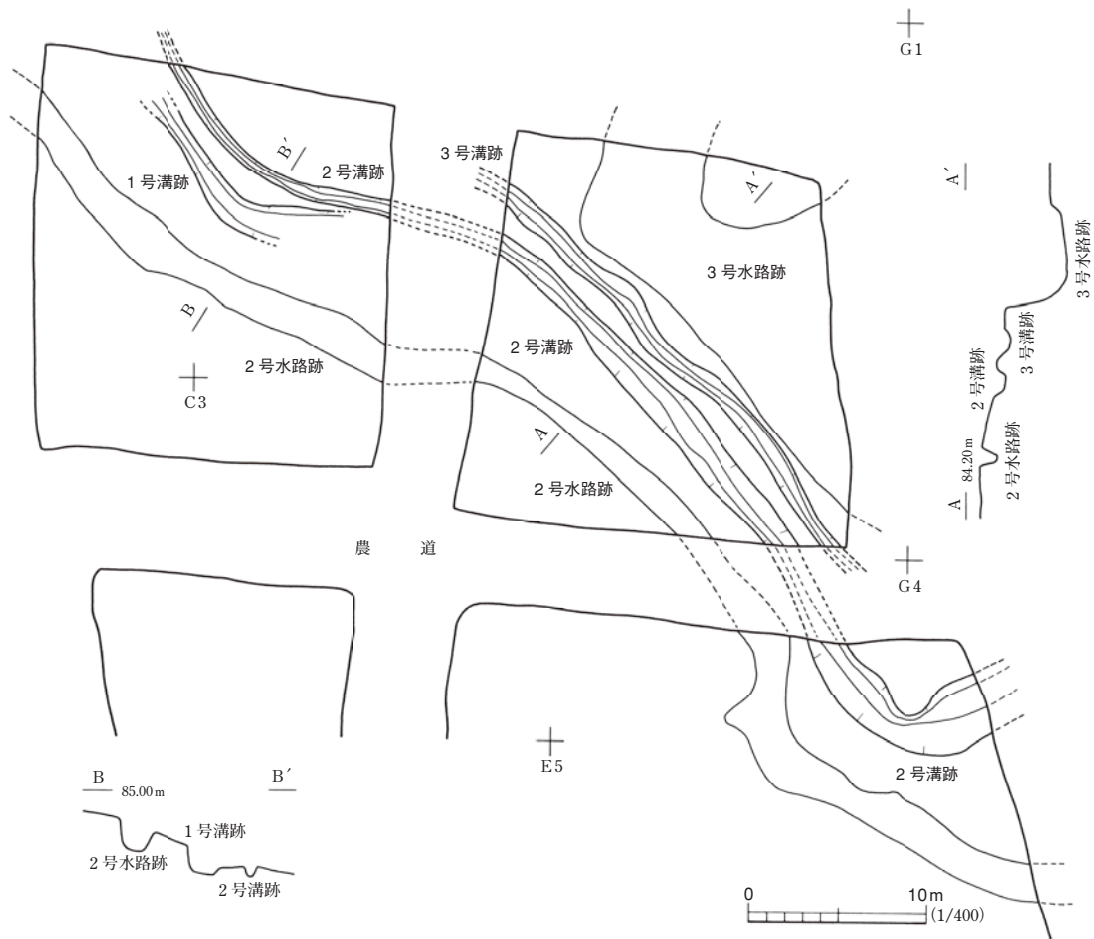


図9 1・2・3号溝跡

cmと非常に浅い。遺構内にはL I bが堆積していることから、人為的に埋められたものである。

ま と め

出土遺物はなく造られた時期は不明だが、昭和20年代末の圃場整備により廃絶したのであろう。

(細 山)

3号溝跡 SD03

遺 構 (図9)

3号溝跡は、調査区の最も北端のD 1・2, E 2・3・4, F 3・4グリッドにまたがって位置する。検出された大きさは長さ約27m, 幅約100cm, 最も深い所では上端から36cmを測る。底面の比高差は約24cmで、北西から南東へと、わずかずつ高さを減じて行く。

遺構内の堆積土は盛土であるL I bで、1・2号溝跡や2・3号水路跡と同時に埋め立てられたとみられる。

ま と め

出土遺物はなく造られた時期は不明だが、付近の水路と同様に昭和20年代末以前に機能し、圃場整備事業により埋められたのであろう。

(細 山)

第3章 まとめ

本遺跡は水田地帯に位置する段丘上に存在する。周辺は、圃場整備関連の造成工事の掘削による改変が著しく、当初の地形・景観が失われていることを推察させた。南側で見られたキャタピラの痕は、圃場整備の際に土木機械の走行した証しとなろう。

本遺跡は試掘調査時においては、旧石器時代と近世の集落跡の複合遺跡とされていた。調査の結果としては縄文時代早・前期の所産と考えられる落し穴状土坑1基、時期不明の水路跡3条、同じく溝跡3条、時期不明の土坑2基を検出したにとどまった。旧石器時代の遺構・遺物や近世集落跡の存在を裏付ける資料は得られなかった。また、これも聞き取りではあるが、調査区の北西寄り付近に、昭和20年代末頃まで数軒の民家があったが、圃場整備事業に先立って移転したとのことである。遺物は、縄文時代早・前期頃のもの、後・晩期に比定される土器、またロクロ未使用の土師器、近現代の陶磁器・金属製品や瓦片などが出土したが、大半が1号水路跡のℓ2という再堆積層出土で、それ以外もすべて盛土層出土の遺物である。縄文土器・土師器のすべてが摩耗していることから本来の位置をとどめていないことがうかがえる。縄文時代や古代の遺跡は、調査区内には遺構がほとんど見られないため、やや標高の高い調査区よりも外側の西寄り一帯にあるのではないかと想定している。

金属製品のうち、1号水路跡から蹄鉄が出土しているが、これは昔馬の脚を洗ったという言い伝えの証しとなろうか。また火縄銃の弾丸が出土しているが、重量は約10.4gであった。これはおおよそ3.5匁に相当する。三匁五分の弾丸は、狩猟用として一般的に用いられたものといわれている。遺跡周辺では、現在でも野生の狐や猪などが出没するといわれているが、遺跡の北側丘陵を含めた山林一帯には、今でも比較的大型の獣類が出没するらしく、これらを対象とする銃猟が行われていたようである。この銃弾について、戊辰戦争で夜の森付近で行われた戦闘と結びつける考えもあるが、なにぶん盛土層からの出土なので、なんともいいようがない。

このように出土遺物からの検討もさることながら、遺跡周辺の景観などについては、地元作業員からの聞き取りも参考になった。

本遺跡は、東は円蔵院の西側、西は県道35号線付近までの広がりをも有し、総面積は約332,000㎡に及ぶが、調査したのはその中央を南北に縦断する7,600㎡で、総面積のうちの2.3%にすぎないが、今後周辺調査が進めば、日南郷遺跡の様相が少しでも明らかになるものと考えている。

(宮田・細山)

参 考 文 献

- 奥村 正二 1973 『火縄銃から黒船まで』 岩波新書
高橋良一郎 1977 「相馬のやきもの」『福島文庫』40 福島中央テレビ
竹内 理三他 1981 「福島県」『角川日本地名大辞典』7 角川書店
富岡町教育委員会 1987 『富岡町史』第3巻 考古 民俗編
富岡町教育委員会 1988 『富岡町史』第1巻 通史編
山内 幹夫他 1989 「中平遺跡」『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告』福島県教育委員会
鈴木 啓治 1989 『福島県 地学のガイド』コロナ社
小林 清治 1989 『図説 福島県の歴史』 河出書房新社
平 凡 社 1989 『福島県の地名』日本歴史地名大系7
福島県立博物館 1990 『企画展 東北の陶磁史』
双葉町歴史民俗史料館 1993 『第2回企画展 相馬大堀焼きの歴史と美』
地質調査所 1994 「浪江及び磐城富岡地域の地質」『地域地質研究報告』
松田光太郎 1999 「神奈川県における諸磯 a・b 式土器の様相」『第12回 縄文セミナー 前期後半の再
検討』縄文セミナーの会
立正大学考古学会 1999 「特集 出土仏具の世界」『考古学論究』5



付 編 自然科学的分析

付編1 福島県富岡町上本町G遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	I5グリッド, II層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定 (Beta-)
No.1	530±40	-23.9	550±40	交点: Cal AD1410 2 σ : Cal AD1310~1370, : Cal AD1380~1430 1 σ : Cal AD1400~1420	153109

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) および2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

付編2 福島県富岡町上本町G遺跡から出土した炭化材の樹種

株式会社 古環境研究所

はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

1. 試料

試料は、上本町G遺跡出土の炭化材7点である。

2. 方法

試料を割折して、新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的な3断面を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果は表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 (写真1-1)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、いずれも常緑の高木で、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ク　　リ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに1～数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20m，径40cm程度であるが，大きいものは高さ30m，径2mに達する。耐朽性が強く水湿にもよく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築，家具，器具，土木，船舶，彫刻，薪炭，椎茸ほだ木など，広く用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 (写真1-2)

横断面：大型の道管が，年輪のはじめに1～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が，火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものとは大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ，コナラ，ナラガシワ，ミズナラなどがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，高さ15m，径60cmに達する。材は強靱で弾力性に富み，建築材などに用いられる。

カエデ属 *Acer* カエデ科 (写真1-3)

横断面：小型で丸い道管が，単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は，平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は，同性放射組織型で1～4細胞幅である。道管の内壁には，微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属にはイタヤカエデ，ウリハダカエデ，ハウチワカエデ，テツカエデ，ウリカエデ，チドリノキなどがあるが，放射組織の形質からウリカエデ，チドリノキ以外のいずれかである。北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木または小高木で，大きいものは高さ20m，径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で，建築，家具，器具，楽器，合板，彫刻，薪炭など広く用いられる。

4. 所 見

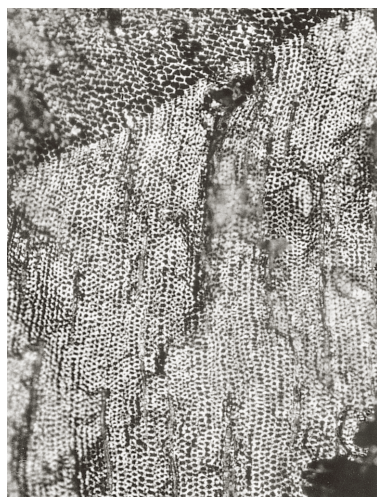
上本町G遺跡出土の炭化材は，マツ属複維管束亜属1，クリ3，コナラ属コナラ節2，カエデ属1であった。クリは温帯に広く分布し，乾燥した台地上などに生育し，二次林要素でもある。縄文時代においては，北日本で多用される。コナラ属コナラ節は，温帯上部の冷温帯に主に分布する落葉広葉樹である。マツ属複維管束亜属は，二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツが含まれる。カエデ属は，谷や小川沿いに分布する落葉高木である。いずれの樹種も周辺地域において一般的に分布する樹木である

表 1 上本町 G 遺跡出土樹種同定結果

試料番号	出土遺構	層位	結果 (和名/学名)	
FBCJ0001	S I 05	床面	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
FBCJ0002	S I 09	ℓ 2	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb.et Zucc
FBCJ0003	S K 09	ℓ 4	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
FBCJ0004	S K 27	ℓ 8	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
FBCJ0005	S K 33	ℓ 4	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb.et Zucc
FBCJ0006	S I 09	ℓ 2	カエデ属	<i>Acer</i>
FBCJ0007	S K 16	ℓ 6	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb.et Zucc

参考文献

- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48
 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100
 島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

1 FBCJ0004 上本町G遺跡 SK27 ℓ8 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.4mm

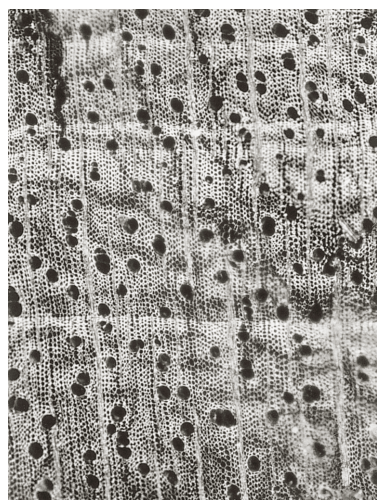


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

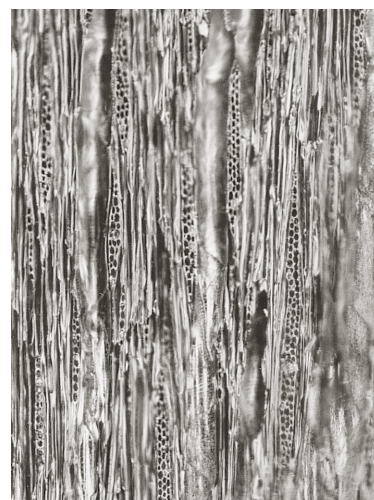
2 FBCJ0003 上本町G遺跡 SK09 ℓ4 コナラ属コナラ節



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

3 FBCJ0006 上本町G遺跡 S109 ℓ2 カエデ属

1 上本町G遺跡出土各樹種の顕微鏡写真

付編3 福島県富岡町上本町F遺跡の火山灰分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

福島県浜通り地方に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、安達太良、榛名、浅間など東北地方南部や北関東地方の火山、さらに中国地方や九州地方などの火山に由来するテフラ(火山^{さいせいぶつ}砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標^{しひょう}テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な遺構が検出された富岡町上本町F遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、SD1のA-A'セクションである。

2. 土層層序

SD1 A-A'セクションで認められたSD1の覆土は、下位より灰色砂層(層厚12cm, 14層), 灰色砂質土(層厚22cm, 13層), 灰色土(層厚10cm, 12層), 暗灰褐色土(層厚47cm, 11層), 灰色土(層厚14cm, 10層), 灰褐色土(層厚14cm, 9層), 黒灰褐色土(層厚17cm, 8層), 灰褐色土(層厚15cm, 7層), 暗灰褐色土(層厚16cm, 6層), 黄褐色土ブロック混じり灰褐色土(層厚26cm, 5層), 暗灰褐色土(層厚19cm, 4層), 炭化物混じり褐色土(層厚15cm, 3層), 黄褐色土ブロック混じり褐色土(層厚18cm, 2層), 暗灰褐色土(層厚16cm, 1層), 灰褐色土(層厚52cm, LI層)からなる(図1)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

示標テフラの降灰層準を把握するために、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、22点についてテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去
- 3) 80°Cで恒温乾燥
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。いずれの試料からも比較的良く発泡した淡褐色軽石（最大径1.1mm）が検出された。この軽石は、とくに試料33から11にかけて比較的多く含まれている。また、これらの試料には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径1.2mm）が少量ずつ含まれている。この軽石の班晶には、角閃石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

遺構覆土の最下位の試料41と、淡褐色軽石が増加し白色軽石も含まれている試料33の2試料について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料41に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.524-1.531である。重鉱物としては、黒雲母のほかに斜方輝石や角閃石、少量の単斜輝石が含まれている。これらのうち斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は、各々1.707-1.712と1.671-1.675である。試料33に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.525-1.532である。重鉱物としては、黒雲母のほかに斜方輝石や角閃石、少量の単斜輝石が含まれている。これらのうち斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は、各々1.707-1.712と1.672-1.677である。

5. 考 察

屈折率測定の対象となった2試料に含まれる淡褐色軽石は、その特徴から1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ（As-Kk，早田，1991，1995）に由来すると考えられる。また、角閃石については、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に由来すると考えられる。以上のことから、SD1の層位は、As-Kkより上位にある可能性が高いと考えられる。

6. ま と め

上本町F遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、SD1の覆土から浅間粕川テフラ（As-Kk，1128年）や榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，6世紀中葉）に由来する軽石を検出することができた。SD1の層位は、As-Kkより上位にあると考えられる。

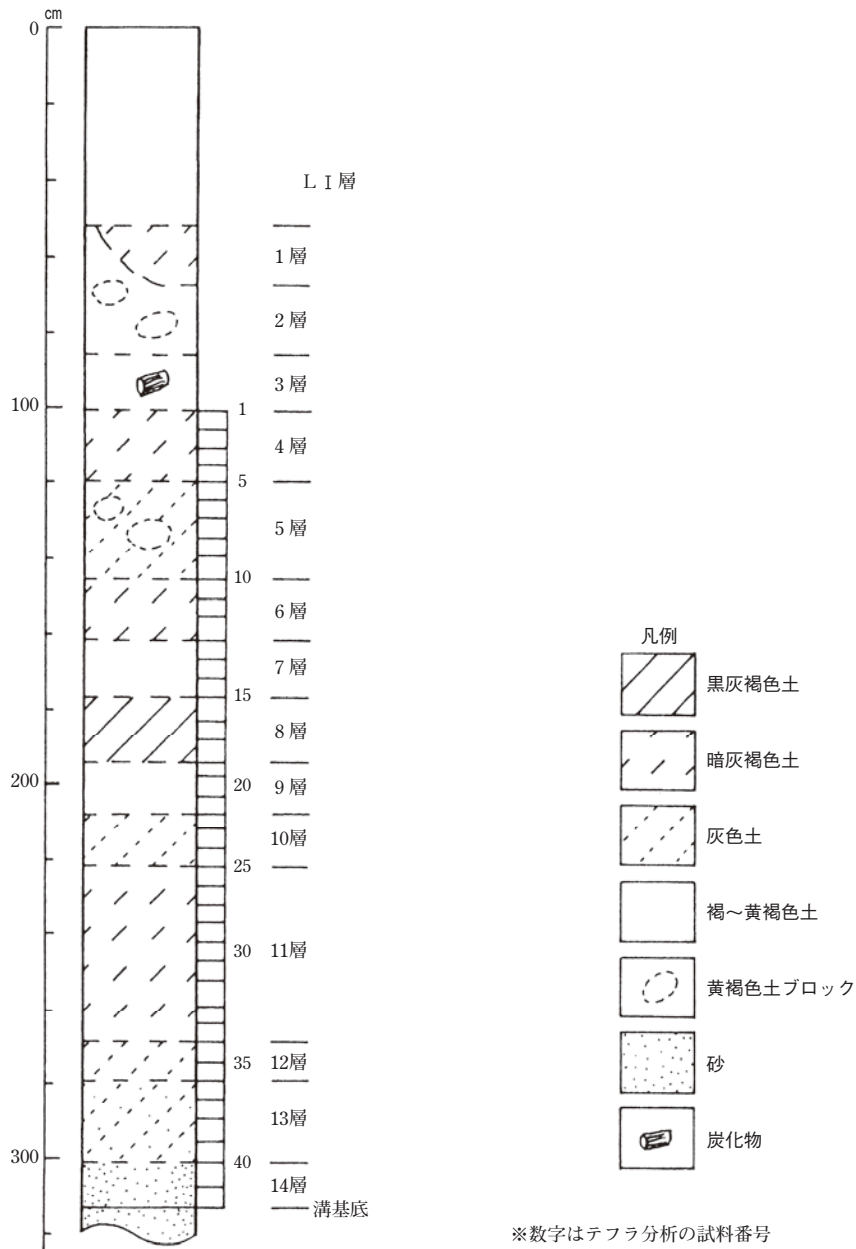


図1 SD1-AA' セクションの土層柱状図

表1 S D 1 覆土のテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
1	+	淡褐	0.9
3	+	淡褐	0.8
5	+	淡褐	0.8
7	+	淡褐	0.7
9	+	淡褐	0.9
11	++	淡褐>白	0.9, 1.2
13	++	淡褐>白	0.8, 1.2
15	++	淡褐>白	0.9, 1.1
17	++	淡褐>白	0.9, 1.2
19	++	淡褐>白	0.8, 0.9
21	++	淡褐>白	0.8, 1.0
23	++	淡褐>白	0.8, 1.0
25	++	淡褐>白	1.0, 0.9
27	++	淡褐>白	1.0, 0.8
29	++	淡褐>白	0.9, 1.0
31	++	淡褐>白	1.0, 1.1
33	++	淡褐>白	1.1
35	+	淡褐	0.8
37	+	淡褐	0.8
39	+	淡褐	0.7
41	+	淡褐	0.8

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,
+: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位はmm。

表2 S D 1 覆土の屈折率測定結果

地 点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物組成	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n_2)
A-A' セクション	33	1.525-1.532	bi>opx, ho, (cpx)	1.707-1.712	1.672-1.677
A-A' セクション	41	1.524-1.531	bi>opx, ho, (cpx)	1.707-1.712	1.671-1.675

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, 重鉱物の () は、量が少ないことを示す。

参 考 文 献

- 新井房夫 (1962) 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編 10』p.1-79
- 新井房夫 (1972) 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究」『第四紀研究 11』p.254-269
- 新井房夫 (1993) 「温度一定型屈折率測定法」『第四紀試料分析法—研究対象別分析法』p.138-148 日本第四紀学会編
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 『火山灰アトラス』東京大学出版会, p.276
- 坂口 一 (1986) 「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』p.103-119 群馬県教育委員会編
- 早田 勉 (1989) 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究 27』p.297-312
- 早田 勉 (1991) 「浅間火山の生い立ち」『佐久考古通信 No.53』p.2-7
- 早田 勉 (1995) 「テフラからさぐる浅間山の活動史」『御代田町町史, 自然編』p.22-46